

赤穂市

# 堂山遺跡

- 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XVI -

本文編

1995年3月

兵庫県教育委員会

赤穂市

# 堂山遺跡

- 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XVI -

本文編

1995年3月

兵庫県教育委員会



塩田とその遺構



塩田の土層



防潮堤の断面



塩田の土層と防潮堤・杭列の関係



防潮堤下の杭列



7ライン西壁の土層



探蝕土坑と集石遺構 1 の検出状況



探蝕土坑①（坑内上面の木製品と礫石の検出状況）



探跡土壌②（礫石除去後の木製品の状況）



探跡土壌③（木製品除去後の黒色粘土と杭の検出状況）



曲物土塿



曲物土塿の土層断面

## 例 言

1. 本書は、兵庫県赤穂市塩屋字堂山に所在する堂山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、日本道路公団が建設する山陽自動車建設事業に伴う緊急発掘調査であり、同公団の依頼を受けて兵庫県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、昭和54年に全面調査を実施した。
4. 整理作業は、昭和55年度～昭和59年度は兵庫県教育委員会が実施し、諸般の事情で休止期間をおいて、平成6年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
5. 遺構・遺物の実測は調査員、補助員が行い、遺構の写真は調査員が行った。遺物の写真は森昭に委託して撮影した。
6. 本書で示す標高値は東京湾平均海水準を基とし、方位は磁北を指す。
7. 遺物の番号は、本文、挿図、図版とも統一している。
8. 本書は、本文編、図版編、遺物観察表編の3分冊の構成をとっている。
9. 本書の執筆は、山本三郎、大平茂、岸本一宏、山田隆一、山本雅和、池野榮子、久保弘幸が担当し、編集は山本三が行った。
10. 発掘調査で出土した遺物および記録としての図面・写真類は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて保管している。
11. 発掘調査にあたっては、日本道路公団赤穂工事事務所、赤穂市教育委員会、赤穂市史編さん室には大変なご協力を頂き地元の方々にもご協力を頂いた。また、発掘調査中および報告書の作成にあたっては、下記の方々のご指導とご教示を頂いた。記して深く感謝の意を表します。

石野博信、近藤義郎、杉原和雄、篠原芳秀、丹治康明、富岡儀八、前田保夫、間壁忠彦、丸山潔、森浩一、森田勉、森田稔、山口卓也、山崎純男

# 本文目次

第1章 序章	
第1節 調査に至る経緯と経過	（山本三郎） 1
第2節 試掘調査の概要（昭和53年度の調査）	（松岡秀夫） 2
第3節 全面調査の経過と調査日誌	9
1 全面調査（昭和54年度の調査）の経過	（山本三） 9
2 全面調査日誌抄	（大平 茂） 10
3 整理調査の経過	（山本三、岸本一宏） 21
4 調査の組織体制	（山本三） 23
第2章 遺跡の位置と環境	（山本三） 27
第1節 遺跡の位置	27
第2節 遺跡の周辺環境	30
第3章 調査の記録・遺構	（山本三） 38
第1節 調査地点と調査区の設定	38
第2節 遺跡の概要	40
1 塩田の構造（南区の遺構）	42
2 釜屋関連の遺構（北区の遺構）	45
3 中層・下層・最下層の遺構・遺物	46
第3節 基本層序について	47
1 南区の基本層序（塩田関係の基本層序）	47
2 北区の基本層序	48
第4節 塩田と関連する遺構（上層の遺構）	51
1 塩田の造成と構造	51
2 採鹹土壌	57
3 曲物土壌	64
4 集石遺構	66
5 北区の遺構	70
第5節 中層の遺構（古墳時代後期の遺構）	71
第6節 下層の遺構	80

第4章	調査の記録・遺物	84
第1節	縄文土器	(岸本) 84
第2節	弥生土器・古式土師器・土師器	(山田隆一) 100
1	弥生土器	100
2	古式土師器	102
3	古墳時代後期～室町時代の土師器	116
第3節	須恵器	(山本雅和) 148
1	形態分類	148
2	古墳時代の須恵器	152
3	飛鳥～平安時代前期の須恵器	155
4	平安時代中期以降の須恵器	156
第4節	製塩土器	(山本三) 186
第5節	土鍾	(山本雅) 192
第6節	石器・石製品	(久保弘幸) 204
第7節	木器・木製品	(山本三) 215
第8節	鉄器・鉄製品	(山本三) 222
第9節	その他の遺物	225
1	韓式系土器	(山本雅) 225
2	鹿角末製品	(山本三) 226
3	銅鐵・管玉・金梨	(山本三) 226
4	埴輪	(山本三) 226
5	緑釉陶器	(山本三) 227
6	黒色土器・瓦器	(山本三) 227
7	輸入磁器	(池野栄子) 228
8	亀山焼	(池野) 228
9	備前焼	(山本三) 229
10	瓦	(池野) 229
11	銭貨	(池野) 230
12	土製円板	(山本三) 231

## 卷首図版目次

卷首図版 1	(上) 塩田とその遺構
	(下) 塩田の土層
卷首図版 2	(上) 防潮堤の断面
	(下) 塩田の上層と防潮堤・杭列の関係
卷首図版 3	(上) 防潮堤下の杭列
	(下) 7ライン西壁の土層
卷首図版 4	(上) 採鹹土壌と集石遺構 1 の検出状況
	(下) 採鹹土壌① (塙内上面の木製品と礫石の検出状況)
卷首図版 5	(上) 採鹹土壌② (礫石除去後の木製品の状況)
	(下) 採鹹土壌③ (木製品除去後の黒色粘土と杭の検出状況)
卷首図版 6	(上) 曲物土壌
	(下) 曲物土壌の土層断面

## 挿図目次

第 1 図	確認調査のグリッド配置図	4
第 2 図	確認調査の各グリッド土層断面図①	6
第 3 図	確認調査の各グリッド土層断面図②	7
第 4 図	確認調査の各グリッド土層断面図③	8
第 5 図	遺跡の位置(1/25000、大日本帝国陸地測量部の赤穂図幅を使用)	28
第 6 図	遺跡の位置(1/5000、赤穂市都市計画図26を使用)	29
第 7 図	周辺の遺跡(1/50000、国土地理院の赤穂図幅を使用)	31
第 8 図	遺跡の地形と調査範囲	38
第 9 図	調査区の設定	39
第 10 図	遺構の配置と基本的な土層	41
第 11 図	5ライン西壁土層図	52
第 12 図	FIVグリッド南壁の防潮堤縦断面図	53
第 13 図	防潮堤下の馬遺体実測図	56
第 14 図	採鹹土壌実測図①	58

第 15 図	採鹹土壌実測図②	59
第 16 図	採鹹土壌実測図③	60
第 17 図	採鹹土壌東西セクション断面図	61
第 18 図	採鹹土壌南北セクション断面図	61
第 19 図	曲物土壌実測図	65
第 20 図	曲物土壌の土層断面図	65
第 21 図	採鹹土壌と集石遺構 1 との関係断面図	66
第 22 図	集石遺構 1 実測図	67
第 23 図	集石遺構 2 実測図	68
第 24 図	古銭ピット	70
第 25 図	竈 3 実測図	72
第 26 図	竈と貝塚の配置図	73
第 27 図	竈 1 実測図	73
第 28 図	竈 2 実測図	74
第 29 図	竈 4 実測図	75
第 30 図	竈 5 実測図	76
第 31 図	竈 6 実測図	77
第 32 図	竈 6 と貝塚 4 の関係	78
第 33 図	類竈 7 実測図	79
第 34 図	下層における土壌の配置①	81
第 35 図	下層における土壌の配置②	82
第 36 図	貝土壌実測図	83
第 37 図	土壌 6 実測図	83
第 38 図	縄文土器①	90
第 39 図	縄文土器②	91
第 40 図	縄文土器③	92
第 41 図	縄文土器④	93
第 42 図	縄文土器⑤	94
第 43 図	縄文土器⑥	95
第 44 図	縄文土器⑦	96
第 45 図	縄文土器⑧	97
第 46 図	縄文土器⑨	98
第 47 図	縄文土器⑩	99

第 48 図	弥生土器①	100
第 49 図	弥生土器②	122
第 50 図	古式土師器①	123
第 51 図	古式土師器②	124
第 52 図	古式土師器③	125
第 53 図	古式土師器④	126
第 54 図	古式土師器⑤	127
第 55 図	古式土師器⑥	128
第 56 図	古式土師器⑦	129
第 57 図	古式土師器⑧	130
第 58 図	古式土師器⑨	131
第 59 図	古式土師器⑩	132
第 60 図	古式土師器⑪	133
第 61 図	古式土師器⑫	134
第 62 図	古式土師器⑬	135
第 63 図	古式土師器⑭	136
第 64 図	古式土師器⑮	137
第 65 図	古式土師器⑯	138
第 66 図	古式土師器⑰	139
第 67 図	古式土師器⑱	140
第 68 図	古式土師器⑲	141
第 69 図	古式土師器⑳	142
第 70 図	土師器①	143
第 71 図	土師器②	144
第 72 図	土師器③	145
第 73 図	土師器④	146
第 74 図	土師器⑤	147
第 75 図	須恵器の形態分類①	149
第 76 図	須恵器の形態分類②	151
第 77 図	須恵器①	162
第 78 図	須恵器②	163
第 79 図	須恵器③	164
第 80 図	須恵器④	165

第 81 図	須惠器⑤	166
第 82 図	須惠器⑥	167
第 83 図	須惠器⑦	168
第 84 図	須惠器⑧	169
第 85 図	須惠器⑨	170
第 86 図	須惠器⑩	171
第 87 図	須惠器⑪	172
第 88 図	須惠器⑫	173
第 89 図	須惠器⑬	174
第 90 図	須惠器⑭	175
第 91 図	須惠器⑮	176
第 92 図	須惠器⑯	177
第 93 図	須惠器⑰	178
第 94 図	須惠器⑱	179
第 95 図	須惠器⑲	180
第 96 図	須惠器㉑	181
第 97 図	須惠器㉒	182
第 98 図	須惠器㉓	183
第 99 図	須惠器㉔	184
第 100 図	須惠器㉕	185
第 101 図	製塩土器①	189
第 102 図	製塩土器②	190
第 103 図	製塩土器③	191
第 104 図	土錘①	198
第 105 図	土錘②	199
第 106 図	土錘③	200
第 107 図	土錘④	201
第 108 図	土錘⑤	202
第 109 図	土錘⑥	203
第 110 図	石器・石製品①	208
第 111 図	石器・石製品②	209
第 112 図	石器・石製品③	210
第 113 図	石器・石製品④	211

第114図	石器・石製品⑤	212
第115図	石器・石製品⑥	213
第116図	石器・石製品⑦	214
第117図	木製品①	217
第118図	木製品②	218
第119図	木製品③	219
第120図	木製品④	221
第121図	鉄器・鉄製品	224
第122図	韓式土器	232
第123図	韓式土器復原図	232
第124図	銅鐵・管玉	233
第125図	鹿角未製品	233
第126図	円筒埴輪	233
第127図	緑釉陶器	232
第128図	黒色土器・瓦器	234
第129図	輸入磁器	234
第130図	龜山焼	234
第131図	瓦	235
第132図	古銭	235
第133図	備前焼	236
第134図	土製円板	236

## 本文付図目次

付図1	7ラインの土層断面図
付図2	塩田の遺構配置図
付図3	中世ピット群

## 本文表目次

第1表	遺構出土の土錘	193
第2表	土錘の形態別・地区別出土点数一覧表	193
第3表	土錘I類重量頻度	194

第4表	土鍾Ⅰ・Ⅱ類孔径頻度	194
第5表	土鍾Ⅰ類の重量と孔径の相関	195
第6表	出土石器器種組成表	204
第7表	銭貨一覧表	231

## 本文写真目次

写真1	分層発掘の状況	11
写真2	写真撮影の影作り	11
写真3	集石遺構2の実測の状況	13
写真4	水被害の状況	13
写真5	現地指導の状況(左から松岡秀夫、廣山飛道、近藤義郎の各氏)	14
写真6	北区の発掘の状況	15
写真7	貝塚1のサンプリングの状況	17
写真8	7ラインの土層の状況	18
写真9	拡張区の機械掘削の状況	19
写真10	南区の塩田の砂による保護層の状況	20
写真11	整理調査の状況	26

## 図版目次(図版編)

図版一	遺跡	上空からみた遺跡の景観
図版二	遺跡	(上) 南上空からみた堂山遺跡 (下) 北上空からみた堂山遺跡
図版三	遺跡	(上) 北上空からみた遺跡の近景 (下) 全面調査前の遺跡の状況(南から)
図版四	南区の遺構	塩浜における遺構の配置(東から)
図版五	南区の遺構	(上) 塩浜とその遺構(東から) (下) 採鹹土壌と集石遺構の関係(西から)
図版六	南区の遺構	(上) 5ライン西壁の土層断面①(塩浜の土層) (下) 5ライン西壁の土層断面②(塩浜の土層)

図版七	南区の遺構	(上) 7ライン・9ライン西壁の土層断面 (塩浜の土層) (下) 7ライン西壁土層断面 (塩浜の土層と防潮堤・杭列の關係)
図版八	南区の遺構	(上) F V・F VIグリッドの防潮堤と踏み石 (北から) (下) 集石遺構 2 (北から)
図版九	南区の遺構	(上) 集石遺構 2 (西から) (下) 集石遺構 1 (西から)
図版十	南区の遺構	(上) 防潮堤の断面 (5ライン西壁) (下) 防潮堤下の杭列 (F VIグリッド)
図版十一	南区の遺構	(上) 防潮堤下の馬遺体と集石遺構 1 の關係 (西から、F IIグリッド) (下) 防潮堤下の馬遺体① (北から、F IIグリッド)
図版十二	南区の遺構	(上) 防潮堤下の馬遺体② (西から、F IIグリッド) (下) 馬骨
図版十三	南区の遺構	(上) 採鹹土壌の検出状況と集石遺構 1 の關係① (北から、E II・F IIグリッド) (下) 採鹹土壌の検出状況と集石遺構 1 の關係② (西から、E II・F IIグリッド)
図版十四	南区の遺構	(上) 採鹹土壌① (塙内最上面出土須恵器、東から) (下) 採鹹土壌② (塙内最上面出土須恵器近景、東から)
図版十五	南区の遺構	(上) 採鹹土壌③ (塙内上面の木製品と礫石の検出状況、南から) (下) 採鹹土壌④ (セクション除去後の塙内上面の木製品と礫石の検出状況、南から)
図版十六	南区の遺構	(上) 採鹹土壌⑤ (塙内上面の木製品と礫石の検出状況、西から) (下) 採鹹土壌⑥ (塙内上面の木製品と礫石の検出状況、南から)
図版十七	南区の遺構	(上) 採鹹土壌⑦ (塙内上面の木製品と礫石の検出状況近景北から) (下) 採鹹土壌⑧ (塙内 I 区の上面の検出状況、北から)
図版十八	南区の遺構	(上) 採鹹土壌⑨ (塙内 II 区の上面検出状況、西から) (下) 採鹹土壌⑩ (塙内 II 区の上面検出状況、北から)

図版十九	南区の遺構	(上) 採鹹土塋① (塋内Ⅰ区上面の沼井かき等の検出状況、北から) (下) 採鹹土塋② (沼井かき出土状態近景)
図版二十	南区の遺構	(上) 採鹹土塋③ (礫石除去後の塋内上面の検出状況、北から) (下) 採鹹土塋④ (礫石除去後の塋内上面の検出状況近景、北から)
図版二十一	南区の遺構	(上) 採鹹土塋⑤ (礫石除去後の塋内上面の検出状況、西から) (下) 採鹹土塋⑥ (礫石除去後の塋内上面の木製品検出状況近景、東から)
図版二十二	南区の遺構	(上) 採鹹土塋⑦ (礫石除去後の塋内上面の木製品検出状況近景、東から) (下) 採鹹土塋⑧ (礫石、木製品除去後の塋内Ⅰ区の黒色年度の断面、北から)
図版二十三	南区の遺構	(上) 採鹹土塋⑨ (塋内Ⅰ区の黒色粘土中に検出した木製品西から) (下) 採鹹土塋⑩ (塋内Ⅱ区の黒色粘土中に検出した木製品北から)
図版二十四	南区の遺構	(上) 採鹹土塋⑪ (礫石、木製品除去後の塋内の黒色粘土と杭の検出状況、北から) (下) 採鹹土塋⑫ (礫石、木製品除去後の塋内の黒色粘土と杭の検出状況、西から)
図版二十五	南区の遺構	(上) 採鹹土塋⑬ (礫石、木製品、黒色粘土除去後の塋内周縁粘土の検出状況、北から) (下) 採鹹土塋⑭ (塋内周縁粘土の断面近景、北から)
図版二十六	南区の遺構	(上) 曲物土塋① (検出状況、東から) (下) 曲物土塋② (塋内の土層)
図版二十七	南区の遺構	(上) 曲物土塋③ (塋内の曲物検出状況、西から) (下) 曲物土塋④ (塋内の曲物検出状況、西から)
図版二十八	南区の遺構	(上) 曲物土塋⑤ (曲物除去後の塋内周縁粘土の検出状況) (下) 曲物土塋⑥ (周縁粘土除去後の土塋の検出状況)

図版二十九	北区の遺構	(上) 上層の貝塚 (下) 古銭ピット (上層)
図版三十	北区の遺構	(上) 中層の竈址6と貝塚6の関係① (BⅦ・BⅨグリッド 東から) (下) 中層の竈址6と貝塚6の関係② (BⅦ・BⅨグリッド 南から)
図版三十一	北区の遺構	(上) 中層の竈址6の検出状況① (南から) (下) 中層の竈址6の検出状況② (南から)
図版三十二	北区の遺構	(上) 中層の竈址3の検出状況① (AⅤグリッド、東から) (下) 中層の竈址3の検出状況② (AⅤグリッド、東から)
図版三十三	北区の遺構	(上) 中層の竈址1の検出状況 (AⅡグリッド、南から) (下) 中層の竈址5の検出状況 (AⅦグリッド、東から)
図版三十四	北区の遺構	(上) 中層の竈址4の検出状況① (BⅤグリッド、南から) (下) 中層の竈址4の検出状況② (断面の状況、南から)
図版三十五	北区の遺構	(上) 3ラインの西壁土層断面と中層・竈址2の状況 (BⅢ ・AⅢグリッド、東から) (下) 中層の竈址二の検出状況 (BⅢグリッド、南から)
図版三十六	北区の遺構	(上) 下層の貝土壌 (XⅠグリッド) (下) 下層の土壌6 (XⅤグリッド)
図版三十七	北区の遺構	(上) 下層の土壌5 (AⅢグリッド) (下) 下層の土壌7 (AⅡグリッド)
図版三十八	土層断面	(上) 7ライン西壁土層 (BⅥグリッドの東壁土層) (下) 7ライン西壁土層 (BⅥ・CⅦグリッドの東壁土層)
図版三十九	土層断面	(上) 3ラインの東壁土層 (XⅢグリッドの西壁土層) (下) 3ラインの東壁土層 (BⅢ・AⅢXⅢグリッドの西壁 土層)
図版四十	土層断面	(上) 7ライン西壁土層 (DⅥグリッドの東壁土層) (下) 7ライン西壁土層 (DⅥ・EⅦグリッド東壁土層)
図版四十一	遺物	(上) 縄文土器① (下) 縄文土器②
図版四十二	遺物	(上) 縄文土器③ (下) 縄文土器④
図版四十三	遺物	(上) 縄文土器⑤

		(下) 繩文土器⑥
図版四十四	遺物	(上) 繩文土器⑦
		(下) 繩文土器⑧
図版四十五	遺物	(上) 繩文土器⑨
		(下) 繩文土器⑩
図版四十六	遺物	(上) 繩文土器⑪
		(下) 繩文土器⑫
図版四十七	遺物	(上) 古式土師器①
		(下) 古式土師器①
図版四十八	遺物	古式土師器②
図版四十九	遺物	古式土師器③ (土壇 5 出土土器)
図版五十	遺物	(上) 古式土師器④ (土壇 5 出土土器)
		(下) 古式土師器⑤ (土壇 5 出土土器)
図版五十一	遺物	古式土師器⑥ (土壇 5 出土土器)
図版五十二	遺物	古式土師器⑦ (土壇 5 出土土器)
図版五十三	遺物	(上) 古式土師器⑧ (土壇 6 出土土器)
		(下) 古式土師器⑨ (土壇 6 出土土器)
図版五十四	遺物	(上) 古式土師器⑩
		(下) 古式土師器⑪
図版五十五	遺物	古式土師器⑫
図版五十六	遺物	(上) 古式土師器⑬
		(下) 古式土師器⑭
図版五十七	遺物	(上) 古式土師器⑮
		(下) 古式土師器⑯
図版五十八	遺物	(上) 古式土師器⑰
		(下) 古式土師器⑱
図版五十九	遺物	古式土師器⑲
図版六十	遺物	古式土師器⑳
図版六十一	遺物	古式土師器㉓
図版六十二	遺物	(上) 古式土師器㉔
		(下) 古式土師器㉕
図版六十三	遺物	土師器①
図版六十四	遺物	(上) 土師器②

図版六十五	遺物	(下) 土師器③
		(上) 土師器④
		(下) 土師器⑤
図版六十六	遺物	須恵器①
図版六十七	遺物	須恵器②
図版六十八	遺物	須恵器③
図版六十九	遺物	須恵器④
図版七十	遺物	須恵器⑤
図版七十一	遺物	須恵器⑥
図版七十二	遺物	須恵器⑦
図版七十三	遺物	須恵器⑧
図版七十四	遺物	(上) 須恵器⑨
		(下) 須恵器⑩
図版七十五	遺物	須恵器⑪
図版七十六	遺物	須恵器⑫
図版七十七	遺物	(上) 須恵器⑬
		(下) 須恵器⑭
図版七十八	遺物	(上) 須恵器⑮
		(下) 須恵器⑯
図版七十九	遺物	(上) 須恵器⑰
		(下) 須恵器⑱
図版八十	遺物	(上) 須恵器⑲
		(下) 須恵器⑳
図版八十一	遺物	(上) 須恵器㉑
		(下) 須恵器㉒
図版八十二	遺物	(上) 韓式土器
		(下) 円筒埴輪
図版八十三	遺物	(上) 輸入磁器
		(下) 黒色土器・瓦器
図版八十四	遺物	(上) 備前焼・亀山焼
		(下) 飯蛸壺・土製円板等
図版八十五	遺物	(上) 製塩土器①
		(下) 製塩土器②

図版八十六	遺物	製塩土器③ (上段は外面、下段は内面)	
図版八十七	遺物	製塩土器④ (上段は外面、下段は内面)	
図版八十八	遺物	製塩土器⑤ (上段は外面、下段は内面)	
図版八十九	遺物	(上) 製塩土器⑥	
		(下) 鹿角未製品	
図版九十	遺物	土錘	
図版九十一	遺物	(上) 石錘	
		(下) 石錘	
図版九十二	遺物	(上) 叩石	
		(下) 軽石	
図版九十三	遺物	(上) 鉄器①	
		(下) 鉄器②	
図版九十四	遺物	(上) 鉄器③	
		(下) 銅鏃、耳環、古銭	
図版九十五	遺物	(上) 古銭① (古銭ビット出土)	(下) 古銭②
図版九十六	遺物	採鹹土塋出土遺物①	
図版九十七	遺物	採鹹土塋出土遺物②	
図版九十八	遺物	採鹹土塋出土遺物③	
図版九十九	遺物	鹹土塋出土遺物④	
図版百	遺物	採鹹土塋出土遺物⑤	
図版百一	遺物	採鹹土塋出土遺物⑥	
図版百二	遺物	採鹹土塋出土遺物⑦	
図版百三	遺物	(上) 防潮堤出土の木杭	(下) 塩浜の埋立層出土の種子

## 遺物観察表目次 (遺物観察表編)

1. 縄文土器	1
2. 弥生土器	14
3. 古式土師器	17
4. 土師器	53
5. 須恵器 (古墳時代)	60
6. 須恵器 (飛鳥～平安時代前期)	76
7. 須恵器 (平安時代中期以降)	86
8. 製塩土器	99
9. 土錘	105

# 第1章 序 章

## 第1節 調査に至る経緯と経過

兵庫県赤穂市・堂山遺跡は、列島において初めて平安時代後期から鎌倉時代後半の塩田（塩浜）の構造が考古学的に解明された発掘調査である。

堂山遺跡の発掘調査は、昭和53・54年度に山陽自動車道建設に伴う事前調査として実施された。

山陽自動車道は「国土開発幹線自動車建設法」に基づき計画・建設される高速道路であり、大阪府吹田市を起点として兵庫県、岡山県、広島県を通り、終点山口県山口市を結ぶ総延長約426kmである。

堂山遺跡のある赤穂市域を通る山陽自動車道は、「兵庫県姫路市～広島県佐伯郡甘日町」の区間の中であり、この区間の基本計画が決定されたのは、昭和46年6月8日である。

昭和47年6月20日には、姫路市から備前市間の整備計画が決定され、同日付をもって建設大臣から日本道路公団に施行命令が発せられた。そして、同年12月13日に日本道路公団から路線発表が行われた。

埋蔵文化財の事前協議については、基本計画が発表された段階、あるいは、それ以前からから始まっており、昭和47年度に幅約200mの基本計画範囲内の分布調査や周知の遺跡の立会調査等を行い、その時点で明らかになっている学術上・歴史上重要な遺跡については路線外に保存できるかどうかの協議を行った。揖保郡揖保川町・美久山墳墓群はこのような協議の中で路線外に保存された遺跡である。

赤穂市域において、山陽自動車道建設に伴って発掘調査を実施したのは、この堂山遺跡のみである。その原因は、トンネルが多いことに加えて遺跡の希薄のところroad計画されたからであろう。因みに、赤穂市域の路線内の周知の遺跡は、基本計画段階では皆無であった。

堂山遺跡は事前の分布調査による発見ではなく、昭和53年10月22日に、松岡秀夫先生によって発見された。その場所は山陽自動車道の赤穂インターとそのアクセス道路建設予定地であった。直ちに、「文化財保護法」第57条の6に基づく遺跡発見通知が昭和53年10月30日付で赤穂市教育長から提出された。因みに、この段階では遺跡は弥生土器散布地と報告されている。

これを受けて、兵庫県教育委員会と日本道路公団は、試掘の発掘調査が必要であることとその時期などの協議を行った。試掘調査が必要であることはすぐに了解に達したが、道路公団は工期の関係から、試掘調査を急いでほしいとのことであり、昭和53年度中の実施の要望であ

った。年度途中のことでもあり、兵庫県教育委員会にも人的手当が困難な状況であった。しかし、不時発見の遺跡でもあり、県教育委員会としても遺跡の性格等を早く把握したいところもあり、可能な限り道路公団の要望に答える方向で検討することとした。

そこで、兵庫県教育委員会は赤穂市教育委員会と相談・協議したところ、試掘調査については、赤穂市教育委員会が発掘調査団を組織して実施してもよいという回答を得た。なお、この時期、赤穂市教育委員会ではまだ埋蔵文化財専門職員は未配置であった。

日本道路公団大阪建設局と赤穂市が委託契約を行い、赤穂市教育委員会は、「赤穂市大津堂山遺跡試掘調査団（団長松岡秀夫）」を組織して、昭和54年1月3日～1月7日の5日間にわたって堂山遺跡の試掘調査を行った。

試掘調査対象地は段差のある3面の畑地・水田面からなり、北側が高い。そこに、上段の畑地1列・6ヵ所、中段の畑地に2列・12ヵ所、下段に1列・3ヵ所の計21ヵ所に2×2mのグリッドを設定して、調査を行った。なお、便宜上、北から順にA・B・C・D列と呼称された。調査は、D列を除く、多くのグリッドから縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・製塩土器等の遺物包含層や遺構が検出された。

試掘調査の段階から、中段のC Iグリッドの板囲い遺構とその土層が入浜式塩田の土層と相似していることから、古代塩田の遺構の推測されている。

その結果、上段と中段の田地については全面調査が必要であるという判断に至った。

全面調査は、範囲がそれ相当の規模になること、調査期間から調査円で発掘調査を遂行するには多くの困難があることなどから、全面調査は次年度に兵庫県教育委員会が行うことになった。

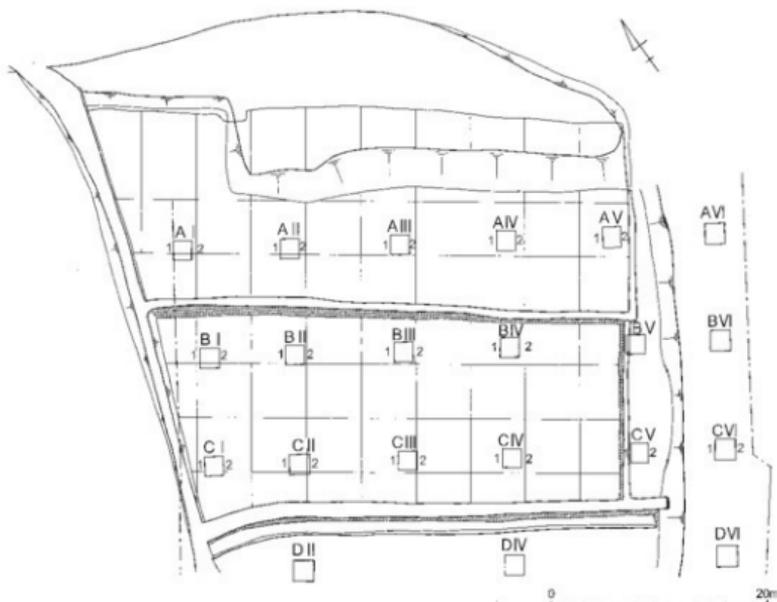
そして、昭和53年4月16日から、兵庫県教育委員会による全面調査が開始されるに至った。なお、前年度の協議のときの合意事項として、試掘調査の調査団のメンバーは、学識経験者として、全面調査の一員として加わっていただき、定期的に調査検討委員会を行った。とくに、松岡秀夫先生、廣山堯道先生には、全面調査期間を通じて共に調査にあたっていただいた状況であり、絶えず、ご指導、ご教示を賜り、大変にお世話になった。

## 第2節 試掘調査の概要（昭和53年度の調査）

試掘調査の報告書は既に、昭和53年3月に『赤穂市大津堂山遺跡試掘調査報告書—山陽自動車道大津インター—』として赤穂市から刊行されているが、県外の方々には入手が困難であること、また、試掘調査の段階ですでに「古代塩田の遺構が推測」されている重要性を鑑み、了解を得て、本報告書に再録させていただいた。本文は「試掘報告書」のとおりであるが、挿図類は縮尺等を変えて掲載させていただいた。

## 『赤穂市大津堂山遺跡埋蔵文化財試掘調査報告』

1. 調査地 赤穂市塩屋字堂山 山陽自動車道用地内
2. 調査日 昭和54年1月3日～1月7日（5日間）
3. 調査員 松岡秀夫（有年考古館長）  
河原隆彦（東洋大姫路高校教諭）  
谷崎良晴（神戸野田高校教諭）  
松岡秀樹（兵庫県播磨高校教諭）  
松本 保（赤穂西中学校教諭）  
谷中 進（赤穂中学校教諭）  
廣山堯道（赤穂高校教諭）  
赤穂市教育委員会・赤穂市史編さん室
4. 事務局 赤穂市教育委員会
5. 調査方法 東西50m、南北30mの調査該当地を10m角に区切り、各区に縦横2mずつの試掘地を設定、調査した。
6. 調査成績
  - (1) A列
    - ① A I 1. 30mの深さを8層に区別した。第3層（0.5m）の黒褐色粘土層から、土師器・弥生式土器の小破片出土。第6層（0.8m）のところには厚さ約0.2mの貝層が発見された。貝類はハイガイを主としていて、時に須恵器の破片を混じている。そのしたの第7・8層は砂層である。この貝塚は北方に広がっている模様である。
    - ② A II 深さ1.3mの試掘穴は5層の地層からなり、第3層の黒褐色粘土層から弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器等の破片出土。第5層から土師器片出土。
    - ③ A III 1.8mの深さまで試掘。第3層（0.4m）の黒褐色粘土層から弥生土器・須恵器の破片出土。次の第4・5層からも土器片出土。
    - ④ A IV 1.9mの深さまで試掘。9層に分けられる。第3層から弥生土器・土師器片出土。第4・5層からも土器片出土。第6・7・8層は色を違えた砂層であるが遺物は含まない。遺構なし。
    - ⑤ A V 試掘穴は6層の地層からなっている。第5層の褐色砂層から、土師器・弥生土器の破片とサヌカイト製の石包丁出土。遺構なし。



第1図 確認調査のグリッド配置図

- ⑥ AVI 1. 9mの深さまで掘る。地層は8層に分かれていて、第3層の褐色粘土層から土師器破片出土。以下の各層に遺物を含まず。遺構なし。
- (2) B列
- ① B I 1. 0mの深さにて砂層となる。7層の地層を分かち得るも、第3・4・5層のあたりより1～2片の土師器片を採取したのみ。
- ② B II B Iと同様1. 0mの深さまで白砂層となる。第3・4・5層のあたりより少量の土師器弥生土器片を採取。
- ③ B III 前2つのトレンチと同様、1. 0m付近にて白砂層となる。第4・5・6層より少量の弥生土器・製塩土器片を採取す。遺構なし。
- ④ B IV 1. 8mの深さまで発掘。第5層の黄砂層からかなりの縄文土器片出土。遺構なし。
- ⑤ B V 1. 8mの深さを5層に分けられるが、第3層の黒褐色土層から須恵器・土師器・土釜片等出土。
- ⑥ B VI 1. 3mの深さまで掘る。地層は5層に分けられる。最下層の黒砂層から土師器・縄文土器片出土。遺構なし。

(3) C列

- ① C I 1. 5mの深さまで発掘する。地層は5層に分けられる。第3層の褐色土層から摺鉢片・土師器片出土。第4層は褐色砂層で柔らかく弾力性がある。その下層の黒褐色砂層との間に幅0.15m、長さ約0.5m、厚さ0.03mに板が杭に支えられて立ててあり、この板と0.6m隔てて、更に厚くて長い板がほぼ平行に立てられている。この板はその先端を試掘穴の壁中にはいついてその全長は測り得ない。第4層の褐色土層は入浜式塩田の土質に似ている、板を立てて囲った遺構が発見されたことは重大で、ここに古代塩田の存在を推測せしめるに十分な資料である。
- ② C II 1. 2mの深さまで発掘。地層は6層に分けられるが、第3・4・5層の黒褐色土層から白色の山礫に交じって、土師・須恵器・土師器片が出土。遺構なし。
- ③ C III C II同様、1.2mの深さにて、淡色砂層となる。地層は5層に分けられる。第3・4層の黒褐色土層から須恵器・土師器片出土。
- ④ C IV 1. 2mの深さまで掘る。地層は6層に分けられる。第3・4・5層の黒褐色の礫交じりの層から、黒褐色砂層にいたる間に、円筒埴輪片、弥生土器片・須恵器片布目瓦片が出土。須恵器には底に糸切底を有するものが交じっている。

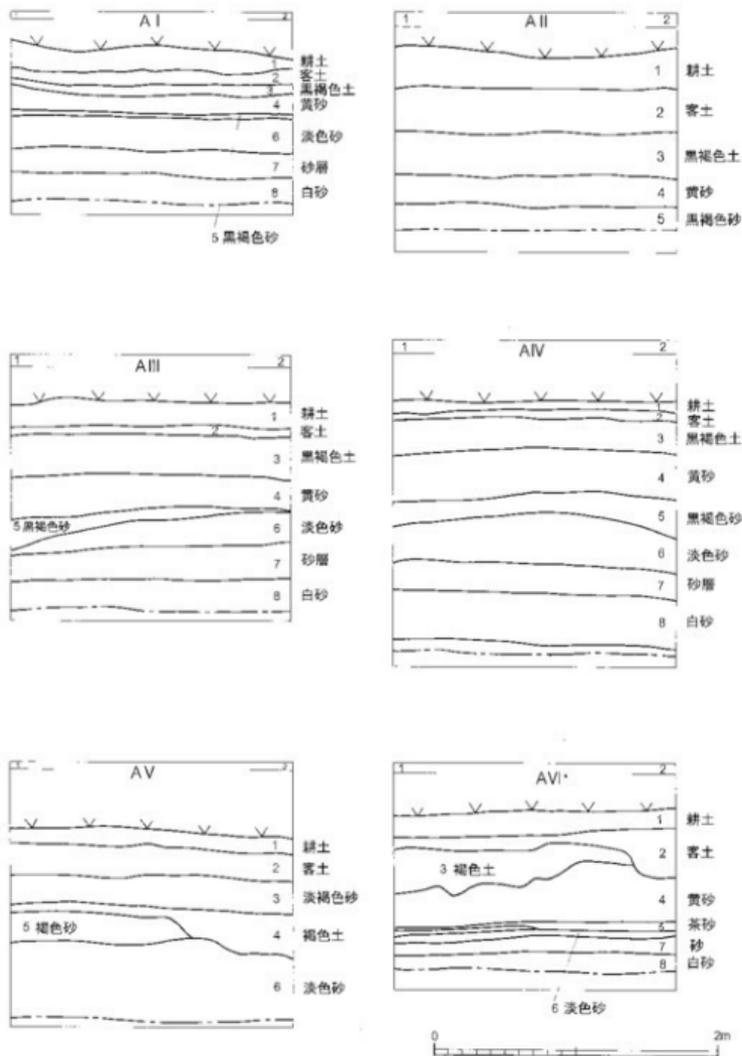
(3) D列

- ① D VI 0.6mの発掘において、湧水多く作業困難となる。地層は6層に分けられ、第3層の黒褐色土層から、須恵器・土師器の小片が多数出土。この層に流木も埋もれていた。遺構は見られず。
- ② D IV 約0.5mの深さまで発掘したが、湧水多く作業中止。出土物なし。

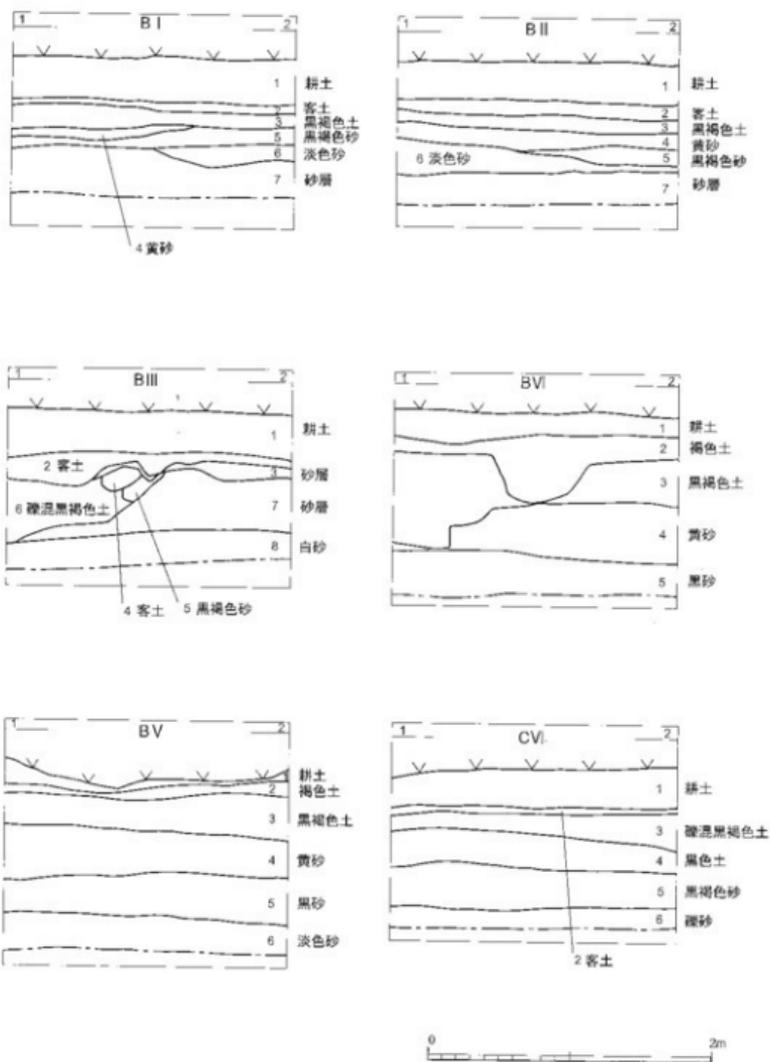
以上20ヶ所の試掘調査において得たる主な所見は、第1にA Iにおいて発見された古墳時代とみられる貝塚の発見である、この貝塚はなお北方へ広がっているものと見られ、全面発掘調査が必要である。第2にはC Iトレンチにおける板囲いの遺構の発見である。この板囲いの遺構が何を意味するかを明らかにすることは、この板囲いのある土層が、入浜式塩田の土層と相似していることと併せて考えて、あるいは古代塩田の遺構にあらずやの推測をなさしめるものである。これを明らかにするために更に拡大して板囲いの遺構の完全調査と、塩田土層と相似た土層の全面追求のために、全面発掘調査の必要を痛感する次第である。なお、前期弥生土器と製塩土器の発見は赤穂地方最初のもので、考古学上からみてその意義は大きいものである。

右報告いたします。

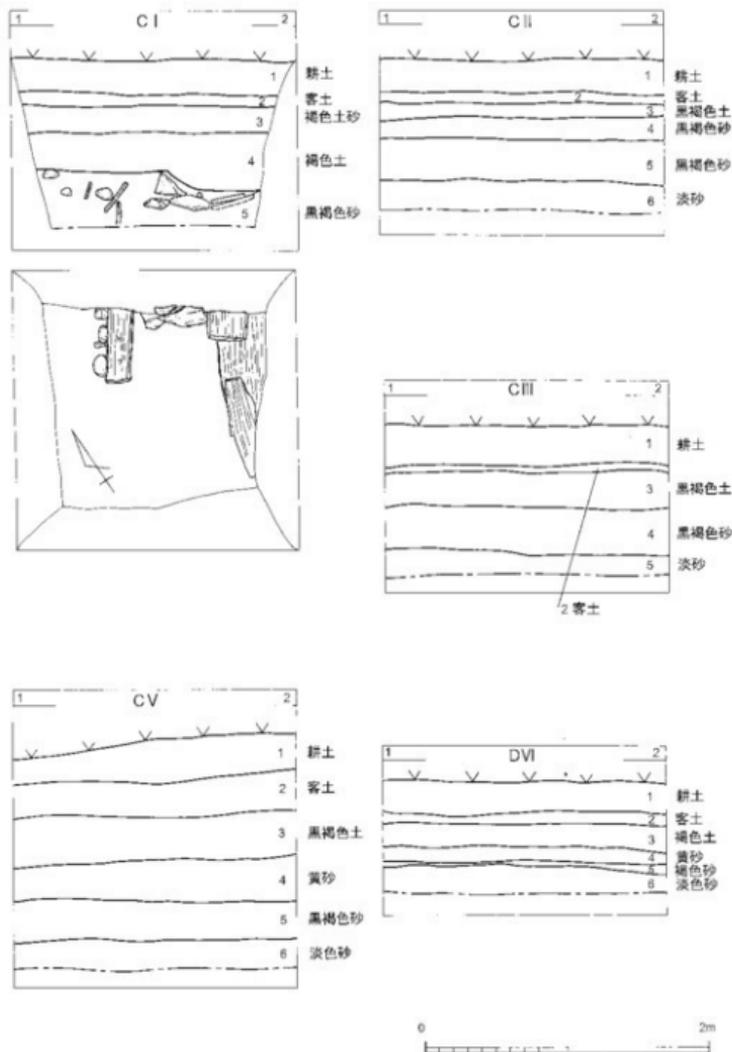
発掘責任者 松岡 秀夫



第 2 図 確認調査の各グリッド土層断面図①



第 3 図 確認調査の各グリッド土層断面図②



第 4 図 確認調査の各グリッド土層断面図③

### 第3節 全面調査の経過と調査日誌

#### 1. 全面調査（昭和54年度の調査）の経過

昭和54年度の発掘調査は、4月16日から開始し、10月12日に赤穂市民会館で行った発掘調査の成果の記者発表をもって現地での調査は終了した。その10日後の10月21日に県民向け発掘調査報告会を赤穂市民会館で行った。

この年この時期雨が多かったという印象であるが、約6ヶ月の発掘調査期間であった。なお、全面調査の進行の過程で、すなわち、北区の調査を開始した8月中旬ごろに、当初の調査範囲より北側に遺構が広がっていることが明らかになり、調査範囲の拡張と調査期間の延長を日本道路公団と協議を行ったのは8月27日であった。基本的に合意にいたり、所用の契約変更などを行った。拡張した範囲はほぼXⅢ～XⅨの各グリッドに相当し、調査期間は約1.5ヶ月の延長であった。

4月16日は発掘器材の運搬や発掘作業を委託する飛鳥建設赤穂作業所と発掘調査の打合せを行い、17日の午前中は、道路公団赤穂工事事務所と赤穂市教育委員会に発掘調査開始の挨拶、午後は第1回調査検討委員会を赤穂市民会館で行った。議題は試掘調査の結果報告と全面調査の日程が主であったが、そのとき、委員の先生方の勤務の関係で毎土・日曜日も調査を行ってほしいことと基本的にこの委員会を委員の交流を深めるためにも2週間に一度の割りて調査の経過報告を行って欲しいという要望が試掘調査の団長の松岡秀夫先生からあった。出来るだけ前向きに考える方向で検討することとし、次回の委員会を4月28日に開催することを決めた。その後、上司とも相談し、調査検討委員会は基本的に要望とおり行うこととしたが、土・日曜日の件は、土曜日を行うこととし、日曜日は原則として休みとさせていただいた。

現地の調査を開始したのは、4月18日からで、草木の伐採であった。発掘調査を設定したのは4月24日である。掘削を開始したのは、4月25日からで、南区の調査から開始した。南区が塩田に関連する遺構群であろうと捉えて間違いないのではと考えだしたころの6月27日の大雨で調査区全域にわたり、水と土砂が流入し、その被害状況は床上浸水の相当する被害であった。溜まった水を汲み出すと、そこには、数10cmのヘドロが堆積していた。ヘドロを除去するのに大変苦労した。探鍼土壌の精査は長期間かかり、上面を検出したのが5月22日で、黒色粘土下の祭祀遺物の写真撮影や取り上げなどを行い終了したのは8月3日である。ひとつの遺構に2ヶ月半ほどかかったことになる。

保存についても協議したが、工事の進捗状況から困難であるとの判断のもと記録保存という措置をとらざるを得なかった。なお、南区の塩田面は橋脚の位置ではなく、土盛工法であるので、せめて砂を入れて遺構保護に努め、将来に託した

## 2. 全面調査日誌抄

4月16日(月)曇り時々雨

王子分館から現場事務所に発掘用具の搬入。飛鳥建設赤穂作業所と調査工程の打合せ。

4月17日(火)晴れ

赤穂市教育委員会、日本道路公団赤穂工事事務所へ発掘調査開始の挨拶と打合せ。現場用品購入。午後、第1回調査検討委員会を赤穂市民会館にて開催。試掘調査結果の報告と発掘調査の日程及び塩田の可能性の高い調査にあたっての注意事項について。

4月18日(水)晴れ

C～F区の草木の伐採とベルトコンベヤーの設置。

4月19日(木)雨

現場休止、室内の整理と赤穂市塩業資料館を見学、廣山発道先生に説明を受け、塩田の調査上のことについて教えていただく。

4月20日(金)雨後曇り

現場休止。室内作業。

4月23日(月)晴れ

試掘調査時掘削土の除去。コンテナの入荷。

4月24日(火)晴れ

試掘調査時掘削土の除去及び5m方眼の調査区の設定を行う。

4月25日(水)曇り

南区から調査を開始。南区C～F-VIグリッドの掘削を行う。CVIグリッドの耕土下の擾乱層から古墳時代初頭ごろの上器が出土。

4月26日(木)曇り後雨

EIV・FVIグリッドの掘削、EVIグリッドで石蔵が出土。

赤穂市史編纂室の方々が見学。

4月27日(金)曇り

C～F-IVグリッドの掘削。CIVグリッドで庄内期の土器が出土。赤穂市教育長見学。

4月28日(土)曇り後晴れ

調査検討委員会(第2回・現場事務所)、調査進捗状況と今後の日程について報告。

5月2日(水)曇り

C～F-Vグリッドの掘削。D・E-VIグリッドの掘削。15cmごとの分層発掘を試みる。

5月3日(木)晴れ

E・F-Vグリッドの掘削。D・E-VIグリッドの掘削。15cmごとの分層発掘を試みる。

5月4日(金) 晴れ後曇り

E・F-V・VIグリッドの塩田地盤の上の層を掘削、FVグリッドで礎石を検出。後に防潮堤の粘土上に置かれた踏み石と理解する。道路公団赤穂工事事務所の視察。

5月7日(月)

E・F-V・VIグリッドの掘削。

5月8日(火) 雨

現場休止。室内作業。

5月9日(水) 晴れ

D・E・F-IVグリッドの掘削。

5月10日(木)

D・E・F-IVグリッドの掘削。

5月11日(金)

C~F-II・IIIグリッドの掘削。

5月14日(月) 雨

現場休止。土器の水洗い等の室内作業。

5月15日(火)

C~F-II・IIIグリッドの掘削。

5月16日(水) 晴れ

D・E・F-II・IIIグリッドの掘削。

5月17日(木) 雨

現場休止。土器の水洗い等の室内作業。杉原和雄氏(京都府立丹後郷土資料館)現場見学。

5月18日(金)

D・E・F-II・IIIグリッドの掘削。

5月19日(土)

D・E・F-II・IIIグリッドの掘削。

5月20日(日)

D・E・F-II・IIIグリッドの掘削。

5月21日(月) 晴れ

D・E・F-II・IIIグリッドの掘削。

5月22日(火) 晴れ

E-II・IIIグリッドの掘削、塩田地盤面に探鍼土壌の掘方を検出。

5月23日(水) 晴れ

E・F-II・IIIグリッドの掘削。探鍼土壌のすぐ南に集石遺構1を検出。



写真1 分層発掘の状況



写真2 写真撮影の影作り

5月24日(木) 晴れ

E・F-Ⅱ・Ⅲグリッドの土層観察畦断面図作成。C～F-Ⅶグリッドの掘削。

5月25日(金) 晴れ

FⅡグリッドの集石遺構の南端で杭列を検出、杭列の西端に馬遺体を検出。後に防潮堤粘土下に埋められたと判明。

5月28日(月) 晴れ

E-Ⅲ・Ⅳグリッドの土層観察畦の除去。

5月29日(火) 晴れ

C～F-Ⅸグリッドの掘削。

5月30日(水) 晴れ

DⅡグリッドで曲物土壌を検出。E・F-Ⅳグリッドで集石遺構2を検出。

5月31日(木) 晴れ

C～F-Ⅶ・Ⅷグリッドの掘削。

6月1日(金) 晴れ

C～F-Ⅱグリッドの埴田地盤上面の遺構検出状況の写真撮影。D～F-Ⅶ・Ⅷグリッドの掘削。

6月2日(土) 晴れ

調査検討委員会(第3回・現場事務所)、調査進捗状況の報告と遺構の検討及び打合せ。

C～F-Ⅱグリッドの集石遺構1の写真撮影。E・F-Ⅶ・Ⅷ・Ⅸグリッドの掘削。

6月4日(月) 晴れ

EⅡ区の探鍼土壌検出状況の写真撮影。E・F-Ⅶ・Ⅷ・Ⅸグリッドの掘削。埴輪片が出土。

6月5日(火) 晴れ

EⅡグリッドの探鍼土壌の掘り下げ。E・F-Ⅶ・Ⅷ・Ⅸグリッドの掘削。布目瓦が出土。

6月6日(水) 曇り後雨

EⅡグリッドの探鍼土壌の掘り下げ、平安時代後期頃の瓦質土器が出土。E・F-Ⅳグリッドの埋立層の掘削、埋立層からは果実(桃核)及び木片が多い。

6月7日(木) 雨(本日から梅雨入り)

現場休止。土器の水洗い、図面整理等の室内作業。

6月8日(金) 雨

現場休止。土器の水洗い、図面整理等の室内作業。

6月11日(月) 雨

現場休止。土器の水洗い、図面整理等の室内作業。

6月12日(火) 曇り後晴れ

前日の雨、排水作業。E・F-Ⅲ・Ⅳグリッド間の土層観察畦を除去。

6月13日(水) 曇り

EⅡグリッドの採鹹土壌の掘り下げ、沼井かきを発見。北区の草木の伐採。

6月14日(木) 曇り後晴れ

EⅡグリッドの採鹹土壌の掘り下げ。E・F-Ⅲ・Ⅳグリッドの集石遺構2の写真撮影。E・F-Ⅶ・Ⅷ・Ⅸグリッドの掘削。

6月15日(金) 曇り

EⅡグリッドの採鹹土壌の構造物的な板材と集石遺構1の写真撮影。E・F-Ⅶ・Ⅷ・Ⅸグリッドの掘削。

6月18日(月) 晴れ

E・F-Ⅶ・Ⅷ・Ⅸグリッドの掘削。

6月19日(火) 晴れ

EⅡグリッドの採鹹土壌の土層断面写真撮影。

6月20日(水) 曇り

北区の調査を開始。B-Ⅲ・Ⅳグリッドの掘削。F-Ⅶ・Ⅷグリッドで杭列を検出。

6月21日(木) 雨

現場休止。土器の水洗い、図面整理等の室内作業。

6月22日(金) 晴れ

A・B-Ⅲ・Ⅳグリッドの掘削。E-Ⅱ区の採鹹土壌の断面図作成。E・F-Ⅲ・Ⅳグリッドの集石遺構2の実測。

6月25日(月) 曇り時々雨

A・B-Ⅲ・Ⅳグリッドの掘削。E・F-Ⅲ・Ⅳグリッドの集石遺構2の実測。EⅡグリッドの採鹹土壌の土層観察畦除去。

6月26日(火) 曇り

A・B-Ⅲ・Ⅳグリッドの掘削。EⅡグリッドの採鹹土壌の土層観察畦除去。

6月27日(水) 大雨

現場休止。大雨で現場の状況を度々見に行く。ひどい状況になりそう。



写真3 集石遺構2の実測の状況



写真4 水被害の状況

6月28日(木) 曇り時々雨

昨日の大雨のため、南区の調査全域にわたり、雨水と土砂が流入。被害状況は床上浸水クラス。主力は排水作業。影響の少ない北区の調査を行う。A・B-Ⅲ・Ⅳグリッドの掘削。AⅣグリッドで北宋銭が出土。

6月29日(金) 雨

現場休止。土器の水洗い、図面整理等の室内作業。

7月2日(月) 雨

現場休止。土器の水洗い、図面整理等の室内作業。

7月3日(火) 曇り後晴れ

A・B-Ⅲ・Ⅳグリッドの掘削。道路公団赤穂工事事務所(諸岡氏)の視察。

7月4日(水) 雨時々曇り

現場休止、土器の水洗い、図面整理等の室内作業。明日の調査検討委員会の打合せのため、有年考古館で松岡秀夫先生と打合せ。

7月5日(木) 晴れ

調査検討委員会(第4回・赤穂市民会館)、調査進捗状況の報告と打合せ。A・B-Ⅲ・Ⅳグリッドの掘削。AⅢ区でサヌカイト片が出土。

7月6日(金) 晴れ

A・B-Ⅲ・Ⅳグリッドの上層の遺構面の精査。ビット群を検出。

7月9日(月) 晴れ

A・B-Ⅰ・Ⅱグリッドの掘削。AⅣグリッドの上層の遺構面の精査。北宋銭等12枚が入ったビットの精査。

7月10日(火) 曇り時々雨

A・B-Ⅰ・Ⅱグリッドの掘削。

7月11日(水) 曇り時々雨

A・B-Ⅰ・Ⅱグリッドの掘削。AⅠグリッドの上層の北区6上面で貝塚を検出。道路公団赤穂工事事務所の視察。

7月12日(木) 曇り

EⅡグリッドの採鹹土壌の清掃。A・B-Ⅰ・Ⅱグリッドの掘削。

7月13日(金) 曇り

EⅡグリッドの採鹹土壌及び堀田面の清掃、全景写真撮影。DⅡグリッドの曲物土壌の写真撮影。近藤義郎氏(岡山大学)に現地指導を受ける。京都国立博物館の八賀晋氏見学、ご教



写真5 現地指導の状況(左から松岡秀夫、  
廣山典道、近藤義郎の各氏)

示を受ける。

7月14日(土)曇り

調査検討委員会(第5回・現場事務所)、調査進捗状況の報告と打合せ。EⅡグリッドの探  
鹹土壌の実測。E・F-Ⅳグリッドの塩田の埋立層の掘削。

7月16日(月)曇り

EⅡ区の探鹹土壌の実測。XⅠグリッドの掘削。

7月17日(火)雨

現場休止。土器の水洗い、図面整理等の室内作業。

7月18日(水)曇り

排水作業。EⅡグリッドの探鹹土壌の実測。X-Ⅰ・Ⅱグリッドの掘削。

7月19日(木)晴れ

EⅡグリッドの探鹹土壌の木製品を取上げ、その後下層の掘り下げ。F-Ⅲ・Ⅳグリッド集  
石遺構2の精査、グリッドの南端で杭列の検出。X-Ⅰ・Ⅱグリッドの掘削。

7月20日(金)曇り

EⅡグリッドの探鹹土壌の掘り下げ。F-Ⅲ・Ⅳグリッドの杭列の検出。南区の調査南端の  
畦が崩れ、矢板で応急処理。

7月23日(月)曇り後晴れ

DⅡグリッドの曲物土壌の写真撮影、実測。F-Ⅲ・Ⅳグリッドで杭列の検出。広島県草戸  
千軒町調査事務所の篠原芳秀氏見学。

7月24日(火)曇り

EⅡグリッドの探鹹土壌の掘り下げ、断面  
図作成。DⅡグリッドの曲物土壌の実測。  
XⅡグリッドの掘削。

7月25日(水)晴れ

EⅡグリッド探鹹土壌下層の掘り下げ、断  
面図作成。DⅡグリッドの曲物土壌の実測。  
XⅡグリッドの掘削、縄文土器が出土。



写真6 北区の発掘の状況

7月26日(木)晴れ

A・B-V・Ⅵグリッドの掘削。E・F-V・Ⅵグリッドの断面精査、塩田の防潮堤とその  
上の粘土を確認。

7月27日(金)晴れ

B-V・Ⅵグリッドの掘削。EⅡグリッドの探鹹土壌下層の掘り下げ。

7月28日(土)晴れ

B-V・VIグリッドの掘削。赤穂市史編纂室の方々見学。

7月30日(月) 晴れ

B-V・VIグリッドの掘削。

7月31日(火) 晴れ

B-V・VIグリッドの掘削。E IIグリッドの採鹹土壌下層の板材を取上げ、杭列を検出、木根子も出土。大阪商科大学の富岡儀八氏見学。

8月1日(水) 晴れ

A・B-V・VIグリッドの掘削。E IIグリッドの採鹹土壌下層の杭列実測。

8月2日(木) 晴れ

A・B-V・VIグリッドの掘削。E IIグリッドの採鹹土壌下層の良質な黒色粘土を掘り下げ、木器椀・刀形木製品を発見。粘土に埋めこまれた状況であった。

8月3日(金) 晴れ

E IIグリッドの採鹹土壌の黒色粘土層の掘り下げ、木器等出土状況の写真撮影。F-V・VI・VII・VIIIグリッドの防潮堤上の粘土と礫石を検出。

8月4日(土) 晴れ

F-V・VI・VII・VIIIグリッドの防潮堤上の粘土と礫石を検出。C~F-II~VIグリッドの全体の清掃、採鹹土壌・曲物土壌・集石遺構と防潮堤等全体の写真撮影。

8月6日(月) 曇り後雨

A・B-V・VIグリッドの掘削。E・F-VIIIグリッドの掘削。

8月7日(火) 曇り時々雨

A-III・IVグリッドの上層上面の遺構検出(主に鎌倉時代)、ピット掘り。E・F-VIIIグリッドの掘削。

8月8日(水) 晴れ

A IIグリッドの上層の貝層1の検出。A・B-III・IVグリッドの上層の遺構検出、ピット掘り。E・F-VIIIグリッドの掘削。

8月9日(木) 晴れ

A・B-III・IVグリッドの上層の遺構検出、ピット掘り。E・F-VIIIグリッド南区の9層埋立層の掘削、古式土師器が出土。

8月10日(金) 曇り

A・B-III・IVグリッドの上層のピット群実測。D-IXグリッドの汀線側の塩田成形面の精査。E・F-VII・VIII・IXグリッドの掘削。

8月11日(土) 晴れ

A・B-V・VIグリッドの掘削。E・F-VIIグリッドの掘削。E・F-IXグリッドの掘削。

8月13日(月) 晴れ

A・B-VI・VIIグリッドの掘削。E・F-VII・VIIIグリッドの掘削。E・F-IXグリッド南区9層の掘削。

8月14日(火) 晴れ

A・B-VI・VII・IXグリッドの掘削。F VIIグリッドの防潮堤下の杭列を検出。E・F-IXグリッド南区9層の掘削。

8月15日(水) 晴れ

南の水路から水が流れ込み、調査区水没。

8月16日(木) 晴れ後曇り

F IIグリッドの集石遺構1の実測。

8月17日(金) 曇り後晴れ

A・B-V・VIグリッドの掘削。A・B-VII・VIII・IXグリッドの掘削。F IIグリッド集石遺構1の実測。

8月20日(月) 晴れ

X-I・IIグリッドの上層の貝層1の検出(鎌倉時代)。A・B-VII・VIII・IXグリッドの掘削。F IIグリッドの集石遺構1の実測。

8月21日(火) 曇り

X-I・IIグリッドで縄文土器がそれなりに出土。A・B-I・IIグリッドの上層の貝層1のサンプル(50cm方眼)取上げ、管玉が出土。A・B-VII・VIII・IXグリッドの掘削。倉敷考古館の間壁忠彦氏見学、塩田が廃棄された原因を聞かれる。村上紘揚埋蔵文化財係長、吉田昇技術職員が今後の調査日程調整で来跡。

8月22日(水) 晴れ

X-Iグリッドの北端で落ち込みを検出、縄文土器を包含している。A・B-I・IIグリッドの掘削、下層の土壌群を検出。A・B-VII・VIII・IXグリッドの掘削。

8月23日(木) 晴れ

X-I・IIグリッドの落ち込みを掘削、縄文土器がそれなりに出土。A・B-I・IIグリッドの土壌7北側の大きな落ち込みには土師器・須恵器・弥生土器が混入。A・B-VII・VIII・IXグリッドの掘削。

8月24日(金) 曇り

X Iグリッドで下層の貝土壌を含む土坑群を検出(庄内期)。A・B-I・IIグリッドの土



写真7 貝塚1のサンプリングの状況

壕7北側の落ち込みの断面写真撮影、土層断面実測。

8月25日(土)曇り

XⅠグリッドの貝土坑の写真撮影。A・B-I・Ⅱグリッドの落ち込みの写真撮影、土壕7の掘削。A・B-VII・Ⅷ・Ⅸグリッドの掘削。

8月27日(月)曇り後雨

A・B-I・Ⅱグリッドの土壕7の掘削。A・B-VII・Ⅷ・Ⅸグリッドの遺構検出。王子分館に戻り、道路公園と調査期間の延長について協議。

8月28日(火)晴れ

X-Iグリッドの貝土壕の実測、遺物の取上げ。A・B-I・Ⅱグリッドの土壕7の掘削。A・B-VII・Ⅷ・Ⅸグリッドの上層の遺構検出。

8月29日(水)晴れ

EⅡグリッドの探検土壕の断ち割り。E・F-Ⅲ・Ⅳグリッドの掘削。E・F-V・VIグリッドの掘削。

8月30日(木)晴れ

EⅡグリッドの探検土壕の断ち割り、写真撮影。E・F-Ⅲ・Ⅳグリッドの南区9・10・11層の掘削。E・F-V・VIグリッドの南区9・10・11層の掘削。FVIグリッドの南区11層で後期を中心とする縄文土器がそれなりに出土。



写真8 7ラインの土層の状況

8月31日(金)晴れ

X-Ⅲ・Ⅳ・Vグリッドの掘削。E・F-Ⅲ・Ⅳグリッドの南区9・10・11層の掘削。F-Ⅳグリッドの南区11層で縄文土器が出土。

9月3日(月)曇り

X-Ⅲ・Ⅳ・Vグリッドの掘削。専売公社・大阪支社の方々の見学。

9月4日(月)雨

現場休止。土器の水洗い、図面・写真整理等室内作業。

9月5日(火)晴れ

X-VI・Ⅶ・Ⅷグリッドの掘削。X・A-I・Ⅱグリッドの下層の土層群の実測。AⅡグリッドで焼土を検出。

9月6日(水)曇り

X-Ⅲ・Ⅳグリッドで上層の遺構面を精査。A-Ⅱグリッドの焼土は竈1になると判明。土壕7の付近から銅鏝が出土。

9月7日(木) 晴れ

X-Ⅲ・Ⅳ・Ⅴグリッドの上層の遺構面を精査。A-I・IIグリッドの掘削。

9月8日(金) 晴れ

X-Ⅲ・Ⅳ・Ⅴグリッドの上層の遺構面を精査。神戸市教育研究所前田保夫氏に現地指導を受ける。

9月10日(月) 晴れ

AIIグリッドの竈1の実測。BIIIグリッドで中層の竈2を検出(古墳時代後期)。

9月11日(火) 晴れ

AIIグリッドの竈1の所ち割り、写真撮影、実測。X・A-Ⅳ・Ⅴグリッドの上層の遺構面を精査

9月12日(水) 晴れ

A・B-IIグリッドの掘削。X・A-Ⅳ・Ⅴ・Ⅵグリッドの上層の遺構を検出、土塙6などを検出。同志社大学森浩一氏の現地見学、ご教示を受ける。

9月13日(水) 曇り

A-I・II・IIIグリッドの掘削。BIIIグリッドの竈2は単独のもの。X-VI・VII・VIIIグリッドの上層の遺構面を精査。



写真9 拡張区の機械掘削の状況

9月14日(木) 曇り

A・B-IIIグリッドの土塙5・竈2の写真撮影、実測。A・B-Ⅳグリッドの掘削。X-VII・VIII・IXグリッドの上層の遺構面を精査。

9月15日(金) 曇り

X・A・B-VII・VIII・IXグリッドの上層の遺構面を精査、ピットを検出。

9月17日(月) 曇り

X・A・B-VII・VIII・IXグリッドのピット群を掘る。航空写真撮影。

9月18日(火) 曇り

A・B-Vグリッドの掘削、竈3・4及び貝塚2を検出。

9月19日(水) 晴れ

A・B-Vグリッドの竈3・4の調査。A・B-VIグリッドの掘削。榎原考古学研究所の石野博信氏現地見学、ご教示を受ける。

9月20日(木) 晴れ

X・A・B-VII・VIII・IXグリッドの上層のピット群写真撮影、実測。

9月21日(金) 晴れ

A・B-VIグリッドの掘削。

9月22日(土) 曇り

A・B-Vグリッドの竈3・4及び貝塚2の写真撮影。

9月24日(月) 曇り

XVグリッドの土壌6の土器出土状況の写真撮影(庄内期)。BVIIグリッドの掘削。

9月25日(月) 曇り

BVIIグリッドの掘削。A・B-Vグリッドの竈3・4及び貝塚2の実測。

9月26日(火) 曇り

AVIIグリッドの掘削、竈5の検出。

9月27日(水) 曇り

A・B-VIIグリッドの竈5の調査。調査検討委員会(第6回・現場事務所)、調査進捗状況の報告と今後の打合せ。

9月28日(木) 曇り後雨

A・B-VIIグリッドの竈5の調査、類竈7と貝層3の検出。A・B-VIII・IXグリッドの竈6と貝層4の検出。

9月29日(金) 曇り後雨

A・B-VIII・IXグリッドの竈6と貝層4の土層関係写真撮影。



写真10 南区の塩田の砂による保護層の状況

10月1日(月) 晴れ

B-VIII・IXグリッドの貝層6の調査と竈6の実測。

10月2日(火) 晴れ

B-VIII・IXグリッドの貝塚6の土層断面写真撮影。発掘器材・用具の整理。道路公園へ終了の挨拶。

10月3日(火) 曇り

発掘器材と用具及び出土遺物を王子分館へ搬入。

10月12日(金)

赤徳市市民会館にて、松岡秀夫先生、廣山堯道先生同席のもとで記者発表。

10月21日(日)

赤徳市市民会館にて、現地説明会を兼ねたスライド等を使用する発掘調査報告会を開催。これにて、堂山遺跡の現地での発掘調査及び一連の仕事は終了した。出土遺物等を王子分館に搬入してから、調査員は次の現場の現地立会等の業務を行っている。

### 3. 整理調査の経過

整理作業は堂山遺跡発掘調査終了後の昭和55年度より開始し、昭和58年度までに遺構・遺物のトレース・レイアウトまでの基本的な整理作業は終了していた。しかし、諸般の事情により、原稿、編集作業と印刷は平成6年度に実施した。実に報告書刊行までの15年の歳月を費やした。

#### (1) 昭和55年度の整理作業

この年度は、遺物の洗浄・ネーミング及び一部の遺物の接合と遺物写真撮影を行った。

作業はすべて兵庫県教育委員会王子分館（神戸市灘区王子3-1-3）において行った。

整理作業は山本三郎の担当のもと補助員である岸本道昭・西口圭介・岸本一宏を中心とし、池野栄子らによって進めた。

遺跡が砂ないし砂質土であったため遺物洗浄は比較的楽であったが、鉄分が錆着しているものがあり、これについては難渋した。これら洗浄後の土器は出土地区ごとに出土日付順に番号を付けていった。また、同時に遺物台帳を作成し、ネーミングごとの遺物内容も記入していった。これは、各土層に各時期の遺物混入が多少あり、良好な包含層でなく、土層の時期決定が困難であったためである。このことは各土層の遺物内容によりその土層の時期推定を行ううえで重要な指標となった。接合は、同一のネーミング・地区・上層・下層・隣接地区の順に接合を行った。しかるのちに、遺跡を北区と南区に分け、各層の遺物を縄文土器・弥生中期・弥生後期～庄内式・布留式および中世までの土師器・中世土師器・古墳時代中期須恵器・古墳時代後期須恵器・奈良時代須恵器・平安時代須恵器・製塩土器に分類した。

#### (2) 昭和56年度の整理作業

この年度は、遺物の一部の実測と接合・復元及び貝類の洗浄と木製品の保存処理を行った。

担当の山本は、この年度県立成人病センター建設予定地の北王子遺跡の発掘調査や県道改良工事に伴う豊岡市カチヤ古墳などの発掘調査を担当し、整理に専従できる状態ではなかった。また、西口も調査に参加した。岸本道昭は4月1日付けで大阪府教育委員会に採用され赴任した。王子分館では岸本が一人残される形となり、遺物の実測を主に行った。また、8月末で王子分館から魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下630）への移転のため、その準備・引越作業で整理の進行は遅れた。

魚住分館に移転後、10月からから整理の人数が増え、作業も順調に進んだ。遺物の接合や復元は順次行い、復元作業は主として木村佳子があたった。また、貝類の水洗選別を行った。

手順としては真野修氏の指導によって荒いフルイからしだいに細かいフルイを通して行った。さらにこれらを貝類と魚骨等に分離していった。

木器の保存処理については、実測終了後、財団法人元願寺文化財研究所に委託して行った。樹種の同定も同所に行っていた。

### (3) 昭和57年度の整理作業

この年度は、残りのすべての遺物の接合、復元、実測を実施し、保存処理を実施した以外の木器の洗浄も行った。

担当の山本はこの年度も遺跡の緊急発掘調査に従事していた。

西口・岸本は4月1日付けで兵庫県教育委員会に採用され、西口は三田市、岸本は氷上郡春日町へ現地調査に赴いた。整理作業は以下のものが引継ぎ実施した。実測・復元・拓本は山田隆一・山本雅和・川上緑・柳川美穂らを中心に魚住分館で行った。実測は各担当で分担したが、特に古式土師器・須恵器は量が多く、実測にかかる時間が思った以上に多くかかった。また石膏復元についても、小片接合であるため欠損部が多く、かつ量も多大であったため多大な時間を費やした。

### (4) 昭和58年度の整理作業

この年度は、遺物の写真撮影、遺物の拓本、遺構・遺物のトレース、遺構・遺物のレイアウトを行った。

この年度も山田隆一、山本雅和が中心に整理作業を行った。遺物の実測作業は前年度で完了していたため、その実測図をもとに遺物の再分類を行い、レイアウトを行った。次に観察表の作成を行った。遺構の図面の整理とその検討は難渋した。遺物の写真は、森昭氏に依頼して行った。

### (5) 平成6年度の整理作業

この年度は、原稿の執筆と編集作業と印刷、校正の作業を行った。ただし、補助員の学生が分担した遺物の原稿は、早く提出していただいていた。報告書の刊行が諸般の事情で遅れ、この年度に至ってしまったことについて、調査を担当したものとして深くお詫び申し上げます。そして、岸本一宏、山田隆一、山本雅和、池野栄子の各氏の原稿及び特にお願いで石器・石製品の原稿を書いていただいた久保弘幸氏の原稿は昭和59年度前後の段階の原稿であることをここに断っておきたい。時間の制約でその段階の原稿を掲載せざるを得なかった。この点についても深謝申し上げます。

#### 4. 調査の組織体制

発掘調査・整理調査ともに、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり調査を実施した。

##### 1 昭和54年度の発掘調査の体制

(調査事務担当) 社会教育・文化財課

課長	林五和夫
文化財担当参事	田中幹雄
副課長	道畑 實
課長補佐兼管理係長	河合幸一
係長	堀 洋
事務職員	山崎桂子
課長補佐	池田義雄
埋蔵文化財係長	村上祐揚
技術職員	吉田 昇
(調査担当) 技術職員	山本三郎
技術職員	大平 茂
調査補助員	真野 修、辻本 武、岸本一宏 山本 仁、中塚利英、浜田典明 三木雅彦、岡本欣子、大和保公 三好唯義、池野栄子、橋本亮一他

##### 2 昭和55年度の整理調査制

(調査事務担当) 社育・文化財課

課長	藤和重樹
文化財担当参事	田中幹雄
副課長	道畑 實
課長補佐兼管理係長	河合幸一
係長	堀 洋
事務職員	山崎桂子
課長補佐兼埋蔵文化財係長	池田義雄

	主査	大村敬通
	技術職員	森内秀造
(調査担当)	技術職員	山本三郎
	調査補助員	岸本一宏、西口圭介、岸本道昭 池野栄子他

### 3 昭和56年度の整理調査制

(調査事務担当) 社育・文化財課

	課長	藤和重樹
	文化財担当参事	田中幹雄
	副課長	道畑 實
	副課長	中北 勝
	課長補佐兼管理係長	河合幸一
	係長	堀 洋
	事務職員	山崎桂子
	課長補佐兼埋蔵文化財係長	池田義雄
	主査	大村敬通
	主任	小川良太
(調査担当)	主任	山本三郎
	調査補助員	真野 修、岸本一宏、西口圭介 山田隆一、池野栄子、木村佳子 川上 緑、柳川美穂他

### 4 昭和57年度の整理調査制

(調査事務担当) 社育・文化財課

	課長	藤本 繁
	文化財担当参事	吉村芳郎
	副課長	道畑 實
	副課長	中北 勝
	課長補佐兼管理係長	福永慶三
	主任	八家 均

(調査担当)	課長補佐兼埋蔵文化財係長	池田義雄
	埋蔵文化財係長	大村敬通
	主任	西口和彦
	主任	山本三郎
	調査補助員	山田隆一、山本雅和、池野栄子 柳川美徳、川上緑他

#### 5 昭和58年度の整理調査制

(調査事務担当) 社育・文化財課

(調査担当)	課長	西澤良之
	文化財担当参事	大西章夫
	副課長	森崎理一
	副課長	馬田 力
	課長補佐兼管理係長	福永慶三
	主任	八家 均
	埋蔵文化財調査係長	榎本誠一
	技術職員	大平 茂
	主任	西口和彦
	主任	山本三郎
調査補助員	山田隆一、山本雅和、池野栄子 川上緑他	

#### 6 平成6年度の整理調査体制

(調査事務担当) 埋蔵文化財調査事務所

所長	池水義輝
副所長	渡辺 清
副所長	三木正則
主任調査専門員	大村敬通
総務課長	石井 守
課員	飯尾彦人
調査専門員(整理普及班長)	山本三郎

(調査担当) 主査  
調査専門員

吉識雅仁  
山本三郎



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置

堂山遺跡は赤穂市塩屋字堂山に所在する。

現在、赤穂市は兵庫県のも最南西端に位置し、西は岡山県備前市・同県和気郡日生町に接し、東は相生市に接し、北は赤穂郡上郡町に接している。なお、南は瀬戸内海（播磨灘）が広がっている。

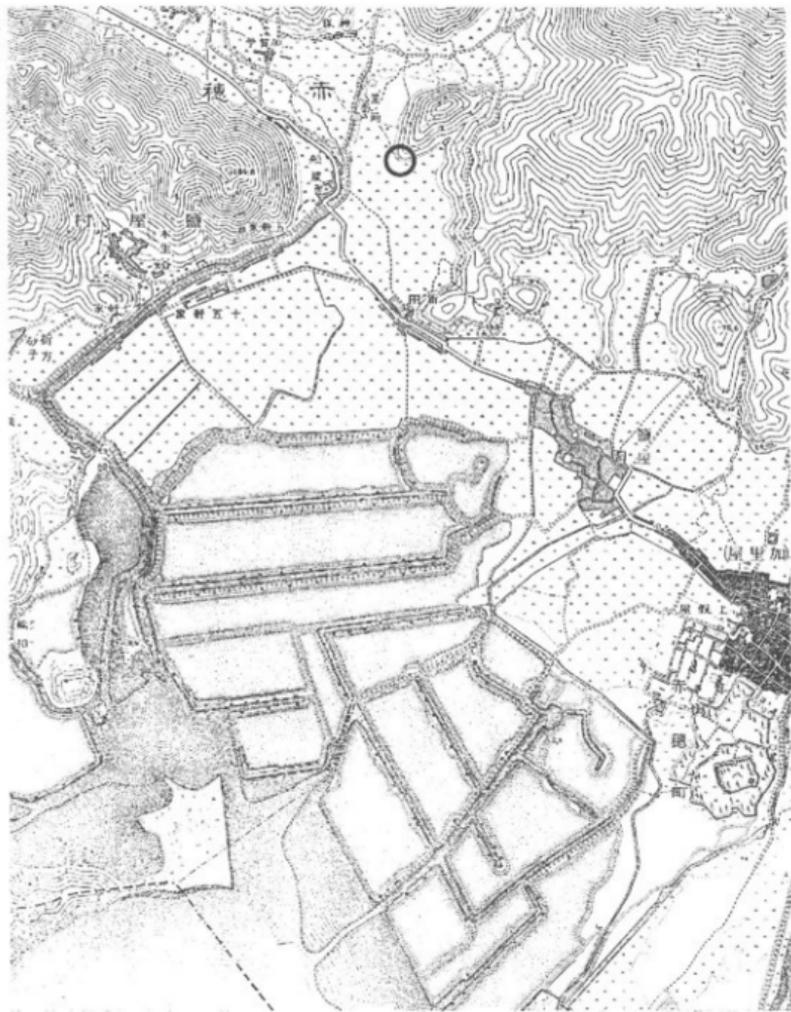
『播磨風土記』には、赤穂郡の記載が欠いている。文献による赤穂郡の初見は、『大安寺流記資料帳』に「播磨国赤穂郡十町多太野四至・・・」と記す天平16（744）年の文書である。『和名類聚抄』の赤穂郡には、坂越郷、八野郷、大原郷、筑磨郷、野磨郷、周勢郷、高田郷、飛鳥郷の八郷があったことが記載されている。和名抄の赤穂郡は、現在の自治体名にあてはめると相生市、上郡町、赤穂市の範囲にほぼ相当するとみられる。

塩屋という地名は、明治22年から昭和12年までは、赤穂郡塩屋村という自治体名であり、その大字名でもあった。江戸期から明治22年までは塩屋村という村名であった。また、塩屋村は、戦国時代にみえる村名であり、永正3（1506）年3月28日の方便法身尊像裏書にある「善祐門徒播州赤穂郡塩屋村」が初見とされる。

赤穂市塩屋は千種川の西に広がる赤穂デルタのほぼ中央部にあたる。堂山遺跡は塩屋の中では西端に位置あたり、赤穂市大津に接する。遺跡はJR赤穂線「播州赤穂駅」の北西約2.5 kmのところの位置し、通称「堂山」と呼称されている独立丘陵状地形を呈する丘陵の南側の山裾から赤穂デルタにかけて立地する。

遺跡の位置は、現在の海岸線から直線距離で約4 km北側にあたり、塩田の立地する遺跡としては海岸から離れすぎているが、これは、近世以降の塩田開発等の結果の累積で、遺跡の南側一帯に広がる現在の水田面の標高1.0～1.2 mという低い位置にあるものが多く、現在でも堤防がなければ、満潮時には海水が入り込む地形である。古代から中世にかけては、堂山の山裾にまで瀬戸内海の海水が入り込む干潟の地形が広がっていたものと見られる。

このことを、『赤穂市史』第1巻の「赤穂デルタ上の河岸・海岸線の変化」図からみれば明らかであり、縄文海進時には堂山の麓まで海水が入り込んでおり、湾状の地形になっている。前田保夫氏は阪神間の縄文海進は標高3 m前後の高さにまで及んでいたとの指摘があり、この指摘を援用すれば、堂山遺跡の調査範囲で北区の標高が3.2 mであり、縄文海進には、この地点まで潮位が及んだであろう。このことは、堂山周辺の堆積物の調査から、ほぼ標高4 m前後の高さまで海成堆積物がみられると指摘されていることから判る。



第5図 遺跡の位置(1/25000、大日本帝国陸地測量部の赤穂図幅を使用)



第6図 遺跡の位置(1/5000、赤穂市都市計画図26を使用)

## 第2節 遺跡の周辺環境

堂山遺跡は、前節でみたように、かつて海辺に面した遺跡である。遺跡からは、縄文時代から鎌倉時代までを中心とする遺物が相当量出土しており、一部に室町時代までに及ぶ土器も出土している。旧赤穂郡の海岸部の遺跡を中心に周辺環境をみていきたい。

### 1. 縄文時代

堂山遺跡出土の縄文土器は、前期から晩期までのものが認められ、後期前葉・中葉のものが大半を占める。いずれにしても、縄文海進以後において、縄文人が海辺で生活した痕跡であるが、貝塚や住居址等の具体的な遺構は検出されなかった。

旧赤穂郡における海岸部の縄文遺跡は、堂山遺跡の他に赤穂市域には塩屋築田遺跡、赤穂大橋遺跡、猪壺谷遺跡の3遺跡が、相生市域では佐竹遺跡が知られている。

塩屋築田遺跡はかつて海辺であったところに立地し、工事中に後期後葉の縄文土器と石器が採集されている。赤穂大橋遺跡は現在の千種川の川底にあたる遺跡で、赤穂大橋の工事中に後期後葉の縄文土器と石器が採集されている。猪壺谷遺跡は、前3遺跡が堆積性の海岸の立地であるに対し、沈降性の海岸に形成された狭い海岸段丘上の立地である。2度にわたる発掘調査により、後期後葉を主体に晩期の縄文土器や石鏃や石錘などの石器が出土している。

佐竹遺跡は相生湾に流れ込む佐竹川の河口部の標高2～3mの海岸平地に立地し、後期の縄文土器や石鏃が工事中に採集されている。

### 2. 弥生時代

旧赤穂郡の海岸部における弥生時代の遺跡については、堂山遺跡以外にその存在が知られていないというのが実態に近いのであるが、坂越湾から相生湾にむかう峠で中期弥生土器の破片が採集されており、高地性集落になる可能性があるかも知れない。

堂山遺跡でも、旧赤穂郡内で唯一の前期弥生土器の発見と言われたが、前期弥生土器は2点のみの出土であり、中期弥生土器にしても多くの出土ではなく、遺構も検出されているわけではない。前期弥生土器は、2点とも逆L字形の口縁をもつ前期末の甕で、播磨地域の特徴を示している。中期Ⅲ～Ⅴ期の土器も西播磨地域の特徴を示している土器の一群である。

海岸部に近い弥生遺跡としては、千種川下流左岸の標高8m前後の沖積地に立地する赤穂市・周世入相遺跡が発掘調査された。弥生後期を中心に展開する遺跡で、後期の竪穴住居7棟や土壘、畑と捉えられている畝状遺構などが検出されている。中期に属する資料は少ないが、



1. 堂山遺跡
2. 天神山古墳
3. 嵐屋築田遺跡
4. 大林古墳群
5. 赤穂市役所遺跡
6. 赤穂大橋下遺跡
7. 赤穂城跡
8. 尾崎大塚古墳
9. 猪堂谷遺跡
10. 生島古墳
11. 上高野遺跡
12. 高取山古墳群
13. 高取山縁石塚古墳群
14. 八重山経塚
15. 茶臼山城跡
16. 坂崎城跡
17. みかんのへた山古墳
18. 小島古墳群
19. 小島遺跡
20. 杵根古墳群
21. 小丸古墳群
22. 野瀬古墳群
23. 佐方遺跡
24. 佐方古墳群
25. 佐方裏山南古墳
26. 坊主屋敷跡
27. 周堂入組遺跡
28. 真殿門前古墳群

第7回 周辺の遺跡(1/50000、国土地理院の赤穂図幅を使用)

遺構や土器が出土しており、中期Ⅲの時期からの資料が出土している。報告書では弥生後期の第五様式の土器を周世Ⅰ～Ⅴ式に細分しており、前半の周世Ⅰ式は吉備地域の様相の傾向が強くなり、周世Ⅱ式以降は近畿地域の影響が強い土器様相であると指摘されている。

周世入相遺跡より南約2kmの千種川の河原から出土した銅鐸の石製鎔范の出土地点である上高野遺跡がある。この鎔范は鈕の部分しか遺存していないが、復原すれば銅鐸の高さ80cm以上の偏平鈕式銅鐸の鑄造に用いられたものである。この鑄型で鑄造された銅鐸はまだ発見されていない。

いずれにしても、旧赤穂郡における弥生時代の拠点集落の動向は、千種川の支流である矢野川流域の赤穂市有年原・田中遺跡や長谷川流域の赤穂市神田遺跡や高田川流域の神子田遺跡などが拠点集落と目され、これらの集落を中心に千種川中流域で展開されたものとみられる。

### 3. 古墳時代

前方後円墳の出現をめぐる胎動期である庄内式期後半から布留式期古段階には、堂山遺跡においては比較的多くの纏まったこの時期の土器が出土している。吉備地域や山陰地域からの搬入土器の比率も比較的高い値を示し、このような土器の様相からみて、海辺の漁村的集落にも時代の波とは無縁でいらなかった状況が看取される現象であろう。この時期には製塩土器も出土しており、堂山遺跡においても土器製塩が開始されている。製塩土器の特徴は備前瀬戸地域のものと同じ傾向であり、その範囲内とみてよいであろう。

前述の現象がみられるといっても、この海岸部に出現期の前方後円墳が築かれている訳ではない。旧赤穂郡に広げても同じである。

古墳時代の千種川流域は掛保川流域と比較してもかなり様相が異なり、出現期の前方後円墳はみられず、古墳時代を通じて確実な前方後円墳が明確でない地域である。

また、堂山遺跡では、古墳時代後期から終末期の土器も多く出土しており、単独の壘やそれに伴う貝塚の遺構が検出されている。少量であるが円筒埴輪なども出土している。

旧赤穂郡の海岸部の古墳をみていきたい。

この地域で最も早く古墳が造られたのは、相生湾で、かつての佐方浦に面した佐方古墳群であろう。2基の古墳からなり、1号墳は竪穴式石室らしい石積みがみられたといい、2号墳は径約1.7mの円墳で、いずれもⅡ式の円筒埴輪が採集されており、前期末葉の和田編年4期の築造であろう。

次は、坂越湾を見下ろす位置に築かれたみかんのへた山古墳が海岸部の古墳としては注目される。標高7.9mの尾根頂部に立地する径3.5m前後の大形の円墳で、北側に造り出し状の張り出しが認められ、帆立貝式古墳になるかも知れない。菅石をもち、Ⅳ式の円筒埴輪、形象埴

輪が採集されており、中期後半の7～8期の築造である。古墳からは隣接する相生湾は見えず、板越湾のみを望む古墳である。板越湾に面する地域は農耕には全く不向きな地であり、このような位置を選択しているのは、みかんのへた山古墳の被葬者が海民の首長であり、海上交通をも管掌した首長とみていいであろう。

前期から中期にかけて、この地域の海岸部で目立った古墳はこの二者位である。

相生湾の入口の丘陵にある壺根古墳群は、箱式石棺を埋葬施設とする20基をこえる古墳群であり、3～4mクラスというきわめて小規模な古墳から構成されている。このうち、10基の古墳が調査され、副葬品が少なく時期の特定には困難が伴うが、概ね中期の7期から後期前葉の9期の築造であろう。なお、古墳は明確でないが、布留式併行期の二重口縁壺や山陰系の鼓形器台が出土しており、前期に遡る古墳が存在する可能性は高い。積石塚に近い墳丘をもつものが多く、箱式石棺の構造は、一般的な箱式石棺とやや異なり、長割石の上部に小口積みの石材を数段積み上げる形態のものが主体で、蓋石の構造も複雑で重厚なものである。枕石は8・10号石棺にみられ、8号石棺からは鉄刀子、滑石製玉類（白玉41、黒玉27、勾玉1）が、9号石棺からは鉄簾5、碧玉製管玉1、小型茶文鏡1が、10号石棺からは鉄製約針が出土している。みかんのへた山古墳の被葬者の下で活躍した海民の古墳であろう。

後期になると海岸部においても古墳の数は増え、赤穂湾・板越湾・相生湾に面するところ少ないとはいえ、それぞれ古墳が造られている。

赤穂湾では、赤穂御崎丘陵の播磨灘に面する東側斜面に尾崎大塚古墳がある。赤穂湾を見下ろす古墳として、中央の丘陵に大林古墳群、大津古墳が、西側の丘陵裾に天神山古墳がある。

なお、湾に面していないが、湾から千種川を若干さのぼったところに高取山積石塚群や高取古墳群がある。

尾崎大塚古墳は横穴式石室をもつ径約20mの円墳で、いわゆる単独墳である。横穴式石室は全長8.6mで、玄室の長さ4.1m、幅2.1m、高さ2.5mの大型の部類に属する。玄室平面は中央がやや膨らみ、前壁は比較的高く、玄室の上部には隅消し技法が認められる。後期後葉の11期の築造である。

大林古墳群は横穴式石室をもつ4基の古墳からなり、1号墳が現存しているのみである。2号墳は箱式石棺が納められており、終末期の古墳である。

天神山古墳は横穴式石室をもつ古墳で、石室の残存長4.5m、玄室幅0.87mの小規模な横穴式石室である。

高取古墳群は横穴式石室をもつ21基の小規模な古墳で構成されており、20号墳のみが片袖式の横穴式石室である以外は、無袖の横穴式石室であり、終末期の古墳群とみていいであろう。

時期は明らかでないが、大津古墳は箱式石棺を埋葬施設とする小規模な円墳である。同じく

高取山積石塚群は5～10mの小規模な6基の積石塚からなる古墳群である。方形の積石塚もみられ、埋葬施設は箱式石棺や小型竪穴式石室状のものである。副葬品がなく時期は特定できないが、両者とも横穴式石室の導入以前とみて大過ないであろうと捉えている。

坂越湾では、小島古墳群と時期は明らかでないが坂越湾に浮かぶ生島にある生島古墳があげられる。

小島古墳群は坂越湾の東丘陵斜面と坂越湾に浮かぶ鍋島の山頂に立地する7基の古墳の総称である。東丘陵斜面の古墳は3基づつ2ヵ所に分かれて築かれており、南にある5～7号墳の3基は箱式石棺を埋葬施設とし、北にある1～3号墳の3基は横穴式石室である。鍋島にある4号墳も横穴式石室である。1号墳は片袖の横穴式石室でTK217型式の須恵器が出土し、2～3号墳は無袖の横穴式石室であり、1～3号墳は終末期の古墳であろう。

生島古墳は径20m前後の古墳であるが、時期は判らない。

相生湾では、湾の入口部に小丸古墳群と野瀬古墳群が、かつて那波野浦といわれた湾奥部には陸狐塚古墳や那波裏山古墳がある。

陸狐塚古墳は、尾崎大塚古墳と共にこの地域の海岸部にある後期古墳としては注目される存在である。現在の相生湾より1kmほど内陸に入っているが、沖積作用や埋立てを考慮するとかつては海辺に近く位置していた古墳であろう。1955年に破壊されており、新聞記事によれば奥行き5m、幅2.7mの横穴式石室と伝え、副葬品も鏡、玉類、鉄製武器類(刀、劍、刀子、矛、鏃、柱甲)、馬具(輪燈、杏葉)、銅鈴、須恵器が出土したという。杏葉は金銅製である。埴輪も出土している。記事が正しければ、海岸部の古墳としてはきわめて大型の横穴式石室をもつ古墳である。後期中葉の10期の築造であろう。

小丸古墳群は東部丘陵裾部の海辺に立地する。横穴式石室をもつ3基の10m強の円墳からなる古墳群であり、3号墳は消滅したが、2号墳は玄室幅1.2m、長さ3.4mの片袖式横穴式石室、1号墳は玄室幅1.5mの無袖式横穴式石室である。石室は湾の入口方向(東南方向)に向けて開口している。出土須恵器等から3号墳-2号墳-1号墳の順に後期後葉の11期から終末期にかけての築造であろう。

野瀬古墳群は3基の古墳からなり、1・2号墳からは湾は見えず、3号墳とは立地条件が異なる。1・2号墳は横穴式石室をもつ円墳である。3号墳は丘陵尾根上に築かれ、眼下に湾を望むが、埋葬施設は不明である。

那波裏山古墳は横穴式石室をもつ小規模な円墳である。

旧赤穂郡内の海岸部の古墳の分布や内容をもても、弥生時代と同じように赤穂市有年地域や上郡町域のものとは比べて見劣りをすることは僻めない。また、終末期前後にこの地域に集中して分布する横穴式石室の袖石が内側に突出する副室構造をもつこの地域の特徴的な祇園塚型石室とも呼ばれる横穴式石室は海岸部には及んでいないことも付記しておきたい。

#### 4. 歴史時代

堂山遺跡においては、奈良時代の土器も少し出土しているが、平安時代の10世紀前半から鎌倉時代の14世紀前半の土器が多く出土しており、塩田（塩浜）は11世紀後半に造られ、14世紀前半まで操業していると捉えている。

旧赤穂郡の海岸部の奈良時代から鎌倉時代の遺跡については、堂山遺跡以外ほとんど判らないというのが実態である。その中であって、赤穂市役所遺跡から11世紀後半から12世紀前半の須恵器椀、瓦器椀が工事中に採集されているのは注目される。それは、東大寺の塩垣園である「石塩生荘」の推定地と近い位置の発見であるからである。

石塩生荘のこについて、『赤穂市史』第1巻によって述べてみたい。

『東大寺文書』や『石崎直矢所蔵文書』によると、赤穂郡坂越郷にある盟生山を、747（天平19）年から753（天平勝宝5）年にかけて当時播磨守であった大伴宿禰が葦原盟田とともに開発した塩山のうち30町歩ばかりを756年に東大寺に直輸入されている。なお、この時、この地を赤穂郡在任の豪族秦大炬を目代に任じて管理させ、大炬はこの時、当地に塩堤をつくりを試みたが失敗し、退却してしまつたと記されている。この塩堤はどのような構造のものであつたのだろうか。『赤穂市史』では、この地をJR播州赤穂駅の北側にあたる塩屋地区のハバ池・ハバ谷の周辺と比定している。

1130（大治5）年の「東大寺諸荘文書并絵図等目録」（『百巻本東大寺文書』）の中の貞元5年の「郡司解」で「石塩生荘」の名が見え、塩山が60町歩に増加している。そして、その四至が「赤穂郡□十町九段百七十二歩 並点地 四至 東赤穂川 南海 西大依松原 北百姓口分并塩生山崎」と記載されている。『赤穂市史』では、この塩浜を現在の国道250号線に沿って山崎山の端から塩屋惣門、さらに以羅々山を結ぶ線を汀線として存在したと考えられている。

1153（仁平3）年の「播磨国東大寺領荘々文書目録」の中には、石塩生荘と同一荘園であるとみられる「赤穂庄公験」に「同五年、塩浜、治田、山、四至郡解」と記され、東大寺が塩山のほかに塩浜と治田を所有していたことがわかる。「塩浜」という後の最も早い記録である。大治5年の文書の中の貞元5年は、「貞元」という年号は3年までしかなく、貞観5年の誤記で、仁平3年の文書の「同年」も貞観5年（863年）のことであると理解されている。文献上の「塩浜」という語の初見である。

このようにみれば、859～876年の貞観年間には、東大寺が経営する赤穂郡坂越郷の「石塩生荘」においては、塩山-治田-塩浜と組合わされた古代製塩の形態が出来上がっていたと言える。

石塩生荘（赤穂荘）が東大寺領から石清水八幡宮領に移つたのは1147（久安3）年であ

る。

なお、西大寺も、おそくとも、770（神護景雲4）年までには、赤穂郡内に塩山を領有していたことが、『西大寺資材流記帳』に記されているが、塩山の記載以外のことは詳らかでない。

また、遺跡のことを若干みていきたい。

坂越湾を望む標高70mの丘陵頂に八祖山経塚がある。径8m前後、高さ2mの山石を積んだ中から陶製経筒らしい円筒形の土器が出土しており、経塚と考えられている。共存した土器から鎌倉時代のものでされている。

坂越浦城跡が坂越湾を望む上の山にある。『播磨鑑』には赤松村秀の城なりと記される。赤松村秀は1495（明応4）年に赤松政則の次子として生まれ、5歳のとき龍野城主となったと伝える人物である。山頂の郭は壊されているが、幅2mほどの帯郭かもしれない平坦地が認められている。坂越浦城跡の上の宝珠山に茶臼山城跡があると伝えているが、郭の遺構等は全くみられないという。

堂山遺跡の北側の丘陵の中に坊主屋敷跡がある。坊主屋敷跡は多数の五輪塔の崩れた石が散乱しており、寺跡らしいとされ、室町時代末期とされる骨壺の破片が出土している。

中世に形成されたみられる貝塚が、真木貝塚、石ガ崎貝塚、福泉寺裏貝塚、折方貝塚、居村貝塚と多く知られている。いずれも千種川以西にあって、ハイガイを主体としているものといわれる。堂山遺跡の中世の貝塚もハイガイを主体としたものであり、関連がある現象かもしれない。

赤穂城が築城されてからは、この海岸部が城下町や近世入浜塩田が整備され、この海岸部が旧赤穂郡の中心となって発展し、現在に至っている。

#### （参考文献）

- ・相生市史編纂専門委員会編『相生市史』第1巻、1984年
- ・赤穂市史編さん専門委員編『赤穂市史』第1巻、1981年
- ・赤穂市史編さん専門委員編『赤穂市史』第4巻、1984年
- ・甲斐昭光他『周世入相遺跡』（「兵庫県文化財調査報告書第70冊」）1990年
- ・高野政昭他『壺根古墳群』（相生市史編纂室）1983年
- ・日野宏他『小丸古墳群』（相生市史編纂室）1985年
- ・角川日本地名大辞典編纂委員会編『兵庫県地名大辞典』（角川書店）1988年
- ・吉田東伍『大日本地名辞書』1980年

### 第3章 調査の記録・遺構

#### 第1節 調査地点と調査区の設定

調査地は、通称「堂山」と呼ばれている南側の山裾部分が対象であった。調査前における遺跡の土地の現況は畑地であった。

畑地になる以前は、少なくとも戦前・戦中から戦後の食料増産期までは、米を作っている水田として利用されていた。この地点の水回りはよくなく、灌漑施設はみられず、井戸を掘削して用水を確保していた。井戸は上段の畑地（北区）の2ヶ所と下段（南区）に1ヶ所の計3ヶ所が残っていた。調査区は基本的には2枚の段差のある畑地に分かれていた。下段の畑地を南区、上段の畑地を北区と分けた。上段の北区は細かく見れば畑地は2枚に分かる。

現在の地表は南区の畑地で標高1.8m、北区の南側の畑地で3.2mである。その段差は1.4mの高低差がある。なお、南区の南側の水田面の標高は1.0mであり、ここまでは塩浜の遺構が拡がっていない。

調査地の東側の水田の標高は2.1～2.1mであり、ここに1984年度に関西電力株式会社の送電線鉄塔建設に伴う発掘調査が赤穂市教育委員会が実施し、南区と同じような遺構と土層の状況を呈しており、塩田がこの地点まで拡がっていることは確認している。



第8図 遺跡の地形と調査範囲

このようにみれば、標高約1.8～2.3m前後を塩田の立地する可能性のある高さのみれば、調査地の西側に約100mほどの高さの地形が広がっており、今回調査した塩田がそのあたりまで広がる可能性は高い。

調査区は、地形に合わせて5mのグリッドを設定して行った。第7図にグリッド名、杭番号ライン名を示した。ライン名は、東西方向を北から順にアルファベットを付しa～fラインと呼称し、東西方向を西から順にアラビア数字を付し1から9ラインと呼称した。杭番号はラインの交差する点をa1・a2などとライン名の呼称を結合させて呼称した。グリッド名は杭番号の北西の杭名をアルファベットの大文字とローマ数字で、A I・B Iなどと表した。

なお、グリッド名でX I、X IIなどと付しているのは、調査範囲の拡張に伴う措置である。



第9図 調査区の設定

## 第2節 遺跡の概要

堂山遺跡の立地するところは、かつて北から南に緩やかに傾斜する砂浜であった。現在は集落や水田が広がっているが、かつては「堂山」の山裾まで瀬戸内海の海水が入り込む、東西を山塊に挟まれた現在の「船渡橋」での東西幅約600mほどの小規模な湾状の地形あるいは入江状地形を呈しており、付近一帯は遠浅の干潟を形成していたとみられる。

人間の活動の結果として、この砂浜が大きく改変を受けたのは、大きくみると2度ほど行われたとみられる。最初は11世紀後半の平安時代後期の塩田の作られたときであり、次は数十年前に水田に伴う造成時であり、このとき石垣で段差を設けた調査前の現地地形が形成された。それ故、前述している、「かつて」とは11世紀後半以前ということができるであろう。少なくとも、発掘調査で砂浜に竪穴と貝塚の遺構が確認できた古墳時代後期頃までは自然の砂浜であったことは間違いないであろう。

なお、山陽自動車道とそれに伴うアクセス道路の建設は3回目の大きな改変と言える。

このような地形条件のところの発掘調査であったことが幸いしたのであろう、古代から中世にかけての塩田の構造の実態が初めて発掘調査によって解明できるという大きな調査成果を得た。

検出遺構の概要の要点というか概略をこの項で述べ、各遺構の詳細は次項で記すという手法をとっていきたい。若干重複するところもあると思うがご容赦願いたい。

第6図によって遺跡の構造の概略を述べる。

第6図の平面図は上層・中層・下層で確認された遺構をすべて表示している。各層の主に所属する時代によって、スクリーン・トーンで区別しており、その対応は以下のとおりである。

- 上層 = 平安時代後期～鎌倉時代の遺構
- 中層 = 古墳時代後期の遺構
- 下層 = 弥生時代末期（庄内式併行期）前後の遺構
- 最下層 = 縄文時代の包含層

第6図に示している断面図は、5ラインと7ラインの土層図の合成して作成したもので、縮尺に応じた必要な情報のみを記入した省略した断面である。

第8図の5ライン西壁土層図と付図1の7ライン西壁土層図の対応関係を示しておくとのとおりである。



第10図の土層について述べる。塩田以外の各層は、干潟の地形の中で、絶えず海水にあらわれ、良好な間層が明確にあるわけでもなく、それほど良好な状況ではなかったが、概ね以下の状況が観察されるとみてよいであろう。

第1層は明灰褐色土層で、主に平安時代から鎌倉時代の土器を包含する。この上面前後に北区の塩屋関連と想われるピット群や古銭ピットなどを検出しており、必要に応じて、上層の遺構と呼称している。南区で検出された塩田関連の遺構も上層と呼称する。

第2層は暗濃茶褐色砂質土で、古墳時代後期の土器が主体を占める包含層で、古墳時代後期の竈址や貝塚の遺構が検出された層であり、中層と呼称している。

第3層は淡黒褐色砂層で、弥生時代末期～古墳時代前期の土器が包含されており、同時代の土壌などが検出された層であり、下層と呼称している。

第4層は暗青灰砂礫層で、縄文時代中期から後期の上器が包含されており、遺構は検出していないが、最下層と呼称している。

なお、第3層と第4層の間には、細かい砂層と小石を含む粗い砂層とが幾層にも細分されるが、基本的に黄色砂層であり、この層中にも縄文土器が包含されている。

検出した遺構の大略について述べると、南区では、平安時代後期に造成・開始された塩田関連の遺構が確認された。塩田の下部の最下層からは縄文時代の土器包含層が確認された。

北区では塩田の操業時と併行する時期のピット群や貝塚の遺構が認められた。その下部の中層からは古墳時代後期の竈址と貝塚の遺構を検出し、さらにその下の下層からは弥生時代終末期から古墳時代前期の古式土師器の時期の土壌などの遺構を検出した。

## 1. 塩田の構造（南区の遺構）

平安時代後期から鎌倉時代前半にかけて操業していた塩田の築造過程を述べる。

まず、緩慢な傾斜をもつ自然浜を成形し、その末端に木杭を約40cm間隔で打ち込む。成形は主に細かい砂の層を取り除き、粗い砂層の固い地盤に達することを目的としている。成形後も傾斜があるため、土器・種子類・木屑などの生活廃棄物を含んだ土砂で埋め立て、平坦面を造成する。この層は9層で埋立層と呼んでいる。

さらに、その埋立層の上に粘りのある黒色粘砂を敷きつめ、この面を塩田地盤としている。この黒色粘砂は、近世以降の入浜式の塩田地盤と類似する土質であり、入浜式塩田では「黒砂（こくさ）」と呼称しているとのことである。<sup>(1)</sup>

なお、この塩田地盤の黒色粘砂が第11図や付図1の土層図のどの層と対応するかということが課題である。両図の南区4層と南区5層は防潮堤（塩堤）の上に堆積が及んでいるので塩田地盤の候補から外して問題はないであろう。

南区6層淡灰黒色粘質砂層・南区7層灰黒色粘質砂層・南区8層灰黒色粘質砂層と称している層はきわめてよく似た土質であり、それを塩田地盤か判断するには困難が伴う。第10図では、一応、南区7層を塩田地盤として表示しているが、確たる証拠があるわけではない。この南区6層から南区8層までが塩田地盤と捉えることも可能であり、南区8層を塩田造成時の最初の塩田地盤と捉え、操業している間に塩田地盤が嵩上げていったとみる捉え方である。後述する2カ所の集石遺構の設置面の関係からこの捉え方でいいのであろう。

その嵩上げが操業時の無作為の結果であるのか、作為的な嵩上げ、すなわち、改築・改良であるのかは明らかにし得ないのであるが、民俗例や集石遺構の関係から前者とみていいであろう。

黄色小礫混じりの淡灰色粘土を使用して造っている防潮堤は、木杭を埋め込むかたちで埋立層の直上から設けており、工程的には塩田地盤の敷設より先に行われているとみてよいであろう。防潮堤の上部に木杭ははさむことはない。防潮堤は幅1.5m前後で、その厚みは0.4m前後である。

防潮堤の上には、比較的偏平な石が踏石状に不揃いに敷き並べられていた。

この塩田と海水面の関係を見るため、この付近の1974年からの過去5カ年の水位の平均を神戸海洋気象台に教えていただいたところ、満潮時が標高83.3cmで、干潮時が-87.7cmであるとのことで、干満の差は1.7mと大きい。防潮堤との関係を見ると第10図で示しているように防潮堤の高いところから満潮時で約30cmの差があり、満潮時の水位より若干高い塩田地盤を形成している。

このような塩田の形態は、揚浜系の塩田で、民俗学で言う汲潮浜塩田と理解できる。

塩田の範囲については、明確にできないということが実態であるが、周囲の地形や検出した塩田関連遺構から類推してみたい。

南側の範囲であるが、調査区の南には農業用水路が東西に走っており、その南の水田とは比高差0.8~1.1mの段差があり、確認調査の結果からも、ここには塩田は及んでいないことは明らかである。

東側の範囲であるが、調査範囲の東端から40mの地点(第6図)からは関電の鉄塔建設の調査時にここまでは塩田が延びていることは明らかである。鉄塔からの東については、その地形から鉄塔から100m東の山裾まで延びている可能性が高いとみるのが可能である。

西側の範囲であるが、調査範囲の西端から二級河川大津川までの約190mの範囲まで塩田があった可能性は高いとみている。それは、用水路を挟んで前後の水田の高低差が調査地点と同じような地形が大津川まで延びているとことが唯一の根拠であるにすぎないのだが。

このように捉えると、用水路の北側に東西約370mの範囲に今回調査した形態の塩田が広がっていると推測できることになる。この推測が当を得ているとして、塩田の単位はどのよう

なものであったのであろう。今回の調査範囲の西に採鹹土壌や曲物土壌、集石遺構が集中していることから、『赤穂市史』にその概要を報告したおり、西側についてはほぼ塩田の端を確認できた<sup>(4)</sup>と記している。いまでもその考え方を<sup>(4)</sup>変えていず、東西370mの範囲に類似した単位の塩田が幾つかあるのではと推測している。

調査した塩田面積は約320㎡(約96坪)である。

塩田関連遺構としては、採鹹土壌(沼井)・曲物土壌・集石遺構と呼称している遺構が塩田の西側に集中して検出した。また、防潮堤の下部に埋められていた馬1頭分の骨も検出おり、生産祈願のための犠牲獣であろう。

### (1) 採鹹土壌

採鹹土壌は径4.1m、深さ0.6mの円形を呈する土壌である。土壌の東半分強には、塘底から肩部にかけて良質な黒色粘土を厚く張り付け、土壌上面から肩部にかけて灰黒色粘土の上に防潮堤の粘土と同質な淡灰色粘土を張り付け土壌の壁を保護している。

この厚い黒色粘土と板材や杭などを組み合わせ、海水の塩分濃度をあげる濃縮装置の主要な構造を形造る。しかし、その濃縮装置を整合性をもって具体的に捉えられているとは言い難いところがある。

廣山逸道先生は、この装置は、「溶出鹹水を簀を通して滴下させる型ではなく、海水を入れておいてその中に鹹砂をかき込み、砂をかき混ぜて鹹砂に附着している塩分を溶出させ、上澄み<sup>(5)</sup>の鹹水を汲みとる方式のもの」と推定されている。

しかし、この上澄みを汲み取る方式であれば、土壌全体に粘土で構成するのが効率的と想うのだが、そのような構造になっていない。土壌のほぼ中央に杭を打ち、板材を立て、その東側に粘土を張り付け、その上部には転用した椀や板材、枝がこの土壌の機能とかかわると想われる状態で検出していることなどである。西半分は粘土はなく、一抱えもある大きな礫石が配置され、砂が堆積していた。後述するが、私は、西半分のところに大甕あるいは曲物などの容器を置いて、廣山先生が否定された前者の方法、すなわち、簀の子を通して溶出した鹹水を受け取る方法を採用しているのでは想定している。

採鹹土壌からは、灰黒色粘土下に封じ込められた状態で出土した漆器椀、刀子形木製品、串などが出土した。これらの遺物は、採鹹土壌が機能よく稼働することを願った地鎮祭的な祈りを行った祭祀品であろう。また、この土壌が稼働しなくなった段階の灰黒色粘土上からは、須恵器碗、木製品の沼井かき、木根子が出土している。

### (2) 曲物土壌

曲物土壌は採鹹土壌から約2m北に造られている。径2.1m、残存の深さ0.45mの円形の土壌である。土壌の中央に径0.55mの曲物を設置し、底面から肩部・上面にかけては

粘土を張り付けて構築している。採鹹土壌と同様に砂地に土壌を構築するため維持・補強用に粘土を張り付けて、土壌の壁が海水で壊されのを防いでいる。この遺構は鹹水溜めと捉えている。

### (3) 集石遺構

集石遺構は2カ所検出した。両者とも人頭大強から握拳大の礫石を塩田地盤の上に密集して置かれた遺構である。集石遺構1は採鹹土壌と接した南に位置し、集石遺構2は集石遺構1の東約3mの位置で検出している。形状は両者とも不整形であるが、強いて表現すれば、集石遺構1は三角形で、南を底辺とすれば約3.7m、高さ4.5mの規模であり、集石遺構2はほぼ方形で、一辺約3.0mの規模である。

塩田地盤の設置面は、集石遺構1が第11図の第8層上面に敷設しており、集石遺構2は第11図の第6層上に敷設すると言う違いが指摘できる。これは、塩田が操業している間に塩田地盤が嵩上げされたことに起因しているのであろう。そうすれば、2カ所の集石遺構は同時に存在したのではないことがわかる。

この機能であるが、この塩田が満潮位に海水を汲み上げて冠潮させる形態であることを考慮すれば、汲み込んだ水勢で塩田面に穴が空くことを防ぐ施設であったのであろう。

以上が塩田の構造と遺構の概略であるが、塩田の開始された時期はどのように捉えられてあろうか。埋立層には、縄文土器から平安時代の土器まで幅広い時代の土器が包含されており、その中で、最も時代の下る土器の示す年代が、塩田の構築に最も近いと捉えて大過ないであろう。その時期は11世紀後半の年代を示し、この塩田は平安時代後期に構築されたものと考えられる。廃絶の時期は、採鹹土壌の灰黒粘土の上から塩田用具の沼井かきや木根子などとともに出土した土器が示す年代とみてよく、14世紀前半と考えられる。

すなわち、この塩田は平安時代後期から鎌倉時代後半の長期にわたって操業されていたことになる。

なお、防潮堤下に埋められた馬や採鹹土壌から出土した漆器椀・刀子形木製品・串などは、塩田での生産の無事を祈願した祭祀に使用したもので、生産遺跡での祭祀形態として注目される事例を提供できた。

## 2. 釜屋関連の遺構（北区の遺構）

今回の調査では、煎熬を行う釜場のある釜屋関連の遺構は発見できなかった。釜屋の関連遺構があってもいい地形条件の塩田より一段高い北区の調査地から、煎熬遺構などが検出されていない。このことから周囲の地形から、釜屋は調査地の北西にある現在の荒前集落がその候補

地として考えられる。

北区の調査地からは、塩田の操業期間と同時期としては、貝塚1と柱穴を含むピット群などが検出されている。

貝塚1は北区の最も西の位置にあり、その範囲は10m四方以上に広がる規模であり、多量のハイガイ、ハマグリ、カキ等で構成されており、そのほとんどの貝が開いており、湯がいて干貝をつくった痕跡と理解している。

貝塚1より東方向にあるピット群は、西・中央・東の3か所に分かれているとみることできる。このピット群は休憩小屋ではないかと推測している。AVグリッドの古銭を入れた古銭ピットと呼称している遺構は西ピット群のところの位置している。

### 3. 中層・下層・最下層の遺構・遺物

中層の古墳時代後期の竈址は合計7基が確認されており、いずれも住居内に設置された竈ではなく、独立したソトクド的な竈である。その内3基までが竈址の全面に2~3mの範囲の貝塚を伴っており、貝を湯がき、干貝として食用に供した施設と捉えている。

下層の弥生時代末期から古墳時代前期の遺構では土壌が7基ほど検出され、貝土壌と呼称している貝を入れた土壌が目される。

遺物では、鹿角末製品や銅銭、韓式土器、碧玉製管玉、金環、埴輪の出土が注意される。

また、製塩土器は弥生時代末期から奈良時代の時代のものが出土しており、塩田以前に土器による製塩が行われていたことがわかる。土鍾も各時代のものが出土しており、製塩と共に漁業も活発に行っていたことの証拠で、塩田による製塩以前は漁村の景観を呈していたであろう。

縄文土器は中期後葉から晩期のものが認められ、後期前葉・中葉のものが大半を占める。土器のほかは石鍾や石簾などが出土している。

文献史料からのみで構造を推定していた古代~中世の塩田が、考古学的な調査によって初めて構造的に把握でき、その操業期間も明らかに出来たことの意義は大きいと言えることができるが、今後に残された課題も多い。

(註)

- (1) 廣山堯道先生の教示に拠る。なお、黒砂は海から採取するとのことである。
- (2) 石川県珠洲市の仁江海岸で、現在も揚浜式塩田による塩作りをされている角花菊太郎氏(無形文化財・揚浜式塩田技術保持者)の塩田は、塩田で用いる砂は、風雨や作業によって少しづつ失われるため、2年に1度の割合で、約2m<sup>2</sup>づつ補給するとのことである。(富山大学人文学部考古学研究室「揚浜式塩田の民俗調査」『能登滝・柴垣製塩遺跡群—古代揚浜式塩田・鉄釜・土製製塩炉の調査—』。富山大学考古学研究報告第5冊。1991年)
- (3) 廣山堯道『日本製塩技術史の研究』雄山閣出版。1983年
- (4) 山本三郎他『堂山遺跡の遺構と遺物』(『赤穂市史』第4巻)1984年
- (5) 廣山堯道『赤穂堂山の汲潮浜』(『日本製塩技術史の研究』)1983年

### 第3節 基本層序について

遺跡の立地するところが、かつて、北は「堂山」の山裾から、南は海辺まで緩やかに傾斜する地形であった。調査前は、その後の塩田の造成や水田の造成などで大きく地形は変化しており、1.4mの段差のある畑地であった。そこで、南区と北区に分け調査をしたことは前述したとおりである。

南区の塩田関係の土層と北の土層は根本的に異なっており、基本土層も北区と南区に分けて捉えた調査時の方針をそのまま踏襲して記述していく。なお、北区と南区と分けているのは純文土器が包含されている層以下は北区と南区は同じような様相を呈しており、同じ層名を使用しているところもあることをことわっておきたい。

なお、遺物観察表の出土層位や本文の層位の説明は、以下に述べるこの基本層序を基本として記述している。

まず、南区の塩田関係の層序から、北区の層序の順に述べていきたい。

#### 1. 南区の基本層序（塩田関係の基本層序）

第11図と付図1を使用して塩田が造成され以後の南区に堆積した土層を述べる。北区の土層は成層的に堆積しており、どのグリッドにおいてもほぼ同じ傾向である。

表土から埋立層の9層上面までの深さを第11図で見ると、DⅣグリッドでは64cmで、FⅣグリッドの防潮堤に接する北では78cmであり、その差14cmである。その間隔7.96mで14cmの傾斜をもっていたことになる。

- 南区1層 耕土。灰色を呈する。厚さ20cmのところがほとんどであるが、12cmの浅いところもある。
- 南区2層 床土（明褐色土）。明褐色や黄褐色を呈し、鉄分の集積が顕著である。厚さは2～4cm前後である。
- 南区3層 灰褐色土。マンガンや鉄分を含む。層自体が若干砂質気味である。
- 南区4層 灰褐色粘質土。「堂山」の基盤である黄色礫や黄色が比較的多く混入している南区3層よりも少ないがマンガンや鉄分の集積がみられる。
- 南区5層 淡灰黒色粘質土。
- 南区6層 淡灰黒色粘質砂土。層全体に鉄分の集積がみられる。
- 南区7層 灰黒色粘質砂土。
- 南区8層 灰黒色粘質砂土。

南区9層 淡灰黒色砂質土。塩田造成のための埋立層である。土器や木屑、種子類及び小礫や小石、砂利を含む層である。木屑には先が焼けたものなどもみられ、種子類には桃などがあつた。土器は縄文土器から平安時代後期の須恵器までが包含されており、今回の調査の中ではこの層から出土した土器が一番多い。

第11図ではこの層を9-1層：淡灰黒色砂質土層、9-2層：淡灰黒色砂質土層と分けているが、9-2層が埋め立て下部の様相を呈しており、埋め立て時の作業工程時の差と捉えていいであろう。

南区10層 基本的には、10層全体を黄褐色砂層あるいは黄褐色砂礫層と大きく捉えても大過ない層であり、調査中の遺物の取り上げ時にはそのような捉えて遺物の出土層名としていた。付図1では、この10層を分け、10-1層：茶褐色砂礫層Ⅰ、10-2層：茶褐色砂礫層Ⅱ、10-3層：淡白黄色砂層、10-4層：灰黒色白色粘質砂層としている。10-4層はその上面と下面あるいはその中間にも鉄分集積層である粘質土があり、この層は湧水が非常に多かった。いずれにしても、この10層は海岸部の波打ち際の、あるいは、干潟の浜の自然堆積層である。遺物は縄文土器が包含されていた。

南区11層 調査時には、11層暗青灰色砂礫として遺物を取り上げた層であり、この遺跡で最も多くの縄文土器が出土した層である。縄文土器は前期から晩期までの土器が混在して包含されており、層的に捉えられる状態の出土状態ではなかった。縄文時代後期前葉の土器が比較的多い傾向である。

付図1では、この11層を11-1層：暗灰紫粘質砂層、11-2層：暗青灰砂礫層（砂利層）と分けている。11-1層の下層に薄い鉄分沈殿層が認められ、これを境に11-2層と分別した。11-2層の上層は砂利も細かく、植物遺体（松果など）はこの上層部に非常に多かった。縄文土器は層全体に包含されていた。この層は何回かあつた縄文海退のときの堆積層で、海辺にあつた縄文土器包含層を引き潮とともに何回かひきずりここに堆積した層ではとみている。

## 2. 北区の基本層序

次に北区の層序をみていきたい。北区の土層については、基盤が砂層であるとともに、北から南にさがる斜面地であり、東西方向にも時代によって凸凹がみられ、調査時には土層の捉え方にも若干の混乱がみられたが、遺物整理調査のときに再検討を行い、現在は付図1に示すように整理を行った。付図1の7ラインでは北区2層から北区5層が欠落しているが、3ライン

や5ラインで北区2層から北区5層は確認されている。また、Xの多くの各グリッドでは、表土下に、北3層から北9層の堆積がなく、縄文土器を包含する北10層になるという現象などがみられている。

- 北区1層 耕土(暗灰色土)。
- 北区2層 床土(茶褐色土)。
- 北区3層 淡灰褐色土。
- 北区4層 淡黄灰褐色土。
- 北区5層 暗灰褐色粘質土。塩田操作中に堆積した層である可能性が高い。一部にこの面から掘り込まれた可能性のある遺構も土層断面などで認められた。土器も平安時代後半から鎌倉時代の土器を主体に包含されていた。
- 北区6層 明灰褐色土。この6層上面で、上層の遺構であるピット群、古銭ピットなどの遺構を検出している。上層の貝塚1もこの6層に対応し、6層中に貝塚が形成されていると捉えている。この層中には、炭や山塊の基盤層である黄色礫などを含み、土器は平安時代後半から鎌倉時代の土器が主体に包含されている。なお、3ラインの土層断面に検出された遺構をみると、この遺構の上部に堆積した土器は北区5層の中にあり、5層から掘り込んでいる遺構もあると捉えた方がよいであろう。
- 北区7層 淡黒褐色砂層。
- 北区8層 暗濃茶褐色砂質土。北区8層は8-1層と8-2層に分けている。この層は古墳時代後期の土器を主体に包含しており、また、古墳時代後期の竈址と貝塚のある付近に厚く堆積している傾向がみられる。基盤の砂層を大きく円形に掘り込みで、そこに竈を設置しているのであろう。BⅢグリッドのこの層では、打ち寄せる波に洗われたとみられる有機物が腐食した黒い砂と基盤の黄色砂が薄く残層にも互層になった調査現地で波状線と呼んでいた層が認められた。
- 北区9層 この層も2に細分した。9-1層:淡暗茶褐色土砂層、9-2層:淡黒褐色砂層である。庄内式併行から布留式併行を含む、いわゆる古式土師器を包含している層である。下層の土壌7のあるAⅡグリッドや土壌5のあるAⅡグリッドに厚く堆積しており、この層にも波で洗われた前述の波状線が顕著に認められる。
- 北区10層 明黄色砂層。縄文土器を包含するが、この層にも波状線が顕著で、縄文土器もプライマリーな状態で出土したものはない。
- 北区11層 明褐色砂層(細砂)。11層と同じく縄文土器を包含するが、プライマリーな状態での出土ではない。この層にも波状線が顕著に認められる。

北区12層 淡茶褐色砂礫層。この層は3に細分したが、いずれも無遺物層である。  
なお、付図1で番号を付してない土層は無遺物層である。

## 第4節 塩田と関連する遺構（上層の遺構）

塩田と関連する遺構とは、南区の塩田遺構と主に北区6層上面で検出された貝塚1、ピット群などの遺構である。ほぼ塩田操業期間と対応する期間の平安時代後期から鎌倉時代後半であろうとみている。遺跡の概要の項でも前述したとおり上層の遺構とも呼称している。

### 1. 塩田の造成と構造

「堂山」の麓に、北から南に緩やかに傾斜する干潟浜が形成されていたとみられ、この自然浜を利用して堂山遺跡の塩田は造成される。

#### (1) 浜の掘削・成形

自然浜を掘削・成形することから塩田の造成は始まる。

北側の浜の掘削・成形は2段に行われている。

第11図の5ラインの断面図でこのことを説明すれば、後世、若干、削平されているとみられるが、調査で検出された塩田の北側の掘削開始面の高さは標高1.47mであり、そこから幅30cm、深さ18cmの1段目の掘削が行われ、その高さで一端幅66cmの犬走り状の平坦な面を設け、再び幅32cm、深さ14cmの掘削を行っている。掘削下端の標高は1.07mである。5ラインの北側の浜は40cmの深さを成形、掘削したことになる。なお、この平坦面は塩田当初の塩田地盤の南8層上面とすりつく状態であることが観察されている。

成形の末端、すなわち南側は、杭が打ち込まれている。

同じく第11図で説明すれば、杭が打ち込まれた場所の成形面の標高は0.53mである。成形面で最も深いところは防潮堤下部で標高0.61mである。北側の浜の掘削開始位置から杭までの距離は10.24mであり、掘削開始の下端から54cmの深さが成形面の低いところになる。

5ラインで見れば、北側の掘削下端から杭までの8.96mの距離で、深さ0.54mの緩やかな傾斜があるということが出来る。

付図1の7ラインでも同じ傾向であるが、数値をあげておきたい。北側の掘削開始面の高さ標高1.55mで、そこから幅38cm、深さ38cmを掘削して平坦面に達し、平坦面の幅66cmで、再び幅34cm、深さ16cmの掘削を行っている。掘削下端の標高は1.01mである。7ラインの北側の浜は54cmの深さの成形、掘削したことになる。なお、犬走り状平坦面に、塩田地盤の南8層上面がとりつく状態は5ラインと同じである。

浜の成形開始点から末端の杭までの距離は9.7mで、杭地点の成形下面は標高0.57m

であり、この高さが成形面の最も深いところになる。7ラインでは、北側の掘削下端から杭までの8.32mの距離で、深さ0.44mの緩やか傾斜をもつことになる。

以上のように浜の掘削・成形は行われ、南側の末端に杭を打ち込む。これが第1段階の工程と言えよう。

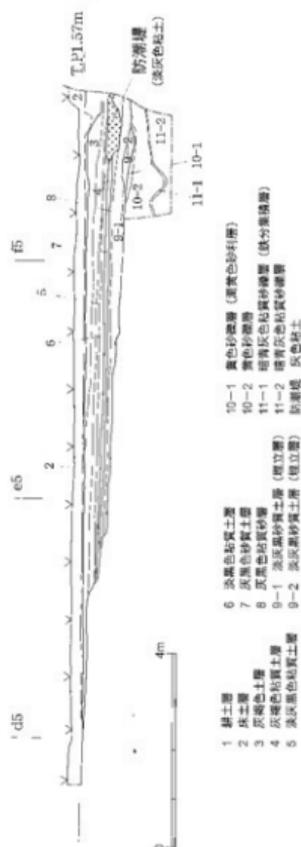
## (2) 杭列

杭は心々距離で45～50cmのほぼ等間隔で一直線に打ち込まれており、杭列を形成する。杭の打設にあたっては、紐などを使用した丁張りをはり施行したものとみられる。

第9図はFVIグリットの杭列と防潮堤の関係を示した図であるが、杭の打設位置の標高をみれば、左から0.49m、0.51m、0.51m、0.47m、0.47mを測り、平均の標高0.49mである。このことは、前述している5ラインの杭の位置の成形面の標高0.53m、同じく7ラインの標高0.57mであることから標高0.55m前後が成形面の標高と計算されていたと捉えてよいであろう。

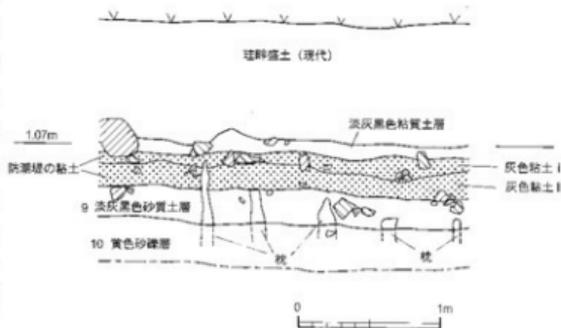
なお、この杭は取り上げを行っており、左から順に1～5と杭番号を付している。取り上げた杭から地中に打ち込まれて杭の深さをみれば、杭3では約60cmを、杭5では約40cmを打ち込んでいると計算できる。杭を打ち込んだ時点で、杭が地上に出ている長さを推測できる遺存状態の良好な資料は杭1で、長さ47cmを測り、その高さは防潮堤の粘土中にあることになる。遺存している杭1の上端の標高は0.96mである。このことからみれば、50cm前後が地上に出ていた長さともみて大過ないのであろう。他の杭はその先が腐食して短くなっているのであろう。

この面の埋立層の厚さは、25cm前後であるから、当初から杭は埋立層より上位にでること、また、防潮



第11図 5ライン西壁土層図

堤より下位になるよう  
計画されていたとみて  
間違いないであろう参  
考に他の杭の検出さ  
れた上端の標高をみれば、FⅡグリッドの杭  
では0.83～1.04mの間、FⅢグリ  
ッドの杭では0.91～  
1.03mの間、FⅣ  
グリッドの杭では0.  
62～1.0mの間、  
FⅦグリッドの杭では



第12図 FⅣグリッド南壁の防潮堤縦断面図

0.66～0.95mの間、FⅦグリッドの杭では0.67～0.96mの間に収まる。

ほぼ等間隔に打ち込まれて杭も、地区によってはその間隔に微妙な差がある。集石遺構1のあるFⅡグリッドの杭をみれば、50cm間隔のものが多く、FⅦグリッドのそのほとんどが45cm間隔である。強いて言えば、西側のFⅡ～FⅣグリッドの杭間隔が50cmと若干広く、FⅦ～FⅧグリッドの杭間隔が45cmと狭く打たれているという傾向は指摘できる。

杭間の埋立ての七砂留めの方法については、確たる証拠を検出されていないが、FⅦグリッドで標高0.6m付近で検出している長さ約70cm、幅14cmほどの板材を使用した可能性があることが指摘できるのと、第12図の断面に有機物が腐食したとみられる集積層みられることを合わせて推測すると、板材と蔓や小枝あるいは竹などを使用したしがらみを利用して土留めとしていたのであろう。

なお、杭の樹木の種類であるが、クリとカヤの材を使用している。

また、現在の潮位と大きな変化がないとすれば、これらの杭の打設作業は満潮時には行える状況ではなく、干潮時に行ったとみて間違いないところである。

### (3) 埋立層

次の段階の工程として、緩やかな傾斜をもつ成形面に土器や種子類、木屑、小礫、小石などを含んだ土砂で埋立て、平坦な面を造成する工事を行う。この層を埋立層と呼称し、基本層序の名称では南区第9層としている。

この埋立てに使用している土砂の中には雑多な生活廃棄物が多量に含まれている。土器が最も多く、縄文土器から弥生土器、古式土師器、古墳時代の須恵器・土師器、奈良時代の須恵器

・土師器、平安時代の須恵器・土師器等であり、製塩土器や土鍾他也含まれている。この埋立層中に含まれている土器の中で、最も新しい時期の土器が示す年代が、この塩田の造成した時期に一番近いとみることができる。その時期が11世紀後半の平安時代後期である。

この埋立層で出土した土器がこの遺跡の出土土器量のかんりの部分を占めていると言える状況である。

種子類では桃の種子が目立った。木屑では先の焼けた木片や木屑も結構多くみられた。小石とは角のとれた河原石や海岸の小石のことで、小礫とは「堂山」の基盤の礫のことを仮に呼称している。

埋立層の厚さをみれば、5ラインでは、e5で6cm、f5で23cm、深い所（f5から南2mの地点）で36cmである。7ラインでは、e7で10cm、f7で25cm、深い所（f7から南1.5mの地点）で30cmである。

埋立層上面の標高を示せば、5ラインでは、e5で1.11m、f5で1.02m、深い所（f5から南2mの地点）で0.91mであり、まだ20cmの差がある。7ラインでは、e7で1.11m、f7で0.97m、深い所（f7から南1.5mの地点）で0.93mであり18cmの差がある。しかし、いずれもの地点も、満潮位の標高83.3mよりも高い位置まで埋め立ていると言うことができる。

#### （4）防潮堤の粘土

防潮堤の粘土の敷設は、埋立層の上に設置されており、工程的には埋立てが終了した段階以後に、この工事が行われていることになる。なお、防潮堤の粘土の上部に木杭は打つていない。

防潮堤の粘土は、調査地の南端に検出されており、その全体が調査できたところは皆無である。防潮堤は現在の畦畔の下部に検出されており、畦畔に接して農業用水路があり、全体を把握する調査は無理であった。

また、調査の初期は防潮堤の粘土の存在していることの認識がなく、集石遺構1・2のあるFⅡ～FⅣグリッドでは、集石遺構に目をうばわれ、防潮堤の粘土を平面的にはとばしており、セクションで確認している状況であった。また、FⅦ～FⅧグリッドでも、採鹹土壌などの調査に集中している状況で、防潮堤の粘土の存在に気付かず、木杭までさげてしまうという失敗もおかしている。

防潮堤の粘土には、灰色粘土を使用して設置している。灰色粘土の中に「堂山」の基盤層である流紋岩の黄色の小礫が点々と混じっているという状況であった。

防潮堤の粘土の規模については、その全体を把握できなかったが、5ライン土層断面（第11図）が比較的良好にその全形に近い状況が観察できる。形状は逆台形に近く、幅は1.34mを

図りこの数値より若干大きいのであろう。厚さは最も大きい数字をとれば0.33mである。標高はその上部で1.13m、下部で0.8mである。

5ラインの土層断面では粘土の分層は確認していないのであるが、7ラインでは防潮堤の粘土の分層を確認しており、第1次築堤と第2次築堤とすることができるかもしれない。その形状をみれば、第1次築堤は5ラインと同じような逆台形の示すのであるが、第2次築堤は塩田地盤の南区7層の上に設置され、北側に張り出している形状である。これは、塩田地盤が嵩上げされた結果、第1次築堤の粘土の上にさらに粘土を継ぎ足し補修した痕跡とみることも可能である。7ラインの防潮堤の粘土の厚さは0.39mであり、標高は上部で1.17m、下部で0.78mである。

9ラインの土層断面でも防潮堤の粘土は分層が確認されており、第1次築堤と第2次築堤とすることができる状況であるが、第2次築堤は7ラインの土層断面の設置層位とは異なり、塩田地盤の南区8層が堆積した段階の設置と認められ、補修・改良は幾度かにわたって行われている可能性が高いとみるべきかも知れない。9ラインの防潮堤の粘土の厚さは0.38mである。標高は上部で0.97m、下部で0.69mであり、西側の5ラインと比べてその上部の高さは約16cmほど低いと言える。

#### (5) 防潮堤上の踏み石

防潮堤の粘土の上には、比較的扁平な石が不揃いに敷き並べられている状況が認められた。このことを良好の状態を観察できたのはFV・FVIグリッドである。それをみれば、歩幅に近い間隔で大きめの石(40～50cm前後)を配置し、その間には小さな石を無造作に配置しているという状態であった。踏み石の上部の標高は1.1～1.2mである。

FIIグリッドの集石遺構1と踏み石の関係であるが、その平面的な位置や高さの関係からみて、集石遺構1の南側の部分は踏み石も兼ねているとしか言えない状況である。防潮堤の粘土の範囲とみられる集石遺構の大きめの石の標高は1.1～1.2mで、FV・FVIグリッドの踏み石と同じ高さであることも兼用しているという傍証になろう。このようにみれば、集石遺構1石の一部は、防潮堤の粘土の中にあることになり、防潮堤と集石遺構1はほぼ同時に施工していると捉えられる。

#### (6) 塩田地盤

塩田地盤のことは、遺跡の概要の項で若干詳しく述べている。塩田が検出された南区の土層堆積状況をみれば、基本層序の南区5層は防潮堤の上部に及んでいることから塩田地盤の候補から外し、塩田地盤と捉えられる層は南区6層、南区7層、南区8層とした。この三つの層はきわめてよく似た土質であり、南区8層が塩田造成時の最初の塩田地盤であり操業している間

に塩田地盤を嵩上げしていると捉えた。

防潮堤にも補修・改良がみられるのは、塩田地盤の嵩上げに対処する処置であろうとみるのが合理的であろう。また、集石遺構1が塩田地盤の南区8層上面に敷設しており、集石遺構2が南区6層に敷設していることも塩田地盤の嵩上げに対応する措置であろうと捉えている。

塩田地盤の厚さと標高を記述しておきたい。

5ラインでは、南区8層の厚さは6~10cmであり、上面の標高は1.21~0.99mを測り、その高低差は2cmである。南区7層も厚さ6~10cmであり、その上面の標高は1.27~1.07mで、その高低差は2cmである。南区6層の厚さは5~12cmで、その上面の標高は1.33~1.12mで、その高低差2cmである。いずれの塩田地盤層も北側が高く、南側が低い状況であり、その差が20cm前後である。このことは、揚浜系の汲塩浜塩田の場合は、厳密な意味での水平な平坦面は要求されていないことの表れであろう。

7ラインでは、南区8層の厚さは4~8cmであり、上面の標高は1.32~1.05mで、その高低差は27cmである。南区7層の厚さも4~8cmで、その上面の標高は1.26~1.01mで、その高低差25cmである。南区6層の厚さ6~10cmで、その上面の標高は1.17~0.97mで、その高低差20cmである。

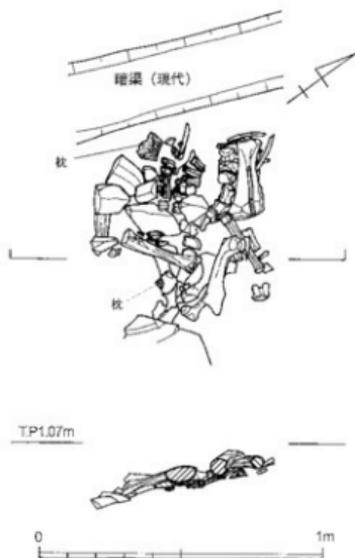
#### (7) 防潮堤下の馬遺体

発掘調査範囲の西南隅にあたるFIIグリップの西南隅の防潮堤の粘土の下部に、馬一頭分が埋め込まれた状態で検出された。

調査当時は、防潮堤の粘土の固りは明確なかちでは把握していなかったが、木杭の上であることは確認していた。また、馬遺体周辺を精査したが、墓壙等の掘り方は検出されなかったので、生産祈願のための犠牲獣として、防潮堤の粘土下に埋められた馬遺体と判断した。

集石遺構1との関係をみれば、位置は集石遺構1の西南隅と接しており、高さもほぼ同じレベルで検出されている。

馬遺体の標高をみれば、高い方で1.01m、低いところで0.69mを測り、このレベルからみれば、杭列の内側の埋立層の上に



第13図 防潮堤下の馬遺体実測図

犠牲獣の馬を置き、その上から防潮堤の粘土を敷設したとみて間違いないであろう。

馬の骨は、歯は全体がよく残っており、脊椎、肋骨、肩甲骨、恥骨、後足の大腿骨・下  
肢骨は良好な遺存状態であった。しかし、前足の部分は見当たらず、現在の暗渠の設置の  
ときに除去されたものとみられる。

なお、蹄は発見されていない。

馬の骨の遺存状態からは、東部を東に向けてうめられていたことがわかる。

馬遺体の埋められたのは、塩田地盤の造成や集石遺構1の設置の前で、埋立層の造成が  
終了した後、防潮堤の粘土の敷設の直前であったと捉えられる。

## 2. 採鹹土壌

採鹹土壌という名称を使用したのは、この土壌が塩田の中に造られ、海水を濃縮して鹹水を  
得る採鹹の過程に利用される施設であると捉えたからである。調査時には、入浜式塩田の海水  
濃縮装置の呼称である「沼井」と仮称していた。

採鹹土壌はFⅡグリッドで検出され、採鹹土壌に接して集石遺構1が南に検出されている。

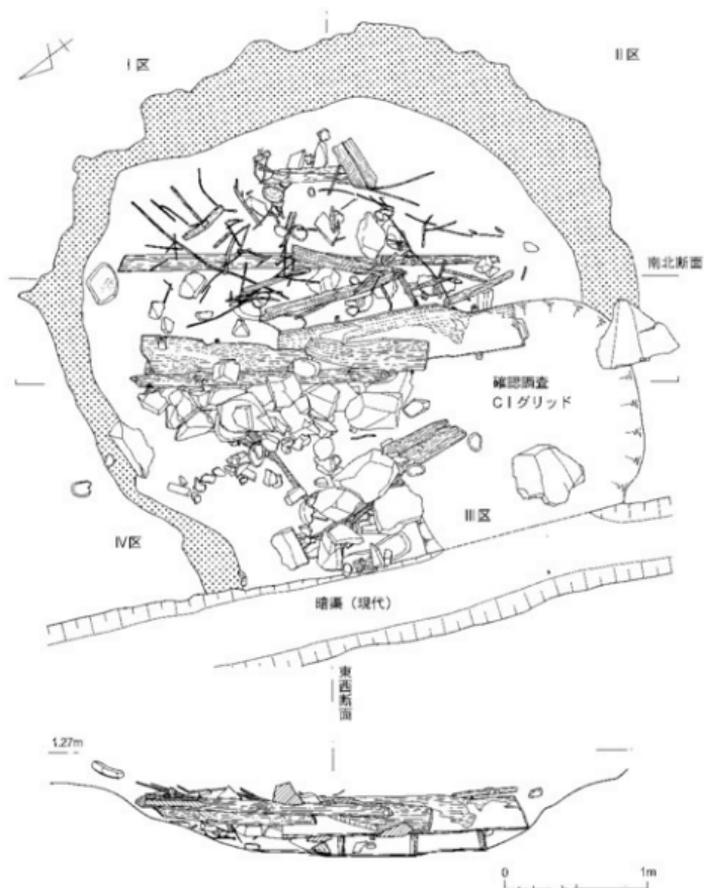
検出された面は、塩田造成当初の塩田地盤である南区8層からと捉えている。第21図は、  
採鹹土壌と集石遺構1の断面に5ラインの塩田地盤や防潮堤の粘土を合成した図であるが、こ  
れをみると、南区8層からこの土壌が掘り込まれていることが示されており、集石遺構1とも  
同時に造られている。第17・18図で採鹹土壌の掘削面の標高をみれば南側で1.13m、  
北側で1.14m、東側で1.15mを測る。

防潮堤の粘土と塩田地盤は施工の工程としては同時に行われていると捉えられが、防潮堤の粘  
土が先に設置され、塩田地盤を造ったとみるの合理的である。それでは、塩田地盤と採鹹土壌  
の先後の関係はどうか。塩田地盤を造成してから掘削したのか、塩田地盤を造成する  
前にあらかじめ掘削していたかの関係であるが、単純に考えれば、塩田地盤の南区8層から掘  
削されていると断面で観察できるのであるから、前者であると捉えるのが常套である。しかし、  
これには大きな無駄が生じる。塩田地盤を造成してからの掘削であれば、生活廃棄物等で埋め  
た埋立層を再度掘り返すことになり、折角整備した塩田地盤をも荒らすことになる。10cm未  
満の土壌の肩部の観察だけで前者と断じるには躊躇を覚えざるを得ない。この位の微調整であ  
ればいつでも可能である。このように考えだすとその先後の関係が判らなくなるというのが実  
態である。

現代の機械力を利用した土木工事からみれば、前者の塩田地盤を造成してから後に掘削する  
のであろうが、採鹹土壌の規模やその土量からみて、当時の技術からでは無駄が大き過ぎるで  
あろう。あらかじめ設置位置が決定されており、同時進行的に工事がなされたみるのが妥当で

あろうと推測している。

採鹹土塼は、現代の暗渠や確認調査で西側と西南部分の一部が壊れていたが、その全形はほぼ検出されている。平面形は円形で、第17・18図でその規模を測ると、南側の肩部の一部を復元的に捉えたが、南北径は3.85m、深さ0.61mであり、東西径は40.8m、深



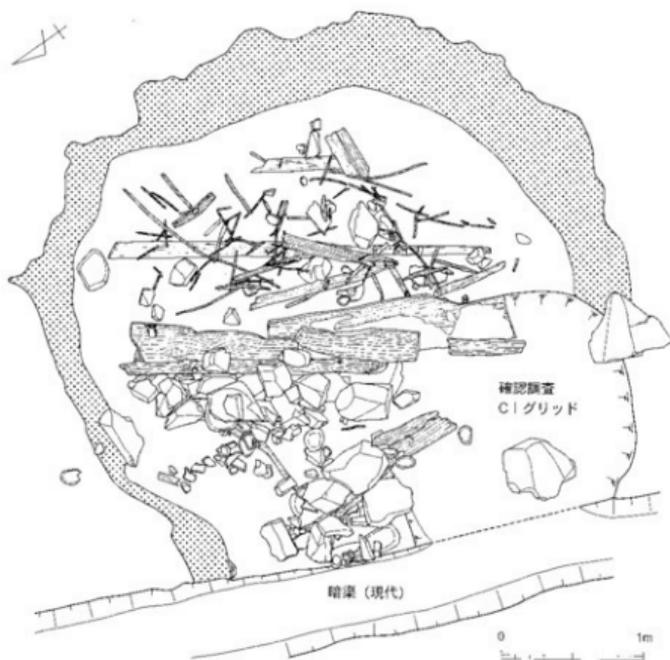
第14図 採鹹土塼実測図①

さ0.59mである。概略的に表現すれば、径4.1m、深さ0.6mの円形を呈する土壇としてよいであろう。

採鹹土壇は、粘土や木材や磯石を組み合わせた複雑な構造をしており、海水の塩分濃度をあげる濃縮装置の機能を整合性をもって具体的に把握できているとは言い難い状況である。そこで採鹹土壇の構築原を詳しく検討することによってそのことを検討してみたい。

おそらく、浜の掘削・成形時で、埋立層が造成される前に採鹹土壇は掘削されているのであろう。

採鹹土壇は、肩部から30度前後の緩やか傾斜で墳底に達し、墳底は径2m前後の比較的平坦な面をもつよう掘削されており、全体は深い大盛皿の形状を呈している。墳底の標高は0.56mで、塩田関連の中では一番深く掘削されて遺構である。



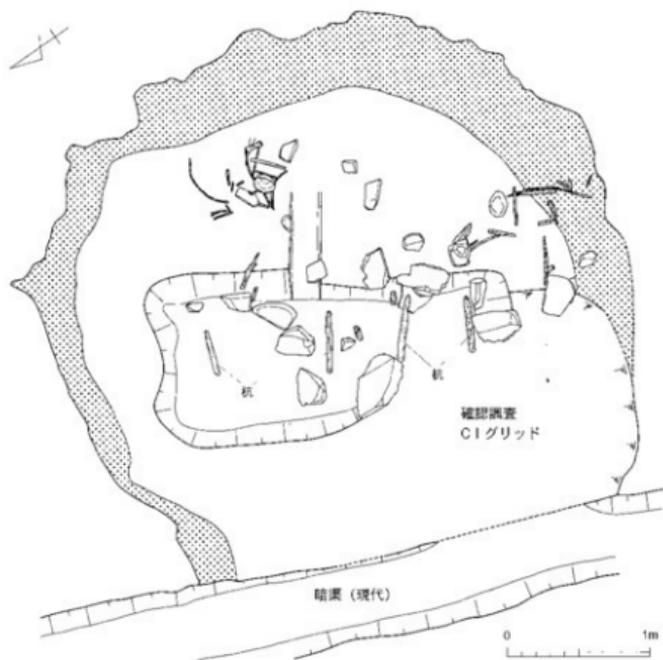
第15図 採鹹土壇実測図②

掘削されてから、しばらくそのままの状態、埋立層や塩田地盤の造成が行われていたのであろう。

採鹹土壌の次ぎの作業は、良質な黒色粘土（壤内3層）をひき詰める前に漆器椀、刀子形木製品などの祭祀遺物を供える行為である。これらの祭祀遺物は竈底の砂礫層に接して置かれている。この段階の祭祀行為を行う時には、塩田地盤の造成は終えて回りは整頓されていたとみるのが妥当であろう。

祭祀遺物は2群に分けて置かれていた。第1群は採鹹土壌のⅠ区に、第2群は採鹹土壌のⅡ区に検出されている。第16図に図示しているが、少し見にくい図になっている。

第1群（図版二十三（上））は、ほぼ南北80cm、東西70cmの範囲に集中して置かれており、漆器椀、曲物片、串、半裁された竹材、割込みを入れた柵目の板材、柵目材、柳のように



第16図 採鹹土壌実測図③

もみえる小枝、樹皮のついた小枝、15cm前後の角礫、円礫で構成されている。用途不明のものが多いのであるが、いずれも小振りのものである。検出された高さは、標高0.55~0.85mの間で検出されている。

第2群(図版二十三(下))は、約1m四方ぐらいの範囲にかたまって置かれている。墳底の砂礫層に置かれているもの他、墳底の肩部付近に検出されたいものは黒色粘土上にあるものも存在する。刀子形木製品、桜皮紐付き曲物片、椀目材、樹皮付いた小枝、先を尖らした枝、人頭大から握拳大強の角礫、円礫で構成されている。第1群と同じように小振りのもので、用途不明のものが多い。曲物は曲物土塊、小枝類や礫は採鹹土塊に使用されており、採鹹工程で使用するものを供えていると捉えることも可能である。

採鹹土塊の主要な構造をのべる前に、採鹹土塊の掲載図の説明をしておきたい。

第14図は採鹹土塊の上面以下で検出した遺物・礫石をすべて図化しており、断面は東からみた見通し図である。船の転用材ともみられる大型木材から東側に良質な黒色粘土、黒色粘質砂層で構成されており、ほぼI・II区に相当する。その西側、III・IV区に相当する箇所は大型の礫石と砂から成っている。

第15図のI・II区の木製品や木材、礫石は、1層を除去した段階で検出した上面のもの(図版十五(下)から図版十七(上))に対応する出土状態とこれらの木製品を除去しその下から検出した椀などの木製品(図版二十から図版二十二(上))に対応する出土状態を合成し

TP1.27m



第17図 採鹹土塊東西セクション断面図

TP1.27m



第18図 採鹹土塊南北セクション断面図

ており、Ⅲ・Ⅳ区は5-1層、5-2層から検出している礫石、木材を図示した平面図である。

第16図は採鹹土壌を構成するⅠ・Ⅱ区の主要な木材をすべて除去し、黒色粘土と木杭（図版二十二（下）・二十四に対応）及び黒色粘土下に封じ込まれた祭祀遺物（図版二十三に対応）の図を合成したものである。Ⅲ・Ⅳ区は墳底に接して検出した礫石（図版二十四に対応）を図化している。

次ぎの工程は、良質な黒色粘土をひき詰める作業である。この粘土は採鹹土壌のほぼ東半分には使用されたとおり、西半分は砂層が堆積していた。粘土の積み詰める作業は何回に分けて行われている。

第17・18図を中心にこの工程をみていきたい。

第18図をみれば、粘土の使用の最初は、9層明灰黒色粘質砂質土Ⅲであり、これは肩部の保護のため粘質土を張りつけていると理解できる。第17図では9層と10層濃灰白色粘質砂が対応するであろう。次ぎに、第18図の3-2層が積み詰められる。その後、8層淡灰色粘土を土壌上面から肩部にかけて全周するかたちで張り付けている。この粘土は防潮堤の粘土と同質で、流紋岩の黄色の微細な礫を含んでいる。最後に3-2層灰黒色粘土Ⅱを積み詰める。この粘土を積み詰める際には大きめの礫石も使用している。良質の黒色粘土と呼んでいるのは3-1層と3-2層のことである。

2層灰黒色粘質砂質土は採鹹作業時に堆積した層と捉えている。

1層明灰黒色砂質土は、この採鹹土壌が放棄されて以後に堆積した層と捉えている。

このように捉えると、第17図との間の層の分け方とその呼称に錯誤が生じていることに気付く。対応関係は、第18図3-1層は第17図3-2層に、第18図3-2層は第17図3-3層に対応し、第18図2層は、第16図2層・3-1層・7-1層・7-2層に対応すると捉えた方が整合的であり、原図の理解をこのように訂正しておきたい。なお、7-1層・7-2層の現地の観察ではかなり明確に分層できたのであるが、また、8層以外は東半分には認められない粘土である。

良質の黒色粘土は以上のような順で設置された。次ぎの工程は、第17図の東西セクション断面で説明していきたい。前述の3層の粘土に第17図6-1層灰黒色粘質砂質土を張りつける。幅は40cmほどである。その前に6-2層灰黒色粘質砂質土を墳底中央部に張っている。

6-1層と大型木材の間には木杭が打ち込まれている。第11図で大型木材と木杭の関係を示しており、木杭の平面の配置は第16図に示している。第16図は大型木材を除去した後の木杭と6-1層をはずした、3層の落ち込みの傾斜を合成して図示している。

直線的に並ぶ木杭は4本で、いざれもかなり斜めに傾いた出土状態である。東によって検出した1本の木杭はほぼ直に検出している。

木杭の打設と6-1層の設置の先後関係であるが、おそらく、先に木杭を打設し、大型木材

を立てかけ、礫石で固定し、その後、その間に6-1層の粘質砂質土を充填したとみるのが妥当性が高いであろう。

木杭が直に打ち込まれていたか、斜めに打ち込まれていたかの問題も解決していない。図版二十二(下)は大型木材を除去した直後の写真であるが、かなり斜めの状態で出土しており、大型木材等の重みで斜めになったのか、当初から斜めに打設されたかであるが、後者の可能性が高いと考えておきたい。

6-1層に張り付いた状態で出土した大型木材の構造は、まず、上端に段状の切り込み、樹皮がのこる長さ約167cm、幅約43cm、厚み約5cmの転用材を木杭に持たせ掛けるように置き、柄穴のある長さ約120cm、幅約35cm、厚み約6cmの木材を、先の木材に約25cmほど重ねるようにたてかける。両木材を合わせた長さ約2.7mであり、高さは南端で0.92m、北端で0.96m、中央で0.93mである。両端から土壌の肩までは粘土で構成されている。さらに、両木材のあわせてほぼ中央に、長さ88cm、幅26cm、厚み6cmの上端に剣込みのある木材を北端がわずかに重なるように置く。この3木材を補強するように、長さ180cm、形11cmの丸太材を北側よりに置いている。そして、丸太材の横、上に大型石材を、これも大型木材が機能をはたすための補強のように置かれている。他に、最初の大型木材の南端の下部を目塞ぐのような長さ55cm、幅10cmほど小型材を補足している。

きわめて煩雑な説明になったが、以上が約東半分の3層、6-1層、木杭、大型木材の構造や大型石材の関係であり、これが採鹹土壌の主要な大枠の構造である。

次に相部の構造であるが、図版二十に示す状態が採鹹土壌の当初の姿ではないかと捉えている。これと第14図をみると、3層上に、長さ2.7mの樫を大型木材と併行に置き、樫の両側に1m前後の柱目木材を併行に配置している。これと直交するかたちで小枝類が検出されている。規則性がみられる出土状態でないが、その間や樫の上にくらかの礫石も配置している。これらの機能はこの上に筵状のものあるいは簀の子をのせる施設ではないかと捉えている。そして、その上に鹹砂を積み上げ、海水をかけて、西側に鹹水を流出させるのではと考えられており、大型木材が斜めに設置されている関連もこのことと関係するであろう。

樫の高さは、北の先端で0.9m、南側の端で0.73mであり、その墳底左は17cmほどある。大型木材の上端の高さより、6から20cmほど低い位置である。この面から木根子(つちのこ)2点が出土している。

図版十五(下)・図版十六・図版十七(上)は、1層を除去した段階での採鹹土壌の最上面での木材等の出土状態である。鹹砂のとおりを良くするために使用したとみられる沼井かきと呼称している木製品はこの面からの出土である。この面においても、大型木材とほぼ併行に出土している柱目木材やそれと直交する枝類や小型の丸太材、礫石が認められる。この面は沼井かきなどの出土していることも含めてこの採鹹土壌が放棄される直前の状態ではないかと捉え

ている。この面及びこの面から出土している木材の高さは、大型木材の上端の高さとほぼ同じである。

主に砂層と礫石とで構成されていた採鹹土壌の西側の構造であるが、図版二十・図版二十一(上)で示している壕底に検出した木材の存在が大きな意味をもつかも知れない。この木材の検出した状況は、直交の状態で出土した二辺しか遺存していなかったが、本来、井桁状に組まれた施設と捉えた方がよいかも知れない。

東側の一辺の木材は柁目木材で、長さ約1.3mであり、礫石に挟まれたような状態で立てられていた。北側の一辺は、長さ0.8mほどが遺存していたのみであるが、その位置から東側の木材の内にくるような配置である。しかし、大型木材と併行していなく、この点はこのように捉える難点かもしれない。

西半分に検出した礫石の状態であるが、その南部分が確認調査のグリットにあたっており、その部分の状態が不明なところがあるがみていきたい。

大型の礫石は、井桁状の施設の周囲に検出されている状態とも捉えられる。詳しくみれば、西側の木材の上とその外側に大型の礫石が検出されているのと、その反対側、木材を検出していないが、大型の礫石が固まっているような出土状態である。後者は前述したように、大型木材の補強が主であったのであろう。北側は大型の礫石は検出されておらず、南側の状態は不明である。

想像を逞しくすれば、この井桁状の施設の中に桶あるいは大型土器を置き、東半分の構造から桶状の施設から流出してくる鹹水をここで一旦溜めておくのではないだろうかということである。そして、北側にある曲物土壌へ鹹水を運び込むため、北側に大型の礫石が置かれていないのは出入りの確保のためではないだろうか。大型の礫石や小型の礫石は桶あるいは大型土器を囲むため何段かは積まれていたものが崩れた状態を示したのであろうとみる事ができないかである。牽強付会の解釈であり、今後の類例を待って検討していくのがいいのであろうが、一応の調査したものの解釈とここに示しておきたい。

第1層は採鹹土壌が放棄されてから堆積した土層と捉えていることは前述のとおりである。この1層から須恵器の椀(第94図F41~F43)と土師器の釜(第74図F18・19)、瓦質の釜・鍋(第74図F20・21)が出土している。須恵器の椀の一点には墨書がみられる。これらの示す年代が採鹹土壌が放棄した時期を示しており、14世紀前半のことである。

### 3. 曲物土壌

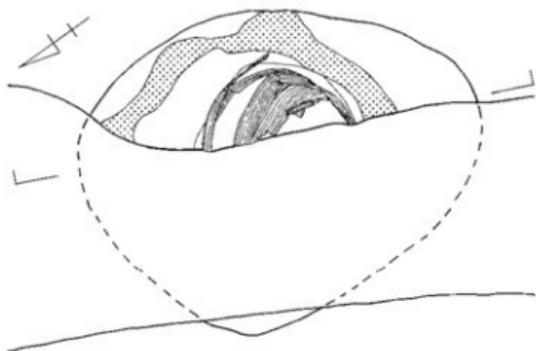
採鹹土壌の北約2mほど離れた位置から検出した。この位置は塩田の汀線側に形成された犬走り状平坦面の位置に極く近いところである。鹹水を釜屋に運ぶには便利な位置と言える。

曲物土壌の約半分が、現代の暗渠に壊されていた。

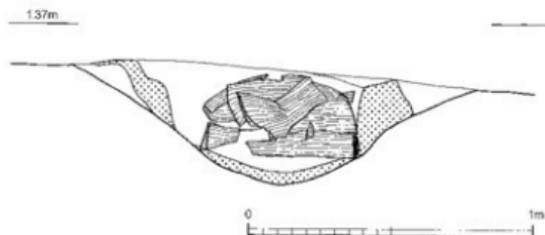
検出された曲物土壌の標高は、北側で1.12m、南側で1.13mであり、採鹹土壌と同じレベルであり、塩田地盤の南区8層上面から掘削されていたと捉えている。しかし、汀線側の埋立層も南区8層も基本的にその厚みが浅く、北側では基盤面から検出した状況である。

曲物土壌の掘り方は、楕円形に近い形状を呈し、長径144cm、短径115cm、深さ40cmである。墳底の標高は0.8mである。図版二十八(下)がその掘り方の形状であり、これを見ると曲物を設置する位置が一段深く掘られていることがわかる。

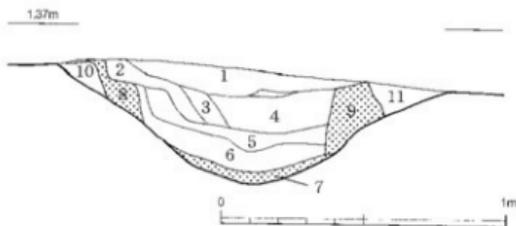
この土壌の肩部の壁を保護・補強する粘土は、掘り方より一回り内側に入ったところに張り付けている。この粘土は第20図の8層と9層の一部であり、採鹹土壌や防潮



第19図 曲物土壌実測図



第20図 曲物土壌の土層断面図



堀の粘土と同質のものである。図版二十八(上)が曲物を除去し、保護・補強の張り付けた検出状態のものである。北側がより重厚に張り付けられている。

次に、曲物を設置するのであるが、曲物と9層の黒色粘土の敷設の先後の関係は、ほぼ同時とみていいであろう。第20図の北側に9層が表示されていないが、これは分層のときの間違いで南側と対応する9層が敷設されていることが、巻首図版6のカラー図版から読み取れる。

曲物は径55cmで、検出した段階の高さは約30cmである。曲物の材は檜材とみられ、約20cm幅の材が三段で構成されている。設置時の高さは60cmを超えていたのであろう。検出時の曲物はやせ細り皮状になっていた。

曲物には底板はなく、底は粘土(6層)を張って構成している。

曲物と9層・6層の粘土は一連の作業として行われているとみてよいであろう。曲物の底の標高は0.9m、検出した上端の標高は1.2mである。鹹水溜めの遺構と捉えている。

#### 4. 集石遺構

集石遺構は塩田面の2ヶ所で検出した。集石遺構1と集石遺構2と称している。

集石遺構1はFⅡグリッドと中心に一部Ⅲグリッドにもおよんで検出され、集石遺構2はf4杭を扶んで、EⅢ・EⅣ・FⅢ・FⅣの各グリッドにまたがって検出した。両集石遺構は近接している遺構であり、塩田の西側に偏って作られている。その間隔は約2mである。

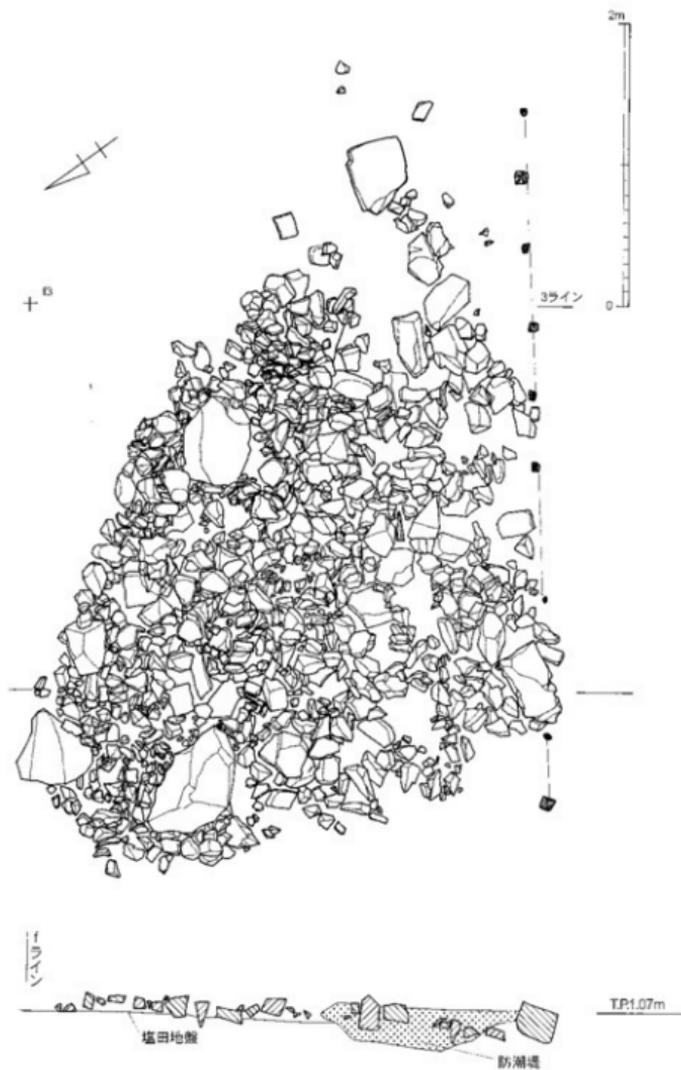
##### (1) 集石遺構1

集石遺構1は採鹹土塋と接して作られており、三角形形状を呈する形状の集石遺構1の最北端の大型の礫石は、採鹹土塋の上面から肩部にかけての保護・補強のための8層淡灰色粘土の層中に置かれており、集石遺構1と採鹹土塋は同時につくられ遺構である。

また、集石遺構1の南側の礫石は、第22図で示すように、防潮堤の木杭と接していたり、木杭の上に置かれたりして検出されている。このグリッドでは、防潮堤の粘土を把握できなかったのであるが、レベルからみて、防潮堤の粘土より先にこの集石遺構1は作られていることがわかる。



第21図 採鹹土塋と集石遺構1との関係断面図



第22図 集石遺構1実測図

これらの関係を表示したのが第21図である。防潮堤の粘土と塩田地盤は5ラインからの援用である。塩田地盤は南区8層上面を表示している。

塩田地盤の関係でいえば、8層上面に集石遺構1は作られている。また、集石遺構1の南側は防潮堤の粘土で覆われ隠れていることになる。

集石遺構1は不定形な形状であるが、強いて表現すれば、三角形の形状を呈しており、南を底辺とすれば、底辺約3.7m、高さ約4.5mの範囲に礫石を置いている。礫石は積み上げるといふ構造ではなく、基本として、礫石と礫石を接して丁寧に一石づつ敷きならべと置いているという状況である。

礫石の配置は要所要所に大型の礫石を配置し、その間およびその周りに小型の礫石を置いていったと言える状態で検出されている。当然といえば、当然であるが大型の礫石のほうが高く、小型の礫石の方が低い。礫石の高さをみれば、最も高い標高が1.35mであり、最も低い標高が0.94mであり、小型の礫石は1.0~1.1m前後が平均である。

## (2) 集石遺構2

集石遺構2は確認調査のグリッドで北側の欠けており、その状態が不明であるが、集石遺構1と形状は異なり、ほぼ方形に近い状態で礫石を配置してされている。一辺3.0mほどの範囲である。

集石遺構2の設置面は、集石遺構1より高い位置にあり、第23図の断面に示すように、塩田地盤の南6層上面に設置している。これは、概要の項で記しているように、塩田を操業している間に塩田地盤面が嵩上げされたことによるのであろう。集石遺構2が防潮堤の粘土より塩田側に検出していることもこのことを傍証している。

礫石の配置は集石遺構1よりも丁寧に欠けているとみえるが、要所要所に大型の礫石を配置し、その間やその周りに小型の礫石を配置するという手法は踏襲している。礫石は積み上げているのではなく、一石一石敷きならべているというのも同じである。

集石遺構2の礫石の高さをみれば、最も高い標高が1.46mであり、最も低い標高が1.19mであり、小型の礫石は1.2~1.3m前後が平均であろう。

集石遺構1は塩田の造成と同時に作られていることをみると、集石遺構は塩田には当初から必備な施設ということになる。集石遺構1の機能が喪失してから集石遺構2を作っているのはそのことを示しているのであろう。

この集石遺構の機能であるが、廣山発道先生は二つの推察をされている。一つは、「この塩田は地盤に満潮時に海水を汲みあげて冠潮させる形式ものと考えられるから、汲み込んだ水勢で塩田に穴が慥れないようにするため」のもの、二つめは、「鹹砂とともに乾燥藻も溶出に使

用したため葎の干場に使用されたのでは」というものである。この報告では前者の可能性が高いと推定している。

以上が、塩田の造成とそれに関連する遺構の説明である。工程としては、浜の掘削・成形と木杭の打設が1段階であり、2段階としては埋立てを行い、防潮堤の粘土の敷設と塩田地盤の設置が第3段階の工程であり、最後の工程として採鹹土壌や曲物土壌、集石遺構などの遺構の整備といえる。



第23図 集石遺構2実測図

## 5. 北区の遺構

北区の調査地の上層の遺構としては、貝塚1とピット群等が検出された。塩田の採業と同じ時期の遺構と捉えている。北区6層上面あるいは北区6層中に検出された遺構である。

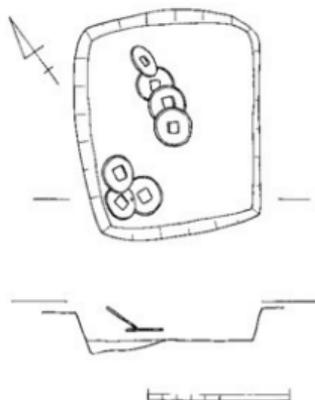
貝塚1は現代の暗渠によって一部壊され、東西に分割されている状況で検出された。その範囲はAⅠ・AⅡグリッドを中心にBⅠ・XⅠグリッドに広がっており、調査地外にも広がっている。東西9.8m、南北10mが最も長いところの数値である。貝塚1は地形と同じく、北から南に緩やかに傾斜しており、北側の高いところで標高3.0m、南側の低いところで標高2.7mを測る。厚さは10～20cm程である。多量の貝が出土したが、ハイガイ、ハマグリ、カキが主体で獣骨や魚骨も含まれていた。南北に5ヶ所、東西に3ヶ所で、50cm四方のサンプルを行ったが、十分な分析ができていない。

貝塚1の東方にピット群が検出され、その集中度から、AⅢ・AⅣグリッドを中心とする西群、AⅤグリッドを中心とする中央群、XⅦ・XⅨグリッドを中心とする東群に分かれると捉えられる。しかし、いずれの群も建物が建つような状態では並ばない。ピットはいずれも円形で、径は20～40cm前後である。付図3の一部には、柱痕跡を图示しているが錯誤の可能性が高く、基本的には、このピット群には明確な柱痕跡は認められる状態ではなかったと捉えるのがいいであろう。

XⅤグリッドで不整形の土壌を图示しているが、これもきわめて浅く遺構として捉えるには疑問がある。

西ピット群のピットが検出されない空白地に、古銭を13枚入れた古銭ピットと呼称している遺構を検出した。古銭ピットは整った長方形を呈し、長さ16cm、幅13cm、深さ2.4cmである。古銭はすべて表面を上に向けて出土した。このピットは古銭を木箱に入れて埋置した遺構と捉えている。古銭は唐銭が1枚のほかは北宋銭であった。

この古銭ピットの存在によって、これらのピット群を塩田作業を行うときの作業小屋的な遺構の性格をもつものではと考えた根拠になっている。



第24図 古銭ピット

## 第5節 中層の遺構（古墳時代後期の遺構）

調査地における北区の中層の遺構として、竈址7基と貝塚3ヶ所が検出された。調査当初は竈穴住居址内に設置された竈ではと考え精査したが、竈穴住居址は確認できず、かえって、竈の前方に貝塚が伴っている例が認められことが判明してきて、独立したソトクド的な竈址と捉えた。なお、規模・形態は竈穴住居址に伴う竈と際立った差はない。

竈址と貝塚はその位置関係から有機的な関連があると捉えている。すなわち、貝塚の3ヶ所はいずれも竈の焚口部の前方に確認され、竈4と貝塚2が、類竈7と貝塚3が、竈6と貝塚4が対応している。

7基の竈はその主軸は一樣ではなく、大きくみれば4つに分けられる。竈2・竈4・竈5・類竈7がほぼ南北方向で、焚口が南に開口する一群である。あとは一基ごとにその主軸が異なる。

中層の遺構としては、竈址と貝塚以外の遺構は確認されていない。

### 1. 竈1

AⅡグリッドで検出された竈で、その主軸はN4°Eであり、焚口は南側に開口している。なお、この下層に庄内式から布留式古相の包含層や土壇7が存在している。

竈1は先の包含層の暗茶褐色砂層上に、粘土と粘土混じりの土で築かれている。その形状は馬蹄形を呈し、その外側の最大幅72cm、最大長83cmである。焚口部の幅33cm、奥行き53cmを測り、残存高は最大値で25cmである。焚口は浅く窪んで焼けている。袖部の粘土幅20～23cmほどで、その内側はよく焼け赤く変色している。袖部の両側の上部に焼土塊が認められ、天井壁あるいは側壁が転落してきたものであろう。奥の中央部が少し窪んでおり、煙り出し部であろう。焼土塊の上や燃焼部に土師器の破片が出土している。支脚に相当するものは認められなかった。検出面の標高は2.59mである。

### 2. 竈2

竈2はBⅢグリッドで検出された。竈1より南6mほどの位置にあり、その高さは竈1より38cm低く、検出面の標高は2.21mである。竈の主軸はN42°Wで、焚口は南東側に開口している。

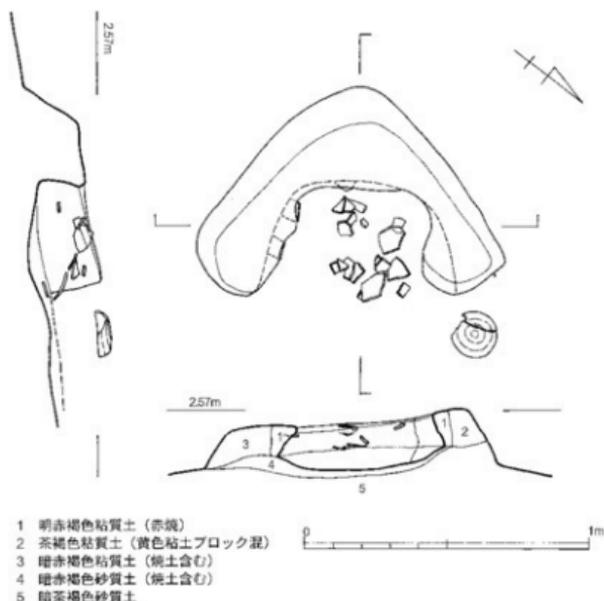
北区10層に対応する明黄色砂層上に、褐色粘質土を使用して築かれている。その形状は、

不整形な馬蹄形を呈し、その外側の最大幅9.5cm、最大長12.2cmである。焚口部の幅2.7cmで、その奥行き6.0cmを測り、残存高は最大値2.0cmである。焚口は浅く窪んでおり、焼けている。袖部の粘土幅3.0～3.4cmほどで、内側はよく焼けている。燃焼部には焼土塊の小片が多く認められた。奥の中央部が少し窪ませ、煙出しとしている。

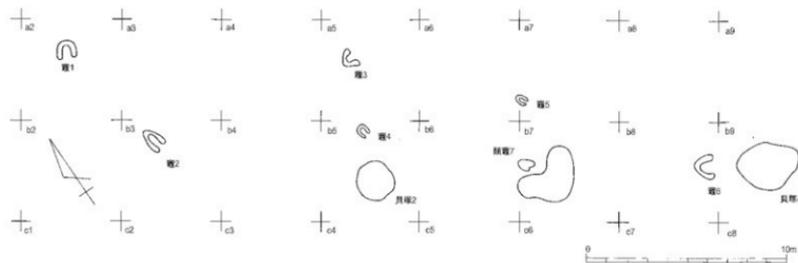
### 3. 竈3

竈3はAVグリッドで検出された。竈3は検出された竈の中では、唯一、山側に焚口が開いている竈であり、その主軸はN51°Eで、焚口は北東側に開いている。検出面の標高は2.58mで、検出された竈の中では一番高い位置に築かれている。

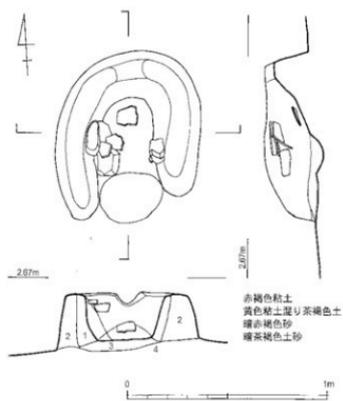
北区9層に対応する暗茶褐色砂層上に、褐色系の粘質土を使用して築かれている。その形状は、三角形を呈し、その外側の最大幅10.8cm、最大長7.4cmである。燃焼部や焚口の形状は他の竈と異なり方形で、袖部や奥部の竈の粘土は袋状に内側に入っている形状である。その結



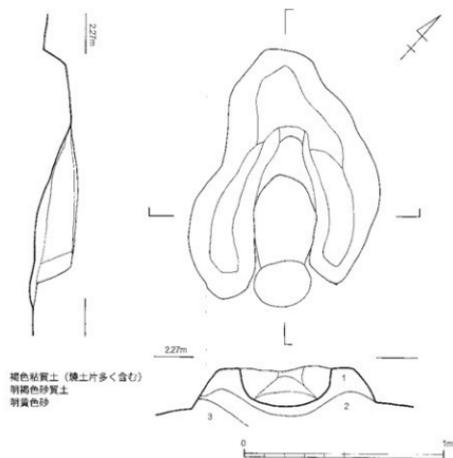
第25図 竈3実測図



第26図 竈と貝塚の配置図



第27図 竈1実測図



第28図 竈2実測図

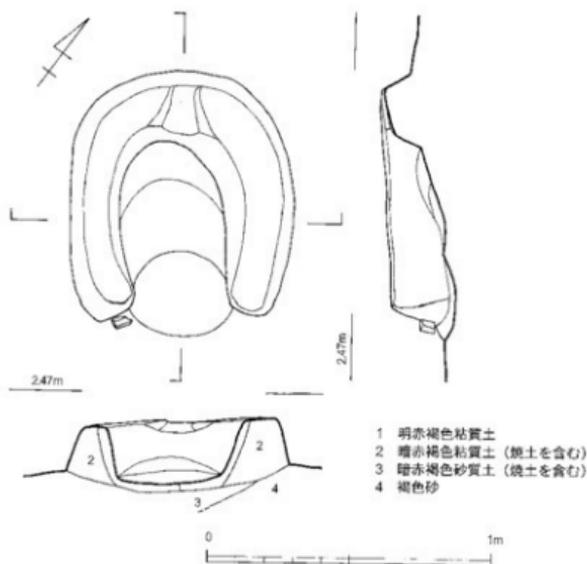
果、焚口は広くなっており、焚口部の幅約60cm、奥行き40cmを測り、残存高は最大値20cmである。袖部の幅は先端にいくに従いその幅を増し、約28cm前後であり、内側はよく焼けている。燃焼部には、焼土塊の小片が堆積しており、焚口より少し窪んでいる。

燃焼部内には、土師器高杯（第67図D1）や須恵器片が検出されており、竈の粘土中にも須恵器片を含んでいる。また、西側の袖部にほぼ接して、須恵器坏蓋（第78図D71）が出土した。土師器高杯の脚部内面にはスサ入り粘土が焼けて付着しており、支脚としていたのであろう。須恵器蓋はTK10型式であり、この竈の時期を示しているのであろう。

#### 4. 竈4と貝塚2

竈4と貝塚2はBⅦグリッドで検出された。貝塚2は竈の主軸より西に偏っているが、1m南側に検出されており、この竈と有機的な関連をもつ貝塚と捉えている。

竈3は北区10層に対応する褐色砂層上に、粘質土を使用して築かれている。検出面の標高は2.38mである。竈3の主軸はN35°Wで、焚口は南東側に開口している。



第29図 竈4実測図

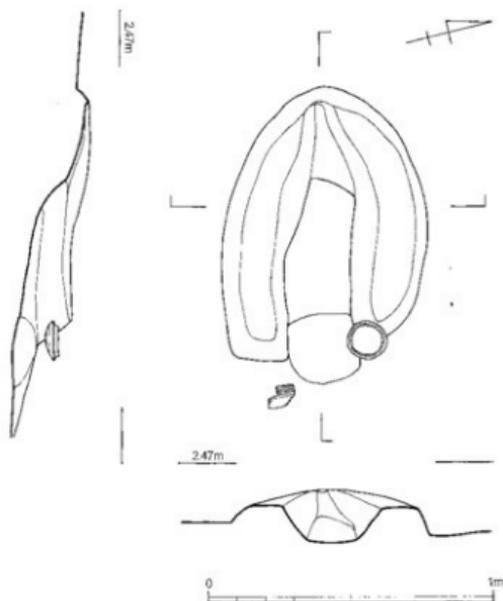
竈4の形状は馬蹄形を呈し、その外側の最大幅79cm、最大長88cmある。焚口部の幅33cm、奥行き67cmを測り、残存高は最大値16cmである。焚口は浅く窪んでおり、よく焼けている。袖部の内側もよく焼けて赤変している。奥部は竈1・2と同じく少し窪んでおり、煙り出しとしている。西側の袖部の先端に挟まるような状態で、TK209型式の須恵器环身(第80図D122)が出土しており、この竈の時期を示している。

貝塚2は円形を呈し、径2mの範囲に貝が堆積していた。貝はハイガイを中心にみられるが十分な分析は行えていない。

## 5. 竈5

竈5はAⅥグリッドとAⅦグリッドに跨って検出された。竈5の検出面の標高は2.39mである。竈の主軸はN77°Wで、焚口は東側に開口している。粘質土で築いている。

竈5の形状は馬蹄形を呈しており、その外側の最大幅72cm、最大長97cmである。焚口部



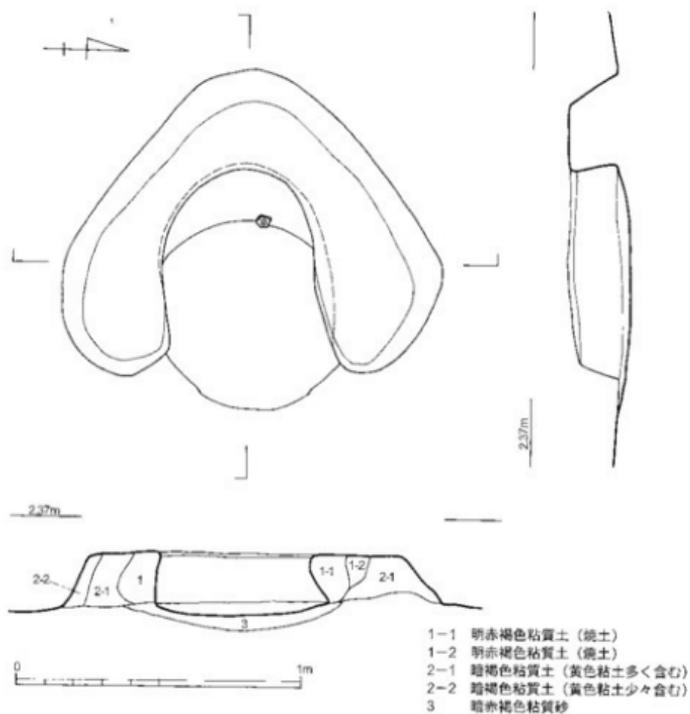
第30図 竈5実測図

の幅2.2cmで、その奥行き6.4cmを測り、残存高は最大値で1.7cmである。焚口は浅く窪んでおり焼けている。奥部の中央は少し窪ませ煙出しとしている。

北側の袖部先端からTK209型式の須恵器坏身(第80図D123)が検出されており、この竈の時期を示すものであろう。袖部の前方にも須恵器の蓋(第79図D108)が出土しているが、時期が異なりこの竈の時期は前者と時期と捉えておきたい。

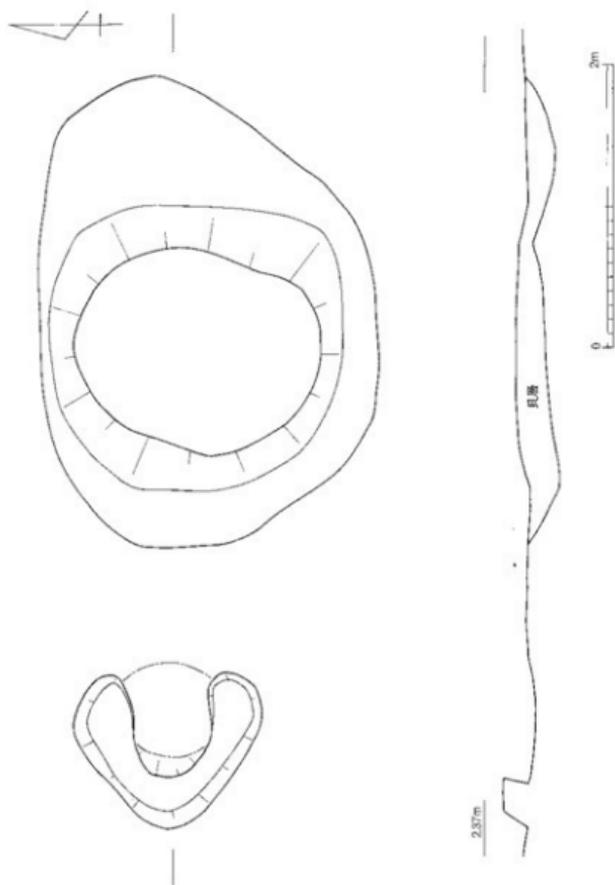
## 6. 竈6と貝塚4

竈6はBⅦグリッドで、貝塚4はBⅨグリッドで検出された遺構であるが、両者は近接しており、竈6の焚口部から0.4mの位置から貝塚4は形成されている。



第31図 竈6実測図

竈6の主軸はN91°Wで焚口は東側に開口しており、検出面の標高は2.24mである。北区10層に対応する砂層上に褐色系の粘質土を使用して築いており、その形状は竈3と同じく三角形を呈し、その外側の最大幅134cm、最大長109cmである。焚口部の幅62cmと広く、その奥行きは73cmを測り、残存高の最大値は20cmである。袖部の内側はよく焼けており、赤変している。また、燃焼部には焼土塊片が多く落ち込んでいた。



第32図 竈6と貝塚4の関係

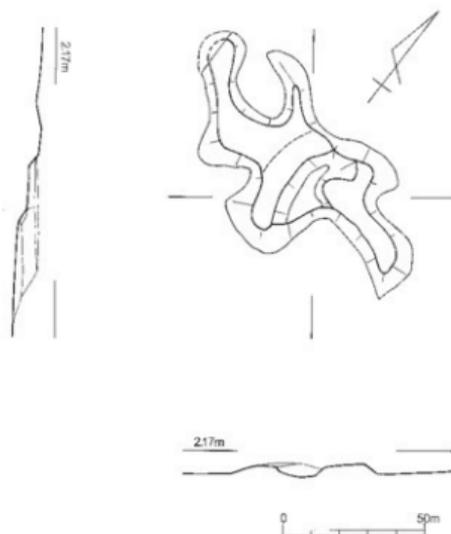
貝塚4は楕円形を呈し、長径166cm、短径120cmの範囲に拡がっており、厚さは5~12cmである。検出面の標高は2.27mである。貝塚の中には焼土も混じていた。

### 7. 類竈7と貝塚3

類竈としたのは不整形なかたちで焼土面が検出され、貝塚3が近接して検出されたからである。検出面の標高は2.12mである。

類竈7はヒトデのような形状をしており、中程に窪んだところが認められる以外は平坦な焼土面である。甕の壊れたものともみれなくはないが明確でない。規模は長いところで110cm、短いところで55cmである。

貝塚3は不整形なハート形状の形態を示し、330×180cmほどの範囲に、10~20cmほどの厚さで貝が堆積していた。貝塚3の検出面の標高は1.87mである。



第33図 類竈7実測図

## 第6節 下層の遺構

下層の遺構とは、弥生時代終末期から古墳時代前期前半の遺構のことである。この時代の土器は庄内式併行期から布留式古段階併行期であり、堂山遺跡からは、南区9層の埋立層や北区9層の包含層、土壌などから、かなり多量に出土している。しかし、遺構としては、土壌が検出されたのみである。

土壌は北区の調査地からのみ検出されており、それも西側半分から検出したのみである。貝土壌や土壌1～土壌4、土壌6は、比較的固い基盤の砂礫層から検出されているが、土壌5や土壌7は軟らかい砂層に掘られており、第34図で遺構の配置を図示しているが、この図が規模を表しているわけではない。また、土壌1や土壌3は径30cmほどのもので土壌と呼称する躊躇を覚えざるを得ないが、発掘調査中の呼称に従った。

### 1. 貝土壌

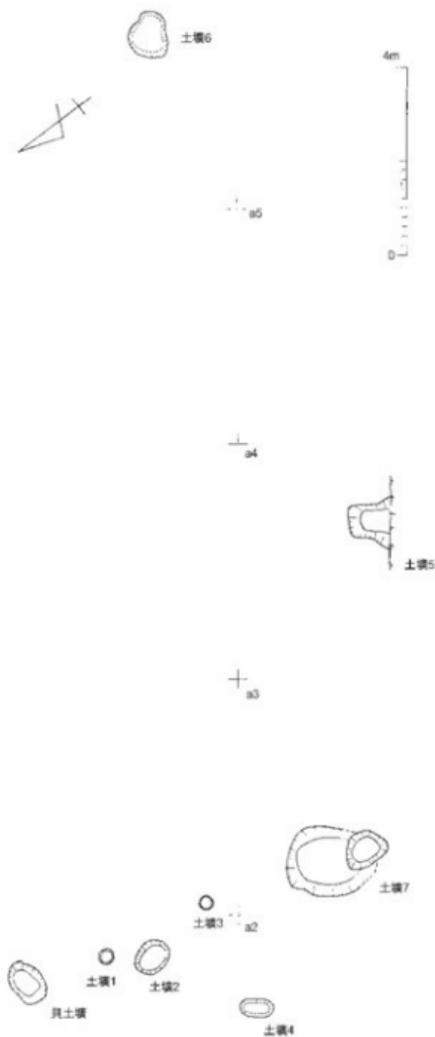
貝土壌は墳底に貝が認められ、調査時からこのように呼称していたので、そのまま採用している。

貝土壌はX Iグリッドで検出した。一番北側に検出された土壌で、検出面の標高は2.97mである。その平面の形状は楕円形を呈し、長径96cm、短径66cmを測り、深さは34cmである。断面は肩部から緩やかにカーブを描き墳底に達し、浅い椀状の形態を呈している。

貝は墳底に接して検出され、その範囲は墳底の西側半分の30×35cmほどである。貝はハマグリやツメタガイ・アラレガイなどが出土した。土器は4層の淡黒褐色砂質土層から出土しており、時期は庄内式（新相）併行期の弥生時代終末期である。

### 2. 土壌6

土壌6はXVグリッドで検出した。土壌の中では最も東側に位置し、検出面も最も高く、標高は3.03mである。その平面の形状は、不整形な楕円形を呈し、長径100cm、短径80cmであり、深さは検出面よりはきわめて浅く5cm前後を測るにすぎない。墳底に接して礫石や土器片が出土している。礫石や土器が土壌の上部にはみでるものもみられ、土壌の深さはもう少し深かったのであろう。土器の所属時期は庄内式（新相）併行期であり、時代は弥生時代終末期である。

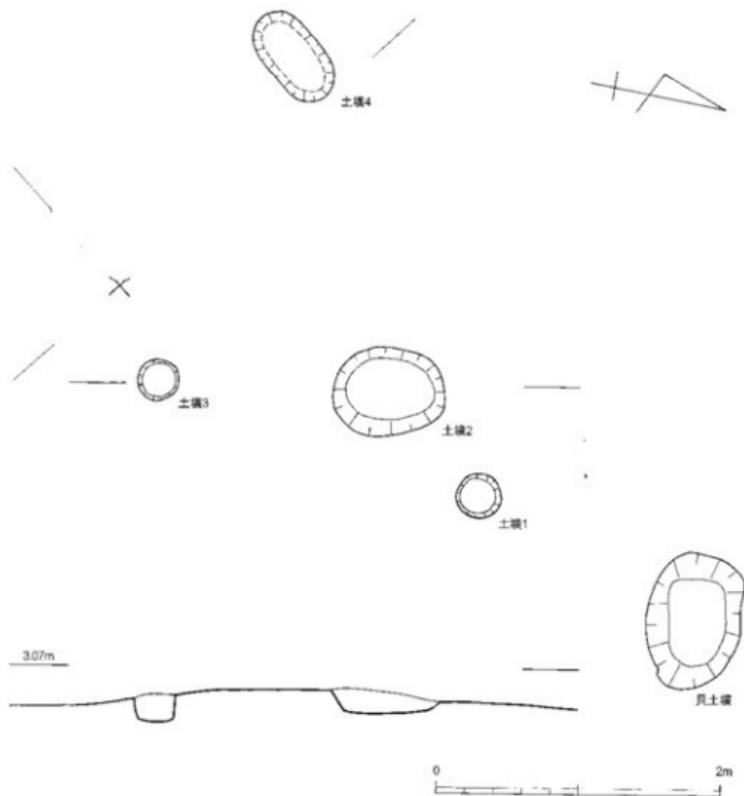


第34図 下層における土壌の配置①

### 3. 土壇5

土壇5はAⅢグリッドで検出した。第31図で図示した土壇5は土壇の下半部の状態を表しているとみられ、これより上部に黄色砂層と黒褐色砂層が波状線をしていた層が互層になってかなり大規模に認められ、そこから庄内式併行期の多くの土器や製塩土器が出土している。軟弱な砂層に掘られ、波の影響を受ける汀線近くにつくられた遺構である。

第31図の高い方の標高は2.11mを測る。土壇内の堆積土は黒褐色砂質土である。

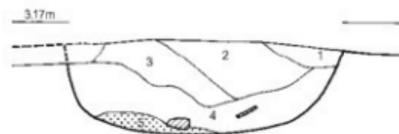
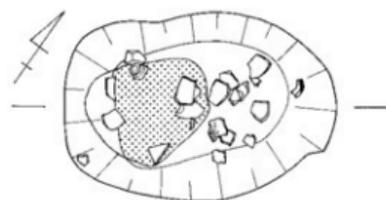


第35図 下層における土壇の配置②

#### 4. 土壌 7

第34図に土壌7の北側に図示しているものは調査時には大土壌と呼んで遺構とみていたが、その後地形の起伏に堆積した包含層と捉えて遺構名を付していない。

土壌7はAⅡグリッドで検出され、その形状は不整形な楕円形を呈し、長径96cm、74cmを測り、深さは約30cmである。坑内の堆積土は黒褐色砂で、土器の細片が出土したのみである。



- |         |          |
|---------|----------|
| 1 暗褐色砂  | 4 黒褐色粘質砂 |
| 2 黒褐色砂  | 5 貝層     |
| 3 淡黒褐色砂 |          |
- 0 50m

第36図 貝土壌実測図

#### 5. 他の土壌

土壌2はXⅠグリッドで検出し、その形状は楕円形を呈し、長径78cm、短径63cmで、深さは17cmほどである。

土壌4はAⅠグリッドで検出され、その形状は楕円形を呈し、長径71cm、短径38cmを測る浅い土壌である。

土壌1と土壌3は、土壌と呼ぶより、ピットと呼んだ方がよい遺構である。

土壌1はXⅠグリッドで検出し、径32cmの円形を呈している。

土壌3はXⅡグリッドで検出し、径30cmの円形を呈し、深さ20cmほどである。

土壌1と土壌2は心点距離で2.4mを測る。



第37図 土壌6実測図

## 第4章 調査の記録・遺物

### 第1節 縄文土器

本遺跡の縄文土器（第38図～47図）は遺構から出土したものはない。縄文土器がほぼ純粋な状態で出土した土層は、南区の第10・11層および北区第10・11層である。しかし、それらは土器型式が混乱して包含されており、層位的に把握できる状態では出土しなかった。縄文土器の出土数は多いが、図示できたものは出土総数の約3分の1にすぎない。それらは殆どが細片となっており、ほぼ全形を窺えるものは2、3点のみである。したがって前期・中期・後期・晩期の4時期を念頭にし、成形・施文方法・文様構成を中心としてA～Oの15類に分類した。またそれらのうち細分可能なものについてはさらに分類を行った。土器の多くは砂礫層から出土しているため表面が磨滅しており、文様・調整痕の細部については不明確な部分が多いことをあらかじめ断っておきたい。

北区で第10・11層を発掘した地区はX～BのⅠ～Ⅲの各グリッドおよびX～BのⅣ各グリッドで、南区では第10・11層まで発掘したのはE・FのⅣの各グリッドおよびC～FのⅣの各グリッドである。

層別別出土量は北区では攪乱部17点、第3層2点、第6層6点、第7層7点、第8層1点、第9層8点、第10層16点、第11層9点である。南区では第9層5点、第10層8点、第11層68点であり、南区第11層が約46%を占める。

時期別によるその数量を見ると、前期2点、中期23点、後期117点、晩期5点で、圧倒的に後期の土器出土量が多く、全体に占める割合は約80%である。

また、それらの土器を時期別に出土層位をみると、前期では北区と南区の第11層より出土し、中期の土器は北区の攪乱を除けばその殆どが北・南区第11層から出土している。後期の土器については包含層全体から出土しているが、特に南区第11層に集中しており、後期土器全体の51%を占める。晩期土器は南区第9層から出土しているが、他からの混入と考えられる。

#### (1) A類 (A1)

前期に属する深鉢の破片である。竹管状の原体を器面に直角に押し引きし、爪形を連続させている。この文様が間隔をおいて2条認められる。瀬戸内地方では羽島下層式併行、近畿地方では北白川下層Ⅱ式に併行するものである。

#### (2) B類 (A2)

A類同様前期に属するものである。口縁端面に貝殻腹縁で押圧文を施すもので、内面には爪

形文が認められる。この特徴を示す土器は瀬戸内地方では里木Ⅱ式ないし井田式、近畿地方では大歳山式に認められ、これと併行関係にあるものと考えられる。

### (3) C類 (A3~A5)

土器外面に地文として単節縄文を持つものである。地文の上に断面三角形の突帯を貼り付け、半載竹管工具で爪形の刻み目を連続させている。突帯は直線的なもの(A4)と曲線を描くもの(A5)がある。瀬戸内地方で中期前半に編年される船元Ⅱ式に相当するものと考えられる。

### (4) D類 (A6~A11)

縦方向に施した燃糸を地文とし、竹管原体で直線文・弧状文・波状文を描いている。8の口縁部直下の波状文は半載竹管の上下を交互に反転させて描いており、口縁部内面には燃糸文が施されている。器壁は薄手のもの(A7・A8)と厚手のもの(A6・A9)とがある。内面はナデ仕上げとなっている。A10は縦位の縄文をつけており、やや厚手のつくりをしている。A11は貝殻による条痕文をもつ粗製の土器で、口縁部に粘土紐を平たく貼り付ける。これらはいずれも里木Ⅱ式ないし里木Ⅲ式に含まれるものと思われるが、A10はやや時期の遡る船元Ⅲ式に編年されるかも知れない。また、A11の土器は里木Ⅲ式に含まれるものと推定される。

### (5) E類 (A12~A14)

口縁部外面に2.5cm程度の幅の広い粘土紐を平たく貼り付けた土器群である。A12は肥厚部下端に半載竹管刺突文を斜方向に、口縁部にV字形の刻目を施した土器である。兵庫県神戸市篠原A遺跡住居跡出土土器に酷似する。A13・A14は胎土・色調・技法とも同じであり、同一個体と考えられる。口縁肥厚部外面に半載竹管を原体として二度引き、計4条の直線文を施す。体部にも同一手法で縦横に沈線を引く。地文は原体不明の条痕を施しているが、あるいは半載竹管によるものかもしれない。内面は巻貝による条痕文を残す。これらの土器の形式名および併行関係は不明であるが、中期末頃のものであろう。

### (6) F類 (A15~A21・A20~21)

口縁下に沈線および沈線内に刺突文を施す土器群をF類とした。A15のみは口縁上端面に燃糸文を持ち、半載竹管で押し引き手法により文様を描く。時期が遡る可能性をもつ。A16はヘラ状工具により刻目に近い刺突文を施す。A17・A18・A20は同一個体と思われ、沈線を数条引いたのち1条おきに刺突文を加えている。口縁部の破片のみで、体部は不明である。内外面とも条痕文を地文とする。A19は沈線を引いたのち器面に直角に刺突したもので

ある。内外面とも条痕仕上げとしている。A21は小片のため傾きが不明確であるが、恐らく内傾するものと思われる。沈線内の刺突はすべての沈線において行っている。これらの土器群については不明な部分が多く、中期末ないし後期初頭の一群であると思われるが、併行関係については不明確である。しかし、平式土器との併行関係にある可能性が高い。

#### (7) G類 (A22~A25)

中期末ないし後期初頭に属すると思われる、どの類型にも属さない土器群を一括してG類とした。A22・A23は厚手の波状口縁の波頂部である。A22は縄文地に突帯および沈線で区画文を施す。A23は無地文に同心円文を描く。体部の破片(A24・A25)は条痕地に弧状文を描くものである。併行関係については不詳であるが、A22については関東地方加曾利EIV<sup>(8)</sup>式の影響を受けたものと思われる。

#### (8) H類 (A26)

H類はこの1点のみである。細かい縄文を施したのち太い沈線を縦方向に引き、沈線間の縄文を磨消するものである。破片左端の沈線内には器面に直角にあてた竹管刺突文を加えている。これらの示す特徴は中津式の要素を備えており、これに含まれると考えてよいであろう。

#### (9) I類 (A27~A39)

基本的には磨消縄文を施す土器群である。波状口縁(A27・A28)と水平口縁(A29~A33)が認められ、土器面の縄文はLRのもの(A28・A29・A31)とRLのもの(A30・A36~A38)がある。口縁部の破片では沈線で描かれた区画内を磨消するもの(A28・A30)と口縁端部付近を磨消するもの(A29・A31)とがある。文様では円文ないし弧文と直線が認められる。35は沈線間に竹管文を器面と斜方向に刺突している。また、36は沈線が太く、磨消も施さず他の土器とはやや異なっており、この土器群のなかでは時期が遡ると考えられるものである。これらI類の土器群は沈線による直線文・三角文・菱形文・同心円文および磨消縄文手法の点で後期に編年されるものである。

さらに細かくみれば、瀬戸内地方の福田KⅡ式<sup>(4)</sup>、近畿地方では北白川上層1式ないし2式<sup>(10)</sup>と併行関係にあるものと思われる。

#### (10) J類 (A40~A79)

縹帯文系の土器群をJ類として一括した。本遺跡の縄文土器中最も出土数の多いものである。この土器群の技法・文様の特徴によりさらに1~10の類型に分離した。まず口縁部では、外面を肥厚させ、端部に縄文を施し、さらに沈線文を加えるもの(A41・A43・A44)があ

る。また、内面を肥厚させ、肥厚部に1~2条の沈線を描くもの(A42・A45~A48)、同様に内面に縁帯を施すが、無文のもの(A49~A51)もある。A52~A56は口縁端部を若干肥厚させて外面に縄文を施すものである。A59は口縁よりやや下がった位置に突帯を有する。以上述べた土器群をJ2~J5類とする。また、J7類は口縁端内面に口縁にそって1条の沈線を引くもの(A67~A69)で、縄文を施すもの(A67)もある。次に体部であるが、沈線で直線文・三角文を描き、磨消縄文を行うものがある。A40の1点のみである。J9類は段の手法により縄文を消すものであり、A72~A76が相当する。そして段の代わりに沈線を施し、研磨部分と縄文部分を区別するもの(A77~A79)をJ10類とする。また縄文以外に縦方向の条線を引くもの(A70・A71)もある(J8類)。次に粗製の一群であるが、縄文・沈線等を施さない一群をJ6類として分類する器種には深鉢・浅鉢があるが、総じて条痕を残している。これらJ類はそれらの示す特徴より瀬戸内地方の彦崎KⅠ式からKⅡ式に相当すると思われ、J5類は彦崎KⅡ式と同一と考えられる。しかし、明確な分離はできない。近畿地方の編年では北白川上層2式から3式と併行関係にあると考えられる。

#### (11) K類 (A80~A92)

器表には縄文を示すが、施文部分上端の縄文が末端を絡げた縄文や結節縄文となっており、また、沈線で6字文を描く特徴のある土器群である。口縁部では縄文の上に沈線を施すもの(A80~A83)とそうでないもの(A84・A85)がある。総じて内湾する口縁部である。体部でも縄文のみもの(A86~A88)と沈線等を描くもの(A89~A92)がある。沈線を引くものについては縄文磨消手法を使用している。これらの土器群の示す特徴は近畿地方後期後半の一乗寺K式の特徴をよく示しており、これに相当すると思われる。瀬戸内地方では彦崎Ⅱ式に併行すると考えられる。

#### (12) L類 (A93~A107)

L類は器表に疑似縄文を施したり、細い沈線を狭い間隔で施し、磨消を行うことを特徴とする土器群である。口縁部は、く字形に屈曲し内傾するもの(A93~A95)とやや内湾するもの(A96~A101)とがある。疑似縄文では、巻貝を転がして付けるもの(A93)と二枚貝の腹縁を押圧するもの(A100・A104・A105)がある。また100は沈線により孤状文を描く。これら一群の土器は近畿地方の元住吉山Ⅰ式併行、瀬戸内地方では竹原式あるいは彦崎KⅡ式併行と考えられる。

#### (13) M類 (A108~A119)

精製土器では内外面に太状の沈線文ないし凹線文を施すものである。器形には深鉢・浅鉢が

ある。沈線・凹線は口縁端外面および口縁部下半に施す。また、口縁端直下の内面に施すもの(A108・A110)もある。A116は粗製の浅鉢で、内外面に二枚貝条痕を螺旋状に施す。A117～A119は粗製の深鉢で、内外面ともに巻貝条痕を施したのちにナデを加えている。これらの土器の示す特徴は近畿地方宮滝式に類似する。

#### (14) N類 (A120～A124)

晩期の土器を一括してN類とした。A120はM類より沈線が細く、胎土が異なり、他の晩期土器と類似している。晩期初頭頃と思われる、瀬戸内地方近隣では広江・浜遺跡<sup>(12)</sup>で出土例がある。近畿地方では滋賀里1式<sup>(14)</sup>と併行すると思われる。121は刺突文を施した土器で、A122は縦方向の条線を施した土器である。A123・A124は口縁部端直下に貼付突帯を有し、A124はさらに刻目を加えている。晩期後半の突帯文である。

#### (15) O類 (A125～A140)

後期に属すると考えられる粗製土器群である。A125・A132は内外面ともに二枚貝を施しており、中期末に遡るものかも知れない。A126～A131・A133～A140は内外面ともに巻貝による条痕を器面調整としている。A126の口縁端部端面はやや凹むように面をもち、四角いものはA127～A129・A131・A138であり、先端がやや尖るものとしてA134・A137・A139・A140がある。他は丸く収めている。A138は端面に斜方向に押圧文を連続させている。

#### (16) P類 (図A141～A147)

本遺跡出土縄文土器底部を一括した。A141～A144は上げ底となっており、A144～A147は平底である。A141～A143はM類の底部の可能性が高い。A144は輪台の上に平底を乗せた状態である。すべて後期と考えてよいであろう。本遺跡出土縄文土器は、11層まで発掘し得た面積が約550㎡であるにもかかわらず、多数出土した。これらは遺跡に伴うものではなく、砂礫層に含まれていたもので、ローリングを受けているものが大多数であったが、付近に縄文集落が存在していた可能性は非常に高いものと思われる。また、昭和54年に遺跡の東隣が調査された際にも縄文土器が多数出土しており、また、この際出土した土器は大きな破片のものが出土しており、集落本体は東側の山麓ないし東北の谷部に存在したものと考えられる。

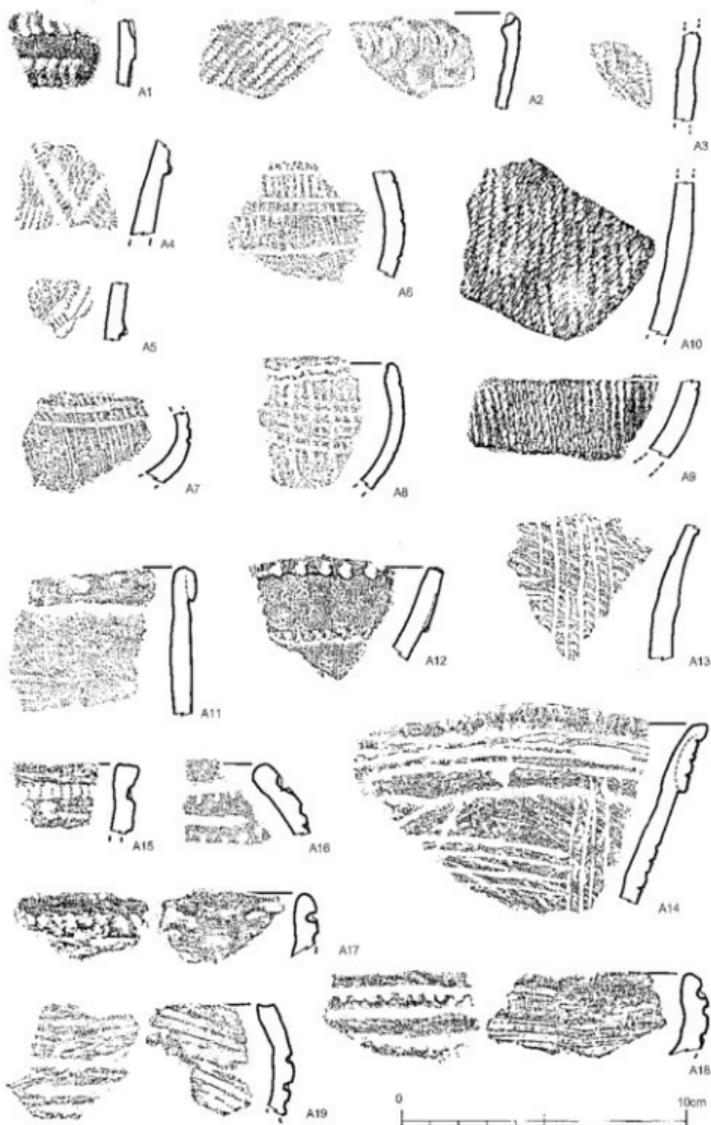
本遺跡出土土器には先述のように層的に検出されたものでないため形式的な分類によって記述せざるを得なかったが、時期的に前期から晩期まで揃っており、縄文土器出土例の少ない赤穂市周辺では多数発見の意義は大きいと思われる。また、一乗寺K式の特徴を示す一群が認

められたことは、瀬戸内地域で類例が少ないこの型式の把握に一石を投じたものである。これまで瀬戸内地域ではこのタイプの文様の出土例は少なく、近畿地方との併行関係も不明であったが、本遺跡で彦崎KⅡ式と併行ないしやや後出の可能性が指摘できた。また、その後続く元住吉山式の特徴をそなえる一群も抽出でき、その存在が明確となった。したがって後期後半には近畿地方と同一の特徴をそなえた土器が瀬戸内東端でも存在したことが指摘できる。今後はこれら近畿・円の土器と在地系土器との分離が課題となるであろう。また、F類とした縄文をもたず、沈線・刺突文を施す土器群については付近での出土例がほとんどないものであるが、型式設定が可能なのではあるまいか。今後の類例ををまてさらに検討を加えたい。

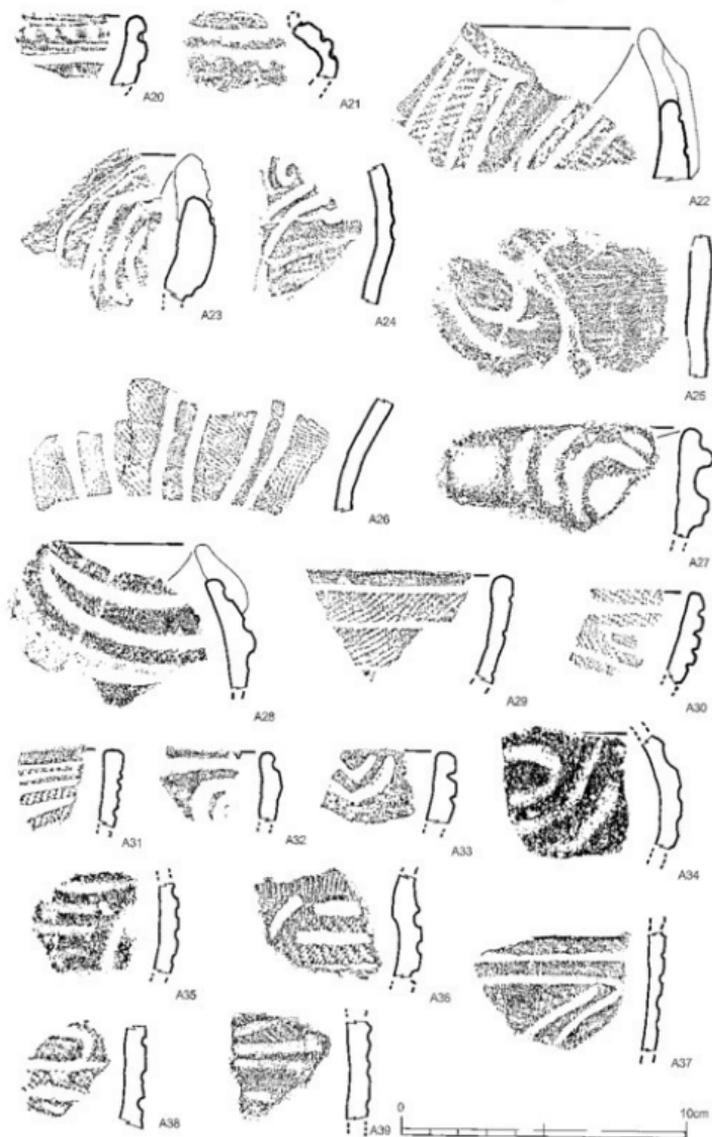
なお、末筆ながら縄文土器の観察にあたっては、間壁忠彦・岡崎正雄・丹治康明・山口卓也の各氏の御教示を得た。

(註)

- (1) 藤田憲司・間壁霞子・間壁忠彦「羽島貝塚の資料」(『倉敷考古館研究集報』第11) 1975年
- (2) 岡田茂弘「縄文文化の発展と地域性7近畿」(『日本の考古学』Ⅱ縄文時代) 河出書房新社、1965年
- (3) 間壁忠彦・間壁霞子「里木貝塚」(『倉敷考古館研究集報』第7号) 1971年
- (4) 鎌木義昌・高橋 護「縄文文化の発展と地域性9瀬戸内」(『日本の考古学』Ⅱ縄文時代) 河出書房新社 1965年
- (5) 直良信夫「大歳山遺跡」(『近畿古文化叢考』) 1943年。
- (6) 南博史「縄文時代中期・後期の遺構と遺物」(『橿原A遺跡』) 古代学協会、1984年
- (7) 野田 直「平遺跡調査概要」(帝塚山大学考古学研究室) 1966年
- (8) 戸沢充則「中期および後期初頭の土器」(『加曾利南貝塚』) 中央公論美術出版 1976年
- (9) 松崎寿和・間壁忠彦「縄文後期文化 西日本」(『新版考古学講座』3先史文化) 雄山閣 1969年
- (10) 泉 拓良「近畿地方の土器」(『縄文文化の研究』4縄文土器Ⅱ) 雄山閣 1981年
- (11) 間壁忠彦氏の御教示による。
- (12) 間壁忠彦・間壁霞子・藤田憲司・小野一臣「広江・浜遺跡」(『倉敷考古館研究集報』第14号) 1979年
- (13) 末永雅雄「宮滝の遺跡」(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査会報告』第15冊) 1944年
- (14) 丹羽佑一・高谷美由紀「遺物の検討—土器」(『湖西線関係遺跡発掘調査報告』) 1973年



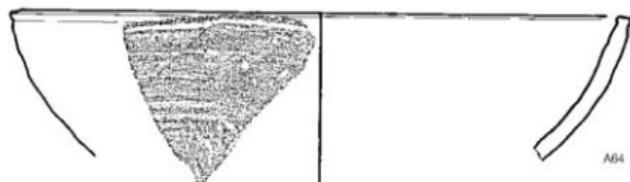
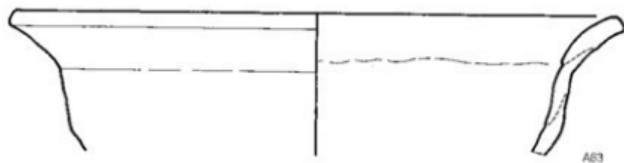
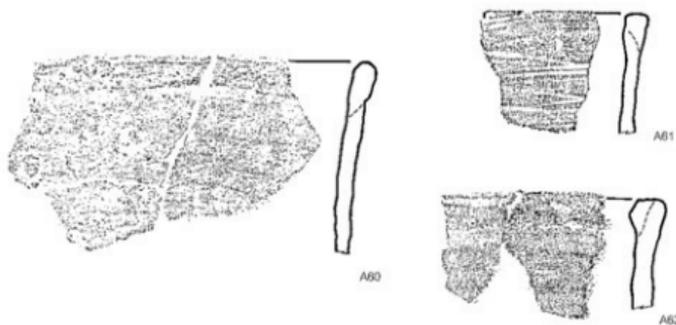
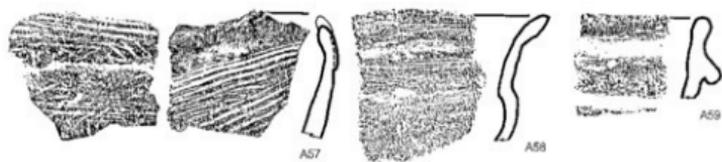
第38図 縄文土器①



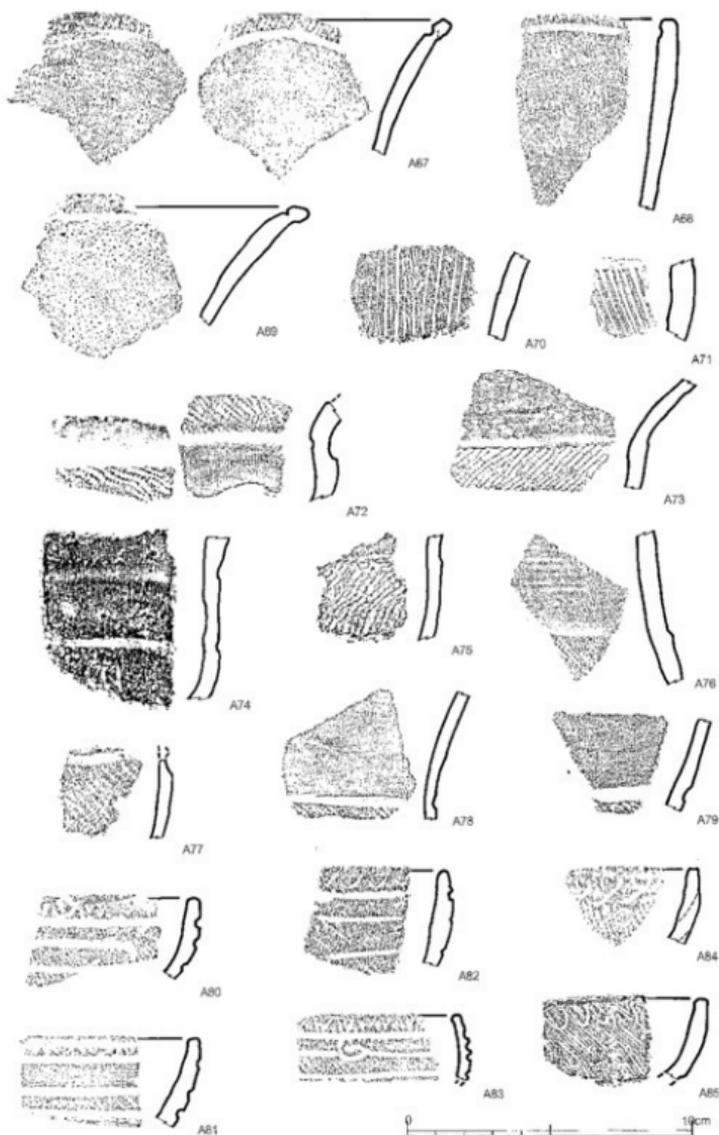
第39圖 縄文土器②



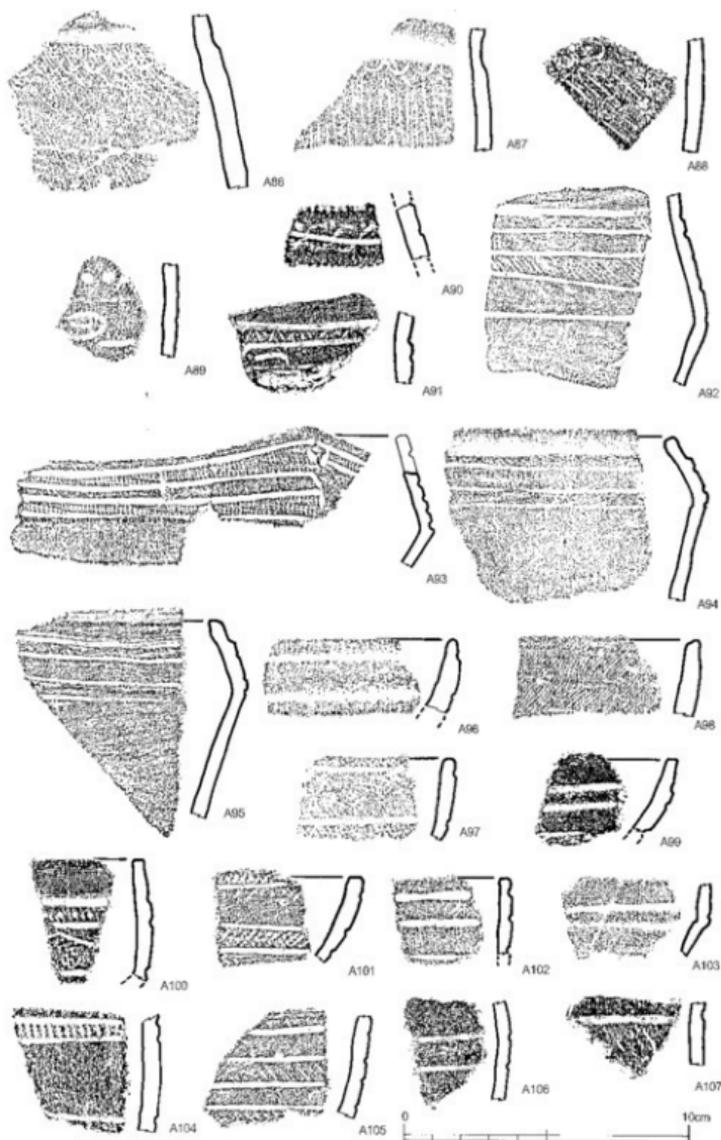
第40図 縄文土器③



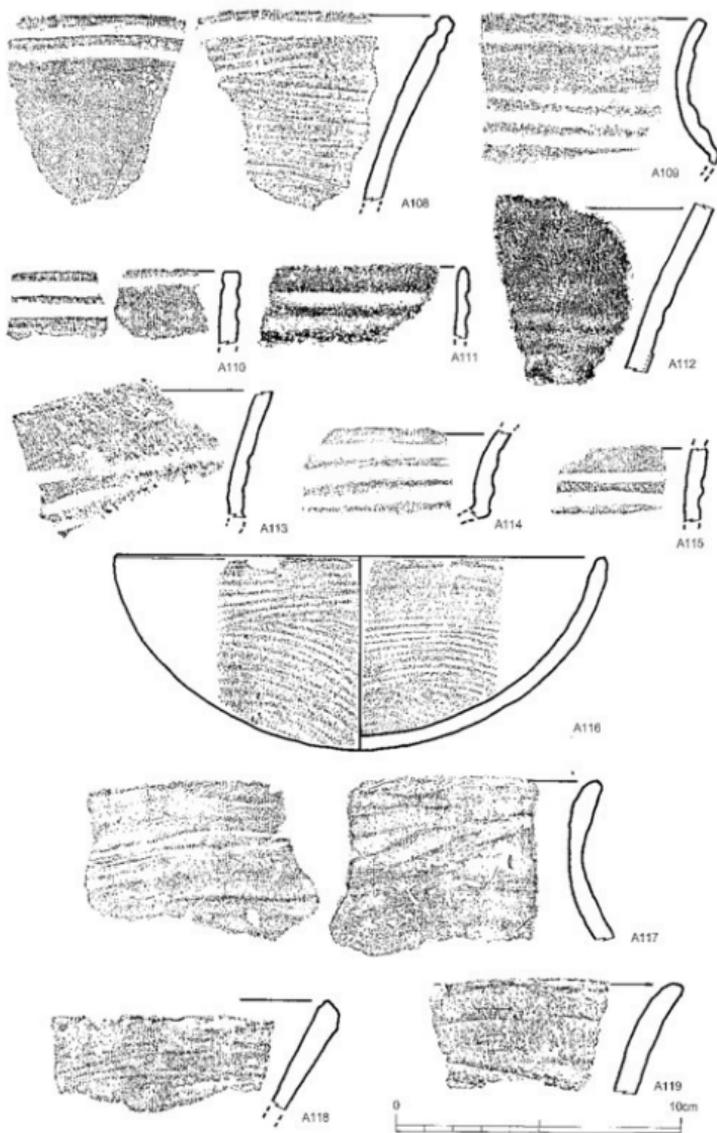
第41圖 縄文土器④



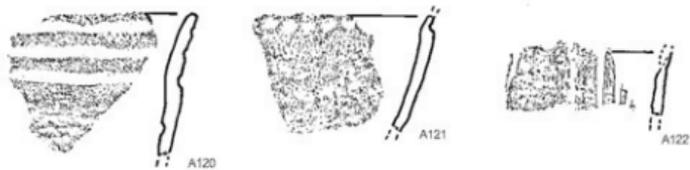
第42圖 縄文土器⑤



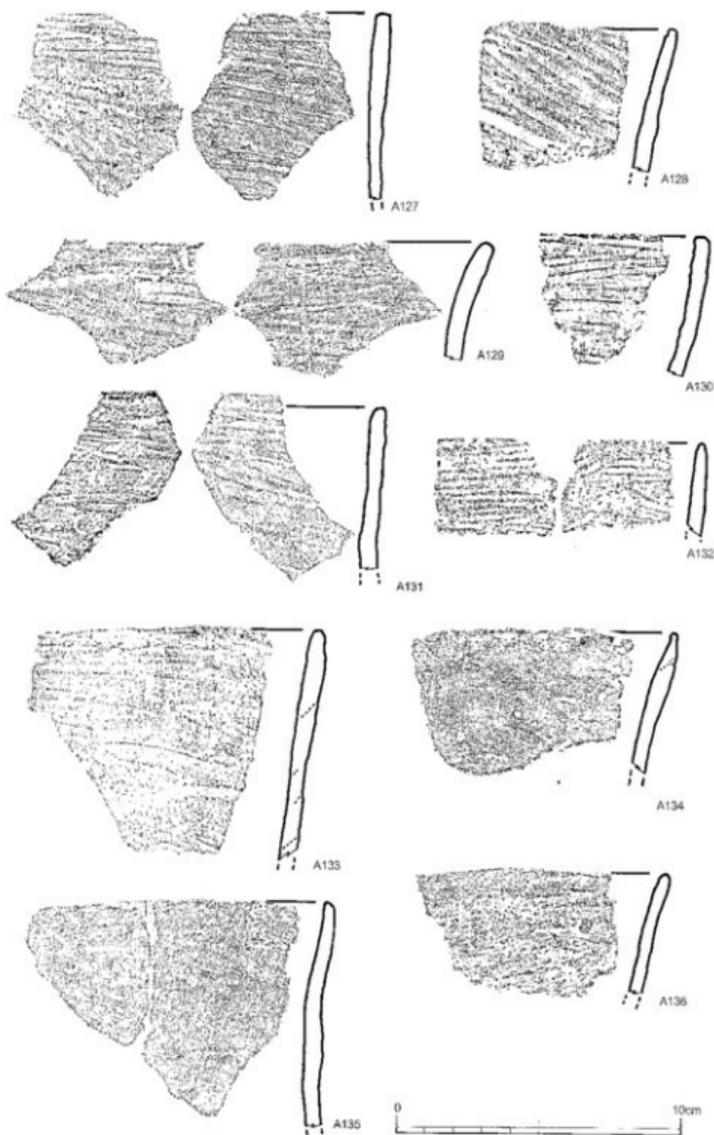
第43図 縄文土器⑥



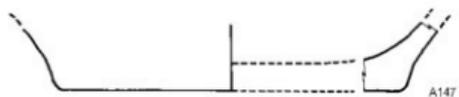
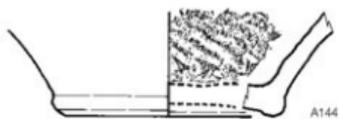
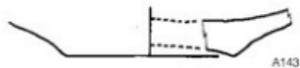
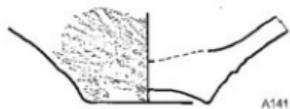
第44図 縄文土器⑦



第45図 縄文土器⑧



第46図 縄文土器⑨



第47圖 縄文土器⑩

## 第2節 弥生土器・古式土師器・土師器

### 1. 弥生土器 (第48・49図)

第49図のB1～B18は、南区9層埋立層、B19～B28は北区包含層出土の弥生中期の土器である。本遺跡出土の弥生中期の土器はすべて包含層、塩田埋立層から検出されたもので、当該時期の遺構は確認できず、遺物量も多くはない。

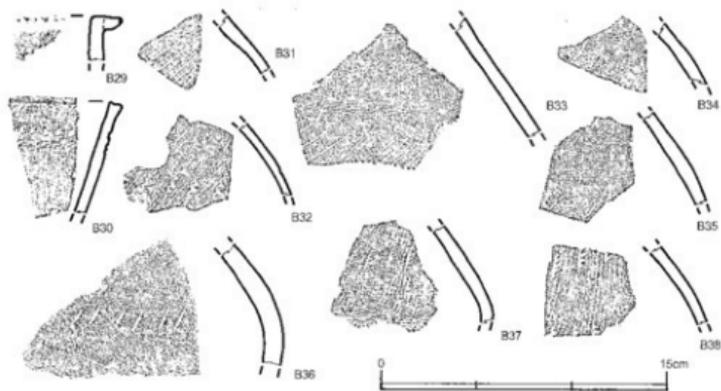
#### (1) 南区9層出土遺物 (B1～B18)

南区9層とは塩田造成時の埋立層であり、少量の縄文土器とそれ以後、塩田が造成された11世紀後半代までの多量の遺物を包含する層である。図示したものは、そこから抽出した弥生土器である。尚、底部以外はいずれも小片であり、法量は正確とは言い難い。

今回の調査では、南区9層で第1様式新段階の逆「L」字状口縁裏の細片が1点検出されている。色調は黄灰色を呈し、0.3～3.0mmの主に石英を多く含む粗い胎土を使用する。口縁端部には刻み目文を巡らせており、調整は不明。以前の調査でも前期の土器は検出されており、いずれも新段階に属する資料である。

壺は広口壺(B1～B4)と短頸壺(B5～B7)の2種類がある。B1・B2は口縁部内面が端部より突出し、端部が上方に立ち上がる。B1は端部上端に刻み目文、B2は端面にクシ状工具による刺突文様を巡らせる。B3・B4は外反してのびる頸部から斜下方に開く口縁部を有す。B4は孔の内側にさらに1条の貼り付け突帯を有すると思われる。

短頸壺は若干外反気味にのびる口頸部に貼り付け突帯を有するもの(B5・B7)と、凹線



第48図 弥生土器①

文を有するもの(B6)がある。B7は端部に3条単位の工具で山形文を描いたあと、円形浮文を巡らせる。

裏は口縁端部を上下に拡張し2条の凹線文を巡らすもの(B9)と、丸くまとめるもの(B8)がある。B8は中期初頭の可能性がある。

底部は薄い平底を主体とし、調整の判明するものは外面が縦方向のヘラミガキ、内面はナデ(B14)、板ナデ(B11・B13・B15~B18)、ヘラケズリ(B15)を施しており、いずれも中期に属する。

## (2) その他の弥生土器(B19~B28)

南区1~8層、B区包含層から出土した多量の遺物の中から抽出したものである。

B19は口縁部内面が端部より突出し、2条の断面三角形の貼り付け突帯を巡らせる。播磨では一般的に見られるタイプであり、凹線文盛行期には口縁端部、頸部に凹線文を巡らせる地域色の強い壺<sup>(1)</sup>である。細片であるため図示できないが、本遺跡の塩田面第9層でも検出している。B19・B20の広口壺の頸部にはB21・B22の如き断面三角形の貼り付け突帯や指頭圧痕文突帯を巡らせる。

底部は南区9層のものと同様に、薄い平底を主体とし、外面はB23以外は縦方向のヘラミガキ、内面は板ナデ(B23・B24)、ヘラケズリ(B27)、ヘラミガキ(B28)を施す。

第48図の拓影はB30が短頸壺の口縁部である以外は、すべて壺の体部上半部分と思われる。B30・B34・B37が北区包含層、B31~B33・B35・B36・B38が南区9層より出土したものである。クシ描きの直線文と波状文(B33~B35)、斜格子文(B31・B33)の他に、貝殻腹縁による列点文を巡らせる破片(B30・B32・B37・B38)が目立つ。B36はクシ状工具による列点文である。堂山遺跡では拓影分以外の破片も合計して14点の列点文を有する土器片が確認できる。クシ状工具2点、棒状工具先端によるもの2点、半截竹管状工具2点、貝殻腹縁8点であり、数量が少なく確定できないものの貝殻腹縁列点文がかなりの高率を占める可能性<sup>(2)</sup>が強い。

以上の資料から弥生時代の堂山遺跡を概観する。まず、1点の逆「L」字状口縁の裏が示すように第I様式新段階から開始されるのであるが、西播磨地域を見る場合、堂山ではそれ以前の縄文中期後葉から晩期船橋式までの遺物も検出されている事実には留意しておくべきであろう。播磨の弥生集落の立地について述べた吉田昇氏によれば、西播磨地区では縄文中期以降、遺跡が沖積地に進出し、これらの遺跡は後期・晩期へと継続しており、ほとんどの場合ここに弥生前期の遺跡が重複、又は近接して入り込むという。そしてこの状況は弥生前期遺跡が、縄文遺跡とは異なった新しい場所に立地する傾向にある東播磨域と比較して明瞭な特徴を示して

いる。現状では、東播的な状況は周辺地域を概観すればごく一般的であり、西播的な状況は特異であるとも考えられる。以上の如く、弥生前期の堂山遺跡も西播地域の地域性を色濃く帯びながら出現した遺跡の1つであった事が判明する。

中期は凹線文出現期以前、第Ⅲ様式古段階がその主体を占めており、抽出し得た弥生土器の多くがこの段階に属する。Ⅱ様式についてはその可能性のある遺物も含まれるが確定できない。Ⅳ様式は、極めて細片であるため図示し得ていないが、前述した如く凹線文盛行期の播磨特有の壺等、数点が認められる。

尚、第Ⅴ様式の遺物は現状ではみられない。

以上の事から、堂山遺跡の弥生時代は第Ⅰ様式新段階以降、第Ⅳ様式の凹線文盛行期まで継続した遺跡と考えられる。尚、第Ⅴ様式期には解体しており、再び出現するのは庄内併行期を待たねばならない。

## 2. 古式土師器 (第50図～第69図)

調査区の全域から多量の遺物が検出しているが、中でも庄内～布留式併行時期に属する所謂“古式土師器”は殊に多量の出土をみている。しかしながら、それらの資料はいくつかの土壌等の一括資料を除いて、そのほとんどが後世の遺物までを混在させた包含層中より抽出したものである。

一括資料としては、南区塩田の埋立層の東北隅で検出された一群の土器、土壙5(およびその周辺部の土壙5の可能性の強い資料)、土壙6、貝土壙がある。本稿では、それら一括資料については遺構毎に説明を加える一方、他の包含層出土遺物については、各器種毎に若干の形式に区分して説明し、堂山遺跡の古式土師器の概略をつかみたい。

### (1) 南区東北隅一括出土土器 (C1～C6)

塩田埋立層の東北隅で遺構に伴わないものの、集中して検出された土器群である。短頸直口壺、甕、小型丸底壺、二段屈曲鉢で構成される。近年、畿内を中心に出土が伝えられつつある庄内・布留式の中間形態を示す一括土器群と理解できる。

甕C2・C3は弥生後期型甕の末期的なものであり、C4は布留傾向型甕で、2つの系統が確認できる。弥生後期型甕は両者とも叩き目の後、下方からハケ目を施し、口縁叩き出し手法による。C3もC2と同様に底部を残さない形態と考えられる。布留傾向型甕は若干尖底気味の底部、横方向ハケ目の見られない点等に庄内式様相を残すものの、口縁端部を内側に丸く肥厚させる等の新しい要素が見られる。尚、内面は上方向にナデを施す。

小型丸底壺（C5）、二段屈曲鉢（C6）は本来、精良な胎土を使用するのであるが、前者は通有の在地産の胎土で、後者は若干色調が灰白色気味であるが通常の粗い胎土を使用している。C5は口縁部外面に水平方向の叩き目、端部をつまみ上げる<sup>(4)</sup>他、底部は二次的な加熱により赤変しており、最大径以上に煤が付着するなど特異である。C6は口縁端部を布留傾向型甕（C4）と同様に内側に丸く肥厚させており、口縁部は部分により歪んでおり、雑なつくりである。

これらの土器群は、近年、奈良県和出庵寺下層溝<sup>(5)</sup>、同矢部遺跡<sup>(6)</sup>、大阪府中田町1丁目土壇<sup>(7)</sup>、同久宝寺遺跡<sup>(8)</sup>、同加美遺跡<sup>(9)</sup>、同八尾南遺跡<sup>(7)</sup>等、他にも多数の遺跡での類似例が両府県を中心に報告されつつあり、布留式古段階古相<sup>(10)</sup>に相当する。播磨でも長越遺跡<sup>(11)</sup>、玉津・田中遺跡<sup>(12)</sup>にその類例がある。

## （2）土壇5出土土器（C93～C126、C114～C126、P1～P12）

北区の土壇で、砂層をベースとするためC127～C139は土壇内遺物とは断定し得ないが、その可能性が強い。

壺、甕、鉢、大型鉢、高杯、小型器台、山陰型甕の他、製塩土器、土錘で構成される。

甕は伝統的な弥生後期型甕（C96～C100、C117～C118）を主体にし、在地型庄内甕（C101）、受け口状口縁を有する甕（C102）がそれぞれ、1点確認できる。後2者は本遺跡でもそれぞれ唯一の存在である。尚、弥生後期型甕としたC100は、器壁が厚く、胎土、焼成とともに他と異質であり搬入品と考えられる。その他の弥生後期型甕では、口縁叩き出し技法（C96～C98、C117～C118）、分割成形技法（C98・C99）が看取され、内面はハケ目、板ナデ、ナデによって仕上げている。これらの甕はC118が強く腹部の張るプローションである以外は、口縁端部に面を有さない、内面ヘラケズリを施さない等の共通点が多い。

C101は播磨在地産の庄内甕であり、本遺跡で唯一の存在のみならず、播磨では他に長越遺跡<sup>(13)</sup>、玉津・田中遺跡で確認されたのみである。体部中位に最大径を有し、底部は欠損するが尖底状を呈すると考えられる。尚、口縁端部に、庄内甕特有のつまみ上げがみられない事には注目したい。体部外面は3方向の細筋の叩き目（3.5条/cm）を施しており分割成形技法が看取できる。口縁部は叩き出し技法の後、横ナデを施している。体部内面は、まずハケ目調整を施した後、体部下半に左斜上方へのヘラケズリ、肩部に横方向へのヘラケズリを施す。内面肩部のヘラケズリは全面におよばず、体部上半にはハケ目の残存する部分が多い。体部上半にヘラケズリのおよばない部分を残す事は畿内では一般的ではないが、同地域の長越遺跡では一般的に確認できる。播磨在地産庄内甕の地域色となる可能性を指摘したい。尚、胎土、色調、焼成ともに長越遺跡の在地産庄内甕に酷似しており、長越遺跡を中心とする地域からの搬入品で

ある可能性が強い。<sup>(14)</sup>

畿内の庄内甕は形態面では尖底から丸底へ、口縁形態の面ではつまみ上げない端部からつまみ上げ口縁、さらに肥厚気味のつまみ上げ、内弯傾向へと変遷していく。上記の一般的状況からすれば、庄内式でも新相、あるいは布留式古段階にまで降る庄内甕の多い長越遺跡の資料に比較して、堂山遺跡のそれは相対的に古い形態を示すと考えられる。

高杯(C103・C119・C120)は杯部外面の屈曲部に凸帯を巡らせており、口縁部は外反する等の共通点を確認できる。本遺跡ではむしろ口縁部の直線化傾向を示すものが目立つが、土壇5の高杯には口縁部外反というより古い要素が強うかがえる。

小型器台(C107)は完形品である。本遺跡においては、他にも数点の小型器台が出土しているが、いずれも裾部の直線化、口縁端部のね上げが認められ、C107に比較してシャープなつくりになっている。

大型鉢(C108・C122)は2点出土している。C122は完形品であり、尖底を呈する。

C140は粗製の甕と考えられ、特異な土器である。特殊なものとして、山陰型甕形土器(C109)が完形で出土しているが、これについては後述する。

注目すべきは、以上の土器群と共に、製塩土器が伴出している事であろう。二次的加熱を受けており、フレーク状に剥離する細片は多く、赤変するもの(P2・P8・P9・P11・P12)も認められる。完形に復原できる個体はないが、口縁部や底部から体部にかけて遺存する破片により、およその形状は推定できる。すなわち、体部は内弯する深鉢形を示し、短く「八」字状に開く脚台部をつけている。P9は体部下端部を細く絞り、脚台部をつまみ出した後、底部には粘土を充填して仕上げる。同様の技法は他の個体にも確認でき、一般的な技法と考えられる。体部外面の叩き目は、他の土器よりも粗く、左上がり一般的なものである。水平叩き目が1点(P6)認められる。口縁端部はすべて水平に削り取っており、面を形成する。その後、内面を下方から上方に丁寧にナデを施すため、端部内側が上方に鋭く突出している。P2にはハケ目が残存している。口縁端部付近の内面に沈線の巡るもの(P7・P8)がある。土鍾も1点出土している。

以上の土器群は、堂山遺跡の古式土師器においては最も古い时期的位置付けが可能で一帯であり、庄内式でもその前半代に併行すると考えられよう。弥生時代第IV様式まで継続してきた堂山遺跡が、第V様式の空白期間をはさみ庄内式前半代に再び出現をみるのであるが、その時からすでに製塩土器を有していた事は重要であろう。その後の古墳時代中期以降の製塩土器、塩田やそれに伴う施設の存在を考慮すれば、庄内期出現の当初から製塩遺跡としてスタートした事がうかがえる。

### (3) 土壙6出土土器 (C129~C135)

壺、甕、高杯、底部で構成される。C129は図上復元であり、底部はほとんど残さないと思われる。酒津甕 (C129) の口縁部外面のクシ描き直線文は明瞭であり、体部内面のヘラケズリも屈曲部近くにまで施している。二段屈曲の高杯 (C133) は全面ヘラミガキを施し、丁寧な仕上げとなっている。堂山遺跡では他に数個体分が確認できる器形である。C130は口縁端部を上方につまみ上げ、内面ヘラケズリを施す甕であり、C128は外傾する口縁部を有する壺であるが、本遺跡においては両者とも唯一の存在である。C129・C133等から庄内式新相に併行する時期に位置付け得る土器群と考えられる。

### (4) 貝土壙出土土器 (C136~C141)

土壙内埋土中には図示した土器と共に、多くの貝殻が検出されている。

甕、高杯、底部が出土した。弥生後期型の甕 (C136) は、腹部の強く張る形態を呈している。口縁部は叩き出し技法によっており、内面はヘラケズリ (強い板ナデか) が認められる。同じく弥生後期型甕の底部 (C141) には、ほとんど平底部分は残さない。C137は器壁の厚い粗製の甕で、体部下半は二次的な加熱で赤変する。酒津甕 (C138) のクシ描き直線文は非常に弱く、2~3条は中途までしか通らず、ラフな傾向を示す。高杯 (C139) の口縁部は直線的である。これらの土器群には、各個体毎に庄内期の中でもより新しい要素が看取し得るのである。以上の状況から、庄内式新相~布留式古段階に併行する時期に位置付け得る土器群と考えられる。

壺については、大部分が口縁部の破片のみで詳細な形式分類はなし得ない。一部の型式を例外に、個々にバラエティーが著しい。さらに、壺自体の占める割合も小さなものであり、当該時期以前から他地域ではすでに壺の減少傾向が指摘されており、堂山遺跡も同様の状況と考えたい。

以上の如くに、量的にも少ない在地産の壺に、単独、あるいは数点の他地域からの搬入土器の混在するのが堂山遺跡の壺の実体であろう。

### (5) 器種の分類と説明 (包含層出土土器)

#### 壺A (C68・C152・C153)

所謂“二重口縁壺”を一括するが、明らかに搬入品と思われるものは後述する。口縁部のみ破片であるが、体部は球形あるいは非形を呈すると思われる。

わずかの資料であるが、口縁部に文様を施すものは確認していない。

C153は頸部、口縁部ともに外反しており、第V様式的なプロポーシオンを示している。

#### 壺B (C1・C7・C13・C93・C94・C143～C147)

口縁部は外傾、あるいは外反し、頸部を有さず、直接に体部に移行する広口壺と考えられるものを抽出した。しかし、口縁部の破片のみで資料的限界があり、バラエティーも著しい。

ほぼ、庄内期の中であらえ得ると考えられるが、C13は口縁端部を横方向につまみ出して<sup>(16)</sup>おり、布留式期高杯に共通する技法と考えられる。丸く張る体部に丸底を有する。岡山県上東遺跡、大阪府八尾南遺跡<sup>(18)</sup>等の類似例はいずれも布留式併行期の位置付けが可能である。

#### 壺C (C67・C142・C148・C149)

外方へ広がる口縁部のみ破片であるが、頸部を有し、体部に移行すると考えられるものを抽出した。

西播磨では竜野市門前遺跡<sup>(17)</sup>等にみられるように、弥生後期前半以来筒状の頸部に外反する口縁部をもつ壺を有しており、畿内はもとより吉備とも異なった様相がうかがえる。庄内併行期にも川島<sup>(18)</sup>、長越遺跡<sup>(11)</sup>では多見される。

#### 壺D (C11・C158～C160)

直線的に外方へのびる口縁部を有しており、球形、丸底の体部を有すると考えられる。

C11のみは、他より若干口縁部が短く、別系統とすべきかもしれない。

C158・C159は、内外面とも細かいヘラミガキを施し、丁寧な仕上げである。また、胎土も精良であり、精製品である。

C158～C160は、口縁部径が12～14cmであり、ほぼ同様の法量であったと思われる。

壺Dは弥生終末以降、庄内併行期にかけて精製壺形土器として出現をみるものであり、体部の球形化、口縁部の直線化等に変遷の方向を読みとれる。C158～C160は庄内式新相～布留式古段階の中での位置付けが可能である。

#### 壺E (C19・C20・C151)

ミニチュアの壺を一括する。いずれも球形の体部を有し、C19・C151は外傾する口縁部を有する。C19は口縁端部、底部ともに欠損しているが、脚台部がつくと考えられる。

#### その他の壺

C16・C17・C156はいずれも西部瀬戸内系の壺と理解されているものである。C16は暗い乳赤褐色で、粗い胎土を使用しており、他の胎土とは異質である。口縁部外面には横ナデによる凹線を形成している。ただ、この種の壺については播磨では他に川島遺跡、長越遺跡<sup>(11)</sup>、小山遺跡V地点でも確認でき、畿内を中心<sup>(19)</sup>に分布するという指摘、さらに器壁が非常に<sup>(20)</sup>

厚く移動困難な土器である事から、「普遍化できる一形式として各地の土器組成に入り込んでいる可能性」も指摘<sup>(21)</sup>されている。どの地域のものなのかは、現状では不明であるが、C16が内傾する頸部を有した瀬戸内のプロポーシオンとなる可能性のある事のみを指摘して、今後の資料の増加を待ちたい。

C18・C127・C154は吉備を中心とした地域のもと考えられる。C18は才の町1式以降主流を占める短頸壺であり、欠損しているが口縁部は上方に拡張させ、外面に凹線を施す。1~3mmの大粒の片岩を多量に含み、もろい胎上であり、他と異なる。C127は内傾する頸部を有しており、吉備では一般的なプロポーシオンを示している。

C14・C15・C155・C157は山陰系の壺と考えられる。C155は口縁部を削り取って、面を形成し、横ナデを施すという山陰系の甕(C38・C39・C198~C201)と同様の技術的特徴を示し、青木Ⅶ(布留古段階併行期)に位置付けられる。C157は底部を欠損しているが、山陰地域の類似例から尖底気味の丸底になると考えられる。山陰でも、出土例は多くはないが、壺棺としての類例がある。鳥取県では井出畑、福岡県では和田遺跡等、島根県では坂瀬遺跡<sup>(22)</sup>等があり、岡山県では二宮遺跡<sup>(23)</sup>のNo.220袋状ピットから出土しておりおおむね庄内併行期の資料と考えられる。

#### 壺A (C2・C3・C71・C72・C96~C100・C115~C118・C136・C161~C179)

弥生第V様式以来の制作技術の伝統を受け継ぐ甕である。口縁部は短く外反し、体部外面に右上がり、あるいは水平方向の幅の広い叩き目を施すことを一般とする。

畿内中央部では、庄内~布留期にかけては、当該時期、所謂“庄内型甕”、“布留型甕”の器壁を2~3mmにまで削り上げた熟効率良好で先進的な甕が主流となる。しかし、堂山遺跡のみならず、播磨では一部の遺跡を例外にして、やはりこの壺Aが圧倒的な高率を占めている。堂山遺跡では1点の在地産庄内型甕(C101)と数点の布留型甕(C33~C36)の他は壺Aと後述する壺Bが主体を占める。

体部の叩き目方向は、ほとんどが右上がりを示すが、C166は縦方向、C100は左上がりである。C100については、器壁は厚く、胎土も粗く他と異なっており他地域のものであろう。

多くのものには口縁部にも叩き目がおよんでおり、口縁部叩き出し技法が確認できる。又、体部外面の叩き目方向を変えているもの(C98・C99・C176)も見られ、分割成形技法が確認できる。C99の2段目は板ナデのみで叩き目は認められない。

体部外面調整については、叩き目の後、ハケ目、板ナデ等を施すもの(C2・C3・C99・C100・C136・C161・C164・C165・C167~C170・C174~C

179)が目立つ。

内面調整については、ハケ目、板ナデを施すものと、ヘラケズリを施すもの(C3・C71・C72・C100・C168・C171・C172・C174・C176・C177~C179)が確認できる。

C177は、技法、プロポーシオンから庄内型甕を連想するが、器壁は厚く、叩き目も広くて、その差は大きい。

C177については、口縁部形態が他と異なるが、2・3と同様に弥生後期型甕の末期的なものとして理解できる。

C178・C179は他と胎土が異なる事、器壁が厚く、短い口縁部を有する事等若干様相を異にしている。

#### 甕B (C22~C31・C180~C188)

体部外面にハケ目、板ナデを施したり、丁寧に平滑化する甕である。外面に叩き目は施さず口縁部のみでは甕Bとほぼ同様である。長越、丁・柳ヶ瀬遺跡<sup>(34)</sup>等、普遍的に確認できる。

甕Aよりも口縁端部をつまみ上げる(C180~C183・C188)傾向が強いのかもしれない。

内面ヘラケズリを施す個体(C26~C28・C184・C181・C183・C187・C188)も確かめられる。

#### 甕C (C4・C32~C37・C189~C192)

所謂“布留型甕”である。口縁部は内弯し、端部は内側に丸く肥厚する。体部は球形を呈し、外面はハケ目調整、内面はヘラケズリを施すことを一般とする。

堂山遺跡で唯一の甕Cの完形品は、純粋な布留型甕ではなく、庄内甕と布留甕の過渡的形態を示すもので、布留傾向甕とも呼称される事は前述のとおりである。

他の布留型甕はいずれも口縁端部破片のみであり全体をうかがえるものはない。口縁部の横ナデは丁寧であり、特に外面屈曲部分は強く施すためくぼんでおり(C34~C37・C189~C192)、特徴的である。C32・C33・C189・C190の口縁端部は、C4と同様、内側に立ち上がり気味に丸く肥厚させており、布留型甕の中では古相を示すと考えられる。

現在、播磨における庄内甕は、長越遺跡<sup>(25)</sup>で多量の在地産庄内甕の検出をみる他は、堂山遺跡<sup>(26)</sup>で在地産庄内甕(C101)1点、門前遺跡<sup>(27)</sup>、橋詰遺跡<sup>(27)</sup>で数点の庄内甕をみる程度で一般的ではない。反面、この布留型甕の段階になると、堂山遺跡、門前遺跡等では一般的な器種となる。

#### 壺D (C137・C193~C196)

粗製の小型甕である。口径は11~15cm、器高は12~13.5cmにおさまる。

薄手のもの(C193・C175)と、厚手のもの(C137・C194・C196)がある。

体部外面は、板ナデ(C137)、下半部にのみヘラケズリ(C193・C194)、ハケ目(C195)、叩き目(C194)、ヘラミガキ(C196)等による粗い仕上げであり、全体的に凹凸が目立つ。

体部外面に煤の付着するもの(C195)、加熱により赤変するもの(C137)があり、煮沸に使用されたものである。

#### 壺E (C214~C218)

強く張る腹部に、短く「く」字形に屈曲する口縁部を有する。口縁部は横ナデが強く、特に内面はいずれの個体も1・2条のくぼみが生じている。色調は明るい褐色をしており、緻密な胎土を使用し、堅くしまった焼成となっている。

体部外面は、C216を除いて、細かい単位ながら鋭利で、明瞭なハケ目を施している。いずれも縦方向のハケ目の後、横方向の断続的なハケ目を施す事を特徴としているが、C214・C215の例を見ると、体部下半には横方向のハケ目は確認できない。

体部内面はすべてに鋭いヘラケズリが認められる。C214は下半に指頭圧痕が残存する。

C215・C218は肩部にそれぞれ、クシ状工具、棒状工具による刺突文を施しており、酒津甕で確認される例もある事から、より西部の土器と考えている。胎土は在地の物ではなく、搬入品と考えられるが、類例は少ない。

類例としては大阪府東大阪市西岩田遺跡<sup>(10)</sup>で1点が示されている。肩部にクシ描きによる直線文と波状文が連続的に施される点は本遺跡例とは異なっている。さらに、西岩田例では内面ヘラケズリが、屈曲部までおよんでいない点等から布留式古段階に位置付けられている。

堂山の例は、内面ヘラケズリに屈曲部付近にまでおよぶ個体(C216~C218)がある事、横方向の断続的なハケ目等の状況より、西岩田例よりも古い様相が認められる。

なお、C218がAⅠグリットの他は、すべてAⅡグリットより検出をみた。

#### 壺F (C41~C46・C70・C129・C138・C204~C213)

所謂“酒津型甕”と呼称されたもの。肩の張った体部で、下半部については復元できる個体はない。ただ破片を検討すると、丸底化を達成しており、内面は指頭圧痕が残存している。

外反する頸部に、直立、外傾あるいは内傾する口縁部を有す。

口縁部外面には6~10数条のクシ描き直線文を施す。C129・C205等は比較的少条

で明瞭なクシ描き直線文であるが、弱いもの、不明瞭なもの、雑なものも目立つ。C43・C212はクシ描き直線文が弱いため、部分的にとぎれており、C210・C211は重複している等がその例である。

体部内面にはいずれもヘラケズリを施し、器壁は2～5mmの厚さにする。外面はハケ目調整の後、縦方向の暗文状のヘラミガキを施すもの(C204・C208)もある。C204は肩部に横方向のハケ目を施す。

この種の甕は、岡山平野部の川人・上東<sup>(28)</sup>、雄町、白間川遺跡等に分布の中心が確認できるものである。畿内を中心に北部九州からも搬入品として出土する場合が多い。ただ、その場合は数点にとどまるのであろうが、本遺跡では地域的に近接している事もあって、甕全体(301点)の中で14.1%を占めている。

酒津型甕は口縁部のみからでは経かな時期は読みとりにくい。ただ、口縁部外面のクシ描き直線文の多条化に加え、不明瞭なもの、雑なものが目立つ事、さらに下田所式の指標とされた下田所P-4資料<sup>(31)</sup>の中に認められる口縁拡張部下の稜線ほど強いものも少なく、新しい要素が強い。下田所式～亀川上層式で理解できる資料で、庄内式新相～布留式古段階に併行する。

#### 甕G (C38・C39・C198～C201)

所謂“山陰型甕”である。強く外反する頸部に、外傾あるいは外反気味の口縁部を有する。口縁部の破片のみで、体部は不明。

口縁部内外面いずれも横ナデを施しており、体部内面には横方向ヘラケズリ(C198～C201)が認められる。

口縁端部は若干尖らせ気味にまとめるもの(C213)が1点確認できる他は、削り取った後、横ナデを施し面を有するもの(C38・C39・C198・C199)が多くを占めている。後者は青木Ⅶでの編年の位置付けが可能であり、布留式くらいに併行すると思われる。前者は後者より古い要素と思われる。

#### 甕H (C202・C03)

強く外反する頸部に、外反気味の口縁部を有する。口縁端部は尖らせる。口縁部には強い横ナデを施す。体部外面は太筋の叩き目の後、C202には下方からのハケ目を施す。内面は横方向のヘラケズリを施す。

播磨では類例の知られない特異な土器である。

#### 鉢A (C265～C267)

口縁部が内湾してたちあがる小型の鉢で、指頭により、突出したあげ底を形成する。

体部外面には叩き目によるもの(C265・C266)と、板ナデによるもの(C267)がある。屈曲部にはいずれも、指頭圧痕が残存し、さらに、C266は後に工具による調整を施す。

内面はハケ目(C265・C266)、あるいは板ナデ(C267)による。

畿内では第V様式全般から庄内期にかけての鉢の主流となる器形であるが、第V様式の実体が不明の播磨では、その幅年の位置付けはもとより、出現時期と共に不明とせねばならない。

#### 鉢B (C57・C82・C272)

扁球形を呈する体部に、短く外反する口縁部を有する小型の鉢である。唯一、体部下半の残存するもの(C272)は小さな底部を形成している。

C82は全面ヘラミガキを施し、丁寧な仕上げとなっている。

#### 鉢C (C269～C271)

内湾し、口径に比して若干器高の高い体部と、わずかに外反する口縁部を有す。唯一、体部下半の残存するもの(C269)は底部を形成している。他の2点(C270・C271)も同様に平底と考えられる。

C269・C270は全面ヘラミガキ調整を施し、丁寧な仕上げとなっている。

#### 鉢D (C5・C58～C61・C277・C278)

所謂“小型丸底壺”で小型器台、二段屈曲鉢とともに小型精製3種を構成するものである。

体部は半楕円形を呈し、若干内湾気味に短くのびる口縁部を有するもの(C58・C59)と、直線的に長く外傾するもの(C5・C60・C61・C277・C278)がある。両者は基本的には、前者から後者への型式変遷を示すと考えられ、庄内式新相から布留式古相の中で理解し得る資料である。

精良な胎土を使用するもの(C58・C277)、細かく丁寧なヘラミガキを施すもの(C61・C277・C278)がある。

C61は扁平化が著しく、一般的ではない。北部九州も含めて西日本の当該期の遺跡を概観すると、数点ずつの出土が報告されているが、今後の資料の増加に期待したい。

C5については前述のとおりである。

#### 鉢E (C81・C268)

内湾しながらのびる体部を有し、底部は尖底を呈する。楕状の鉢Fとは器高の高い事によって区別し得る。

C81の口縁端部は、部分的に強く内湾させている。

吉備、畿内等の当該時期の遺跡の中ではほとんど確認できない形態の鉢であるが、長越遺跡の中には散見しており、播磨にあっては一般的な器種と考えられる。資料の増加を待ちたい。

#### 鉢F (C62・C63・C280~291)

丸底底部を有し、碗状の形態のものを一括してあつかう。法量としては、口径12~16cm、器高5~6cm前後におさまっており、ある程度の規格化がうかがえる。

口縁部形態には、若干内湾しながらも外傾傾向の強いもの(C62・C280・C286)、体部と口縁部間に区画を有するもの(C63・C287)、強く内湾するもの(C281~C285)、口縁端部を短く外方に拡張させるもの(C288)、横ナデにより端部のみを外反させるもの(C289~291)等のバラエティーがみられる。

長越遺跡の各住居址一括資料、吉備における状況から、この形態の資料は庄内式でも極めて新しい時期、あるいは布留式古段階からの出現が考えられるが、個々の資料のみからの时期的位置付けは困難である。

C62は形態的にも、又底部にヘラケズリを施す等の古い様相がうかがえる資料である。しかし、他の個体については古墳時代以降までの長い時期幅の中の位置付けが想定できる。

#### 鉢G (C263・C264)

口径20cm前後の中型鉢である。いずれも体部下半は欠損するが、短く外反する口縁部に、屈曲部径を最大径としてスムーズに底部に移行すると考えられる。

口縁端部は丸くまとめるもの(C263)と、つまみ上げるもの(C264)がある。

#### 鉢H (C108・C122・C260・C261)

口径約30~35におさまる大型鉢であり、口縁部は短く外反、あるいは外傾するものを一括して扱う。

比較的器壁が厚く、口縁端部をはね上げるもの(C108・C260)と、器壁がやや薄いもの(C122・C261)の2種がある。さらに前者は屈曲部径よりも大きくなる腹部を有しているのに対して、後者は屈曲部径を最大径にしてスムーズに底部に移行していく。土壌5には、その両者(C108・C122)がみられる事から、時期差ではなく別系統と理解できる。

叩き目の認められるもの(C108・C261)はいずれも口縁部外面にも残存している。口縁部は叩き技法により、粘土紐をのぼしながら形成されている事が認められる。

吉備においても、畿内においても第V様式の中にその出現時期が確認できる器形である。変遷の方向は、底部残存の状況、体部プロポーションによって表出される。

唯一の完形品C122は、すでに底部は残存しておらず、尖底気味の底部は庄内式併行期に属することを明示している。

#### 鉢I (C262)

1点のみ確認できた。鉢Hとは2段屈曲の口縁部を有する事によって区分する。体部下半は残存しないが、丸底と考えられよう。口径は36cmで、前述の大型鉢よりも若干大きいものの、ほぼ同様の法量を有すると理解できる。

布留式併行期から出現を見るもので、前述の鉢Hとは時期差でとらえる事が可能である。

#### その他の鉢 (C121・C273~276・C279)

各個体独自の特徴が強く、堂山遺跡の中では単独的なあり方を示すものを一括して扱う。

C273~C276は形態上のバラエティーは認められるものの、口径8cm以下、器高4.5cm以下で、ほぼ同様の法量を示す。ミニチュア土器の範疇で理解しておきたい。

C279は鉢Fとは法量が大きく異なっており、底部を指で強く押さえる事により平底を形成している。

#### 高杯A (C76・C103・C119・C120・C139・C122~C235)

杯部の口縁部が屈曲して、外反あるいは外傾する高杯を一括して扱う。

土壌5の資料(C103)、又はその可能性のある資料(C119・C120)はいずれも屈曲部外面に貼り付けにより突帯を巡らせており、口縁部は外反させている。また、細かいヘラミガキを施し、丁寧なつくりである。

それより時期的に新しく、庄内式新相、あるいは布留式古相に属すると思われる貝土壌の資料(C139)は、口縁部を直線的に外傾させる。

本遺跡においても、他遺跡、他地域と同様に、高杯の変遷方向は口縁部の外反傾向から外傾傾向へと確認できる。

北区では多くの高杯が出土しており、外反するもの(C222~224)、外傾するもの(C226~232)を含む。C222・C223は口縁端部を内側に丸く肥厚気味に仕上げる。C226が特異な叩き目仕上げの他は、概して細かいヘラミガキを施し丁寧な仕上げとなっている。C233は体部、脚部外面にヘラケズリを施す。

C234は、体部外面ヘラケズリ、口縁部外面板ナデの粗い仕上げであり、器壁も若干厚く重量感がある。C235は口縁端部を強く外反させる形態で、薄い器壁と丁寧なヘラミガキを施している。両者とも、前述の高杯よりも新しい要素を有するもので、布留式併行時期に位置付け得る資料である。

#### 高杯B (C133・C219～C221)

二段に屈曲する杯部を有する高杯である。

いずれも口縁端部、脚部を欠損しており、全体の形態はうかがえない。赤穂市教育委員会調査時にもこの形態の高杯が数点出土し、口縁端部は大きなつまみ上げ口縁を有しており、本資料も同様の形態を呈する可能性がある。

内外面とも細かいヘラミガキを施し丁寧な仕上げとなっているが(C133・C219・C220)、C221のみは屈曲部外面は丸みを帯びて稜線を形成しておらず、内外面のヘラミガキも単位の粗い、雑な仕上げとなっている。

いずれも庄内式新相に位置付け得る資料と考えられる。

畿内中央部においては一般的に確認できる器種であり、本遺跡においても一般的な構成要素になる。川島遺跡20溝においても、一般的であるが、長越遺跡においては2点(落込1の52・大溝の269)のみ図示されている。

#### 高杯C (C236・C237)

碗形の杯部を有する高杯である。杯部のみの破片であるが、脚部は短い脚柱部と、杯径よりも大きく広がる裾部を有すると考えられる。

出土した2例は、いずれも外面がヘラケズリ、接合痕を残す雑な仕上げに対し、内面は細かいヘラミガキ、板ナデにより丁寧に仕上げている。

#### 器台A (C55・C74・C107・C248～C251)

所謂“小型器台”で、小型丸底壺、二段屈曲鉢とともに小型精製3種を構成する。

皿状の受部を有し、脚部は受部接合部分から直線的に開くことを一般とする。

なお、本遺跡の小型器台で、完形のものとは1点(C107)のみであるが、確認できるものは受部と脚部は貫通しておらず(C107・C251)、中空の小型器台は見られない。

C107は、中央の脚部であり、シャープさに欠ける雑なつくりである。共伴資料の状況から本遺跡の中では庄内併行期でも若干古相時期の資料である。

他の資料はいずれも、シャープなつくりとなり、C107よりも新しい時期に位置付ける事が可能である。裾部は直線的に広がるもの(C55・C251)であり、受部は小さく立ち上がるもの(C248～C250)と若干大きく立ち上がるもの(C74)がある。

なお、本遺跡の資料のなかには細かいヘラミガキで丁寧な仕上げをし、精良な胎土を使用するものは確認できていない。

#### 器台B (C56・C255・C256)

所謂、山陰系の鼓型器台であり、受部と脚部が貫通する中空器台である。脚部内面に横方向ヘラケズリ、受部内面にヘラミガキ(C255)を施す。

粒子が緻密で堅緻なもの(C255・C256)と、白色を呈し粒子が粗くもろいもの(C56)の2種がある。前者では頸部外面の段は比較的しっかりしているが、後者のそれは断面三角形の弱い貼り付け突帯になっている。C56の脚部外面には暗文状のヘラミガキを施す。

所属時期については、「鼓型器台の変化は、全体として、時期を追って器高が縮小する傾向」があるとされる。C56に関しては、藤田憲司<sup>(32)</sup>氏の示されたように、器高に対するくびれ部最小径の比率を求めると、1.1~1.2になる。氏の示された資料では第Ⅳ期(酒津式併行期)のものは1.3~1.5前後、第Ⅴ期(亀川上層式・布留式併行期)のものは1.1~1.0前後の数値を示すとされる。以上のことから、C56は青木Ⅶ(布留式古段階併行期)、あるいは若干遅る時期での位置付けが可能であろう。

C255・C256に関しては、両者ともに受部、脚端部を欠損しており、藤田氏の計数での検出は不可能であるが、しっかりとした頸部外面の段を有する事、器高がC56よりもかなり高くなる事等からより古い様相が看取できる。庄内式併行期におさまる資料であろう。

尚、本遺跡では、布留式併行期でも若干新しい様相を示す、くびれ部に突帯状の段、または稜線を持たない鼓型器台は確認できない。

#### 山陰型甕 (C83・C109)

図示した2点以外にも1個体分の体部片、環状把手1点が出土しているが、復元し得ない。

C83は底部破片である。外面に貼り付け突帯1条の剥離痕が認められる。体部内面には口縁部側からのヘラケズリが認められる。

C109は完形に復元し得たものである。底部から外方に内湾しつつ口縁部に至る中空の体部であり、底部に近接して貼り付け突帯を巡らせ、体部下半に近接して2対の環状把手を装着する。把手は体部に挿入しており、内面には粘土を補充する事により補強している。底部は内外面とも突帯部分まで横ナデ、体部は内外面ともハケ目を施している。なお、体部内面のハケ目はその方向から底部より施したものであり、突帯、把手の状況からも本来は図示したものと上下逆の意識をもって制作されたものであろう。

ところでC109の山陰型甕で注目せねばならないのは、山陰で出土する多くの山陰型甕とはその形態が大きく異なることであろう。山陰地域で出土する山陰型甕で体部上下に2対の把手を装着するタイプのものは器壁が厚く、体部の長い大型品である。山陰では器高は60~70cm前後のものが一般的であるのに対して、C109は33.5cmにすぎないのであり、器壁も厚くなくて、体部が内湾して張る形態を呈している。又、把手も山陰のものは体部の上・下端部近くで両者は大きく離れた位置に装着されるのであり、把手自体も頭丈なつくりになっている

のである。対してC109は、接近した位置に、細く削いつくりの環状把手を装着している  
のである。以上の点で堂山遺跡の山陰型甌は、山陰のそれとは著しく趣を異にしたものとなっ  
ている。C109の胎土は他の器種の胎土と同様であり、在地製品と考えられ、その事が山陰地  
域のものとは大きく異なっている原因と推定できよう。

分布範囲は、その名が示すとおり山陰地域に中心があり、一部山陽地域でも出土が確認でき  
る。米田文孝氏の集成によれば現在、島根県6遺跡、鳥取県14遺跡、京都府1遺跡、広島県4  
遺跡（2遺跡は山陽側）、兵庫県2遺跡（1遺跡は山陽側）、大阪府1遺跡（山陽側）、愛媛  
県1遺跡（山陽側）の合計30遺跡で出土している。以上の内、大阪府利倉遺跡の1例は、や  
はり在地産の可能性が強く、上・下部の把手も約90度ずらせて装着されていたと推定でき山  
陰地方には実例のない特異な事例とされている。近畿瀬戸内側の2遺跡（堂山、利倉遺跡）は、  
いずれも在地産の可能性が強く、山陰には類似例のない“山陰型甌”を有している点で共通し  
ている。

時期は、山陰では青木Ⅵ～Ⅶの弥生時代終末から布留式併行期にかけての極めて短い期間に  
出現と消滅が確認できる。堂山遺跡の例も庄内式のものであり、山陰と同様の時期幅の中にお  
さまる。

#### 手焙り形土器（C258・C259）

2点のみ図示したが、他にも2～3個体分の細片が確認できる。いずれも体部から覆部にか  
けての部分的な残存である。

C258は当該時期の遺物が最も集中するAⅢグリッドからの出土である。両者とも覆部端  
部は、粘土帯を内側に付加（C258）、あるいは若干外方に引きのぼす事（C259）によ  
って拡張部分を形成している。

C259はハケ目調整のみであるが、C258は装飾性が著しい。クシ描き波状文、竹管文、  
貼り付け突帯による装飾がみられる。さらに、C258は、色調（にぶい黄橙色）、胎土とも  
他と全く異なっている。しかしながら現状では時期、産地の特定はできない。

### 3 古墳時代後期～室町時代の土師器（第70図～第74図）

当該時期の土師器は古式土師器同様、古墳時代後期の甕、採鹹土壙等一部の遺構資料を除い  
て、調査区全域の包含層から出土したものである。

出土遺物の時期としては古墳時代後期から中世におよんでいる。しかし、各時期とも遺物量  
が平均的に存在するわけではなく、古墳時代後期と平安・鎌倉時代の遺物は量的にも多く、須  
恵器と同様の状況にある事は言うまでもないであろう。尚、先に説明した古式土師器との関連

について言及しておきたい。布留式土器を庄内式以降、初期須恵器を含む段階にまで考えるならば、登山遺跡では布留式土器の中でも古相のものしか含まないと考えられる。庄内式新相から布留式古段階にピークを迎え、その後6世紀代の土師器、須恵器が多量に出土をみるまで若干の空白期間が認められよう。

#### 高杯 (D1)

完形品である。6世紀後半の甕3内に塗り込められた状態で出土しており、脚部内面には甕壁の土が付着している。外反して開く脚部に椀形の杯部がつく形態である。外面は細かいヘラミガキを施し、部分的に指頭圧痕がみられる。内面は丁寧なナデ仕上げを行っている。二次的な火を請けて赤褐色に赤変し、良好な胎土を使用した精製の高杯である。

#### 甕 (D2～D28・F1・F2・F24)

多数の甕が出土しており、古墳時代後期以降、一部平安、室町時代くらいのもも確認できる。

D2～D16は大部分が古墳時代後期に属するであろうが、一部奈良時代のものも含む可能性のあるものを一括した。現状では個体毎の時期的位置付けは困難であるが、須恵器では6～7世紀前半が最も多く、奈良～平安時代前半はあまり確認されていない状況に対応していると思われる。口縁部の破片が大部分で全体の形態はうかがえないが、D3は下ぶくれの長胴形を呈し、D5・D11・D12等も同様に長胴を呈すると考えられる。体部外面は縦方向のハケ目を基本とし、内面には、指頭圧痕著しく未調整のもの、ハケ目、板ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ等を施している。

D17・D18は口縁部に最大径を有し、口縁も大きい。同じく長胴・丸底の形態を示すと考えられる。

D19・D20は外反する口縁部を有する甕であり、内外面に板状工具による調整痕を残すものの、全体的に丁寧にナデ調整を施す。他にも数個体分出土しており、他と若干趣を異にしている。

D21～D27は、口縁部が短く内弯(D21)、あるいは外傾(D22～D25)し、体部は丸く張り、丸底を有する甕である。口縁端部は内傾する面を有するもの(D21)、外傾する面を有するもの(D22・D23)、内側に丸く肥厚するもの(D25)、尖るもの(D26)等多種多様である。D26のみは平坦な底部を有している。いずれも、口縁部は横ナデ、体部は縦方向、斜上方へのハケ目、底部は不正方向のハケ目を施す。内面はハケ目、カキ取り、ヘラケズリ、指頭圧痕等が認められるが、接合痕を残すものがほとんどで粗雑な仕上げになっている。特に底部内面は指頭圧痕による凹凸が著しく、特徴的である。底部は二次的な加熱に

より赤変、体部には煤が付着（D25～D28）しており、煮沸用具に使用されたものである。同様の形態のものは図示したものを含めて、10数個体分が確認できる。古墳時代後期～奈良時代のなかで理解できる。

D24は口縁部を短く外傾させ、長胴形態を示す甕である。ただし、体部は細く、赤褐色で砂粒の多い胎土を使用しており、他と趣を異にしている。

F1は口縁部を短く外傾させ、端部を上方にはね上げる甕である。口縁部は横ナデ、体部外面は縦方向のハケ目を施す。本遺跡では他に同形態のもの（口径23.1cm）が1点出土している。平安時代に位置付けられる。

F24は微細な胎土を使用し、硬質な焼成の土師質の甕から変化してきた土鍋である。口縁部は直立し、端部を外方に折り返している。体部は破片のため上半部しか図示できないが、丸く扁平な形態を示すと考えられる。口縁部は横ナデ、体部外面は横方向の叩き目、内面はナデを施す。本遺跡では唯一の存在であり、中世土器である。

#### 土釜・足釜（F4～F19）

瓦質の釜を一括する。前述の煮沸用甕の消滅、あるいは減少の後に、日常の煮沸用具として出現する。大和・河内では一部5世紀後半にその出現が認められるが、堂山遺跡では平安時代から鎌倉・室町時代にかけてのものが確認できる。

F4～F8は、菅原氏の分類に照らすと“摂津C2型”の土釜であり、いずれも土師質である。口縁端部に接するか、あるいは非常に接近して幅の狭い罫を貼り付け、口縁部内外面を横ナデ、体部外面を縦方向のハケ目を施す等の共通した技法が認められる。内面には横方向のハケ目を施すもの（F7・F8）も認められる。

平安時代でも10～11世紀での位置付けが可能であり、本遺跡での土釜使用開始時期の様相を示すものである。ただ、摂津C型は出土点数が少ないことから、日常煮炊用には土師器甕がおもに使用されたとの指摘もなされている。

F10～F13・F18は口縁部が直立し、口縁部に最大径を有する形態のものであり、端部に面を有する。土師質（F10）と、瓦質（F11～F13・F18）の2種類がある。口縁部は内外面とも横ナデであり、体部外面は指頭丘痕が残存（F13・F18）しており、未調整である。内面はナデであるが、土師質の1点（F10）にはハケ目を施している。尚、採鹹土壌より出土したF18のみは、内面に段を巡らせている。鎌倉～室町時代にかけての位置付けが可能であろう。

F9・F14・F15は口縁部が内弯し、腹部に最大径を有する形態のものである。土師質（F9・F14）と瓦質（F15）の2種類がある。あるいは三足（F16・F17）を取り付けた足釜であった可能性がある。口縁部は内外面とも横ナデを施しており、体部外面で判明

するもの(F15)は未調整である。内面には横方向のハケ目(F14・F15)が認められる。いずれも鎌倉時代に位置付け得るであろう。

採鹹土塚から出土したF19は土師質であり、口縁端部を内面水平方向に拡張し、上面は横ナデによって凹んでいる。口縁部は内外面とも横ナデを施している。堂山遺跡<sup>(33)</sup>では特異な形態であり、大和H型の土釜と考えられる。鎌倉時代後半に位置付けられる。

#### 土鍋 (F3・F21～F23・F25)

F21～F23は口縁部が受け口状に2段に屈曲する土鍋である。土師質(F22)と、瓦質(F21・F23)の2種類がある。全体に復元できるF23は、外弯しながらのびる体部であり、底部に平坦面を有している。F22もほぼ同様と考えられる。採鹹土塚より出土したF21は、腹部に最大径を有するらしく他の2点と若干異なっており、古い要素とも考えられる。口縁部内外面とも横ナデ、体部外面はいずれも未調整であり、指頭圧痕の凹凸の著しいもの(F22・F23)がある。体部内面は横方向のハケ目を施す。

いずれも鎌倉～室町時代に位置付け得るであろう。

叩き目を施すF25の土鍋もほぼ同様の時期的位置付けが可能であろう。

#### 土師皿 (F26～F38)

F26は貼り付けによる台部を有する小皿である。皿部内面はナデ、外面は横ナデを施す。台部接合痕が明瞭に列なる。本遺跡では唯一の存在である。

F27は口縁端部を内側に丸めており、非常に薄い器壁である。口縁部内外面とも横ナデ、体部外面は未調整である。本遺跡では1点のみ確認した。

F28・F29は中型の土師質皿である。口径は13.3cm、12.8cm、器高は2.6cm、2.7cmとほぼ同様の量度である。両者とも底部は回転系切り、口縁部内外面とも回転横ナデによる。

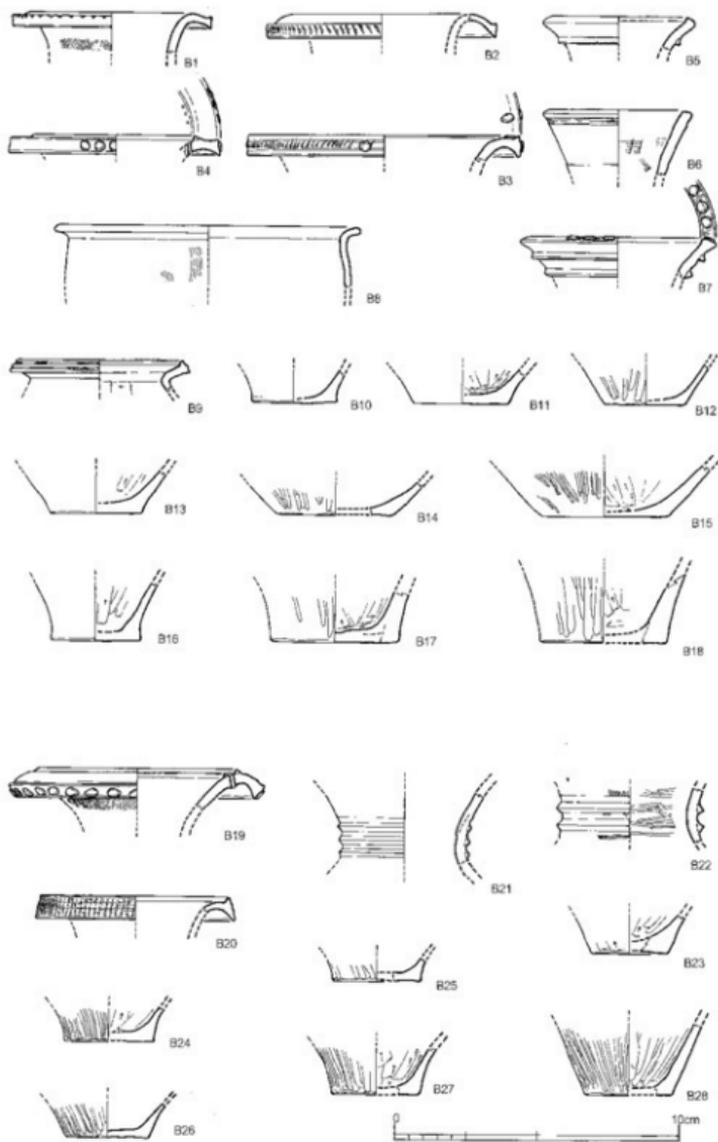
F30～F38は小型の土師質皿である。口径は7.2～8.9cm、器高は1.0～1.6cmにおさまる。いずれも底部は回転系切り、口縁部内外面、体部内面には回転横ナデによる。体部内面に粘土紐巻き上げ痕が残るもの(F33・F36)がみられる。

#### (註)

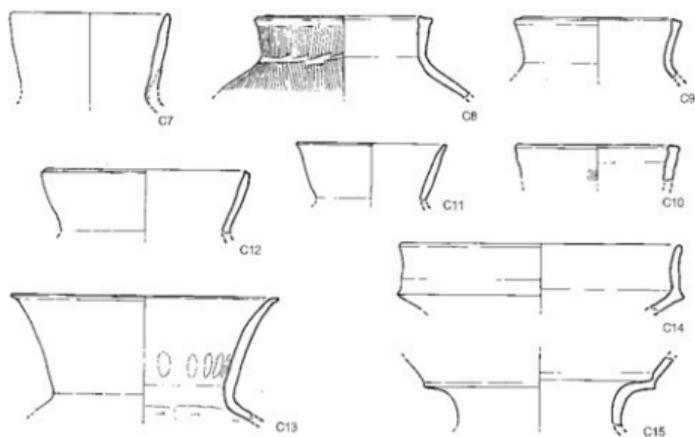
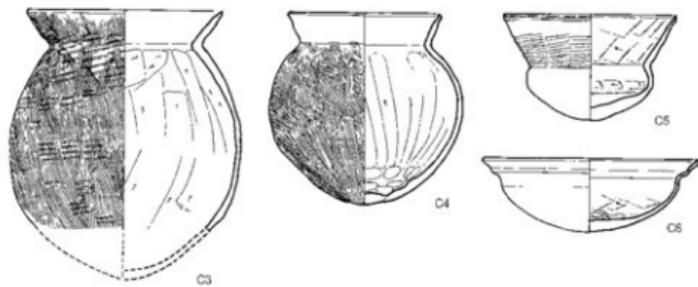
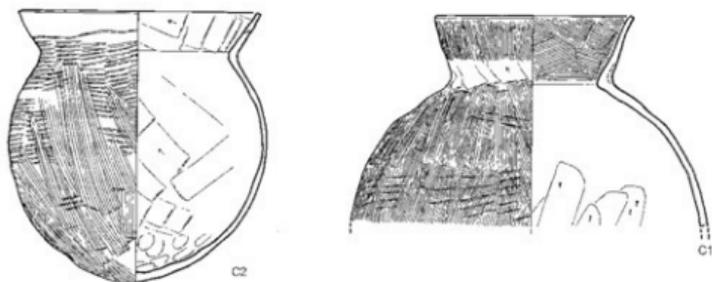
- (1) 「分布の中心は摂津・吉備等の他地域においてほとんど出土例を見ないことから播磨」とされている。森下大輔「弥生時代中期後半の土器様相」(『尾崎遺跡』尾崎遺跡発掘調査団)1977年 52頁
- (2) 同じ西播地域にあってもより東方のⅢ・Ⅳ様式期の竜野市尾崎遺跡では「列点文を有する土器片は

- 総数 133破片あり、棒状工具49破片、篋状工具25破片、貝殻圧痕24破片に分れ他は不明(註1. 前掲書)」となっており、堂山遺跡よりも貝殻圧痕の占める割合が低い。貝殻圧痕の中部瀬戸内の要素である事を考えるならば、西に数kmで吉備に至る堂山遺跡の地理的環境によるものであろうか。ただし、数量が少ないため、今後の資料の増加を待ちたい。
- (3) 吉田昇「弥生集落の立地と分布 一播磨を中心として一」(『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所) 1984年
- (4) 小翠増で端部をつまみ上げる例として、岩崎直也氏によって、阿波型として提唱された矢野式土器の中に見られた。ただし図示された資料の遺跡名は不明。岩崎直也「四国系土器群の搬出」(『大阪文化誌』第17号) 財団法人大阪文化財センター 1984年
- (5) 木下正史「飛鳥地方出土遺物について」(『第5回研究会記録』埋蔵文化財技術者交流会) 1979年
- (6) 寺沢薫他『田原本町矢部遺跡発掘調査概報』(福原考古学研究所) 1978年
- (7) 山本昭・米田敏幸他『八尾南遺跡』(八尾南遺跡調査会) 1981年
- (8) 一瀬和夫「久宝寺遺跡現地説明会資料(Ⅱ)」(大阪府教育委員会・大阪文化財センター) 1983年
- (9) 『加美遺跡現地説明会資料(I～Ⅲ)』(大阪市教育委員会・大阪市文化財協会) 1984年、1984年、1985年
- (10) 小山田宏一他『岩岩田 近畿自動車道天理～次田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』(大阪文化財センター) 1983年
- (11) 松下勝他『播磨・長越遺跡』(兵庫県教育委員会) 1978年
- (12) 神戸市西区玉津町田中に所在。兵庫県教育委員会による昭和59年度確認調査において溝状遺跡より出土。現在整理中。
- (13) 長越遺跡では数点の庄内河内型裏以外はすべて播磨在地産である。
- (14) 長越遺跡の遺物については、松下勝氏の御厚意により実見した。
- (15) 袴瀬昭彦他「川入・上京」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県文化財保護協会) 1977年 141頁
- (16) 註7 61頁
- (17) 『竜野市史』第4巻(竜野市教育委員会) 1978年
- (18) 榎本誠一・山本三郎他『川島・立岡遺跡』(太子町教育委員会) 1972年
- (19) 今甲幾次「播磨弥生式土器の動態(二)」(『考古学研究』第16巻第1号) 1969年
- (20) 米田文孝「搬入された古式土器一摂津・垂水南遺跡を中心にして一」(『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』関西大学) 1983年
- (21) 註7 140頁
- (22) 池田満雄・東森市良『山陰の国々4 出雲の国』(学生社) 1973年

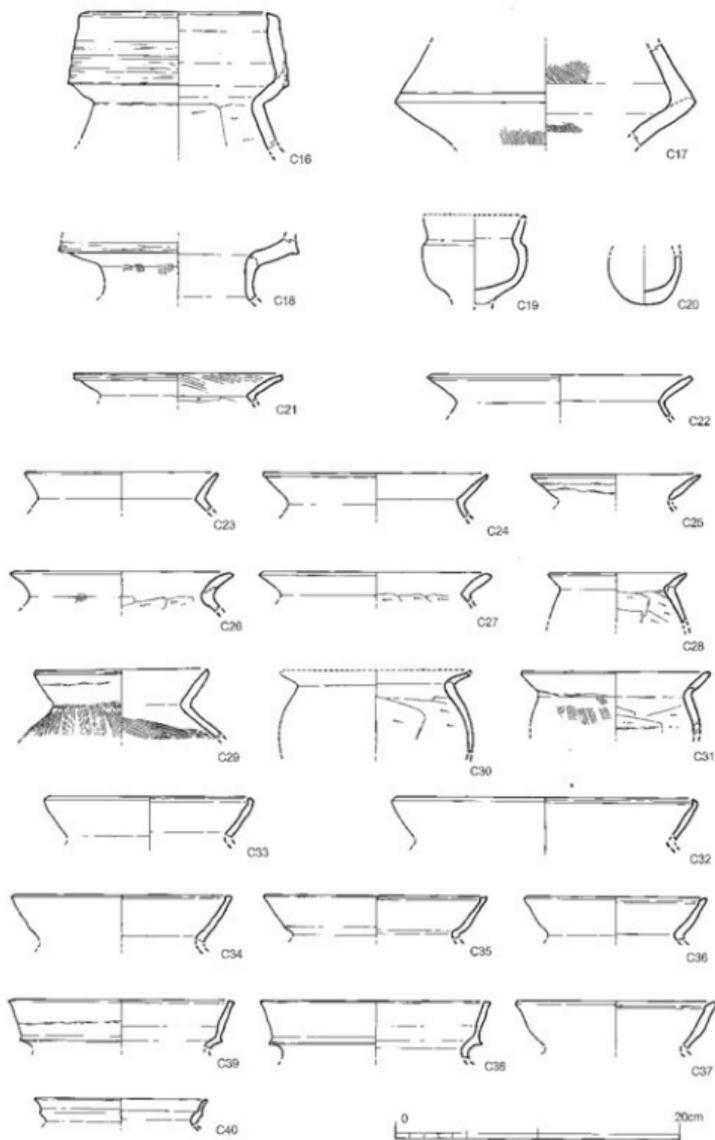
- (23) 高畑知功他「二宮遺跡 一般国道179号線(津山市二宮地区)改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』28 岡山県文化財保護協会) 1978年
- (24) 岡崎正雄、深井明比古氏の御厚意により遺物を実見した。
- (25) 上田哲也他『門前遺跡』(兵庫県教育委員会) 1973年
- (26) 上田哲也他『播磨の土師器の研究』(東洋大学付属姫路高校) 1973年
- (27) 浅田芳胡・今里幾次『播磨橋詰遺跡発掘調査略報』(播磨郷土文化協会) 1960年
- (28) (a) 藤田憲司・正岡睦夫他『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 岡山県文化財保護協会) 1974年  
 (b) 柳瀬昭彦他『川入・上東』(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県文化財保護協会) 1977年
- (29) 正岡睦夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(岡山県教育委員会) 1972年
- (30) 光吉勝彦他「旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅰ百間川原尾島遺跡Ⅰ」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 岡山県教育委員会) 1980年
- (31) 註28. (b)
- (32) 藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」(『考古学雑誌』第64巻第4号) 1979年
- (33) 菅原正明「畿内における土釜の生産と流通」(『文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』奈良国立文化財研究所) 1983年



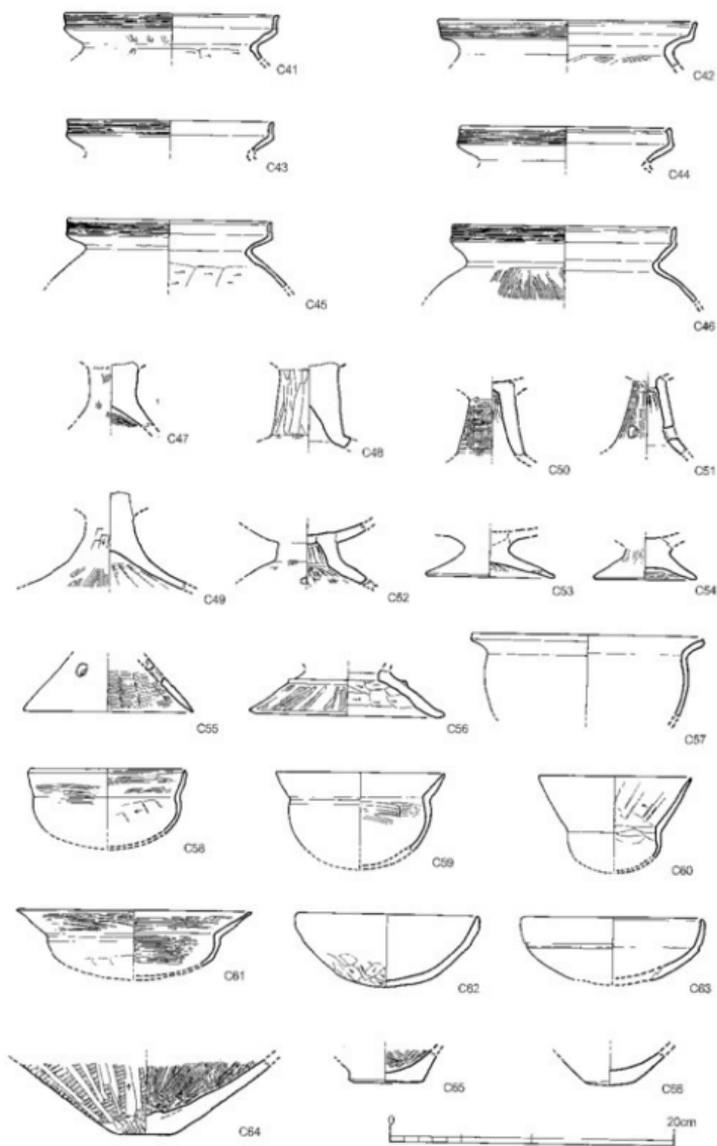
第49圖 弥生土器②



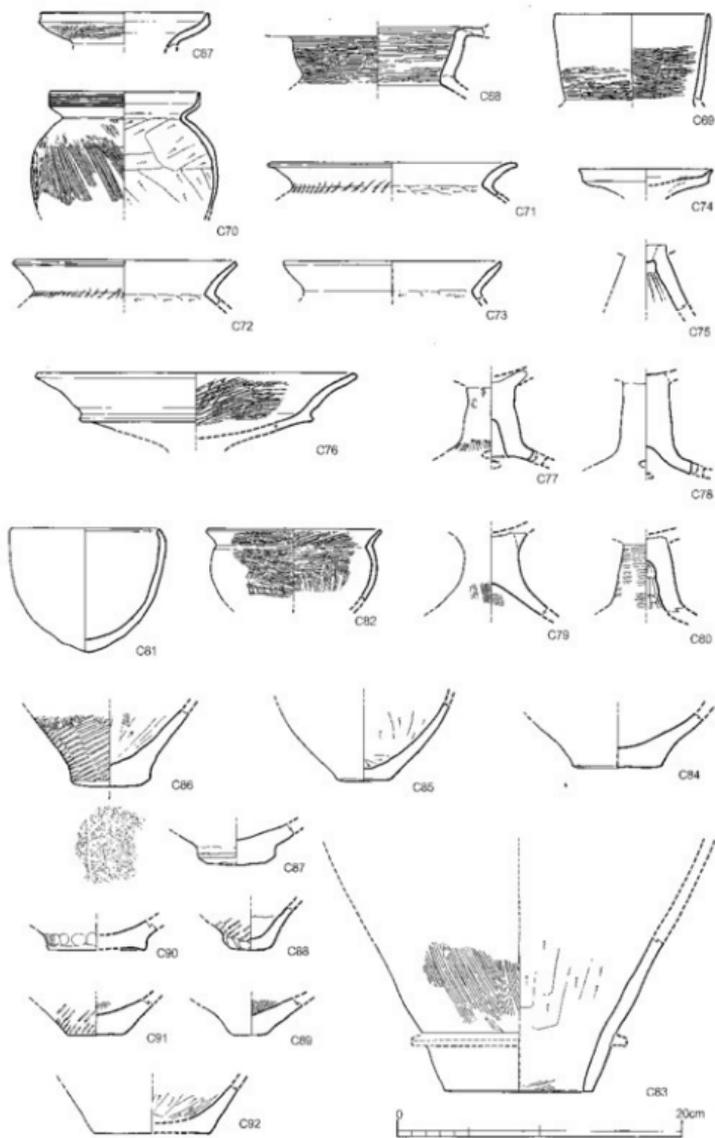
第50図 古式土師器①



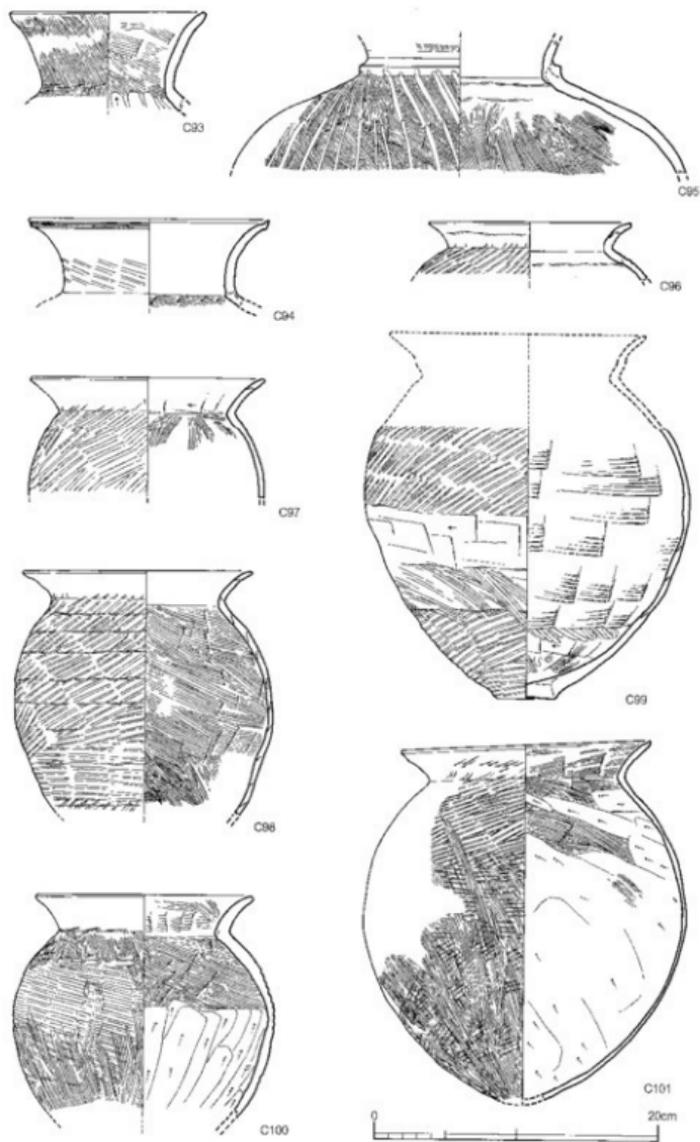
第51図 古式土師器②



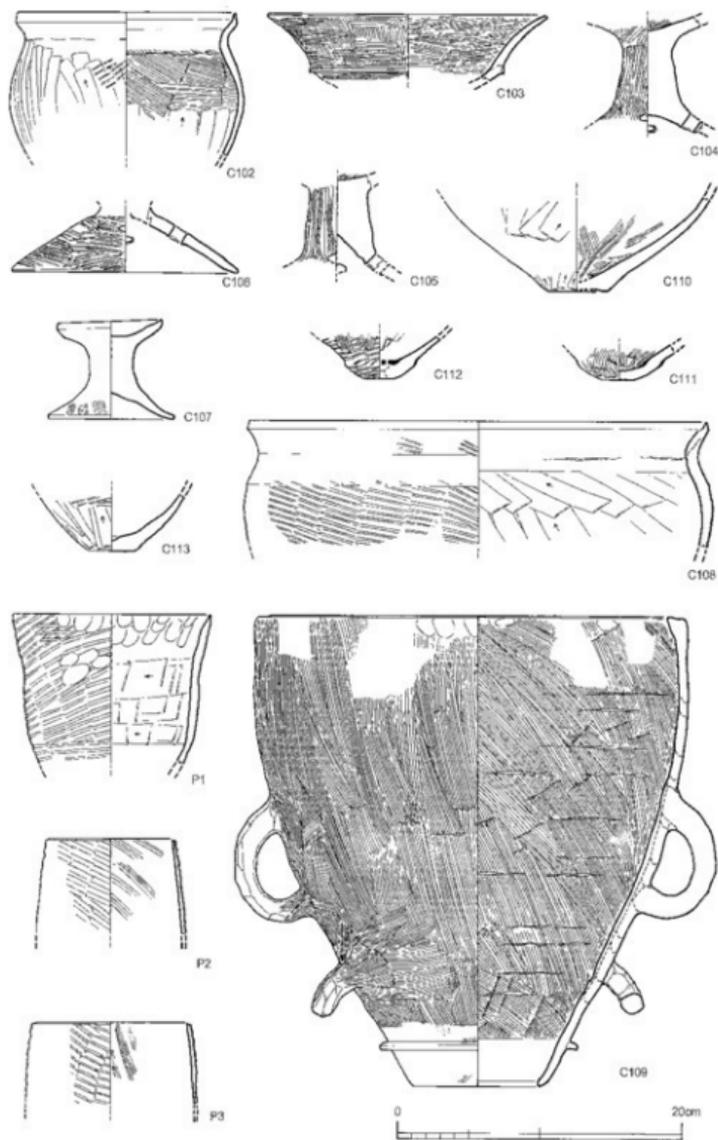
第 5 2 圖 古式土師器③



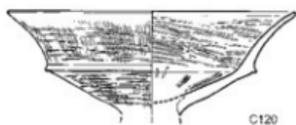
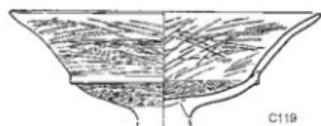
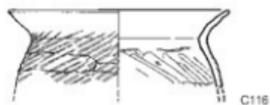
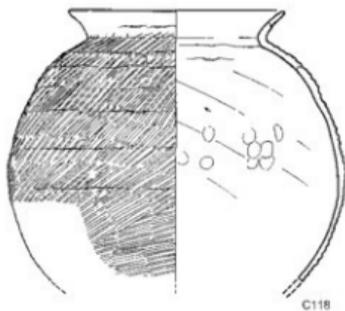
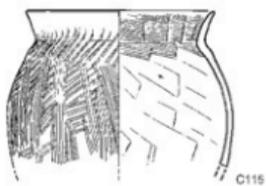
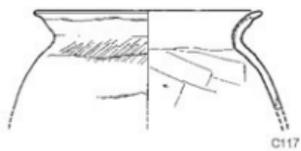
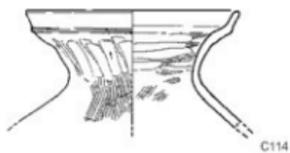
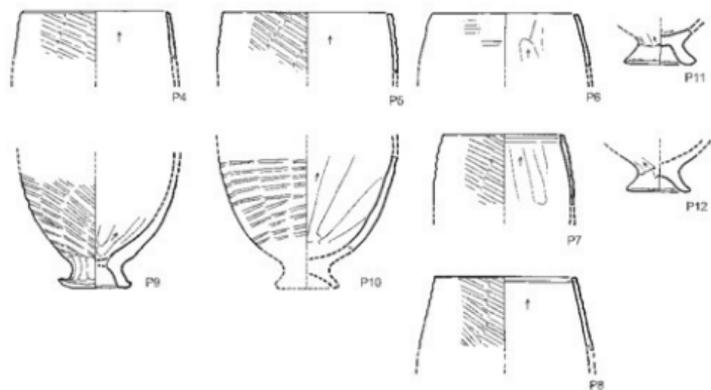
第53图 古式土師器④



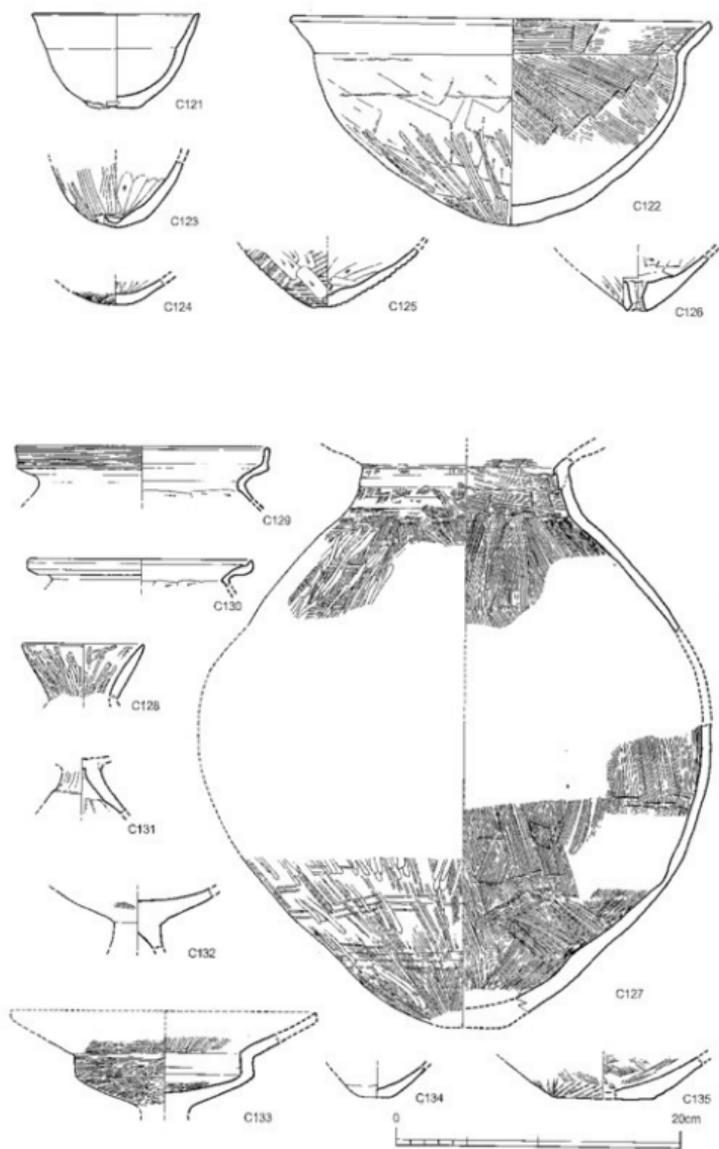
第54図 古式土師器⑤



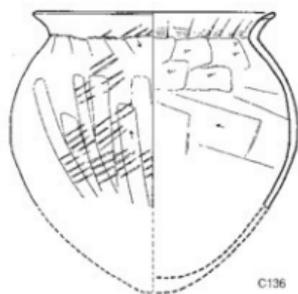
第55圖 古式土師器⑥



第56図 古式土師器⑦



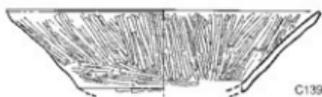
第57图 古式土器⑧



C136



C138



C139



C137



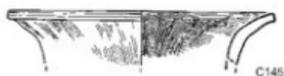
C140



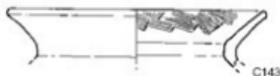
C141



C142



C145



C143



C146



C144



C147



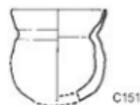
C148



C149

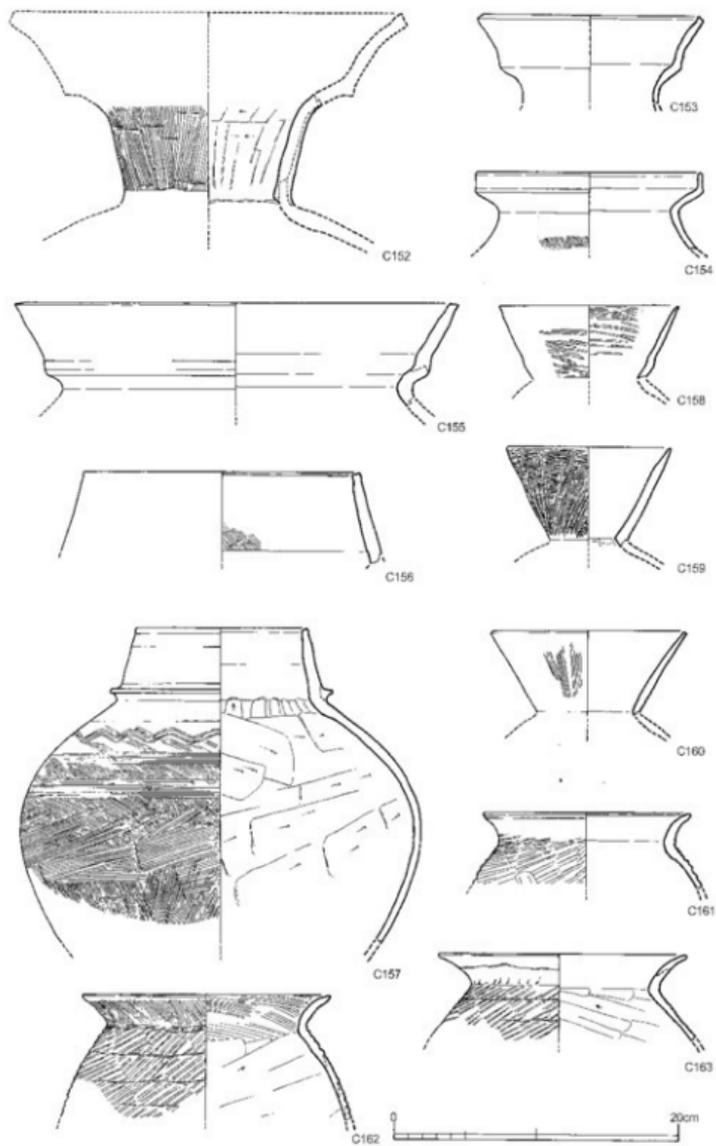


C150

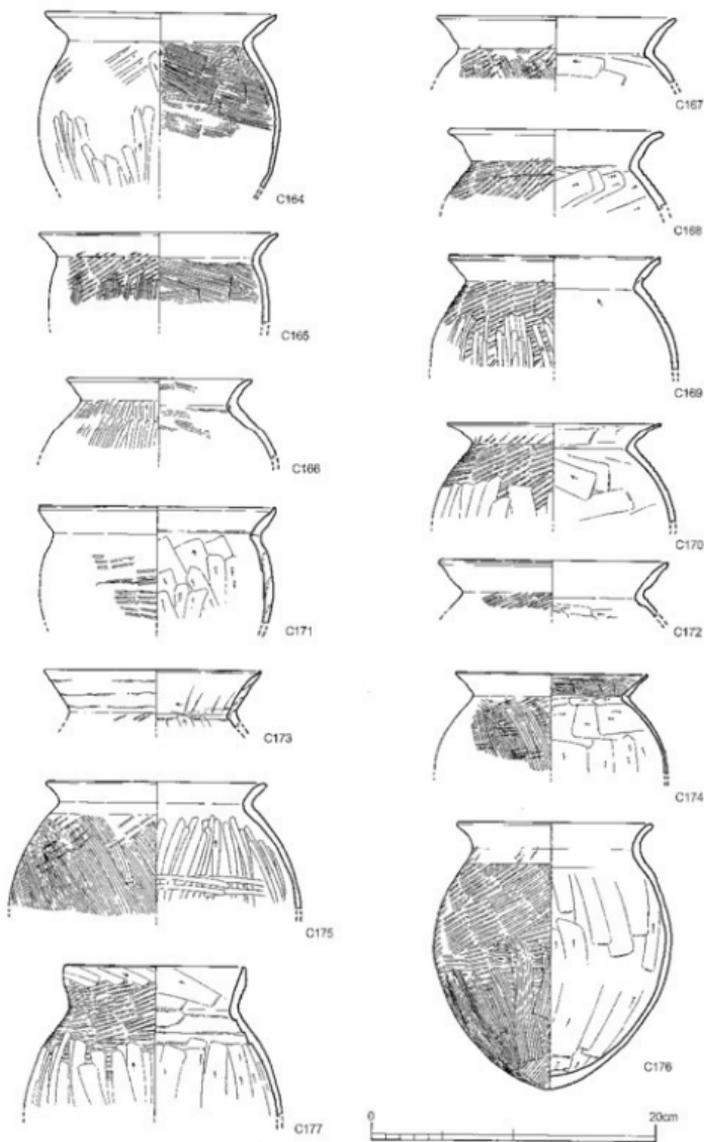


C151

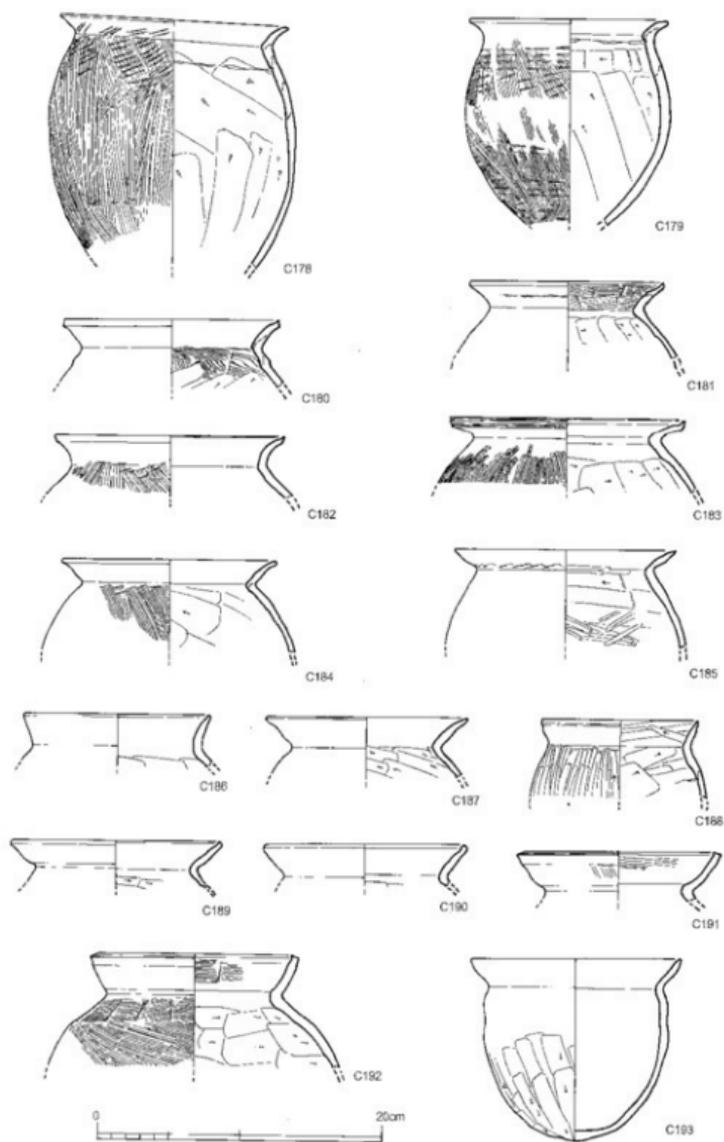
第58図 古式土師器⑨



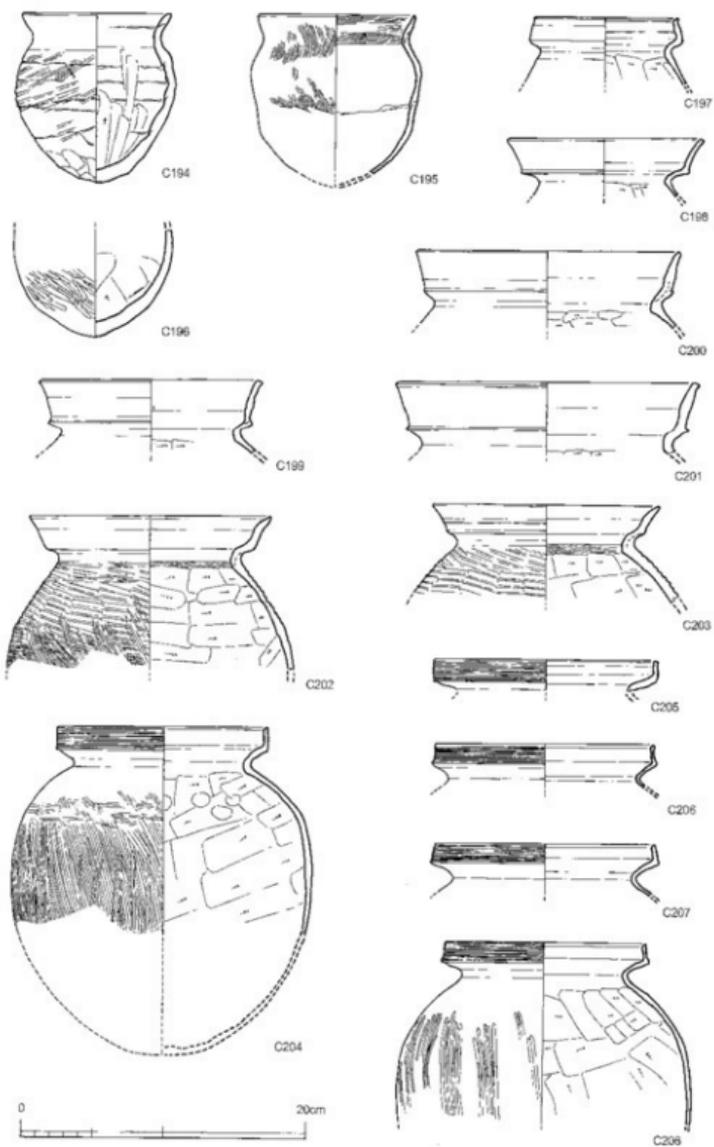
第59圖 古式土師器⑩



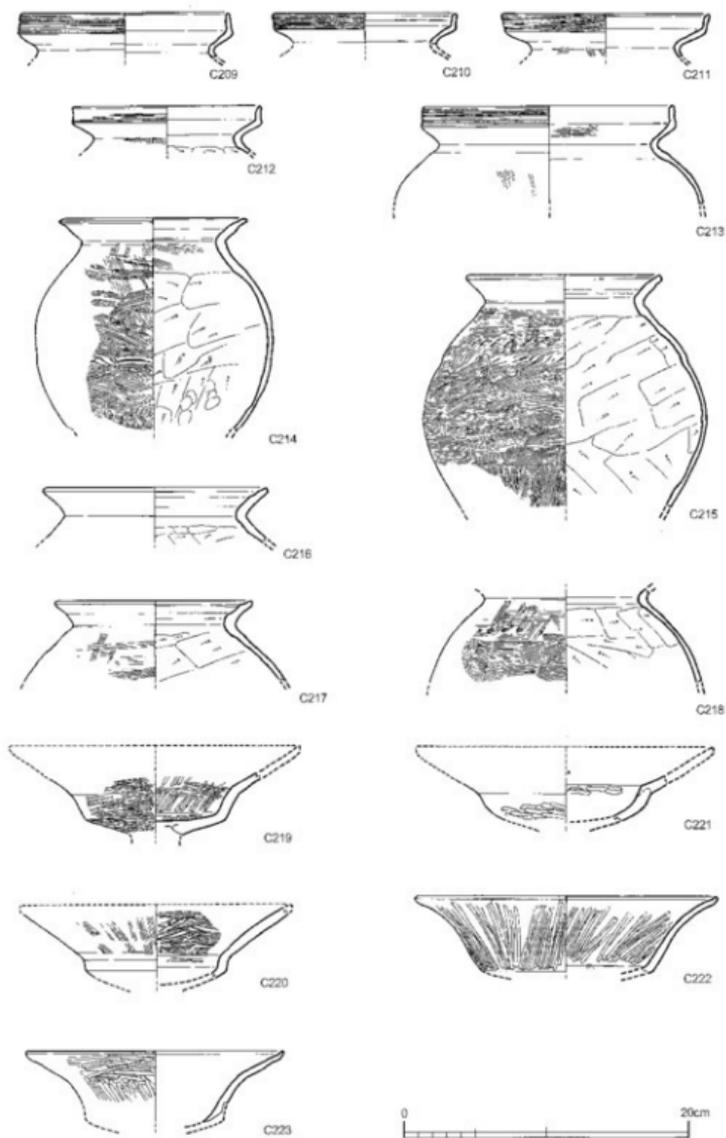
第60图 古式土師器①



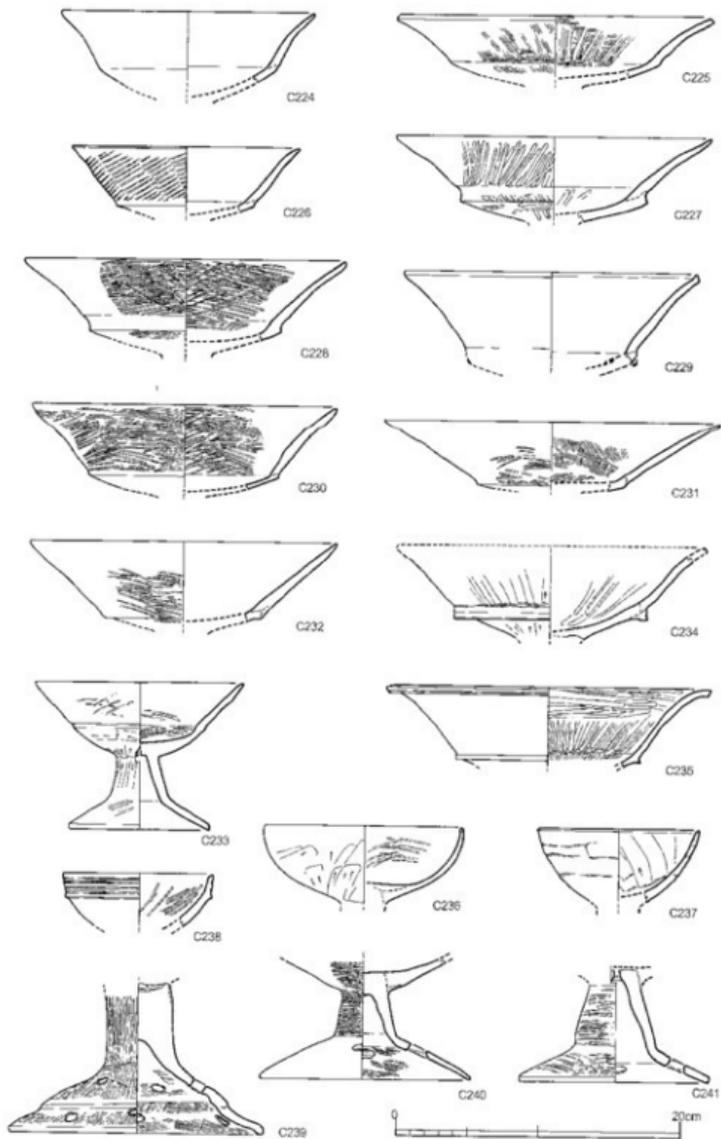
第 6 1 圖 古式土師器②



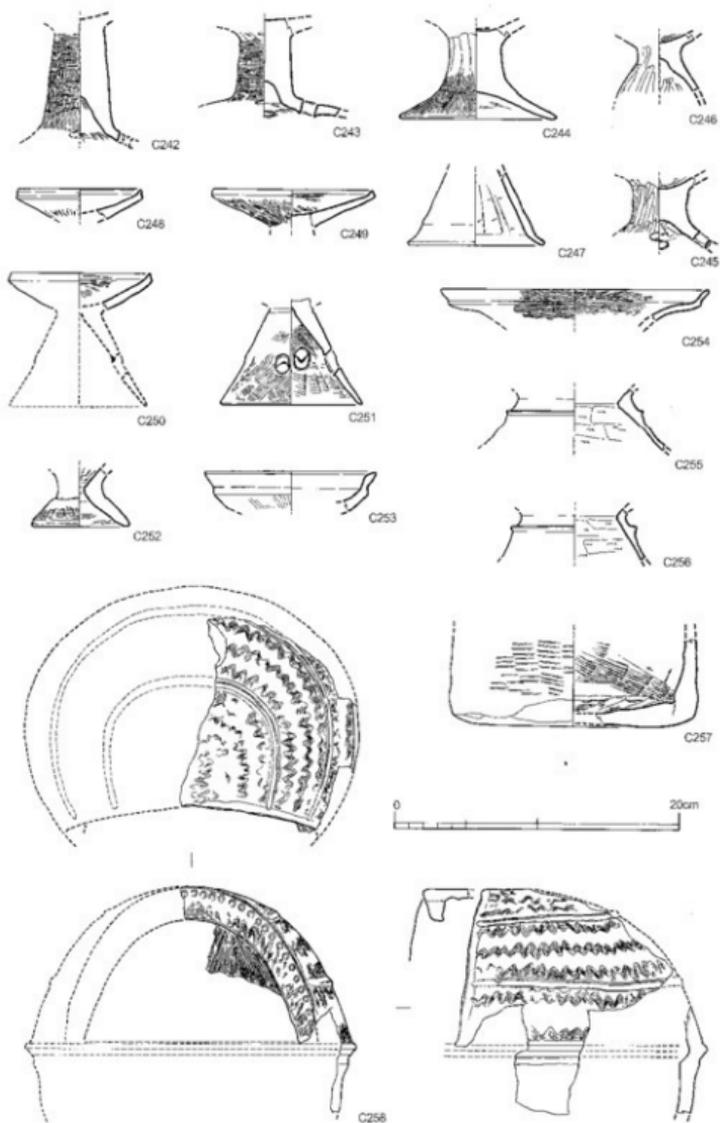
第 6 2 图 古式土師器⑬



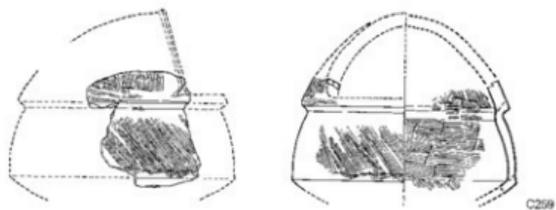
第 6 3 圖 古式土師器⑭



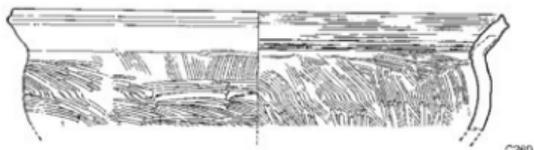
第64図 古式土師器⑤



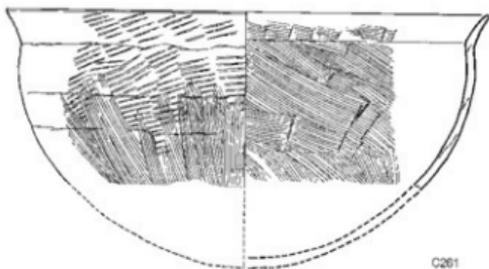
第 6 5 圖 古式土師器⑥



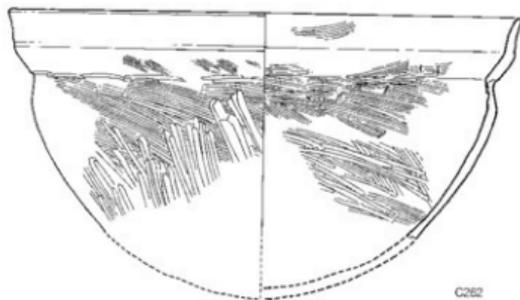
C259



C260



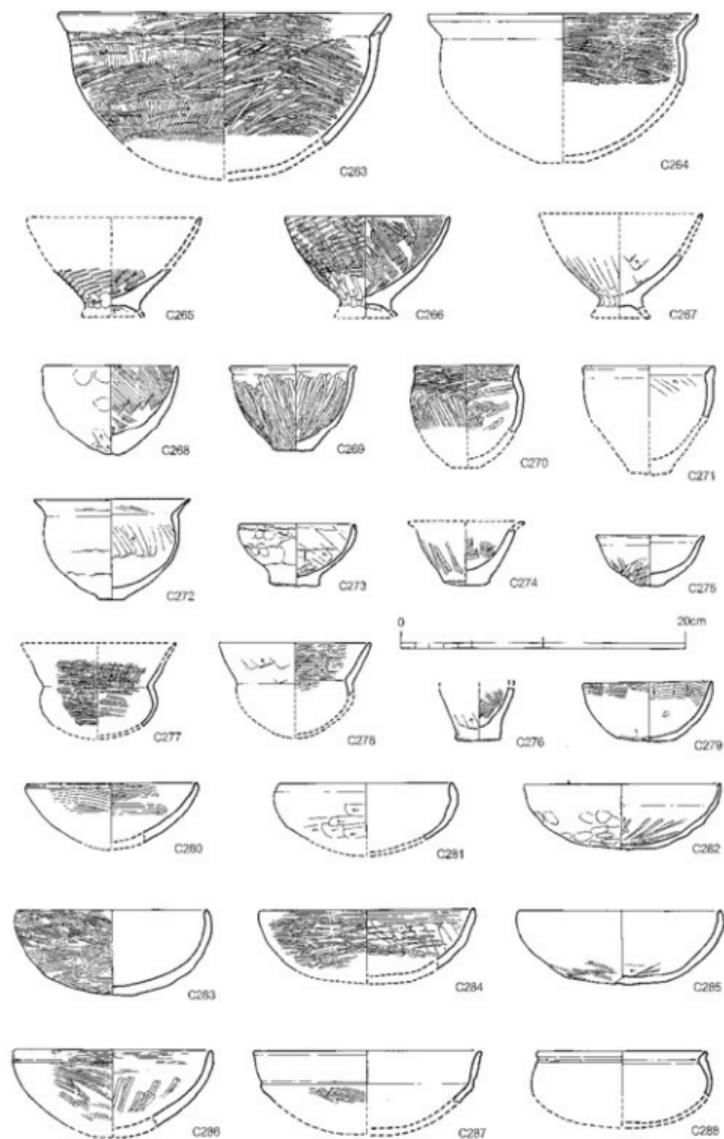
C261



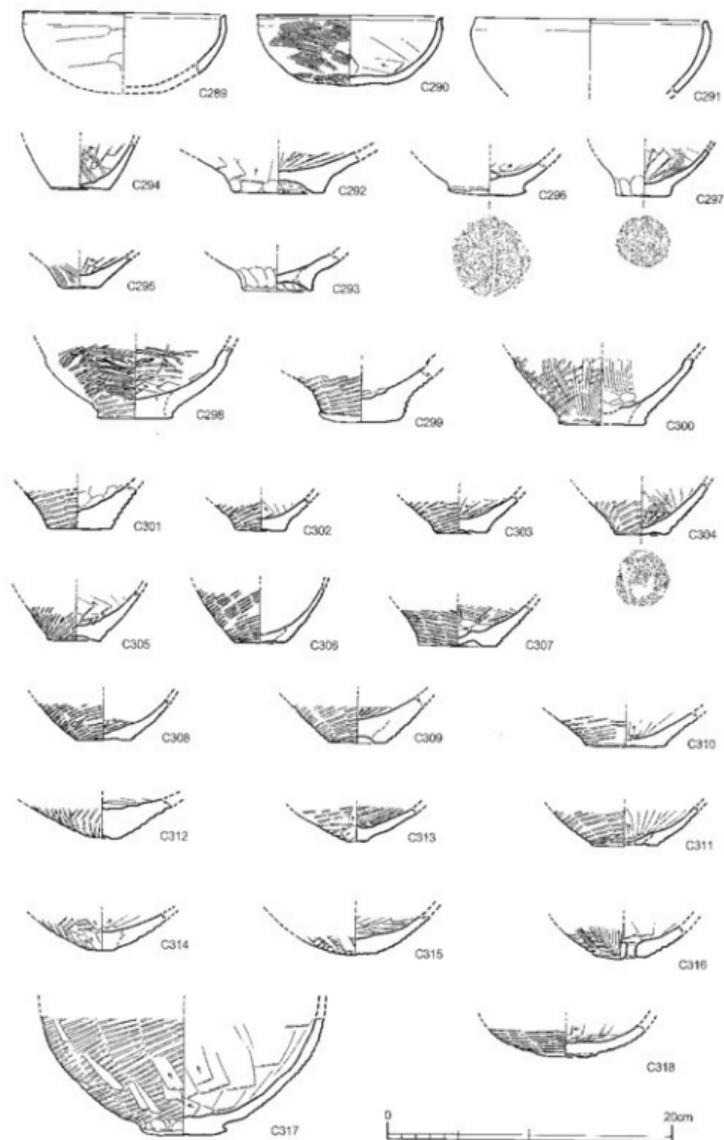
C262



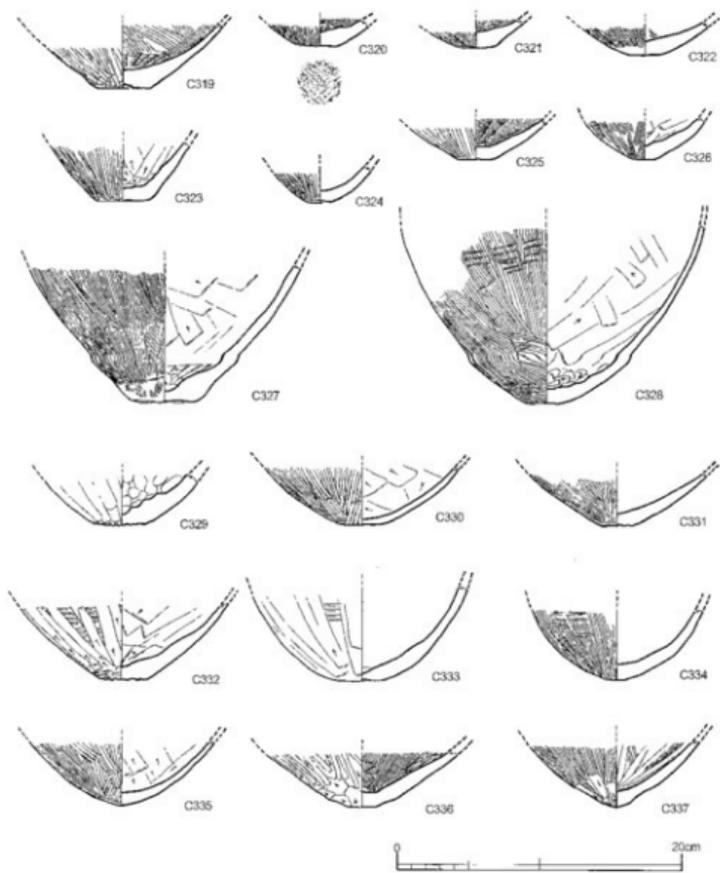
第 6 6 図 古式土師器①



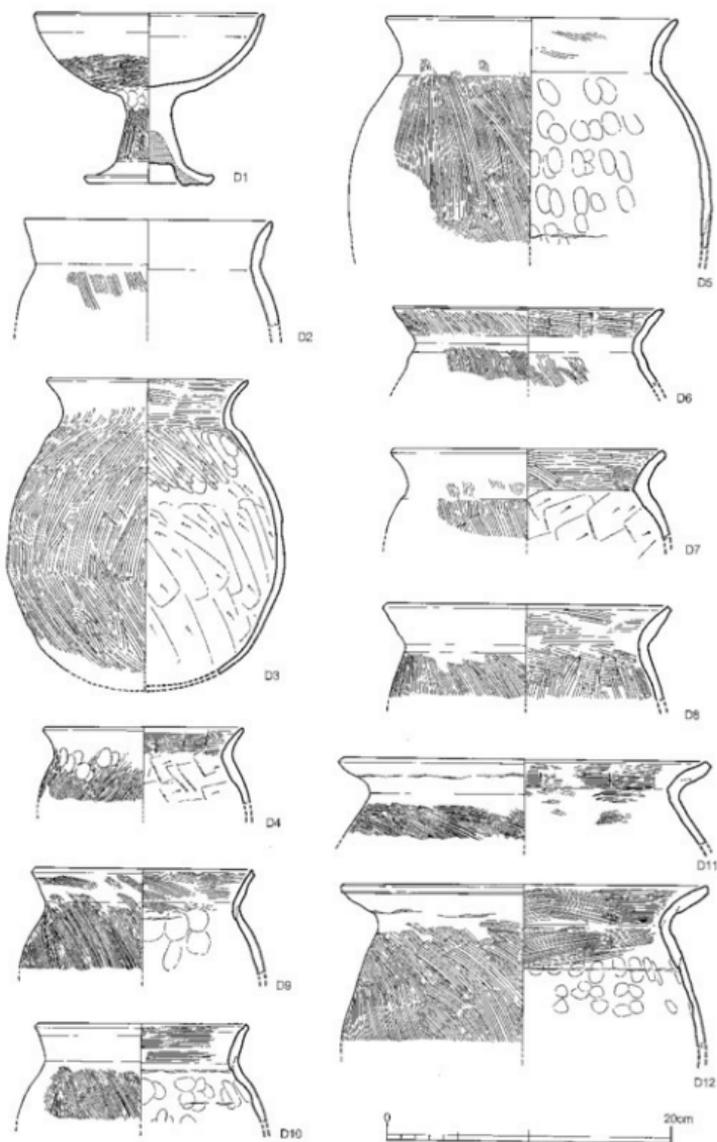
第 6 7 图 古式土師器⑩



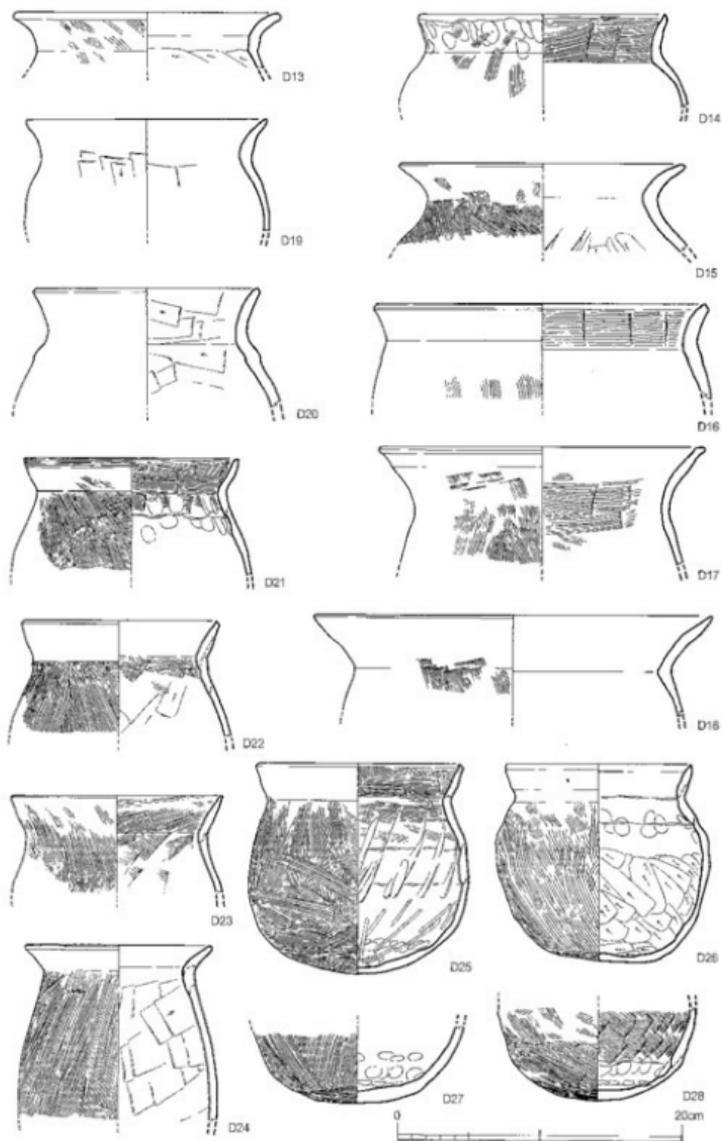
第68圖 古式土師器⑩



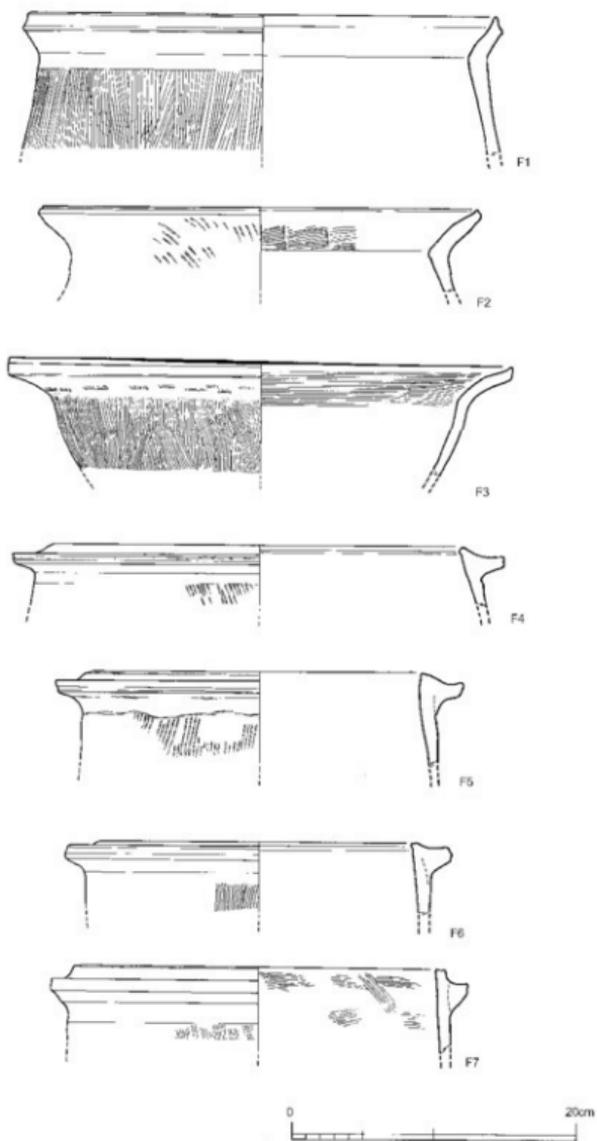
第69圖 古式土師器②



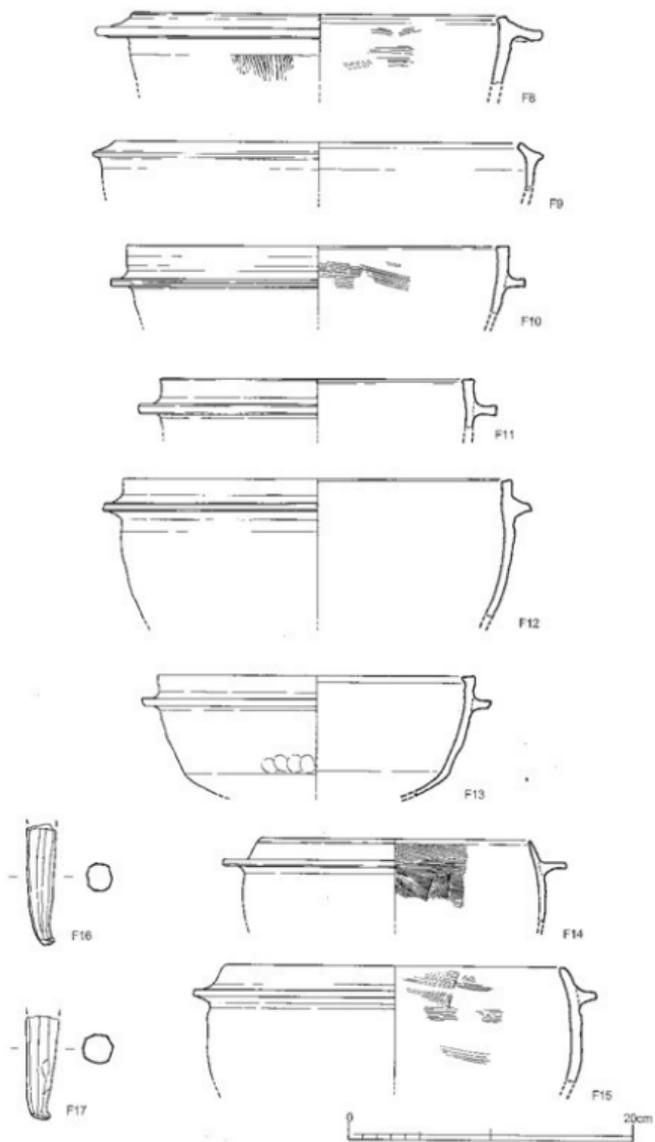
第70圖 土師器①



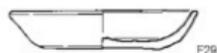
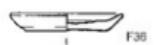
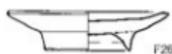
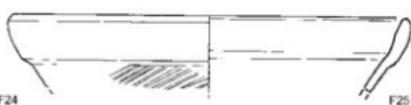
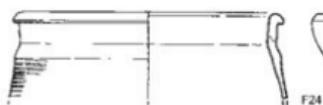
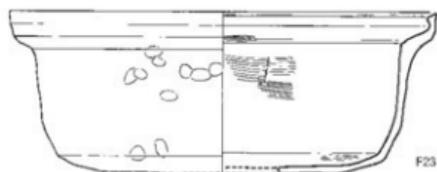
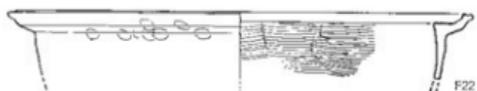
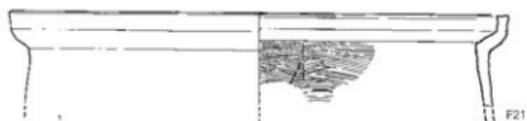
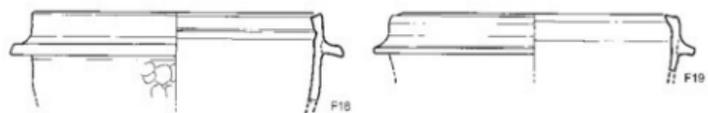
第71圖 土師器②



第72図 土師器③



第73图 土師器④



第74圖 土師器⑤

### 第3節 須恵器

ここでは、堂山遺跡出土の大量の遺物のなかで須恵器全般を扱うこととする。整理作業の初期段階に形態分類を行うという作業を経ていないため、細かい数量的な処理はすでにできない状態であるが、出土頻度では古墳時代後期と平安時代中期以降のものがほぼ同量で、飛鳥～平安時代前期のものが比較的少ない傾向が認められる。これは当遺跡における遺構の頻度とも合致すると思われる。

#### 1. 形態分類

各時期を通じて、機能性が連続し、なおかつ微妙な形態変化を如実に示す供膳形態の杯・椀を指標として形態分類の型式を設定した。なお、最も大きな型式単位として古墳時代（A類）、飛鳥～平安時代後期（B・C類）、平安時代中期以降（D・E類）という3つの画期を便宜的に設けている。なお、型式設定に際しては、田辺昭三氏・中村浩氏等による陶邑古窯址群における編年成果<sup>(1)</sup>、最近注目を集めている播磨南部における須恵器窯跡群における成果等<sup>(2)</sup>を参考に、従来の編年観を踏まえた上で行ったつもりである。以下、各々の形態分類についてみていこう。

##### (1) A類（第75図）

いわゆる古墳時代タイプの蓋杯を指標とする。

- A1……杯身は口径11～12cm前後、器高5cm前後のもので、全体的にシャープな仕上げである。たちあがりは高く、ほぼ直立する。口縁端面は内傾する凹状を呈する。底体部はやや深く、平らに近い。  
陶邑・田辺編年（以下省略）TK208～23型式、中村編年（以下省略）I型式3～4段階併行。
- A2……杯身は口径10～11cm、器高5cm前後のものである。たちあがりは高く、内傾し、端面は内傾する平坦面を呈する。底体部はやや深く、丸みを有する。  
杯蓋は口径12cm前後、器高4.5cm前後のものである。口縁部はほぼ垂直に下り、その端部はやや内傾する凹状を呈し、稜は鋭い断面三角形を呈する。天井部は口径に反して比較的高く、丸みを持つ。  
TK47型式・I型式5段階併行。
- A3……杯身は口径12cm前後、器高5cm前後のものである。たちあがりは高く、内傾して延びる。端部は丸く収めるものと、内傾する凹状を呈するものがある。底体部は丸みを有し、やや深い感を与える。杯蓋は口径13～14cm、器高4～5cmのものである。

口縁部はやや外方へ開き、端部は内傾する凹状ないしは平坦面を呈する。稜はやや鈍くなり、下部に鋭い凹線を巡らす。

MT15型式・Ⅱ型式1段階併行。

A4……杯身は口径13～1

4cm、器高5cm前後のものである。たちあがりは高く、内傾して延び、端部は鋭く収める。底体部はやや深く、平らに近い。

杯蓋は口径13～14cm、器高4.5cm前後のものである。口縁部はやや外方へ開いて延び、端部はやや鈍い凹状を呈する。稜は鈍い断面三角形を呈し、下部に鋭い凹線が走る。天井部はやや高く、丸みを有する。

TK10(古)型式・Ⅱ型式2段階併行。

A5……杯身は口径14～15cm、器高5cm弱のものである。たちあがりは内傾して延び、端部は丸く収める。底体部はやや浅くなり、やや丸みを有する。

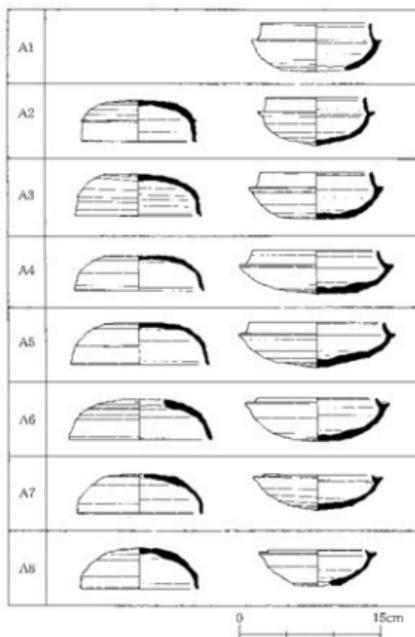
杯蓋は口径15cm前後、器高5cm前後のものである。口縁部はやや外方へ開いて長く延び、端部は鈍い内傾する凹状ないしは段を呈する。稜は鈍く、凹線が走る。天井部は比較的高く、丸みを有する。

TK10(新)型式・Ⅱ型式3段階併行。

A6……杯身は口径13cm前後、器高4～5cmのものである。たちあがりは短くなり、やや内弯気味に延び、端部は丸く収める。底体部は浅くなり、丸みをもつ平らなものが多い。杯蓋は口径14～15cm、器高3.5cm前後のものである。口縁部は外傾してまっすぐ延び、端部は丸く収める。稜はその痕跡を鈍い凹線によって判別できる程度になる。天井部はそう高くなく、丸みを有する。

TK43型式・Ⅱ型式4段階併行。

A7……杯身は口径11～12cm、器高3～5cmのものである。たちあがりは短く、やや内弯



第75図 須恵器の形態分類①

気味に延び、端部は丸く収める。体部は全体に丸みを有するが、底部はほとんど平らに近い。杯蓋は口径12～14cm、器高4～5cmのものである。天井部と口縁部の間にあった稜が消失し、天井部から口縁部にかけて丸くなだらかに下る。口縁端部は丸く収める。

TK209型式・Ⅱ型式5段階併行。

A8……杯身は口径10cm前後、器高3～4cmのものである。たちあがりは最も退化し、短くなる。体部は丸みを失い、直線的となり、底部は平らに近いものが多い。

杯蓋は口径11～13cm、器高3～4cmのものである。口縁部は外弯気味にやや短く延び、端部は丸く収める。天井部は丸みをもつが、平らに近い。

TK217(古)型式・Ⅱ型式6段階併行。

## (2) B類

いわゆる飛鳥時代タイプの杯身を指標とする。資料点数が少なく、細かい形態分類には至らない。高台の有無で2類に分けるが、B2類の方が後出することが知られる。陶邑・田辺編年Ⅲ期、中村編年Ⅲ型式併行。

B1……高台を有さないもの。古墳時代末の杯蓋を逆転させたそのままの形態を採るもの

(a)と、明らかに杯身を意識して平らな底部から直立気味に口縁部がたちあがる形態(b)の二者に細分できそうである。口径10～11cm、器高3～4cmを測る。

B2……高台径7～8cmを測るもの。幅が広く、比較的高い高台は底端部から底部中央に偏って「八」の字形に貼り付けられ、基本的には内端部で接地する。

## (3) C類

いわゆる奈良時代タイプの高台付杯身を指標とする。当該時期には杯蓋・杯身が明確な形態変化を示さないことが知られ、法量ならびに器種の多様化という変遷をたどる。すなわち、器種の構成・組成という視点から把握、分類すべきではあるが、当遺跡では資料数も限られ、細分するのは困難な状況である。そこで、ここでは法量にかかわらず杯身の高台の付される位置、その高さや端部の形状を把握して2類に分けた。

C1……杯身は底部外面の端部からやや中央に偏って高台が付されるものである。高台は直立するかやや外傾し、内端部で接地するものが多い。口縁部は外傾してまっすぐ延び、端部は丸く収める。

C2……杯身は高台がC1類より底端部に付され、ほぼ直立するやや弱々しいものとなる。高台は外端部で接地するようになる。口縁部の形態はC1類とほとんど変わらない。

#### (4) D類 (第76図)

蓋を伴わない椀を指標とする。形態分類を行うに際しては、高台の形態と大きさを軸にして、口縁部の形態もあわせて考慮している。

D1……前代の杯の形態を踏襲する貼り付け高台を底部端に有するものである。形態的にはC類の最終末として取り扱うべきかもしれないが、時間的なまとまりを加味してD類として扱っておく。この点については、同じ形態のものを杯または椀と呼称している点からも判るように器種名についてはまだ流動的である。高台の形態からさらに3つ分類できる。

a類は高く、内湾気味に延び

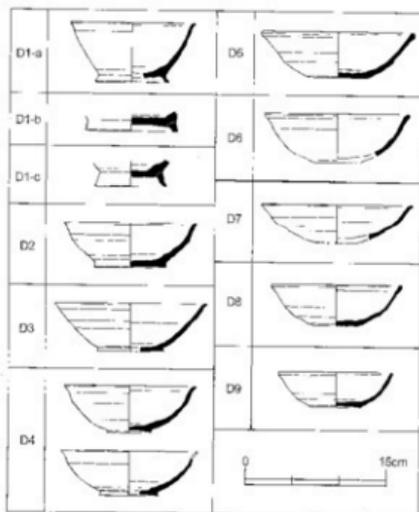
た後、内面に稜を有して外傾して延びる。b類は断面が丸みをもつ方形に近いもの。c類は弱々しく「八」の字形に延びるもので、端部は丸く収めるだけである。いずれも底部は平らで、体部はまっすぐ斜上方へたちあがるものと体部下半に丸みを有してたちあがるものがある。

D2……口径1.4cmを測るもので、平高台は口径に比して大きく、高く突出する。また、高台の側面は丁寧な仕上げである。体部はやや内湾気味に斜上方へ延び、中位からまっすぐに延びる。端部は丸く収め、顕著でないもののやや外傾する。

D3……口径1.6cm前後を測るもので、底径が大きく、比較的高く突出する平高台を有する。体部はまっすぐに延び、口縁部はわずかに外反する。

D4……口径1.6cm前後のもので、高い器高と高く突出するしっかりした平高台を有する。高台側面はナデによって丁寧に仕上げられる。体部は下半にやや丸みを有してたちあがり、口縁部は鋭く外反させる。

D5……口径1.5～1.6cmを測り、D3に比して底部平高台の突出度が小さくなり、器高もわずかに低くなる。体部～口縁部の形態変化は顕著ではないが、端部を肉厚に丸く収めるものもある。



第76図 須恵器の形態分類②

D6……口径は15～16cmを測り、器高は5cm前後である。底部の平高台はわずかにその痕跡をとどめるだけのものとなる。体部は内弯気味にたちあがり、口縁部はわずかに外反するが、丸く収めるだけとなる。

魚住・楠A併行。

D7……口径15～16cm前後、器高4.5cm前後のものである。口径に比して器高が低くなり、高台は消失する。D6類の椀に比して体部が外開きとなり、やや直線的となる。口縁端部は丸く収める。

魚住・楠B併行。

D8……口径14cm前後、器高4.5cm前後のものである。底部の形態を除くと、D6類の椀を縮小させたような形態を採り、D7類と比べると口径が小さくなっている点を看取できる。口径の縮小化に伴って体部下半に丸みが出ており、口縁部は内弯する。

備前・Ⅱ期併行。<sup>(3)</sup>

D9……口径12cm前後、器高3.5cmのものである。底面はやや凹んでおり、体部は内弯気味にたちあがり、口縁端部はやや外方へ肥厚するもので、上方へも鋭くつまみ上げられる。

備前・Ⅲ期併行。

## (5) E類

須恵器の焼成であり、D類に併行すると思われるものの、D類に含むことができない形態のものを指す。瓦器椀と類似した形態を採るもの(F78)や瓦器椀の製作手法を用いたと思われるもの(F17)がある。いずれも須恵器としてはやや趣を異にするものであり、現段階では類例は管見に触れず、細かい形態分類には至らない。

## 2. 古墳時代の須恵器(第77～85図)

先述したように、古墳時代の杯蓋・杯身はその形態特徴から8類に分けることができた。そして、それぞれを陶邑における型式編年に対応させてみた。これらを出土量からみると、A7～A8類が最も頻度が高く、その他は散在的な傾向がある。

まず、蓋杯の分類作業の中で若干気づいた点を示しておこう。陶邑の編年を軸に分類したわけだから、個々の形態特徴には大きな相違点を見い出せないことは言うまでもない。また、調整手法についても陶邑では中村編年(以下省略)Ⅱ型式5段階以降ヘラ切り未調整の製品が登場するのに対応するようにして堂山遺跡でもA7類から始まっている。これらを法量からみると、陶邑ではⅡ型式から飛躍的な大型化が始まり、3段階に杯蓋の口径で15cm前後の最大と

なり、これ以後縮小化し、最終末の6段階では杯蓋の口径で約10cmにまで縮小する。堂山遺跡でもA5類で最大径の14~15cmを測るが、最終末のA8類の杯蓋の口径は12cm前後にまで縮小するとどまる。A8類として設定した蓋杯に続く型式は一応形態特徴からみれば考えられないものの、蓋と身が逆転した型式のものが当遺跡では確認されておらず、今後検討の余地があると言わざるを得ない。しかしながら、播磨西南部における古墳時代の須恵器の蓋杯の変遷は6世紀後半までは陶色と軌を一にするものの、6世紀末葉~7世紀前半には法量の保守性という地色をもつて、型式変遷を示すことが看取できそうである。

次に、蓋杯以外の器種についてみていこう。有蓋高杯、無蓋高杯、高杯蓋、椀、甕、壺、壺蓋、提瓶、横瓶、甕というように古墳時代の須恵器の一通りの器種が出土している。特に陶色との比較の上で形態的にも手法的にも大きく変わるものはなく、形態変化が顕著でないものが多く、蓋杯と同じように細かく分類するには至らない。

続いて、個々の資料で特徴的なものを順に取り上げよう。

D10はほぼ垂直に延びる高いちあがりや浅く丸みを持つ底体部から成る古式を呈する杯身である。特に注目されるのは、底体部外面の全面にわたって1単位が小さい静止ヘラ削り調整を施している点であり、その他の調整はいずれも丁寧で鋭く仕上げている。これらの特徴から、いわゆる初期須恵器の範疇で把握できるものと思われるが、陶色では管見に触れない資料である。

D44は大器種ではあるが、器型は不明である。斜め上方へ延び、丸みをもった断面方形の突帯を有した後、「く」字形に屈曲して延びる。9線1条の櫛溝波状文を4段施し、突帯上には櫛溝列点文を施す。胎土・焼成からみると、古墳時代の中でもそれほど古いものとも新しいものとも思えないが、器形とともに細かい型式比定はできない。

D88はA7類の杯蓋で、天井部外面に広葉樹と思われる葉脈痕が明瞭に遺存するものである。これは成形・調整終了後の乾燥段階に遺存したものである。蓋杯の天井部ないしは底体部の外面にわら状の植物繊維痕ないしは板状圧痕（叩き板か）のある製品を見ることができ、そうした中で当資料は特異なものである。

D161はA2類の有蓋高杯の脚部片である。完存していないものの、\*形のヘラ記号が認められる。陶色における併行期の類例は陶器山200-I号窯、陶器山71号窯の製品中に認められ、II型式2~4段階の高蔵寺44-II号窯でも認められる。

D29・D161は直口壺と思われる口頸部で、前者は中位に凹線が巡る。形態特徴は類似しており、外傾してまっすぐ延び、端面はわずかに内傾する凹状を呈する。調整手法は特徴的で、縦方向に刷毛目状の条痕が遺存する。条痕はいずれも回転ナデによってスリ消されており、平行叩き目の可能性も捨てられないが、おそらく刷毛目であろう。この調整とともに胎土・色調の上からも他の須恵器とは趣を異し、前者は砂粒を含まず、明灰色を呈し、後者は砂粒を多

く含むものの堅緻で、暗赤褐色を呈する。古式を呈するものと思われるが、即断できない。D172は壺の体部片と思われるもので、纏播列点文から成る文様帯の下位にヘラ描きと思われる斜格子文が刻まれる。小片のため、体部を全周する文様帯を構成していたものか不明である。

D173・D174は同一個体と思われる甕の体部片である。外面には通有の平行叩きの後カキ目調整を施すが、内面のあて痕は同心円文ではなく車輪文と呼ばれるものである。車輪文はそれが何らかの意味をもつような特別な文様というわけではなく、木材年輪をモデルとした同心円文と木材の亀裂をモデルとした放射状文を組み合わせたもので、木材の木口面の特徴を表現しただけのものであることが知られる<sup>(6)</sup>。また、その分布は岐阜県～熊本県にわたる広範囲で、6世紀後半から9世紀まで存在することも知られる。当資料は時期比定こそ明確ではないが、その類例のひとつとして数えられよう。

以上みてきたように、古墳時代の須恵器は5世紀後半から7世紀前半までの間で、出土量の傾度差が認められるものの、ほとんどの器種を網羅していると言えよう。

最後に、播磨における須恵器窯の展開と関連づけて堂山遺跡の古墳時代の須恵器について考えてみよう。

播磨においていわゆる地方窯と呼ばれる古墳時代の須恵器窯は50基あまりが確認されている<sup>(7)</sup>。しかしながら、その実態は発掘調査例も少なく、採集資料から垣間見ることができずに過ぎない。現在知り得る範囲の中で、最も古い型式の須恵器を生産しているのは相生市那波野丸山窯跡群で、陶邑Ⅰ型式3～4段階に併行するものである。特に、3号窯では硬質土師質の埴輪を同時に焼成している。続いて、陶邑Ⅰ型式5段階併行段階の揖保郡御津町碓岩窯跡がある<sup>(8)</sup>。しかしながら、播磨では南部を中心に古墳出土の遺物をはじめとする初期須恵器の類例が増加し、初期須恵器窯の存在も従来より指摘されてきている<sup>(10)</sup>。今回わずか1点を確認したにすぎないが、静止ヘラ削り調整の杯身で、陶邑に類例をみない形態のものが堂山遺跡でも出土している。また、朝鮮半島との何らかのつながりを示唆する韓式系土器も出土しており、今後初期須恵器窯の確認が期待されるところである。

陶邑のⅡ型式段階に併行する生産規模のやや大きな窯跡として、東より明石市鴨池窯跡群<sup>(11)</sup>、姫路市青山桜峠窯跡群<sup>(12)</sup>、先述した那波野丸山窯跡群をあげることができる。その生産は前二者が陶邑Ⅱ型式2段階併行期より開始され、古墳時代を通じて生産が存続する点で共通する。那波野丸山窯跡群は前代より続き、古墳時代を通じて存続したものである。そして、陶邑Ⅱ型式4段階併行期には播磨各地で単発的に生産も開始される。

以上概観してきた須恵器窯の展開を陶邑との関連でみると興味深い点がある。まず、揖保郡揖保川町笠田古墳の埴輪塚部より出土した資料がある。これは6世紀初頭とされる有蓋高杯、子持壺、壺、甕等である。胎土分析の結果、前二者は直線距離にして約1kmの那波野丸山窯跡

群の製品（肉眼観察でも認定可能である）、後二者は陶邑の製品であることが判った。<sup>(14)</sup>この事実は、播磨でも揖保川流域で須恵器窯が成立しているにもかかわらず、陶邑製品の供給が行われていることを示す。該期の地方窯の成立については中央政權との交渉を通じて行われた技術援助によるとされ、その背景には特定地域への供給目的があったとされる。<sup>(15)</sup>那波野丸山窯跡群の成立については笹田古墳や龍野市タイ山古墳群への副葬という需要に応じたものであろうが、陶邑への依存を断ち切れなかった状況が窺えよう。そして、横穴式石室への須恵器副葬という葬送儀礼の普及に伴って、ある特定地域の大量需要に応える形で成立したのが、陶邑Ⅱ型式2段階、4段階併行期に操業を開始するものと言える。つまり、これらの須恵器窯は群集墓の盛行と軌を一にしながら、陶邑への依存度が徐々に減少していく傾向として把握されよう。播磨では陶邑Ⅱ型式4段階併行期には集団内の須恵器需要を賄い得るようになったものとも推定できよう。こうした状況は、堂山遺跡出土の須恵器が肉眼観察ではあるものの、A7類以降のものも多くが那波野丸山窯跡群の製品である可能性が高いことから容認できよう。そして、先に蓋杯の型式分類にもとづく変遷でも述べたように、地域色の創出と言えるべき法量の変化は、陶邑との関係を如実に反映しているものとして把握できるのではないだろうか。

### 3. 飛鳥～平安時代前期の須恵器（第86～92図）

先述したように、当該期の須恵器は堂山遺跡の須恵器の中では出土量も多くなく、細かい分類は行えなかった。分類作業の中で気づいた点をまとめて、特徴的な遺物について検討しよう。

まず、杯Bには特徴的な傾向を指摘できない。資料数が少なく、古墳時代末にみられた地域色は時代が代わって再び薄れてしまったのだろうか。ただ、杯B1はいずれも器壁の厚いもので、陶邑との比較からすれば形態・手法の上で稚拙な感を受ける。さらに、底部を平らに仕上げをあまり意識していないようにも思われる。

C類については法量及び器種の多様化を示す時期のもので、それぞれの併行関係に基づく分類はできなかった。杯Cで出土量を比較すると、杯C2類の方が杯C1類より多い傾向がある。また、杯C2類の中でも新しい要素の強いものが多い。なお、杯Cの中には底部外面の高台内側に沿って爪形状圧痕の遺存する資料がある（E29）。

杯以外の器種としては、杯蓋、皿、稜碗、壺、甕、横瓶等がある。特徴的なものを順にみていこう。

E37は壺で、底部外面に粘土接合痕が明瞭に遺存する。体部内面は下から順に指頭圧痕、不整ナデ、粗い横刷毛（5本/cm）の調整が施される。

E38は壺の底部で、体部外面下半をやや粗雑な静止ヘラ削り調整を施すのが特徴的である。

E97は甕で、体部中位を欠くものの完形に復原できる。体部外面は通常の平行叩きではあるが、体部内面下半に遺存するアテ具痕は外面の平行叩きと同じものである。類例としては加古川・札馬47号窯<sup>(17)</sup>(図版28-14)、同・札馬44号窯<sup>(18)</sup>(図版32-27)をあげることができる。

E99は埴輪通有の甕の体部で肩部に直径8cmの円形の範囲で自然軸のかかっている部分<sup>(19)</sup>が認められる。これは焼成時に杯身等の小型器種を乗せていたために生じたものと思われる。

#### 4. 平安時代中期以降の須恵器<sup>(19)</sup> (第90~100図)

当該期の須恵器については、発掘調査の進展に伴って著しく類例が増加し、窯跡の発掘調査も進展し、最近研究成果が蓄積されてきつつある。しかしながら、いまだ明確な編年が確立したとは決して言えない状況である。そこで、堂山遺跡の資料を形態分類を通じて分析し、従来の編年観を整理しながら、碗を中心にまとめていきたい。なお、出土資料のうち、碗以外の器種については最後にまとめて扱う。

まず、先述した碗の分類にもとづいて、底部外面の調整手法を中心に、窯跡及び他遺跡の類例を明示しながら、それぞれに検討を加えよう。また、あわせて時期の問題についても考えていこう。

D1-a類は回転ヘラ切りの後高台を付す。類例は管見に触れないが、形態特徴からすれば、加古川・札馬24号窯の杯A<sup>(20)</sup>(図版32-1)・杯B<sup>(21)</sup>(図版32-2)、同・札馬45号窯の杯B<sup>(22)</sup>(図版33-2)、相生・鶴亀1号窯の碗A<sup>(23)</sup>(第5図-9)等の資料が示唆的である。札馬24号窯の杯Aは回転ヘラ削り、札馬45号窯の杯Bは回転糸切り、札馬24号窯の杯Bと鶴亀1号窯の碗Aは不明である。調整手法からみれば、回転ヘラ削り→回転ヘラ切り→回転糸切りの順に変遷するのが最も妥当性をもつと思われる。すなわち、札馬24号窯杯A→堂山D1-a類碗→札馬45号窯杯Bと変遷すると考えられる。なお、鶴亀1号窯ではまだ蓋が存在することから、ここでは大勢に影響しないものの、札馬24号窯より形式的に先行するものと思われる。具体的な根拠は示し得ないが、10世紀前半でもやや新しい時期の所産としておく。

D1-b類については体部の形態が不明ではあるが、回転糸切り後高台を付するものである。この中でも高台径の相違が認められ、おそらく一時期のものではなく、幅をもたせて考えねばならないだろう。形式的には高台径の大きいものから小さいものへと変化すると考えられ、F53→F54→F56→F5・F55→F57と変遷し、10世紀後半~11世紀後半の間に収まるものとしておく。なお、F54は加古川・札馬5号窯の碗D類に形態的に類似しており、F57は相生・緑ヶ丘落矢ヶ谷1号窯の体部中位に突帯を有する碗(第16図-5)に類似している。このような点からすると、相生古窯跡群で認められるいわゆる突帯碗は奈良時代金属器模倣タイプの稜碗の系譜で扱えられるものかもしれない。

D1-c類はD1-b類と同様突帯柄の可能性を持つものである。回転ヘラ切りと思われるものと回転糸切りのものがある。先述したE類に同形態の高台を有するものがあるが、底部を平らに仕上げる意識が働いている点、器壁の厚さの相違からE類とは分類した。高台の形態からすれば、a類の系譜で扱えられるかもしれないが、類例がなく、これ以上言及できない。

D2類は回転糸切り未調整で、高い平高台のものである。高台の側面は回転ナデで丁寧に仕上げている。D2類において、普遍的な手法とは思えないが、回転糸切りの後平高台の端部に粘土を補充し、通常の回転糸切り未調整のものと同じ形態の平高台を呈するように仕上げるF62のような資料もある。D2類の類例としては加古川・札幌5号窯<sup>(24)</sup>の椀B(図版35-5・8・11)が形態的には最も近い。この札幌5号窯の資料は回転糸切り平高台椀の成立について特に示唆的である。5類に分けられた椀のうち、底部ヘラ切り未調整の椀Aと底部糸切り未調整の椀Bを同一床面上で検出したという。窯体には3枚前後の重複状態が確認されているにもかかわらず、そのどの床面に対応するものかは明示されていない。さらに、奈良時代に登場した金属器模倣タイプの稜椀の系譜の上で扱えられたとする椀D、この後出として位置づけられる椀Eも焼成されている。椀A・Bと椀D、椀Eの前後関係については出土層位を明示しておらず、不明と言わざるを得ない。また一方で、相生・入野6号窯<sup>(25)</sup>では、回転ヘラ切り高台椀と回転糸切り平高台椀との併存が確認されている。このようにして、従来より判然としないう糸切り平高台椀の出現に関する資料も増えており、今後の資料補強の望まれるところである。なお、D2類の時期比定については、札幌で明確な根拠が示されていないものの、10世紀後半とされているのを援用しておく。

D3類は静止糸切り未調整で、比較的高い平高台をもつもので、体部は直線的である。形態的特徴からは、堂山D4類の椀に分類できる緑ヶ丘落矢ヶ谷1号窯<sup>(26)</sup>の椀C(第16図-4)を類例としてあげ得るが、底部の調整は全く異なる。底部静止糸切り未調整という点では回転糸切り未調整のD4類より古相を示していると言えそうであるが、平高台の形態をみれば型式差を見出し難い。また、D2類と比べると、底径には大きな差がないものの、平高台の突出度は小さくなり、新しい要素を看取できる。これらの点を考慮すれば、D3類はD2類よりも新しいことを指摘できるが、D4類との前後関係は現段階では不明である。

D4類からD9類までは、いずれも回転糸切り未調整で、順に変遷すると考えている。D4類で糸切り平高台の椀として確立してから後、D5類、D6類と口径が顕著な変化を示さず、平高台が退化する傾向をみせながら、器形が微妙に変化する。そして、D8類からD9類までは器高が顕著な変化をみせず、口径が縮小する傾向を示す。それぞれの代表的な類例を求めると、D4類は相生古窯跡群<sup>(27)</sup>の椀Cを、D6類は魚住古窯跡群<sup>(28)</sup>の椀Aを、D7類は魚住・椀Bを、D8類は備前焼Ⅱ期の椀を、D9類は備前焼Ⅲ期の椀をあげることができる。

さらに、ここで注視しておかねばならないことは、D4類併行期とされる椀がその生産地に

よってバリエーションが認められるようで、一概に把えることは現状では困難であるということである。当遺跡においては、F59の資料を除けば、ほぼ相生産として妥当性もち、形態特徴として体部中位に屈曲点を有する点や口縁端部が外反する点があげられる。一方、併行期とされる神出・老ノ口5号窯では、体部中位に沈線<sup>(30)</sup>を有する資料(fig.43-44・45)がある。両者は先述した札幌5号窯の椀D・椀Eの系譜で把えられるものとできそうであるが、現状では明らかにできない。仮に、両者が同一型式に属するものとすれば、今後の編年作業はより複雑となり、各古窯跡群単位での細かい整理が必要となろう。

以上、椀について検討を加えてきたが、ここで敢えて時期比定についてまとめておく。<sup>(31)</sup>D1-a類は10世紀前半、D1-b・c類は10世紀後半～11世紀後半、D2類は10世紀後半、D3類は11世紀前半～後半、D4類は11世紀後半、D5類は12世紀前半、D6類は12世紀後半、D7類は13世紀前半、D8類は14世紀後半、D9類は14世紀前半というおおよその絶対年代を考えておく。

ところで、これらの椀は肉眼観察の結果、D1～D4類のもののほとんどが相生古窯跡群の製品、D8～D9類のものが備前古窯跡群の製品であることが判っている。なお、D5～D7類についてはいわゆる東播系のものでなく、相生産とも備前産とも言えるもので、現段階では産地を限定できない。

総じて、椀の中でも特徴的なものについて若干触れておく。

F1・F147はD3類で、先述したように底部外面静止糸切り未調整で、体部に火だすきが遺存するものである。F28はD5類の底部で、回転糸切り後布目圧痕と棒状工具の圧痕が3本以上遺存するものである。F41はD9類の底体部で、外底面に墨書が認められる。欠損しているため、正確な判読は困難であるが、「目」の部首に属するそれほど画数の多くない文字が書かれているものと思われる。沼井からF42・F43・漆器椀とともに出土していることも合わせて興味深い資料である。F124・F125はD4類の大型椀で体部中位に突帯を有するものである。F161はD9類の底体部で、底部外面の回転糸切りを部分的にスリ消している。このスリ消しはあたかも回転糸切りの後に回転ヘラ切りを重ねて施したかのようである。

さて、椀以外の器種では、皿、杯、壺、鉢を確認している。なお、甕は現状では確認していない。

皿は大きく3種類に分けられる。底部外面の調整とその生産地からみて、D1類は回転ヘラ切り未調整のやや突出する平高台で、D4類は回転糸切り未調整の高く突出する平高台で、両者とも相生古窯跡群産、D7・D8類は高台を有さない回転糸切り未調整の小皿で、D7類は魚住古窯跡群産、D8類は備前古窯跡群産であることがわかっていく。

壺には小型のもの(F162)と大型で肩部に2条の突帯を有するもの(F46・F13

6)がある。いずれも相生古窯跡群の製品と思われる。

鉢は柄の次にまとまった量出土している器種である。F44・F126・F127・F133は具体的にどの柄と併行するものか明示できないが、いずれも相生古窯跡群の製品と思われる。D6類～D9類としたものは、いずれも魚住古窯跡群の製品で、D6類は魚住古窯跡群・鉢B類、D7類は魚住・鉢C類に分類できるものである。なお、鉢はD8類からD9類へ変遷する際に、焼成後の発色が青灰色から灰白色へと変化し、口縁部の重ね焼痕が真黒になる傾向が認められる。

最後に、須恵器の流通面からまとめておく。上述してきたように、肉眼観察という消極的な確証ではあるが、堂山遺跡から出土した当該期の須恵器は相生古窯跡群、魚住古窯跡群、備前古窯跡群の製品が含まれていることはほぼ確実である。形態分類で言えば、D1類からD4類までのいずれの器種も相生産、D6類からD9類までの鉢は魚住産、D8類～D9類の柄は備前産ということになる。なお、D5類からD7類までの柄については、肉眼観察による限りでは相生産として大過ないと思われるが、現段階では確証が得られないため、保留しておく。また、絶対年代に取って換言するなら、距離的にも比較的近接し、その生産が存続している間は相生古窯跡群の消費地のひとつとしてもっばら展開していたと言える。そして、12世紀後半以降、鉢については魚住古窯跡群の消費地として、魚住古窯跡群で柄の生産が絶えたとされる13世紀後半以降は柄については備前古窯跡群の消費地のひとつを構成していたと言えよう。さらに、鉢については魚住古窯跡群からの供給が続いている14世紀前半において、備前古窯跡群からの供給も併せて行われている状況も看取できる。

以上、さまざまな点について概括してきたが、当該期の須恵器についてはいまだ妥当性をもつ編年が確立しているとは言い難く、今後に残された課題は非常に多岐にわたる。播磨国内だけでなく、隣接地域を含めた古窯跡群において類例が増加し、細かい編年作業が進展してくれば、自ずと堂山遺跡における当該期の須恵器の位置づけも容易に行い得るであろう。商品流通という立場からすれば、その生産地は胎土分析等によってある一定度の化学的な実証も得られるであろう。また、沼井での漆器柄と備前産とされる柄の共伴例などは、当該期における須恵器の存続そのものの位置づけを考える上で興味ある資料であろう。さらに、今後検討を重ねることによって、さまざまな問題が派生してくるであろう。しかしながら、当該期においてまとまった資料を提供できた点で評価されるものと思われる。

(註)

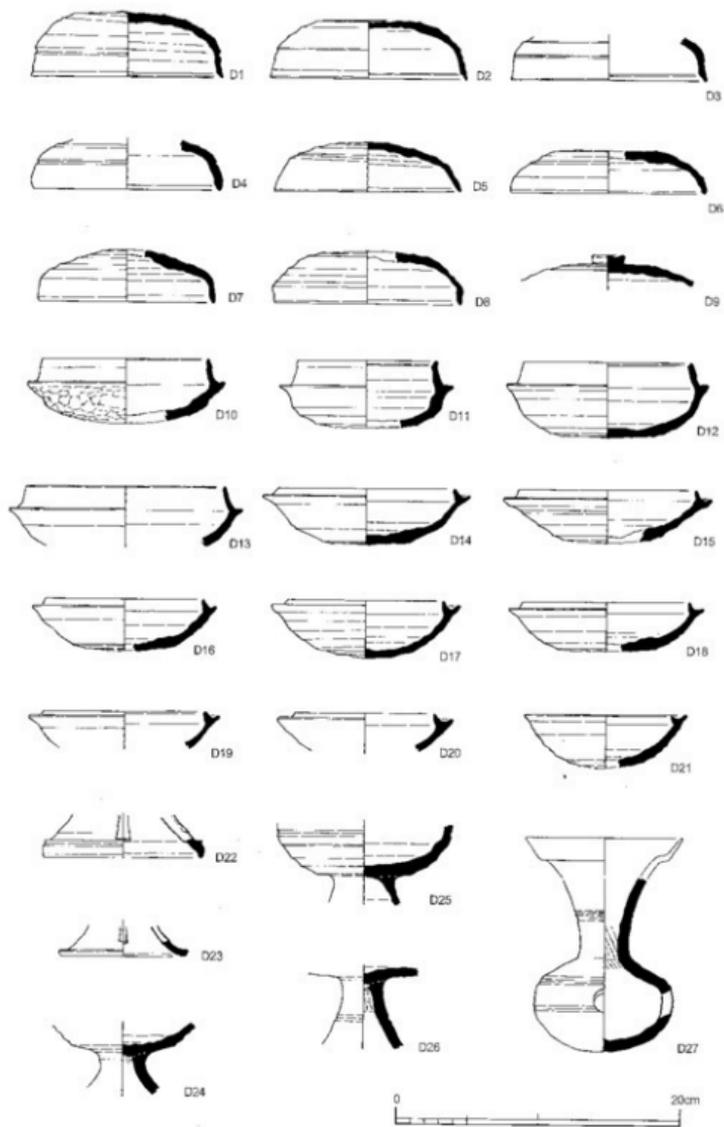
(1) (ア) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(平安学陶考古クラブ) 1966年

(イ) 中村浩「和泉陶邑窯出上異物の時期編年」(『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯)

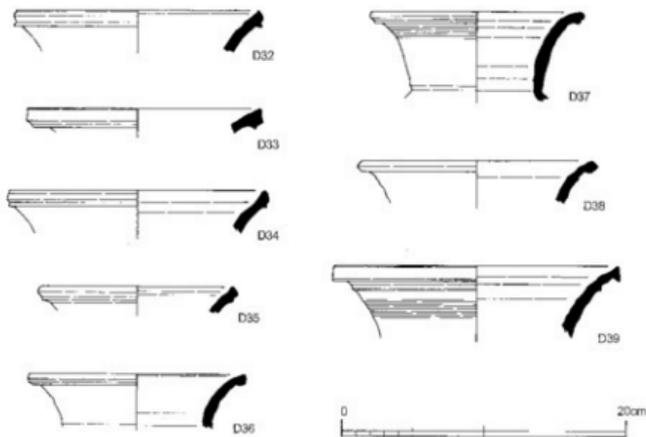
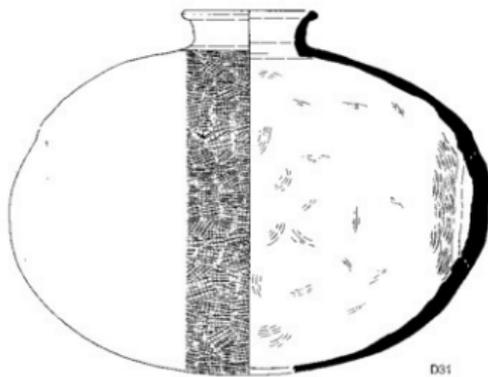
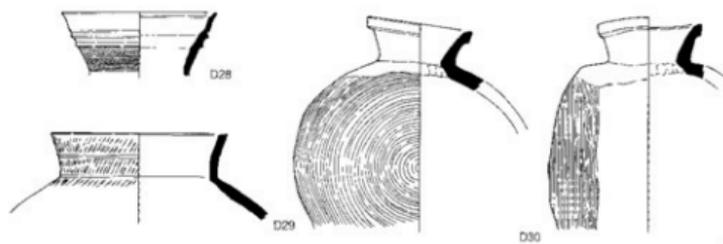
1978年

- (2) (ア) 加古川市教育委員会『札馬古窯跡群発掘調査報告書』(加古川市文化財調査報告7) 1983年
- (イ) 兵庫県教育委員会『魚住古窯跡群』(兵庫県文化財調査報告第19冊) 1983年
- (ウ) 森内秀造「兵庫県相生古窯址群について—平安時代の窯址を中心に—」(『日本史論叢』第10輯) 1983年
- (3) 間壁忠彦・間壁稔子「備前焼研究ノート(1)(2)(3)(4)」(『倉敷考古館研究集報』第1・2・5・18号) 1966・1968・1984年
- (4) いわゆる飛鳥タイプの蓋杯については姫路周辺の古窯跡群の調査が進展してくれば徐々に解明されるであろう。
- (5) 野上丈助「高蔵寺地区・陶器山地区出土のヘラ記号とその意義」(大阪府文化財調査報告書第33輯『陶邑V』) 1982年
- (6) 横山浩一「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」(『九州文化史研究所紀要』第26号) 1981年
- (7) 上月昭信「播磨地方における須恵器の生産」(『鹿児』第100号) 1984年
- (8) 森内秀造「相生の古代窯業」(『相生市史』第1巻) 1984年
- (9) (ア) 御津町教育委員会『御津町岩見地区遺跡分布調査報告書』 1975年
- (イ) 田辺昭三『須恵器大成』 1981年
- (10) 中村浩「播磨の初期須恵器」(『大谷女子大学紀要』第16号第1輯) 1981年
- (11) 神戸古代史研究会『鶴谷池古窯址群』 1983年
- (12) 註8に同じ
- (13) 種定淳介「70 笹田古墳」(『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』兵庫県教育委員会) 1983年
- (14) 註8に同じ
- (15) 中村浩「須恵器生産の階段階一地方窯成立に関する一試考一」(『考古学雑誌』第67巻第1号) 1981年
- (16) 龍野市文化財調査報告書Ⅲ『長尾・タイ山古墳群』龍野市教育委員会 1982
- (17) 註2(ア)に同じ
- (18) 註2(ア)に同じ
- (19) この項をまとめるにあたっては、倉敷考古館館長 間壁忠彦先生、兵庫県教育委員会水口富夫氏・森内秀造氏、神戸市教育委員会 丸山謙氏・森田穂氏・丹治康明氏をはじめ、多くの方々から御教示を得ました。ここに記して、謝意を表します。
- (20) 註2(ア)に同じ
- (21) 註12(ア)に同じ
- (22) 註2(ウ)に同じ

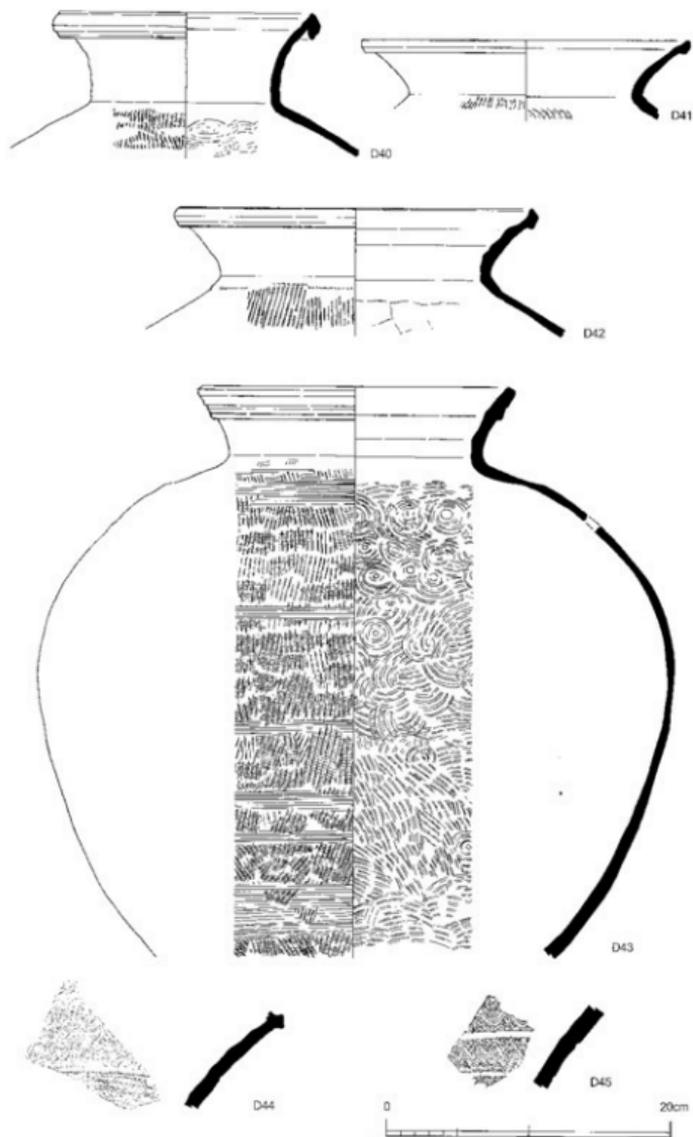
- (23) 註2に同じ
- (24) 註2(ア)に同じ
- (25) 註2(ウ)に同じ
- (26) 註2(ウ)に同じ
- (27) 註2(ウ)に同じ
- (28) 註2(イ)に同じ
- (29) 註3に同じ
- (30) 神戸市教育委員会『昭和56年度 神戸市埋蔵文化財年報』1983
- (31) 絶対年代については筆者自身の意見を有しているわけではない。冒頭にも述べたように、従来の編年観を整理、援用したため、今後修正しなければならない可能性は高い。
- (32) 肉眼観察については、間嶋忠彦先生、水口富夫氏、森内秀造氏、丹治康明氏に拠るところが大きい。重ねて深謝致します。



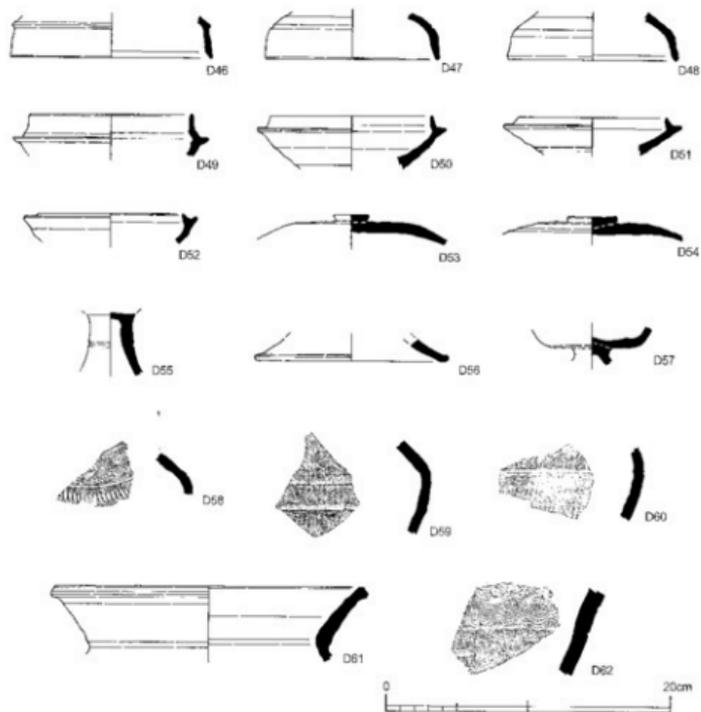
第 7 7 图 须惠器①



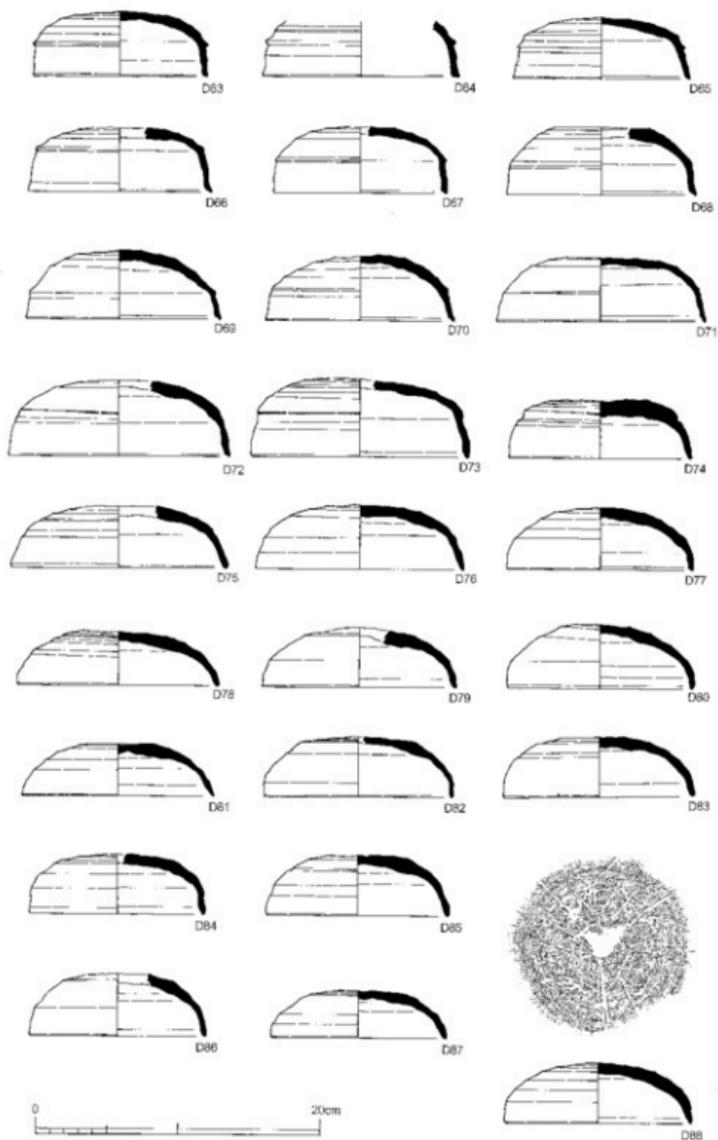
第78圖 須惠器②



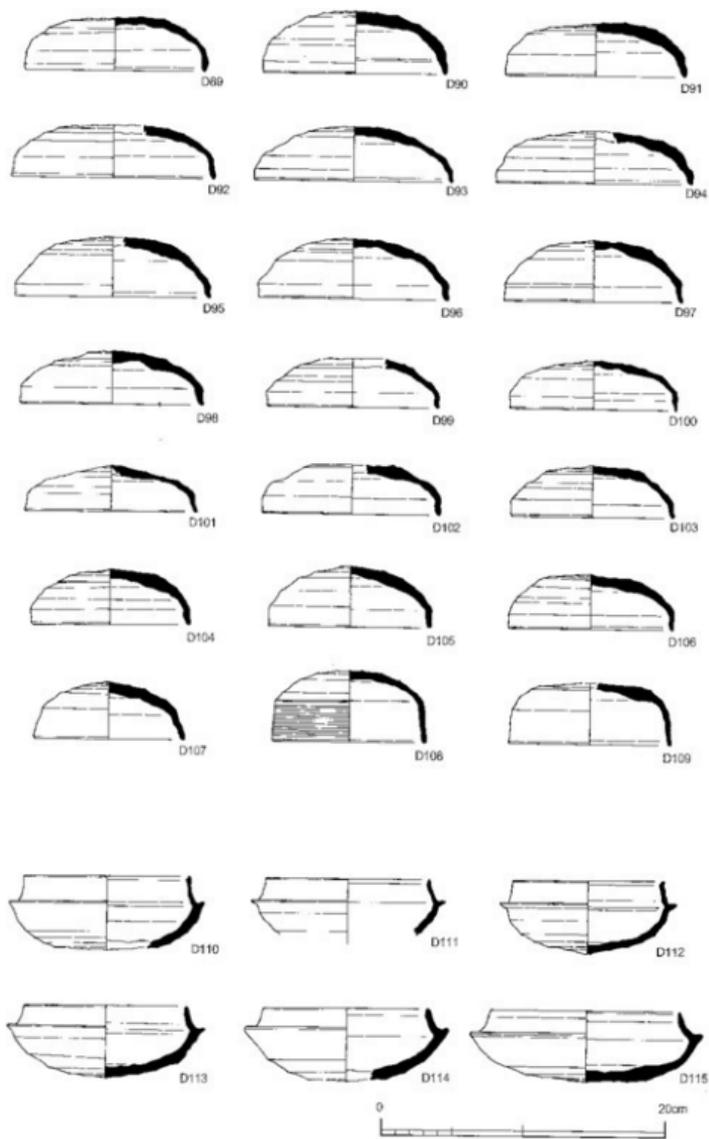
第79図 須恵器③



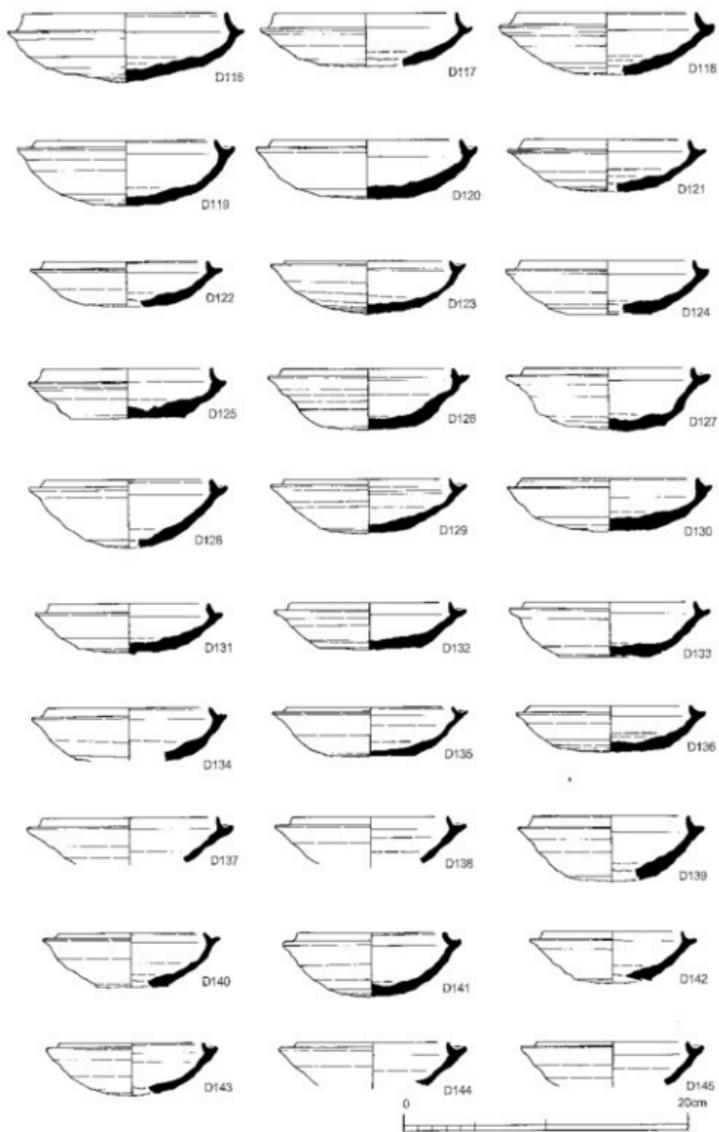
第80圖 須惠器④



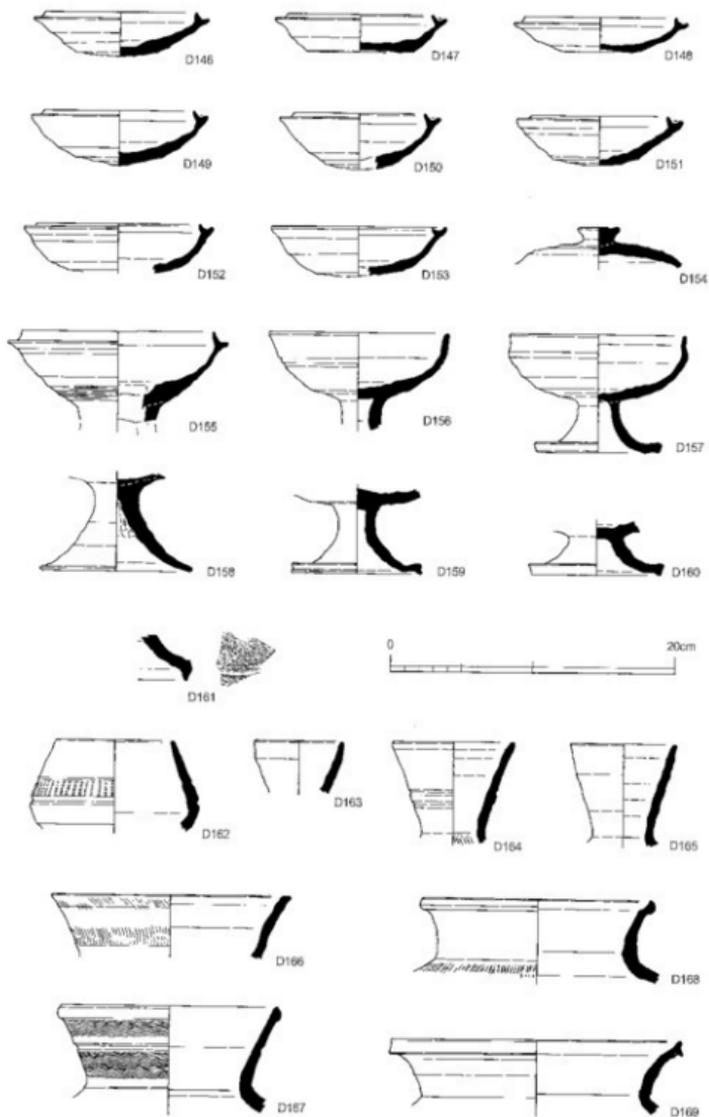
第 8 1 圖 須惠器⑤



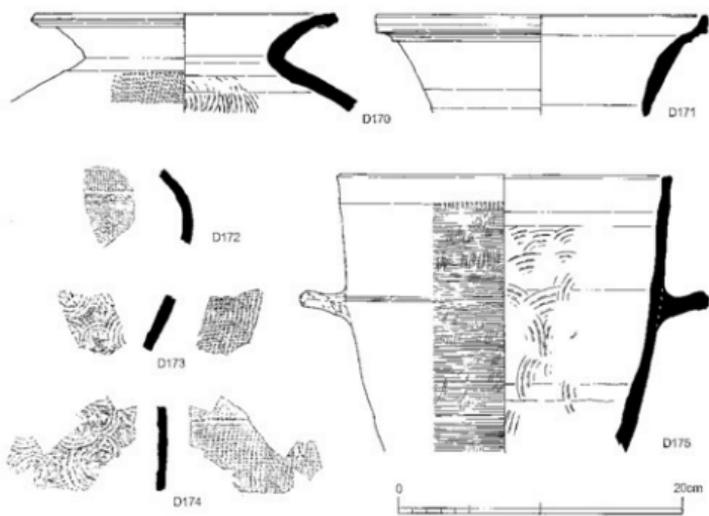
第 8 2 図 須惠器⑥



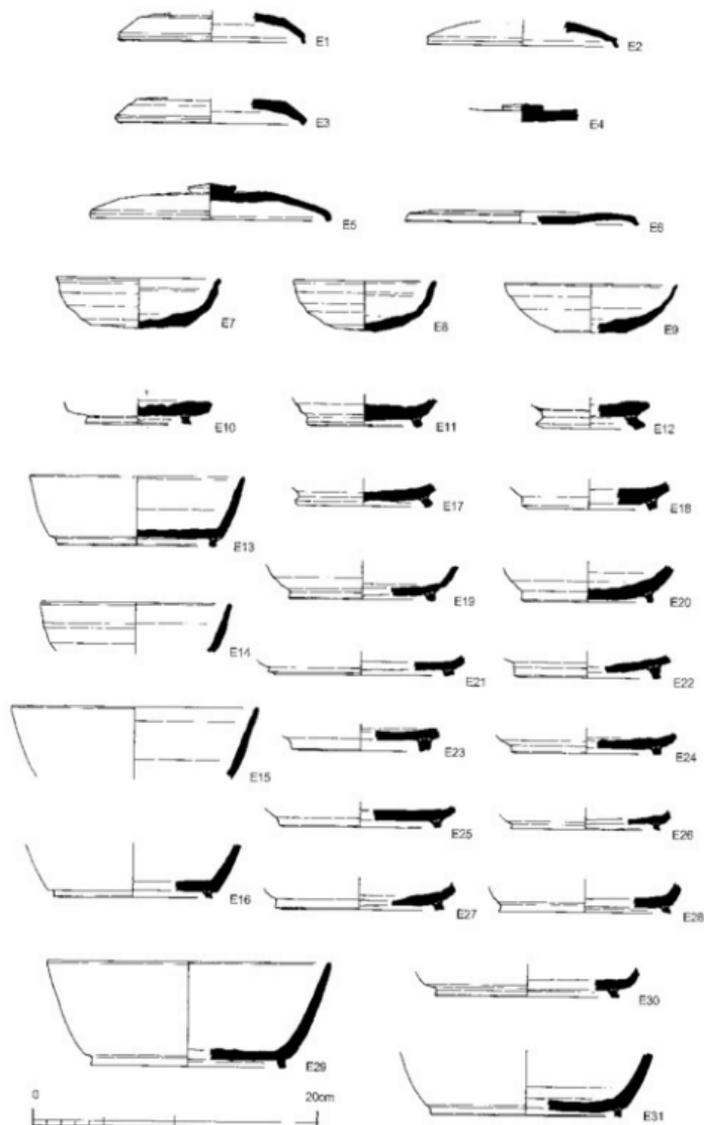
第 8 3 圖 須惠器⑦



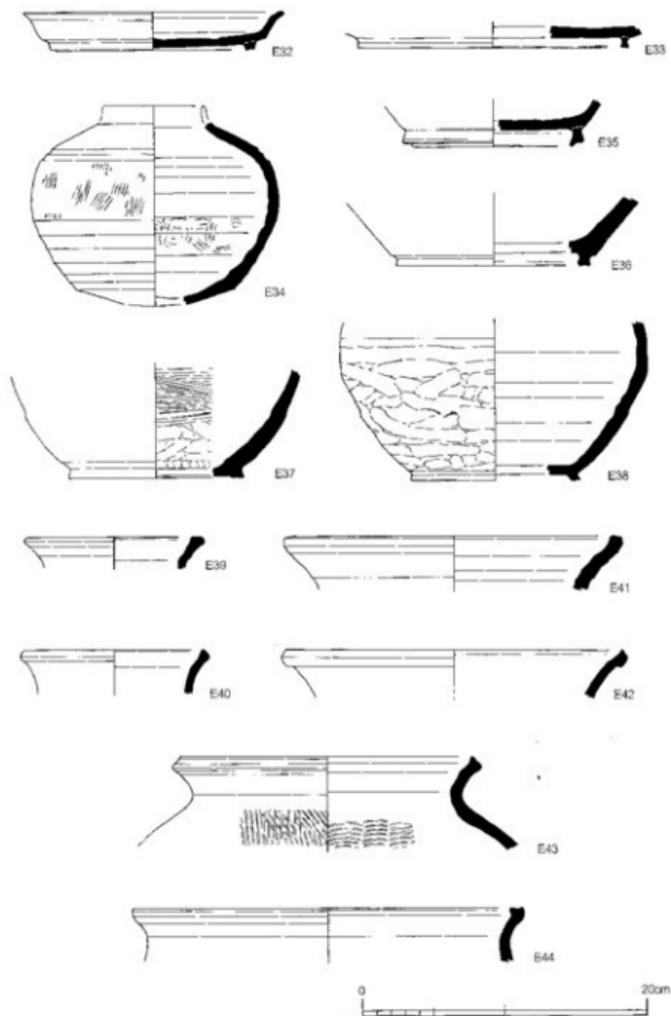
第 8 4 图 须惠器⑧



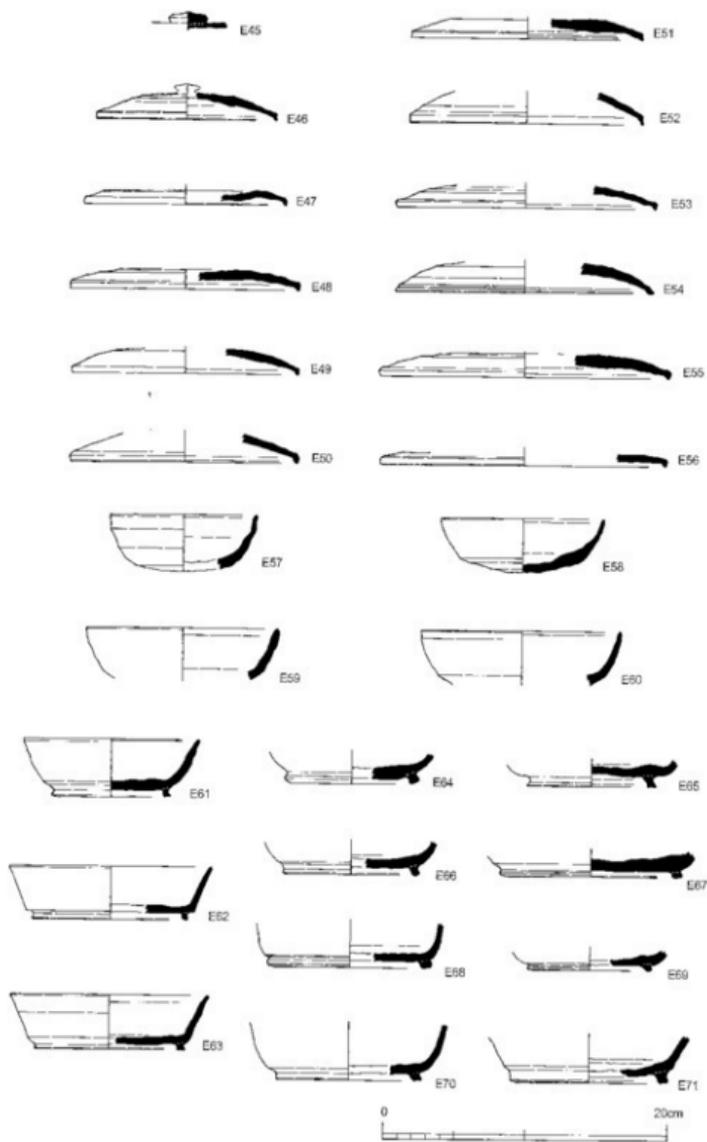
第 8 5 圖 須惠器⑨



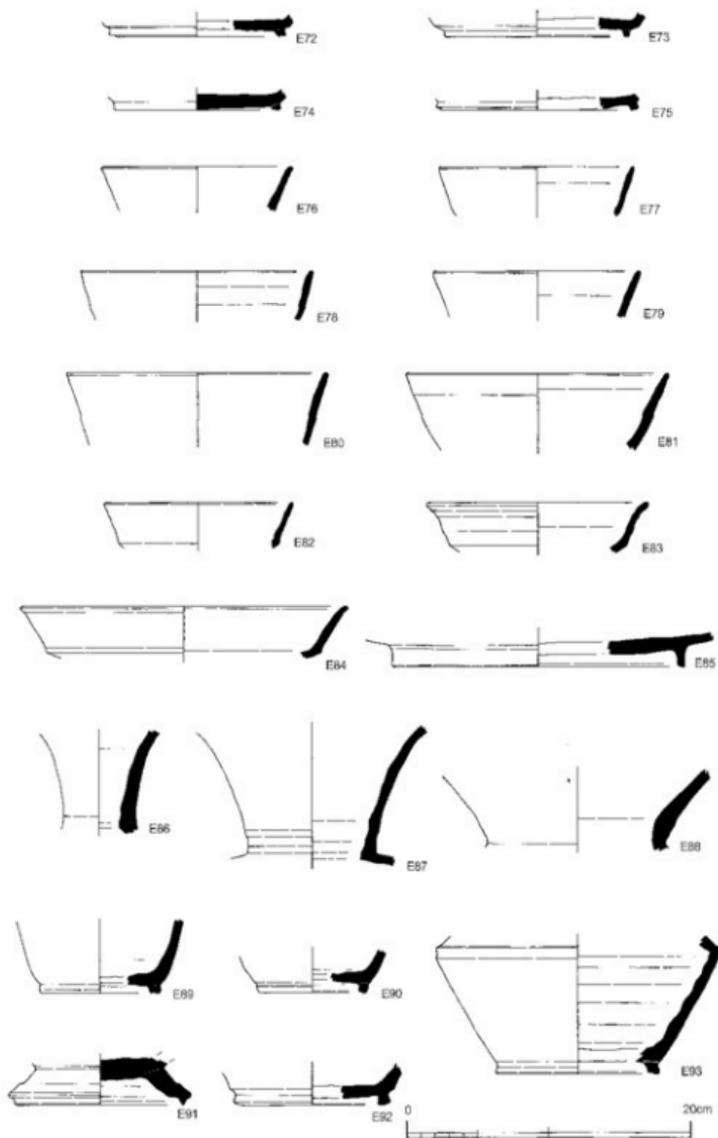
第 8 6 圖 須恵器⑩



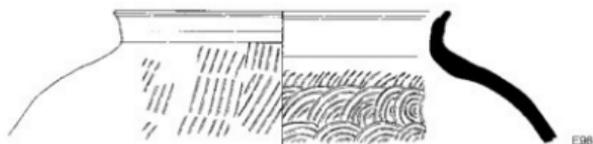
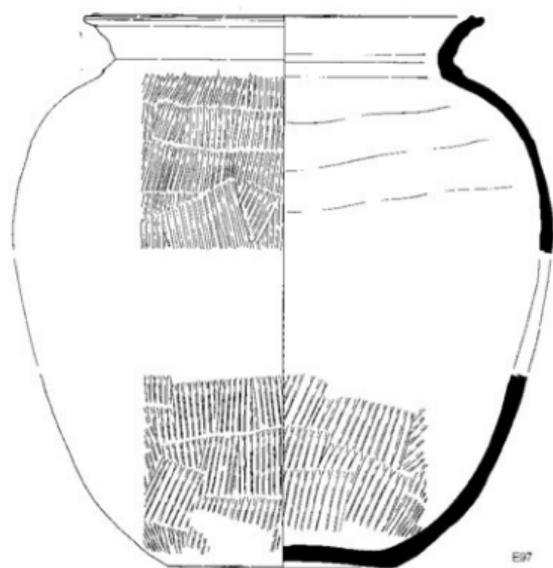
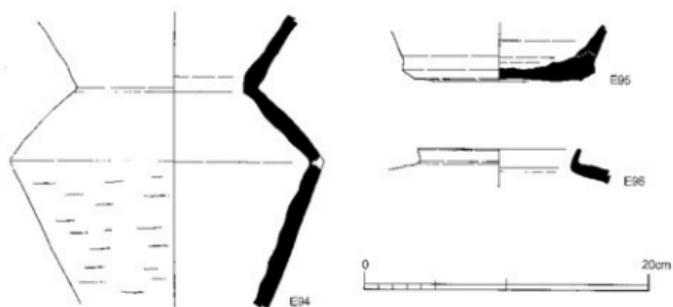
第 8 7 图 须惠器①



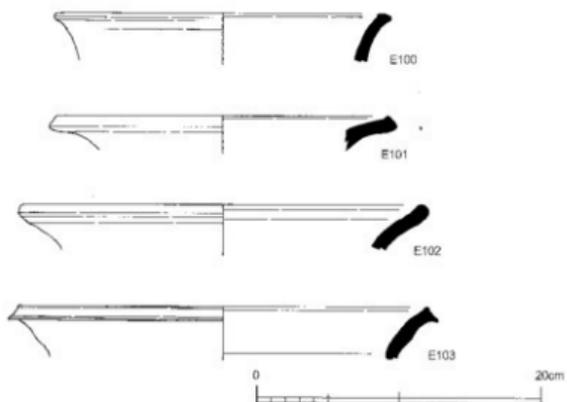
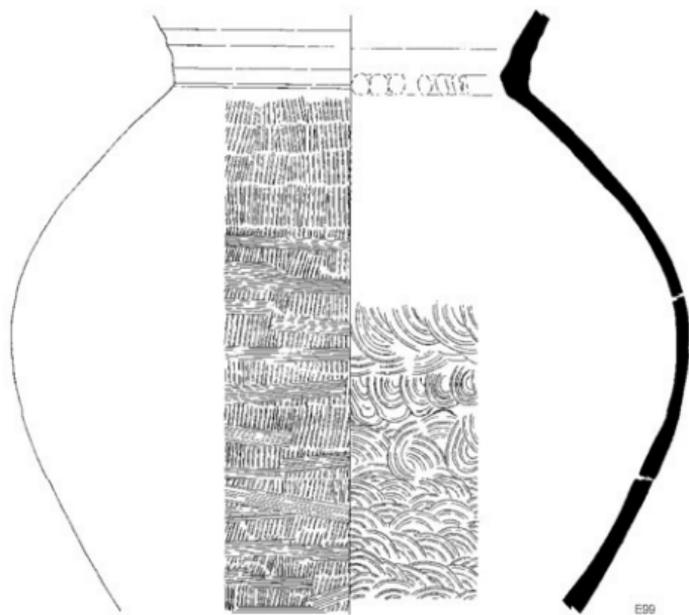
第 8 8 圖 須准器②



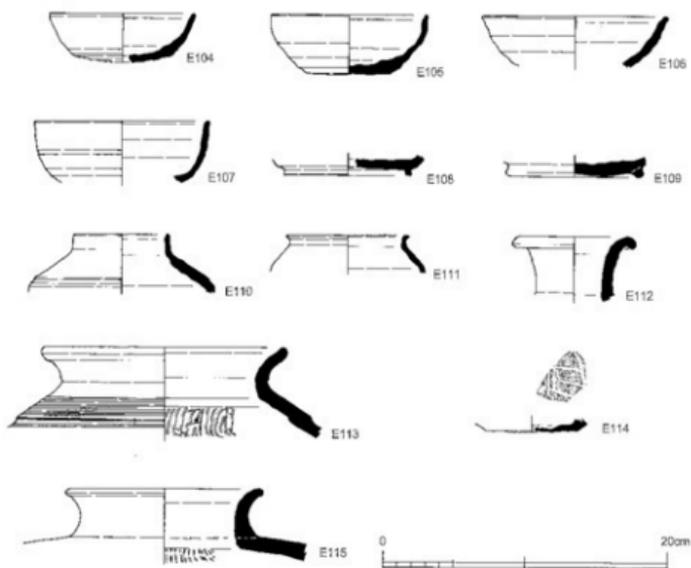
第 8 9 圖 須惠器⑬



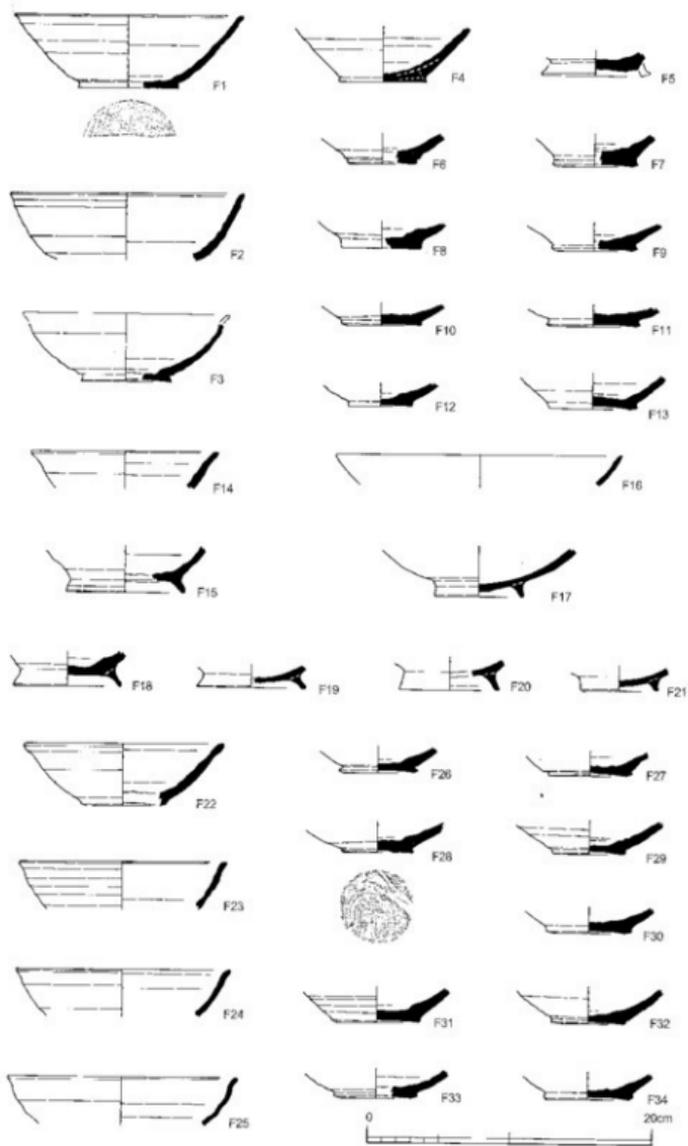
第90图 须惠器⑩



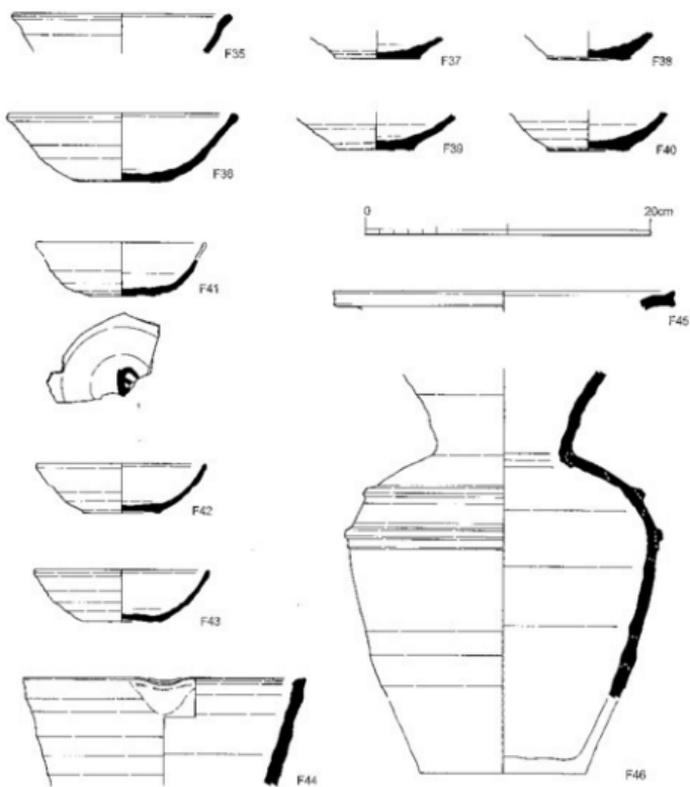
第91圖 須惠器⑮



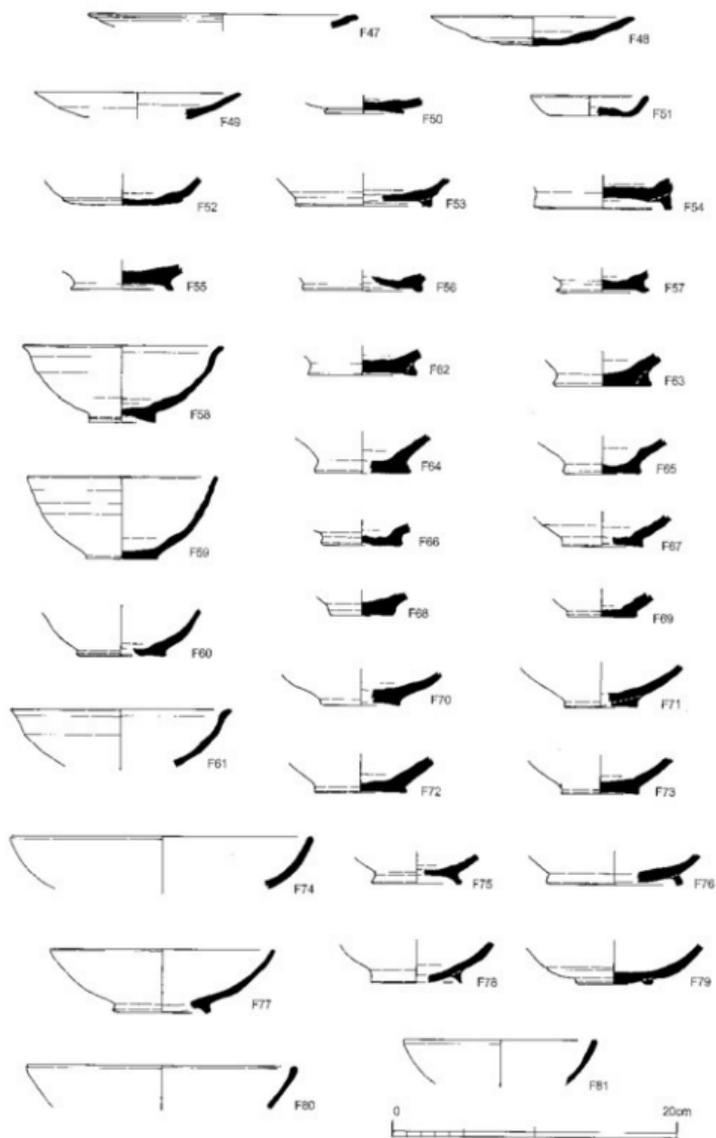
第92圖 須惠器⑬



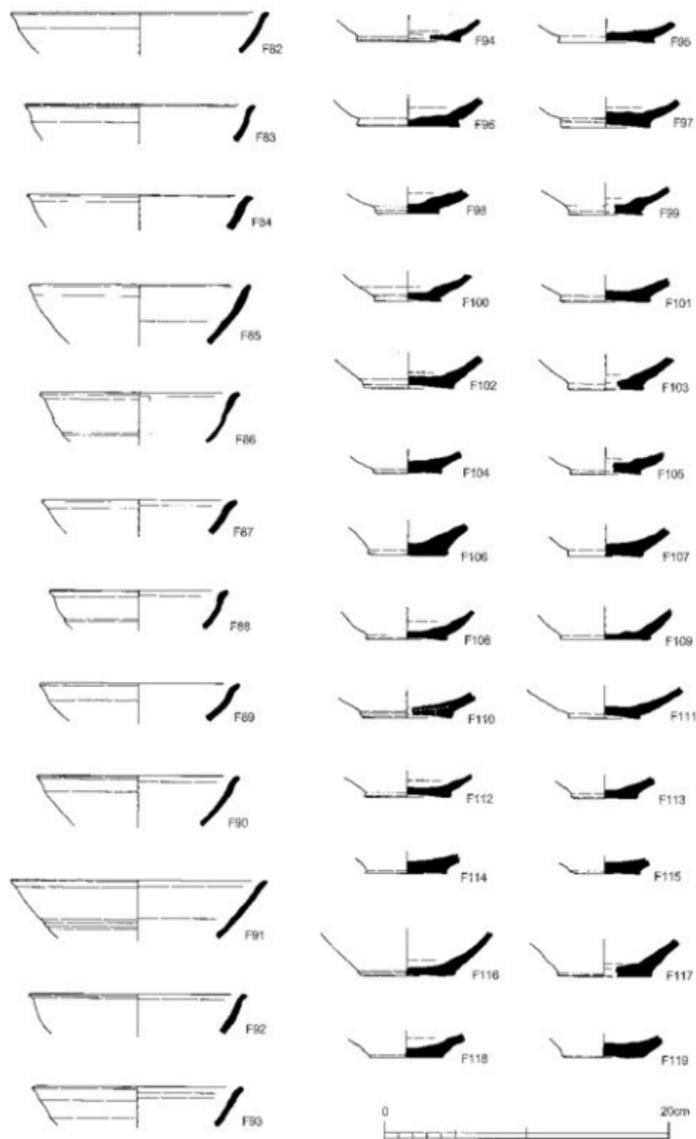
第93圖 須恵器⑦



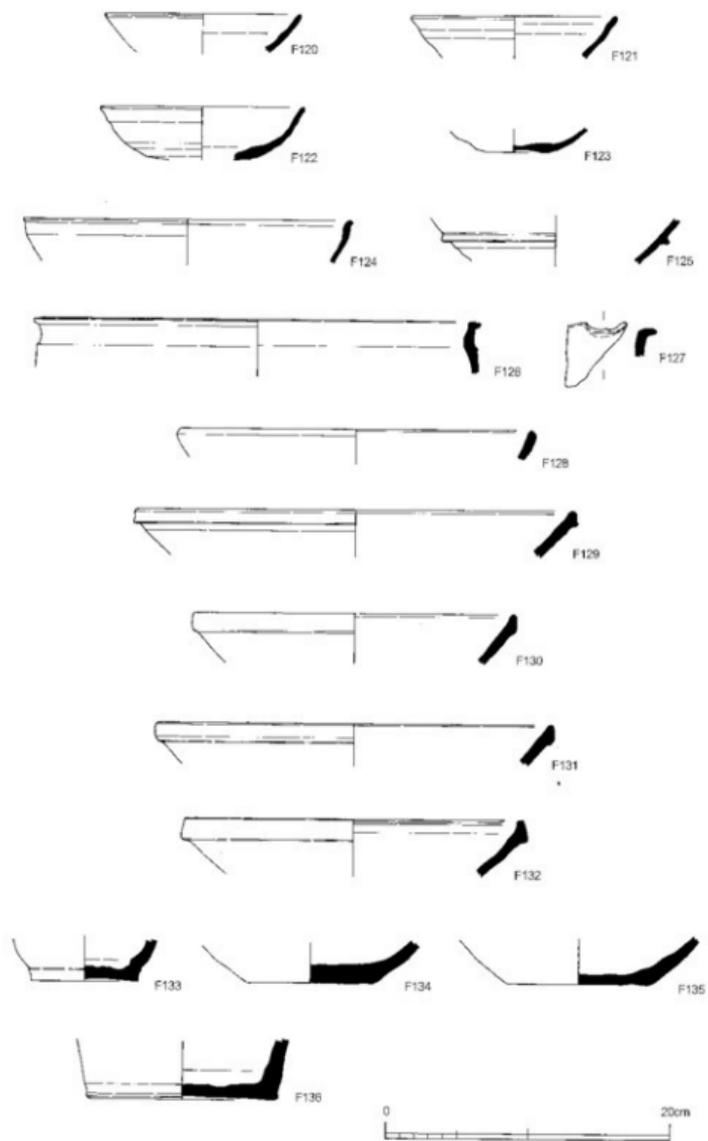
第94圖 須惠器⑩



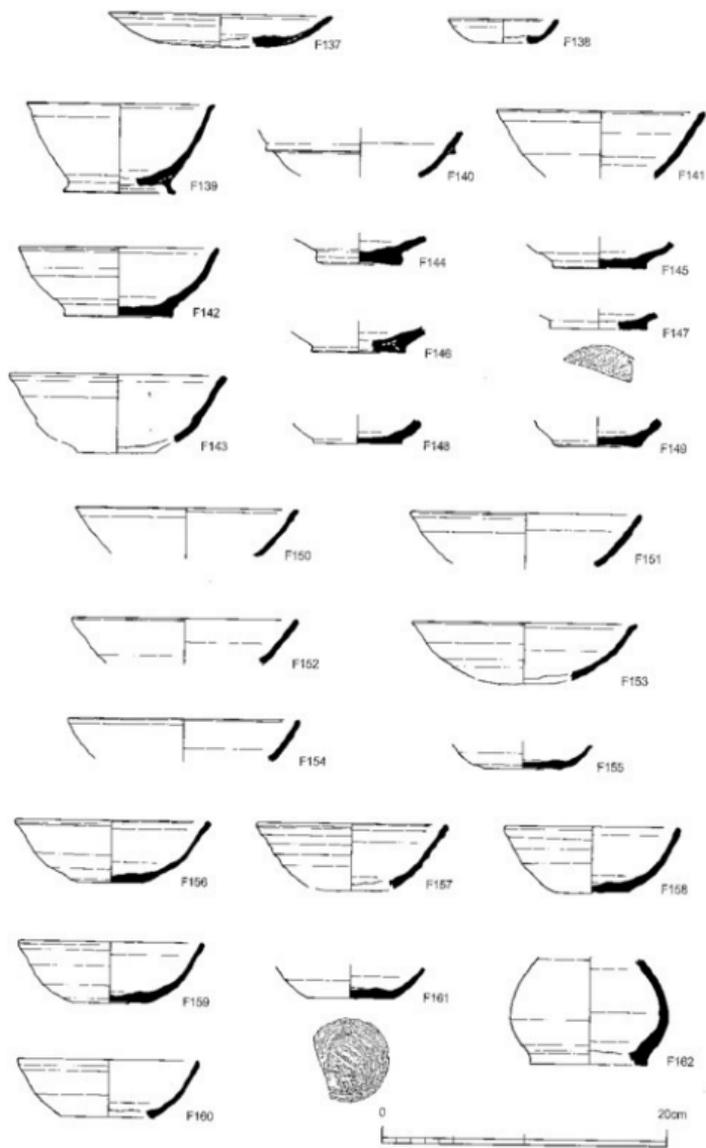
第95区 須恵器⑨



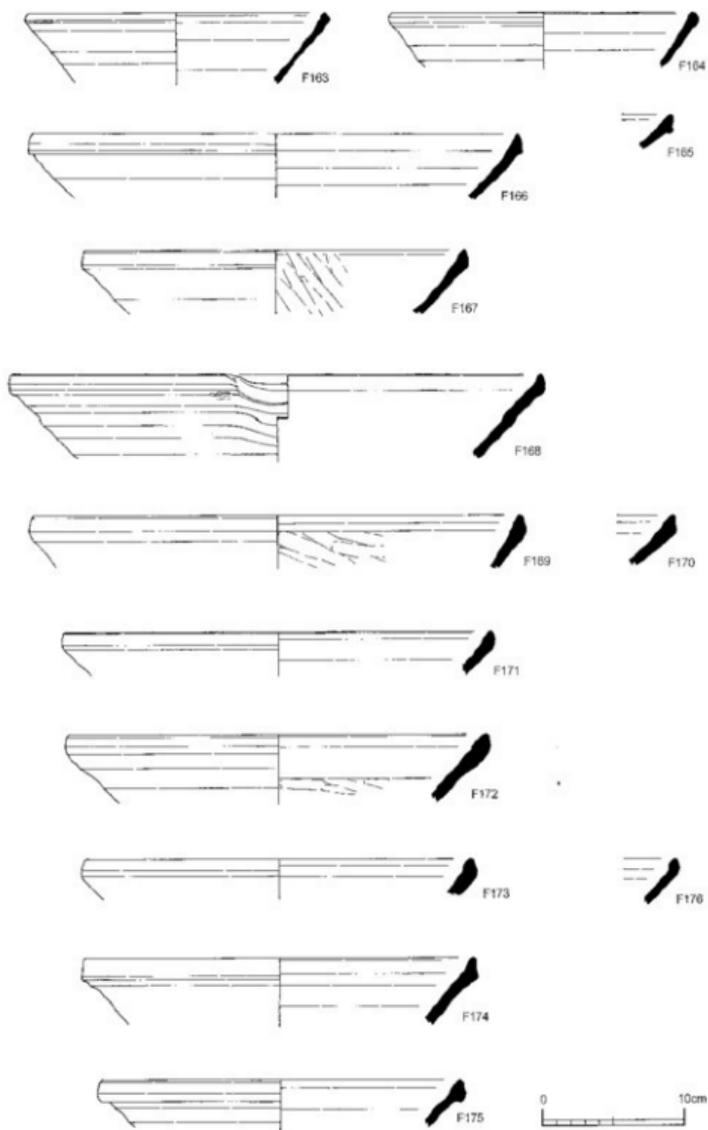
第96圖 須惠器②



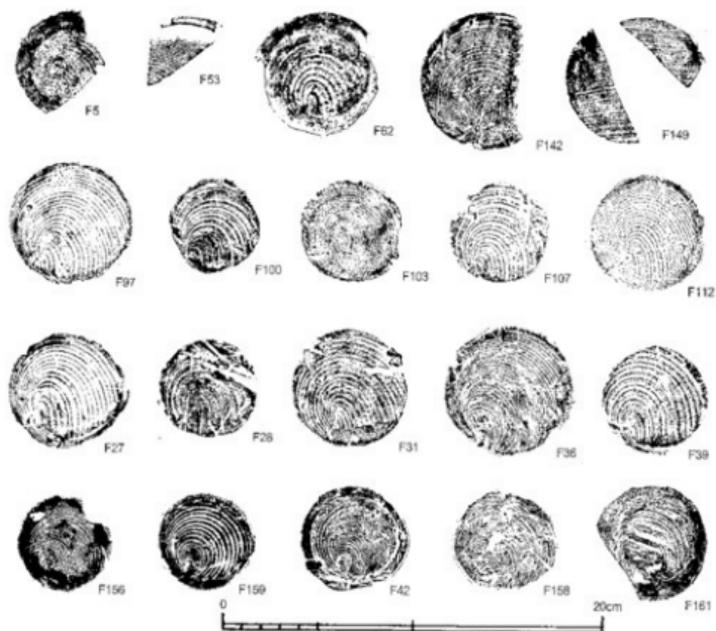
第97圖 須惠器②



第98圖 須惠器②



第99圖 須惠器②



第100圖 須惠器

## 第4節 製塩土器

今回の調査では、土器製塩を行った炉址や製塩土器を多量に廃棄した場所は、確認されていない。しかし、1984年の赤穂市教育委員会の調査で丸底のC類の製塩土器（第102図P50）の廃棄層が確認されている。

出土状態から所属時期の判明する製塩土器は、下層の土壌5から出土したのみであり、他は南区9層の埋立層や南区と北区の各層から出土しているものは、製塩土器の形態から判断せざるを得ない状況である。製塩土器は良好な状態に遺存しているものは少なく、破片を対象に行うしかないが、一応、A～D類に分けて説明していきたい。しかし、かつて海辺に立地し、土器製塩を行っていた遺跡としては、他の遺跡と比較して、いずれの型式の製塩土器（第55図、第56図、第101図～第103図）も少量といわざるを得ない状況である。

### (1) A類 (P1～P28, P39～45, P52～69)

体部に脚部をつけるもので、体部外面は平行タタキで仕上げる形態のものをA類とする。

二次的な加熱を受けて赤変している製塩土器が多い。

A類の完全な形あるいは完形に復元できる製塩土器は出土していないが、遺存する破片からおよその形状は推定できる。体部は丸みをおびた深鉢形を呈し、脚台は倒環形といわれる形である。体部は外面には平行タタキが施され、内面はナデで調整を行っている。脚台の多くは指頭によって調整を行った痕が観察できる。

口径を図示しえた破片は8点であり、8.5～11.8cmまでのものがみられるが、すべてが復元径である。その平均の口径は10.3cmであり、この前後の口径を有していたとみていいであろう。底径はP63・P68の2点が4cm未満である以外は、4.5～5.5cm前後のものである。脚内高は1cmを超え、2cm未満のものがほとんどである。器高は明確な数値ではないが、復元的にみれば13cm前後とみていいであろう。

このような特徴をみれば、堂山遺跡のA類の製塩土器は、筆者の播磨地域における製塩土器型式分類のI式e<sup>(1)</sup>2類の一型式内におさまるものばかりである。そして、この特徴は環大阪湾沿岸の製塩土器の特徴よりも、備讃地域の製塩土器の特徴と同じであり、その影響下にあると言える。備讃地域の製塩土器の分類ではIV A式<sup>(2)</sup>に相当する。

時期は下層の土壌5から伴出している土器が庄内式期であり、また、布留式古段階の土器もこの遺跡から出土しており、この間におさまる時期とみていいであろう。

なお、P1はA類の製塩土器と比べ、器壁が厚く、一見すれば、日常の土器の印象を受けるが、土器製塩に利用されたものであろうと捉えている。また、P69は脚部の径が6.7cmと

大きく例外的である。

### (2) B類 (P70~72)

器壁が薄く、小形でコップ状の体部をもつ丸底の形態のものをB類とする。

B類の製塩土器でなんとか図示しえたものは3点のみであり、他の小破片を含めても10数点しか出土していない。P70はB類としては比較的器壁が厚く、外面に平行タタキの痕跡をとどめている。

### (3) C類 (P29~36, P46, P47, P49, P50, P73~P80)

椀形の体部をもち、B類より大形化した丸底の形態をもつものをC類とする。C類はいくつかのタイプに細分できるとみられるが、ここでは細分は行わず、良好な資料の出現をまって、今後の課題としておきたい。

一つは、矢羽根文様の変形ともいえるタタキをもつP76、格子状のタタキをもつP46・P78であり、備前地域で盛行をみる製塩土器である。堂山遺跡のC類製塩土器の中では客体としての存在であろう。備前VI式に相当する。

二つ目は、口縁端部が特徴的に内傾するP31, P75である。P74, P73もこの中に含めてよいであろう。P74・P75の内面は板ナデで仕上げている。外面は指頭によるナデやオサエで調整している。このタイプのもは家島群島の真浦遺跡で出土しており、外面に平行タタキをもつものと指頭によるオサエ、ナデ調整している二者がみられる。真浦遺跡ではTK10型式の須恵器と伴出している。

三番目は、この遺跡は多く出土しているもので、口縁部が内傾あるいは内湾するもので、口縁端部は丸くおさめる。

P50は完形に復元できる唯一の個体で、器壁は薄く、口径14.8cmで、器高11.8cmと深く、底部は小さく尖り気味の丸底となっている。調整は内外面とも指頭によるオサエ、ナデで仕上げ、指頭圧痕が顕著に認められる。器高の深さや形鑑から、広瀬和雄氏の丸底Ⅱ式<sup>(4)</sup>の中では最も新しいタイプのものであろう捉えている。赤穂市教育委員会で調査した堂山遺跡の廃棄層から出土した製塩土器もこのタイプのもので、P50と同じく内外面は指頭によるオサエ、ナデで仕上げ、指頭圧痕が顕著に認められ、TK209~TK217型式の須恵器と伴出している。

P29, P30, P32~P36, P47, P49はP50に比べ器壁は若干厚く、指頭圧痕の痕跡も顕著でない。口径もP50と比べ一回り小さく、復元径であるが、8.1~12.8cmと幅がある。破片ばかりで深さの度合いは明らかでしえないが、P50ほど深くならないであろうとみている。P38やP48の底部がこれらの底部とすれば、P50のタイプの製塩

土器と分けた方がよいであろう。これらのタイプのものは、丸底Ⅱ式の標識遺跡である波路島の浜田遺跡<sup>(6)</sup>で類似のものが多量に出土している。P50よりは古い時期のものであると捉えている。

なお、C類と分類しているものの中にP80のような浅い椀状で、口径の小さなもののみられる。P80は口径7.8cmである。これなどはまた別のタイプと捉えた方がよいであろうとみている。

いずれにしても、堂山遺跡を代表する製塩土器をあげるとすれば、P50タイプのものとしてよいであろう。

#### (4) D類 (P51, P77)

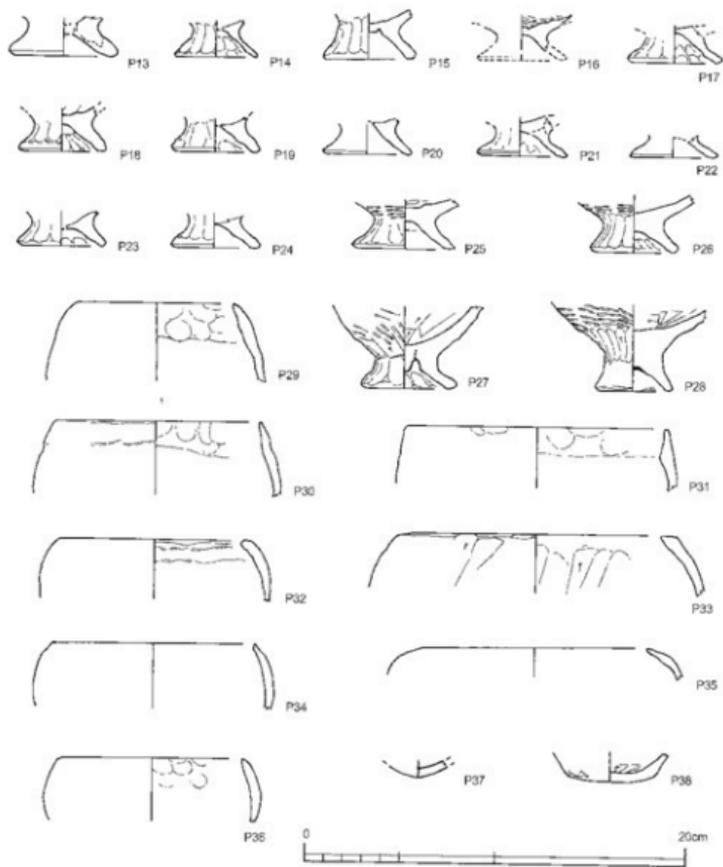
直線的に外傾するタイプのものをD類と分類する。D類の典型的なものP51である。

P51は口径15.7cmに復元でき、残存の器高12.1cmであり、かなり深い形盤のものであろう。外面は指頭によるオサエ、ナデで仕上げ、指頭圧痕が認められる。内面はナデ調整で仕上げる。器壁はP50より厚く、丁寧なつくりの製塩土器である。おそらく、P50からの系譜をひき、その発展形態とみられるが、1点のみではその当否は今後のこととした方がよいであろう。

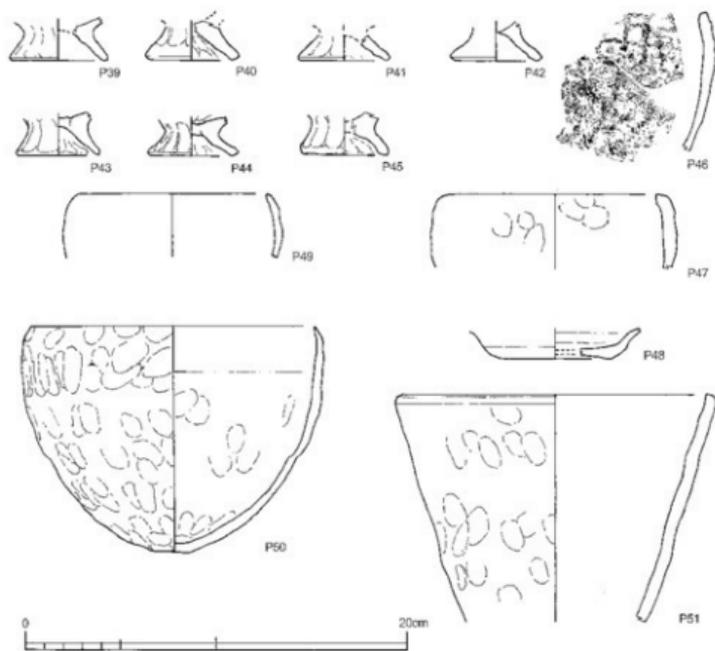
P77は口径9.6cmと小さいが、直線的に外傾する形態なので一応D類としておきたい。

#### (註)

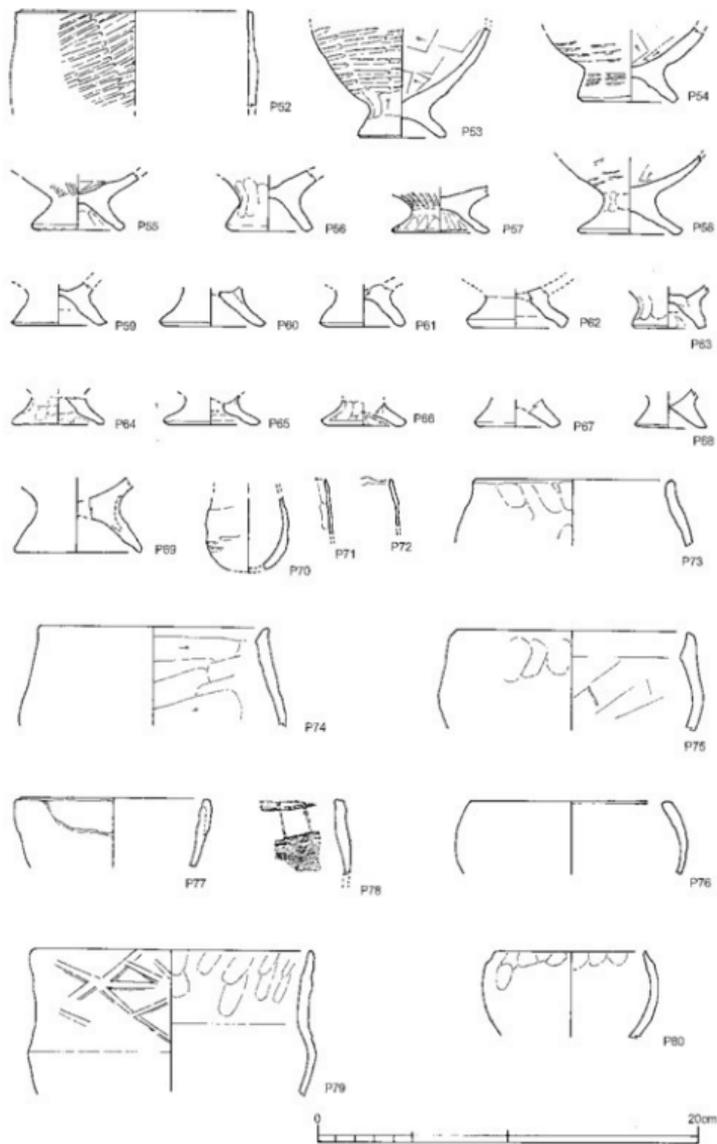
- (1) 山本三郎「兵庫県(播磨・摂津)」(『日本土器製塩の研究』青木書店)1994年
- (2) 大久保徹也「岡山県」(『日本土器製塩の研究』青木書店)1994年
- (3) 近藤義郎「家島群島における師楽式遺跡の調査」(『家島群島』神戸新聞社)1962年
- (4) 広瀬和雄「近畿地方における土器製塩」(『考古学ジャーナル』298号)1988年
- (5) 岡本欣子「堂山遺跡(N065)-14」(『海の生産用具-弥生時代から平安時代まで-』埋蔵文化財研究集会第19回研究集会)1986年
- (6) 多賀茂治「兵庫県津名郡北淡町浜田遺跡の製塩土器」(『送達-市橋重喜追悼文集』)1991年



第101圖 製塩土器①



第102图 製埴土器②



第103圖 製塩土器③

## 第5節 土鍾

土鍾（第104図～第109図）は各地区より出土しており、総数135点を数える（第2表）。そのうち、比較的遺存度が高く、資料的価値が高いと思われるものをできるだけ掲載するよう努めた。胎土はいずれも多く砂粒を含むものであるが、細かい砂粒（1mm未満）を含むものとやや粗い砂粒（1～2mm）を含むものの2種類が認められる。

焼成は概して土師質であり、一部瓦質に近いものも含まれる。

色調は褐色系統のものが最も多く、灰色系統のものも含まれる。

形態については非常に多岐にわたるが、大きく3種類に分けることができる。すなわち、Ⅰ類：管状土鍾、Ⅱ類：棒状有孔土鍾、Ⅲ類：有溝土鍾となる。この分類は、土鍾を漁網に装着する<sup>1)</sup>という機能差を反映するものと考えられる。以下、各類型について具体的にみていこう。

### （Ⅰ）Ⅰ類 管状土鍾（N1～N36、N40～N69、N78～N119）

竹などの円棒に粘土を巻きつけて成形したのち、円棒を抜き取ったものである。土鍾そのものが、製作手法からみて厳格な基準に基づいて作られたものとは思われず、特にⅠ類においては形態が多岐にわたり、中間形態も多いため、分類が曖昧になりがちであるが、その形態的特徴よりおおよそ6種類に細分できる。

- a類 小型品中心で、長さ4～6cm、最大径1.0～1.5cm。
- b類 中型品中心で、縦断面が長方形に近いもの。両端へ行くほど器肉が薄くなる。Ⅰ類の中では調整が最も粗雑である。
- c類 中型品中心で、両端を絞ることによって縦断面が紡錘形に近くなるもの。両端をナデによって不明瞭な小口部を形作るものと絞っただけのもの2種類がある。
- d類 中型品中心で、縦断面が隅丸長方形で、ナデによって明らかに小口部を形作るもの。長さは最大径を明らかに上回る。
- e類 中型品中心で、縦断面が正方形に近く、ナデによって明確な小口部を形成するもの。最大径は長さと同程度かもしくは上回る。
- f類 いわゆる球形土鍾で、球形の粘土塊の中心に貫通孔を穿つものである。

さて、土鍾Ⅰ類の製作段階における特徴的な資料はあまり多くなく、基本的には円棒の周りに粘土を巻きつけて、形を整えた後、円棒を抜き取っている。粘土の巻きつけについては、孔の方向と同じ方向（長軸方向）に粘土の接合度が遺存する資料（N15・N64）があるが、粘土板の上に円棒をころがして巻きつけたのか、円棒に粘土塊を巻きつけたのかは不明である。

番号	類型	出土地区	遺構	時間
N73	II-b	CVI		庄内
N79	I-a	AI II	貝塚1	中世
N80	I-d	AII	土壇7	庄内
N83	I-d	AII	土壇7	庄内
N111	I-b	AVII	竈5	古墳後期
N117	I-c	AB I II	貝塚1	中世
N125	II-b	AIII	土壇5	庄内

第1表 遺構出土の土錘

形態 出土地区	I-a	I-b	I-c	I-d	I-e	I-f	II	III	合計
	A地区第9層	6	9	7	11	5	1	3	0
A地区包含層	11	4	5	6	2	4	6	2	40 (29.6)
B地区包含層	3	1	6	29	7	1	6	0	53 (39.3)
合計	20	14	18	46	14	6	15	2	135 (100.0)

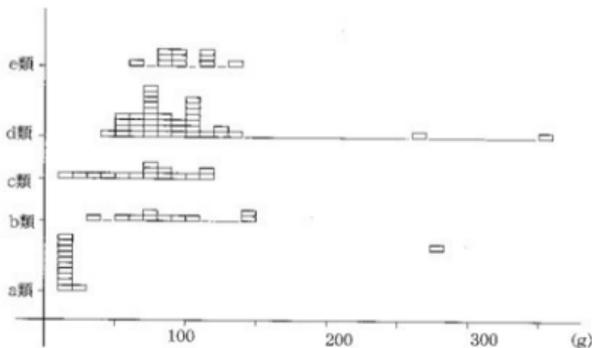
第2表 土錘の形態別・地区別出土点数一覧表

整(成)形段階では、指頭圧痕がちょうど手の形に合うように遺存するもの(N83)がある。また、特にI-d類で顕著に認められる孔を中心に小口部をナデるものがあり、反対に円棒に巻きつけたままの状態の小口部から粘土が若干飛び出すもの(N107・N111・N119)などもある。調整、乾燥段階では、ヘラ状工具による記号様の彫り込みのあるもの(N11・N24・N61)、爪形圧痕様のものが遺存するもの(N16)、植物繊維圧痕(ワラ)が遺存するもの(N15・N60・N116)、刷毛状工具による調整が遺存するものなどがある。

次に、重量頻度表(第3表)から土錘I類の重量についてみてみよう。なお、この表の数値は乱暴ではあるが、全体の傾向を把握しやすくするため、測定重量の「1」の位を四捨五入した。また、完形品のみを扱っていることは言うまでもない。

各分類別の重量幅をみると、a類は10gを中心に非常に狭い範囲で分布するのに対して、その他の4種類(f類については資料が少数であり除外した。)は分布幅が広い。すなわち、b類は30~140g、c類は10~110g、d類は50~130g、e類は60~130gとなる。

この中でも、d類とe類の分布について注目してみたい。d類では70gと100gのものが多いのに比べて、e類ではこの重量のものが欠如していることがわかる。これは両者が焼成・胎土で酷似しているものが比較的多いこともあわせて考えると、資料数が少な

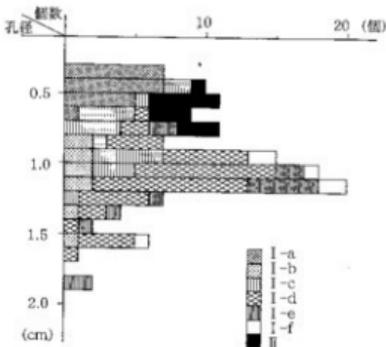


第3表 土鍾I類重量頻度

く断定できないものの、両者を併用して沈子が構成されていたことが想像できよう。そして、両者は時期比定こそ明確にできないものの、同時期の所産である可能性が高い資料と言えよう。

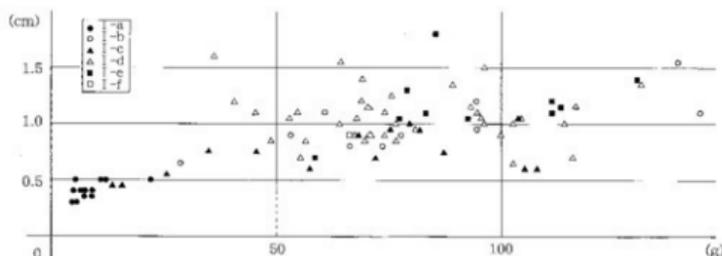
続いて、孔径頻度表(第4表)についてみてみよう。孔径は成形の際の円棒の太さを示すとともに、装着する漁網の太さも反映していると考えるのが妥当であろう。類型を除外して表からみると、0.5cm前後と1.0cm前後を中心とする漁網の太さが想定できよう。なお、0.3cm未満、2.0cm以上のものは一点も認められない。ところで、円棒抜き取りの際円棒を回したりして、円棒の直径を保ち得ず、孔径が大きくなっているものが数多く認められる(N13・N27・N29・N56・N90・N96・N100・N111・N119)。また一方で、成形・調整段階の円棒を抜き取る際に指頭で押さえつけたため、片方の孔が半月形なしは三日月形につぶれて、予定通りの網にとでも装着できそうにないもの(N24・N32・N94・N114・N115・N116)もある。これらの土鍾は、成形時の計画性にもとづくものではなく、偶発的な所産とみる方が妥当であろう。実用に耐え得るものかどうかは立証のしようがないが、先にも述べたように、土鍾が厳格な規格のもとに製作される性格を有していなかった証明とはなろう。

以上みてきたように、土鍾を構成する要素



第4表 土鍾I・II類孔径頻度

の中で重要なものは、第1に沈子という性格からして重量、第2に装着する漁網の太さを反映する孔径であると考えている。なお、先に行った形態分類による類型はこれらに後続する要素として扱えるものであろう。



第5表 土鍾I類の重量と孔径の相関

そこで、重量と孔径の相関々係を知るために作成したのが第5表である。資料点数が少なく、ドットの分布が散在しているが、一応5つのグループを把えることができる。すなわち、このグループがそれぞれ小型、中の小型、中の大型、大の小型、大の大型を示すものであり、重量と漁網の太さには必ずと比例関係が生じているのがわかる。また、いくつかの類型が集まってひとつのグループを形成しながらも、やや離れた数値を示す資料もあることから、形態においては厳格な規格性がなく、形態が異なっても粘土塊に漁網を通すことのできる貫通孔があれば、事足りたのではなからうか。そして、実際の漁網では種々の形態の土鍾が同時に使われていたのではなからうか。

## (2) II類 棒状有孔土鍾 (N37~N39, N73~N75, N120~N125)

短軸断面が円形に近い適当な長さの粘土棒をつくり、棒状工具でその両端付近にそれぞれ貫通孔を片側から穿つもので孔のまわりが平坦面を成すものが多い。従来断面形によって分類されることもあったが、最大径と長さの違いから大・中・小の3種類に分類でき、それぞれを a・b・c と称することとする。

総数15点のうち、各類型別の資料点数をみると、a類が1点、b類が9点、c類が5点あるが、完形品はb類に2点含まれるだけである。2点の完形品から、その大きさをみれば、b類は長さ7~8cm、短軸径2cm前後、孔の心々距離5cm前後となり、重量は約30gを測る。なお、a・c類については完形品がないため、全容を窺うことはできない。

孔径についてみると、0.5~0.7cmの間に集中することがわかる(第4表)。形態3類型の大きさに極端な相違が認められない点も考慮しなければならないが、装着していた漁網の太さには大きな差はなく、大小の別をあまり意識しないような使用方法を採っていたと考えるこ

とができる

なお、Ⅱ類は比較的小型の定置網への使用が考えられている。<sup>(3)</sup>

### (3) Ⅲ類 有溝土鍾 (N76、N77)

球形ないしは卵形に近い粘土塊の表面を巡るように1条の溝があるもの。

全容を知ることができるのは(N76)の1点のみで、資料点数が少なすぎるため、多くは言及できない。これは、最大長4.8cm、最大幅2.6cm、重量38.3gで、丸みをもったU字形の溝の最大幅0.6cm、最深部で0.4cmを測る。表面はナデと指頭圧によって調整しており、特に、溝のない両側面は指頭圧による押さえが強い。また、溝は棒状工具を押しつけたものであろう。

これまでみてきた土鍾の時期比定をここで試みておきたい。先に述べたように、層序等から他の遺物との共伴関係を知ることのできる資料はわずか7例しかなく(第1表)、全体の時期を把握するのは非常に困難である。

一般的に、漁網法は古来から大型化または多様化をしてきたものの、土鍾自身は大きな形態変化を示さないことが知られている。また一方で、弥生時代から古墳時代において、土鍾には2つの画期のあることも知られている。すなわち、第1に棒状土鍾(堂山Ⅱ類)が発展してくる弥生時代中期後葉～後期と、第2に大型の有溝土鍾(堂山Ⅲ類)が出現し、管状土鍾b類(堂山Ⅰ-a類)が特に小型品として顕著な展開をみせだす古墳時代後期が画期とされている。そこで、播磨南部の比較的海岸部に近い遺跡出土例について検討してみよう。加古川・砂部遺跡(現海岸線より6.5km)<sup>(5)</sup>では堂山(以下省略)Ⅰ-a、Ⅰ-b、Ⅱ-b類が古墳時代中期～後期、姫路・権現遺跡(3.6km)ではⅠ-c、Ⅰ-e類が弥生時代後期、太子・常全遺跡(6.5km)<sup>(8)</sup>ではⅠ-e、Ⅰ-f類が弥生時代後期、竜野・門前遺跡(4km)<sup>(9)</sup>ではⅠ-d類が弥生時代後期、同・福田天神遺跡(16km)<sup>(10)</sup>ではⅠ-a、Ⅰ-c類が平安時代後半～鎌倉時代前半にそれぞれ比定されている。遺跡の立地する環境の相違や土鍾が小地域でのまとまりをもつことも考え合わせなければならぬが、以上の類例をひとつの根拠として、先の類型別の存続期間を次のように設定しておきたい。なお、この時期比定はあくまでも推論の域を出ないものであり、せめて点としてでも時期を把握しようとした結果である。

- Ⅰ-a類 古墳時代中期～中世
- Ⅰ-b類 古墳時代中期～後期
- Ⅰ-c類 弥生時代後期～中世
- Ⅰ-d類 弥生時代後期～庄内式併行期
- Ⅰ-e類 同上

I-f類 弥生時代後期

II-b類 庄内式併行期

なお、II-a・c類、III類については現段階では不明である。

以上、形態を中心に堂山遺跡出土の土鍾について検討を加えてきた。結論としては、土鍾は考古学的方法論からだけでは内実には迫れないことがわかった。四周を海に囲まれた日本においては古来から漁業が生業の一部を構成してきたことは自明である。そして、内海として発展してきた瀬戸内海域にあってはなおさらであろう。こうした中で、現海岸線より4km離れた堂山遺跡での土鍾のあり方は、時期比定を個々に明確にできない点や漁網の復原には至らなかった点などの今後の課題を多く残しながらも、ある程度のみとまりとして資料を提供できたことには変わりない。さらに、製塩遺跡(庄内式併行期、平安時代後期～鎌倉時代前半)としての位置づけもできることから漁撈を体系的に把握できる資料と言えるであろう。

(註)

(1) 本稿作成にあたっては以下の文献を参考にさせて頂いた。

①大野左千夫「有溝土鍾について」(『古代学研究』86) 1978年

②大野左千夫「有孔土鍾について」(『古代学研究』93) 1980年

③小田原昭嗣「草戸千軒町遺跡出土の土鍾1・2」(『草戸千軒』No.86・96) 1980年・1981年

④和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」(『考古学論考—小林行雄博士古稀記念論文集—』) 1982年

(2) 註1の②に同じ

(3) 註1の②に同じ

(4) 高桑守「伝統的漁民の類型化にむけて—漁撈民俗研究への一試論—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第4集) 1984年

(5) 註1の④に同じ

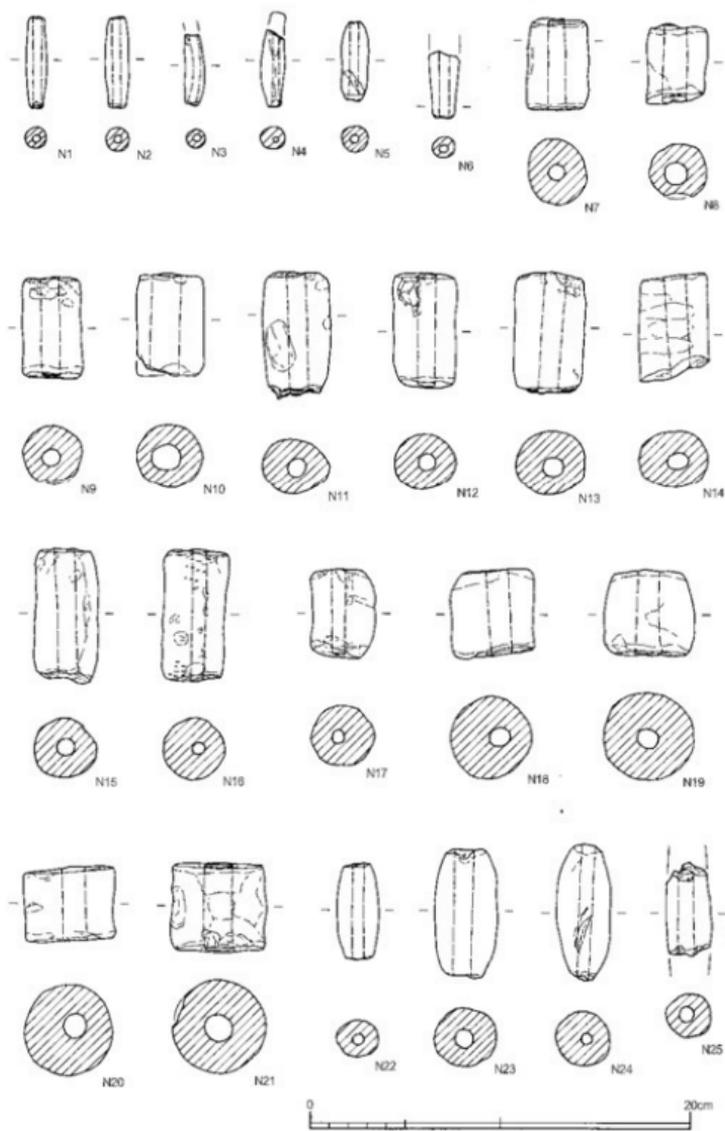
(6) 加古川市教育委員会『加古川市砂部遺跡』 1978年

(7) 兵庫県教育委員会『播磨権現遺跡』(兵庫県文化財調査報告書第6冊) 1972年

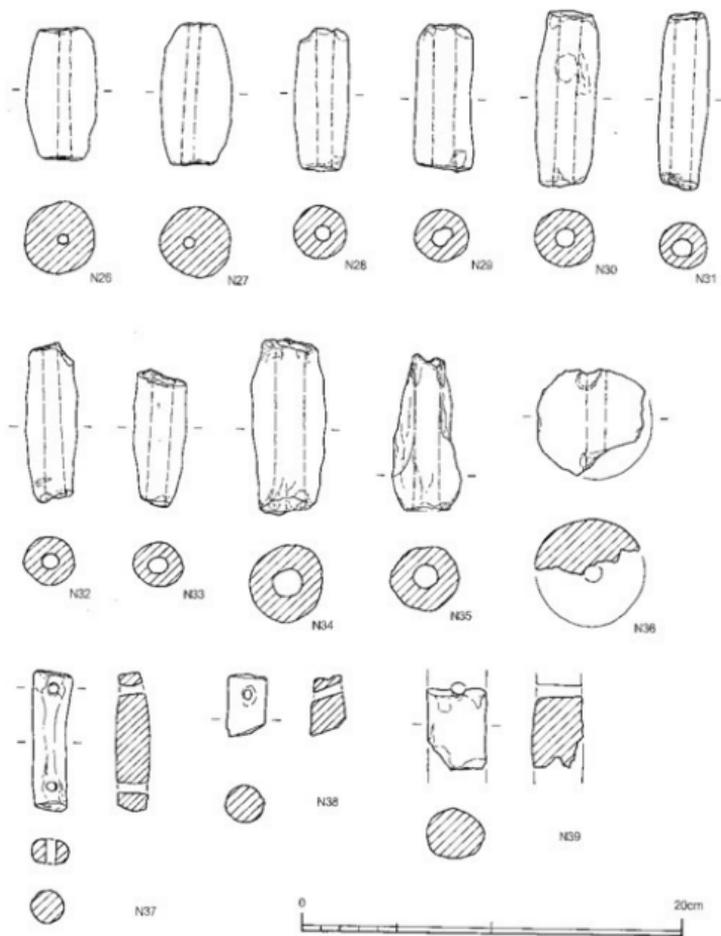
(8) 磯崎正彦ほか「兵庫県太子町常全遺跡調査概要」(『山陽新幹線建設地内兵庫県埋蔵文化財調査報告書』兵庫県文化財調査報告書第4冊) 1971年

(9) 兵庫県教育委員会『山陽新幹線建設地内兵庫県埋蔵文化財調査報告書』(兵庫県文化財調査報告書第5冊) 1971年

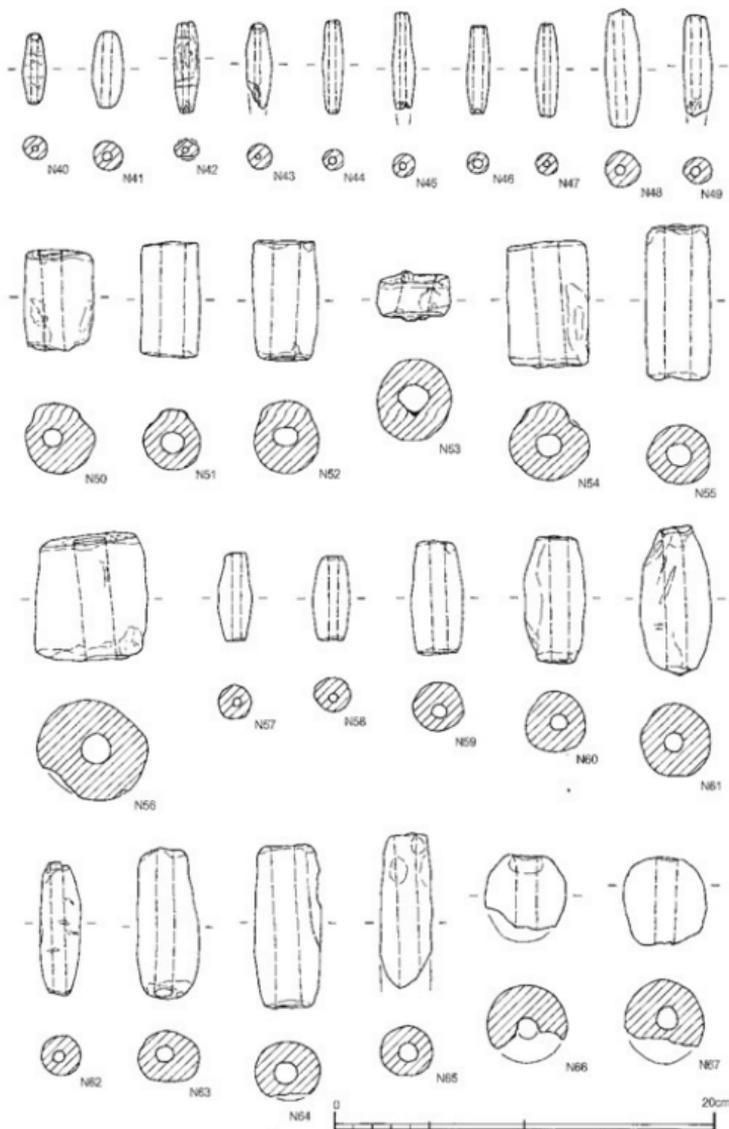
(10) 龍野市教育委員会『福田天神遺跡』(龍野市文化財調査報告書IV) 1982年



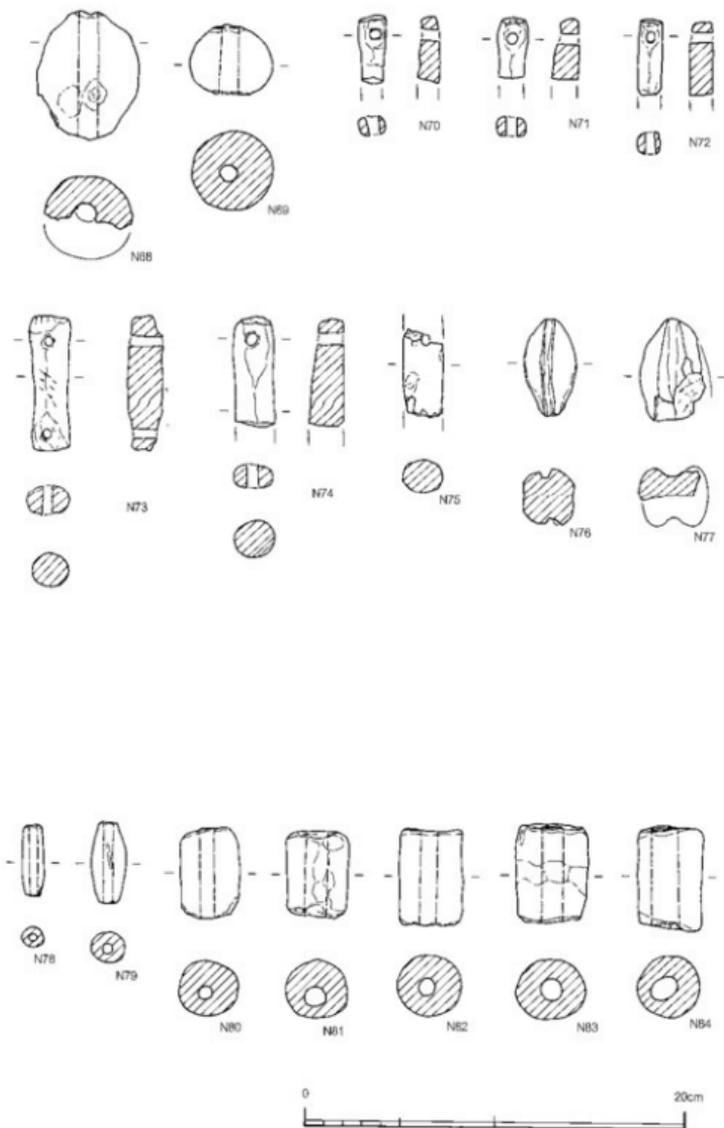
第104图 土鍾①



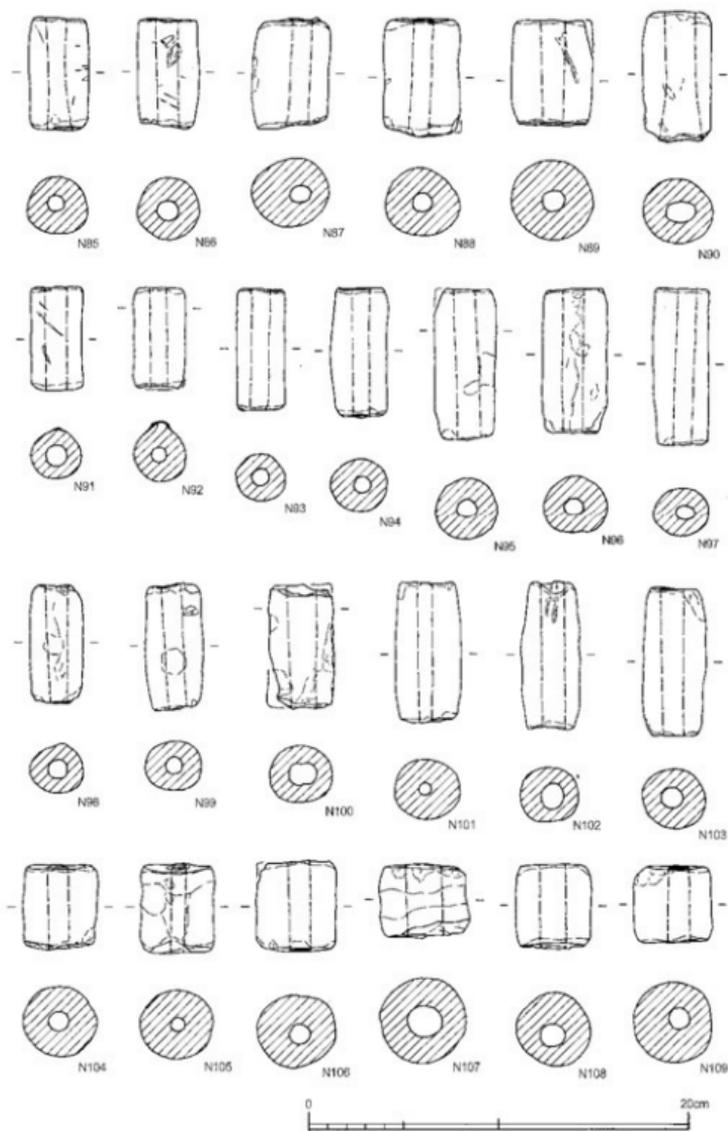
第105図 土鐘②



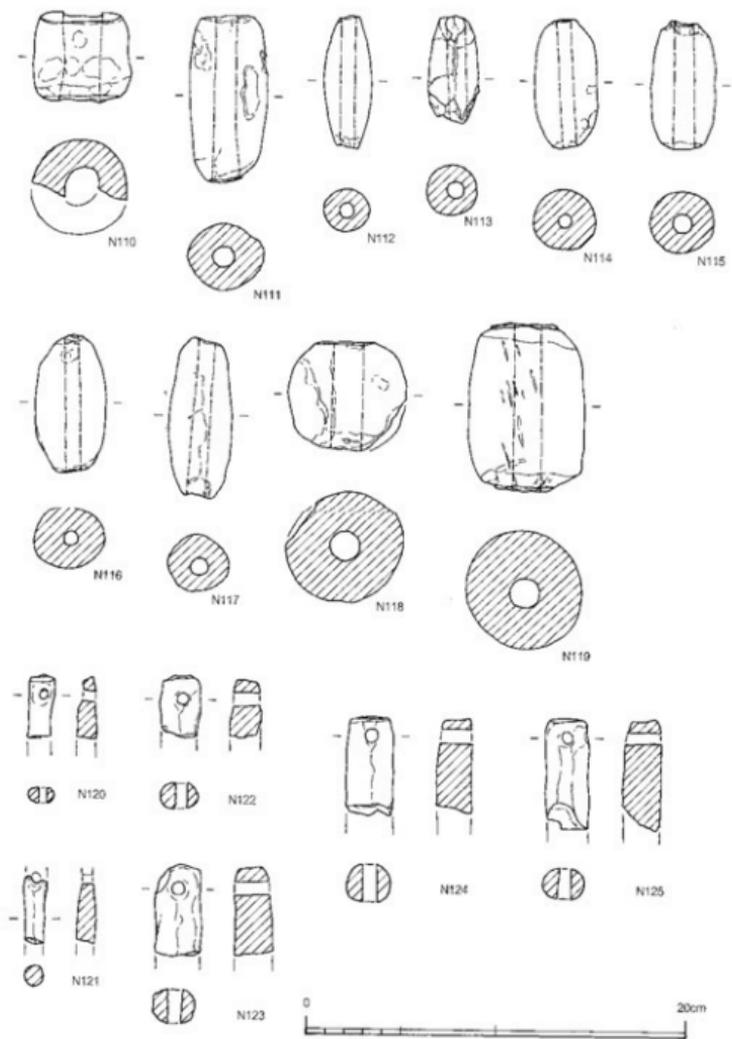
第106図 土器③



第107圖 土鍾④



第108圖 土種⑤



第109圖 土罐⑥

## 第6節 石器・石製品

石器及び石製品（第110図～第116図）は、計309点が出土しており、その内訳は第6表に示す通りである。ここではこれらの遺物のうち、二次加工を施されているものを主として図示し、器種ごとに纏め各々について説明してゆきたい。

### (1) 石鏃 (S1～S16)

石鏃はいずれもサヌカイトを用いた打製石鏃であり、計19点が出土している。形態別に分類するならば、凹基無茎式11点（57.9%）、凸基無茎式3点（15.8%）、凸基有茎式2点（10.5%）、不明3点（15.8%）であり、凹基無茎式石鏃が過半数を占める。また基部を折損する3点についても、断面の形態から無茎式石鏃であるものと推定される。

凹基無茎式石鏃（S1～S11）にはさらに、脚が外方に張り出すもの（S1・S2）、著しい窟歯状の縁辺を作り出すもの（S7・S8）、左右の脚長が異なるもの（S9）、平面形が非対称形を呈するもの（S10・S11）等のヴァリエーションが観察される。

凹基無茎式石鏃の重量は、0.4g～1.05gの間で変異を示すが、特に0.5g～0.7gの間にやや集まる傾向が認められる。

S10・S11は、各々2.2g、2.1gをはかり、この変異幅を大きく逸脱しており、また、器面に対する二次加工が他に比べてやや粗雑であることから、未製品である可能性も考慮されよう。

凸基無茎式石鏃（S12～S14）は、凹基無茎式石鏃に比してやや大型となっている。S12・S14は先端部を折損している。全般に器面に対する二次加工は粗雑であり、縁辺部の整形も、凹基無茎式石鏃ほど精緻なものではない。基部は、いず

石鏃	19	叩石	4
削器	1	石鏟	3
石鏟	1	砥石	5（うち1点は？）
楔形石器	1	石皿	1
楔形石器の削片	3	石核	2
二次加工のある剥片	1	滑石製品	2
使用痕のある剥片	1	破砕礫	14
剥片	116	不明石製品	2
碎片	118	軽石	15
			総数309点

第6表 出土石器器種組成表

れも弱い弧状を呈して張出している。

凸基有茎式石鏃（S15・S16）は、本遺跡出土の石鏃中、最も大型の石鏃である。いずれも一部を折損しているが、長さは4cm以上、重量も、S15が2.55g、S16が3.3gをはかる。

器面に対する二次加工は、いずれも入念に施されており、特に16では、斜めに平行する細長い剥離痕の連続が観察されることから、押圧剥離が用いられた可能性が考慮される。

本遺跡出土のこの石鏃は、以上の通り3形式に大別される。これらの個々について、その所属年代を与えるのは困難であるが、S15・S16については、形態・大きさの点から弥生時代中期に見られる石鏃の一群に、その類例を求めることが可能である。また、凹基無茎式石鏃については、これよりも古い所属年代を推定しようであろう。

## （2）楔形石器（S20・S21）

楔形石器は1点が、楔形石器の剥片は3点が出土しており、いずれもサヌカイト製である。ここでは楔形石器と剥片1点を図示する。

S20は、小型の楔形石器である。相対する二側縁（図では上・下両縁辺）に対して、入念な二次加工が施されており、縁辺は一部で潰れた状態を呈している。これに直交する二側縁は上・下方からの打撃によって載断されている。

S21は、楔形石器の削片である。図中では、上端に位置する縁辺に、入念な加工が施されている。器表の剥離痕及び載断面において、上・下二方向からの剥離が観察されることから、楔形石器の削片と考えられる。

## （3）削器（S22）

S22は、大型・厚手のサヌカイト剥片を素材とした削器である。剥片の一侧縁に対し、背・腹両面より細かな剥離を施し、他の一侧縁は、やはり背・腹両面よりやや粗い剥離は施されている。削器としての刃部は、図中、下縁にあたるものと考えられる。

削器は1点のみの出土である。

## （4）石錐（S23）

S23は、サヌカイト横長剥片を素材とし、その打面部側に、背面側より急角度の整形加工を施して、短い錐部を作出したものである。錐部の断面形は、ややひずんだD字形を呈しており、使用による磨耗はほとんど認められない。

石錐は1点のみの出土である。

#### (5) 使用痕のある剥片 (S24)

S24は、使用痕のあるサヌカイト縦長剥片である。自然面を打面として剥離された縦長剥片の、一次剥離によって形成された鋭い縁辺に沿って、極めて微細な剥離痕が観察され、使用痕と考えられる。微細剥離痕は、剥片の背面側縁辺に集中して分布しており、主要剥離面側にはほとんど認められない。このことから、当該剥片の使用にあたっては、剥片の主要剥離面側から背面側に対して力が加わる方向への動きがなされたものと思われる。

#### (6) 石錘 (S25～S27)

石錘は計3点が出土している。いずれも扁平な河原石を素材としており、石材はS25がチャート、S26・S27は砂岩であると思われる。素材となる扁平礫の相対する縁辺に、剥離または敲打によって凹部を作出したものであるが、総じて加工の程度は低く、素材がもつ自然の凹部を利用する部分も認められる。

重量はS25が90g、S27が270g、S26が285gをそれぞれはかる。

使用による擦痕等は、ほとんど認めることができない。

#### (7) 叩石 (S28～S31)

叩石として明瞭な使用痕をもつものは、4点が出土している。いずれも棒状から楕円形の河原石を用いているが、中央部付近での最大径は、35～60mmをはかり、掌中に収めるのに適した礫が選択されているといえよう。石材はS31は砂岩、S28～S30は石英斑岩かと思われるが明瞭ではない。

使用痕は、両端に認められるもの(S28・S29、S31)と、一端にのみ認められるものがある。いずれの使用痕も端部にみに認められることから、これらの叩石が長軸方向に沿って垂直に対象物に打撃を与えた状態が観察される。こうしたことから、これらの叩石が石器製作に用いられたものと考えるのは困難であり、他の用途を考慮すべきものと思われる。

#### (8) 砥石 (S32～S36)

砥石は5点が出土している。石材は各々異なり、S33は緑色片岩、S32は凝灰岩、S32は砂岩、S36は泥岩で、S34については不明である。S32～S35はいずれも折損しているが、大型のものである。S33・S35は両面が研磨面となっている。S36は短冊状に入念に整形されたもので、片面には、長軸に直交する方向の鋭い擦痕が認められる。

なお、S35は研磨面が強く凹んでいることから、石皿の断片かとも思われるが、ここでは一応、砥石として取り上げておく。

### (9) 石皿 (S37)

石皿は1点が出土している。極めて大型の砂岩を、石皿として用いたもので、片面の中央部はゆるやかな凹面となっている。岩質がやや粗いため、擦痕は不明瞭である。

### (10) 石製品 (S38~S41)

いずれも研磨によって整形されたもので、4点が出土している。

S38・S39は偏平に製作された滑石製品である。いずれも折損しており、原型を推定しえないが、厚さの点ではほぼ共通している。両面および側面に対して、入念な研磨が施されており、S38では一側面に切断の痕跡も認められる。

S40・S41は、泥岩を石材とした磨製品である。いずれも研磨された器表が薄く剥離したもので、原形は全く推定しえない。あるいは砥石の可能性も考慮されよう。

### (11) 軽石

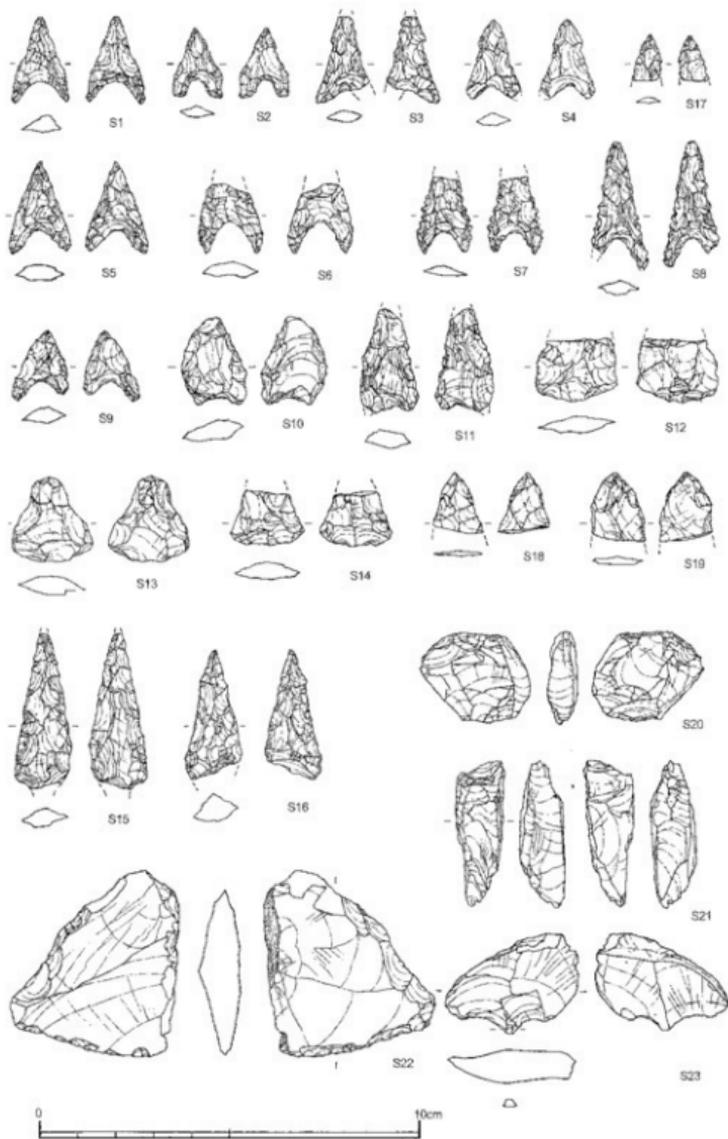
本遺跡からは、軽石が計15点出している。最大のもは、径約7.5cm、最小のもは径約1.5cmをはかる。いずれも二次的加工痕は認められず、使用痕についても明瞭ではない。軽石は、本遺跡周辺では産出せず、搬入石材であると思われる。

### (12) 小結

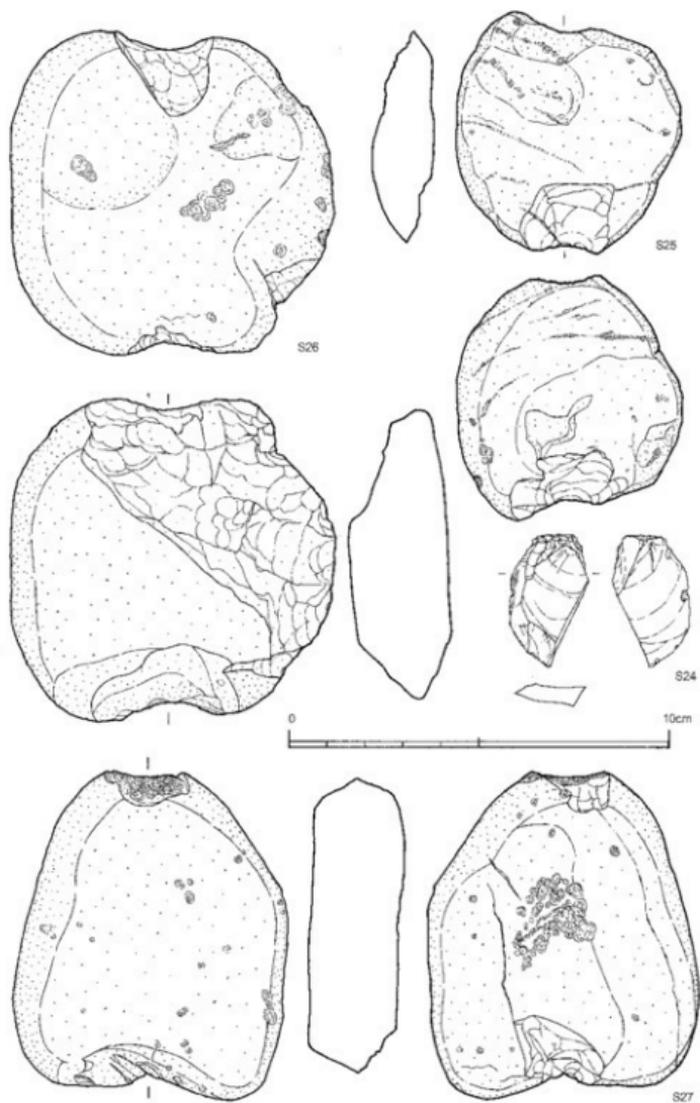
以上、本遺跡出土の石器・石製品について説明を進めてきたわけであるが、ここで若干のまとめをおこなってみた。

本遺跡では、縄文時代から鎌倉時代まで、数時期にわたる土器の出土が知られ、石器類についても、当然各時期の遺物の存在が考慮される。しかしながら、原位置を遊離した状態で出土した石器が多数を占めることから、所属時期の認定は極めて困難であり、わずかに石楯の一部で推測するにとどまった。従来、当該時期の石器群については、完成された石器のみが抽出され、石核・剥片・砕片等については捨象される例も少なくない。しかし、各時期の石器群を復原するにあたっては、単に完成された石器だけではなく、その基礎となる技術的側面からの分析も不可欠のものとなるであろう。また、こうした作業を保障するためには、原位置を保っていると考えられる状態で出土したと考えられる石器の記録を、遺構・遺跡を単位としておこなってゆく必要がある。

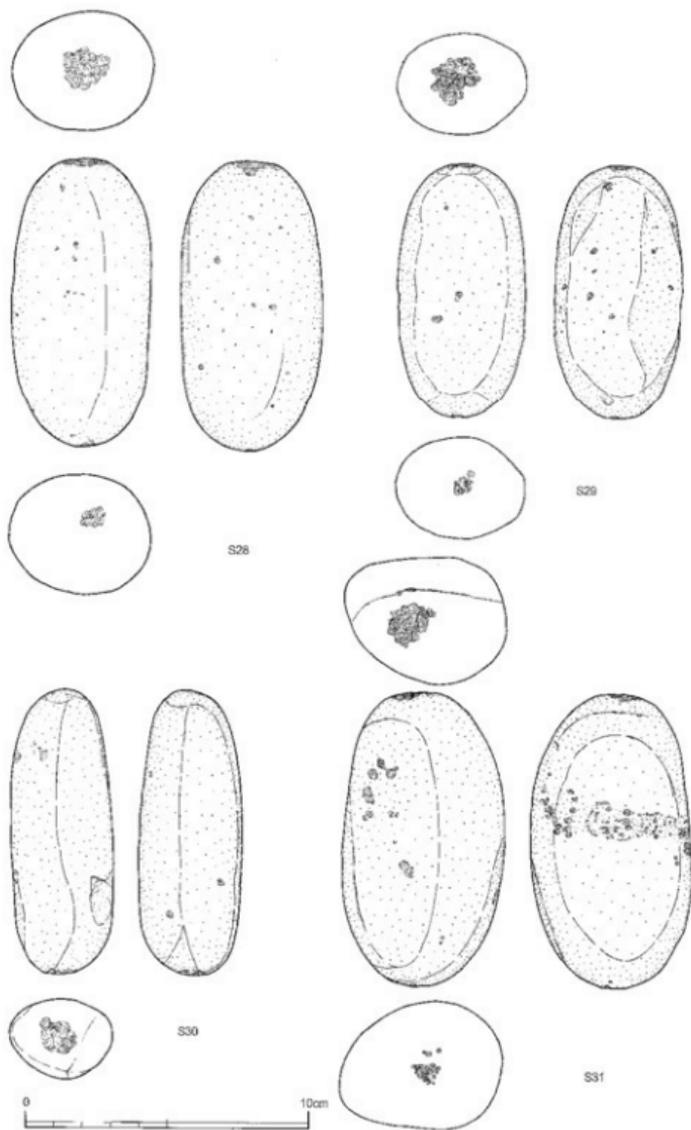
また、本遺跡では極めて多くの石材(サヌカイト・緑色片岩等)が、遺跡外から搬入されたものである。これらの搬入石材の原産地等について、今後自然科学的方法をも併用して、分析を進めてゆく必要がある。石材の搬入(交易)関係は、一遺跡のみならず、その遺跡が位置する地域と、原産地域との社会的関係を推察する上で、極めて重要な示唆を与えるものである。



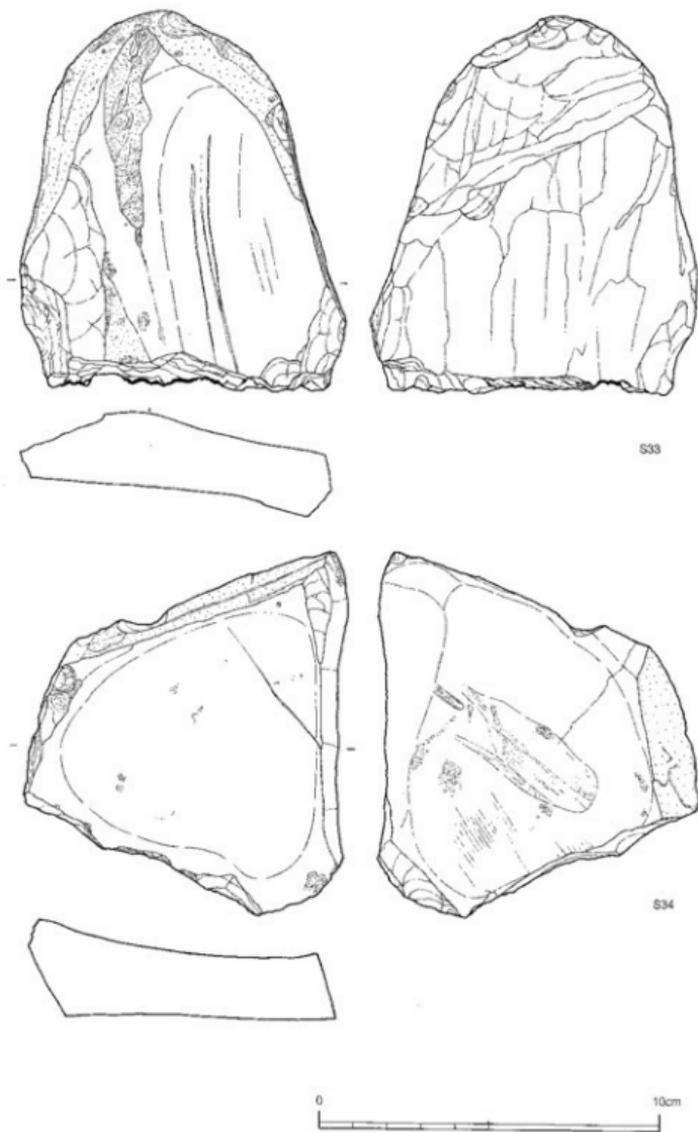
第110图 石器·石製品①



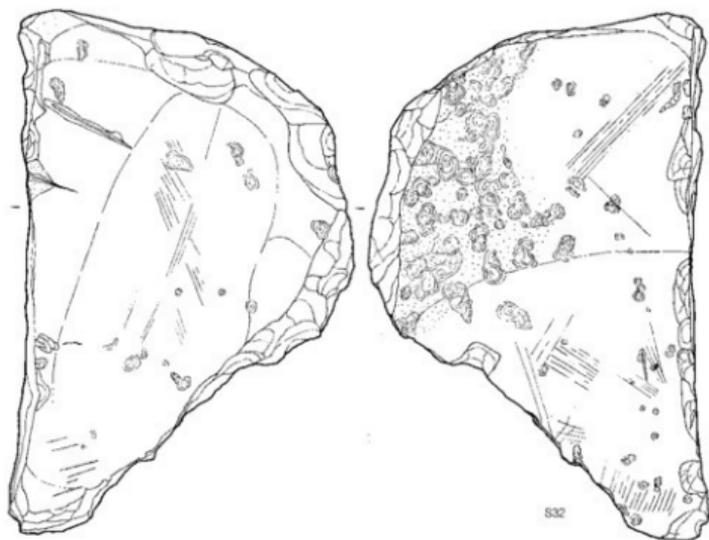
第111図 石器・石製品②



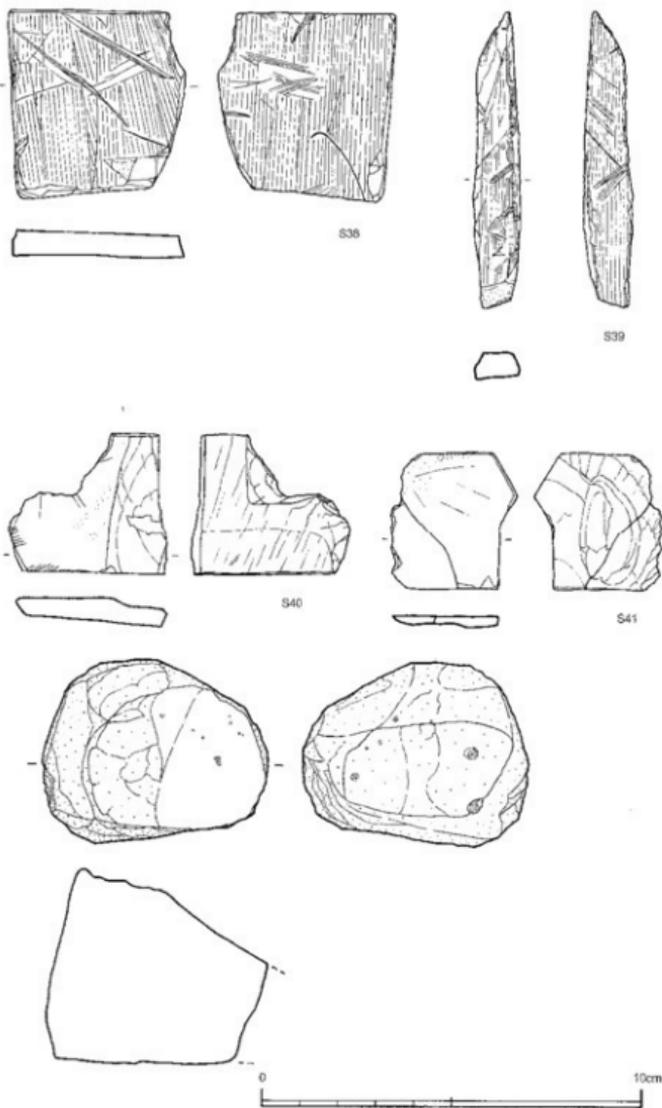
第112図 石器・石製品③



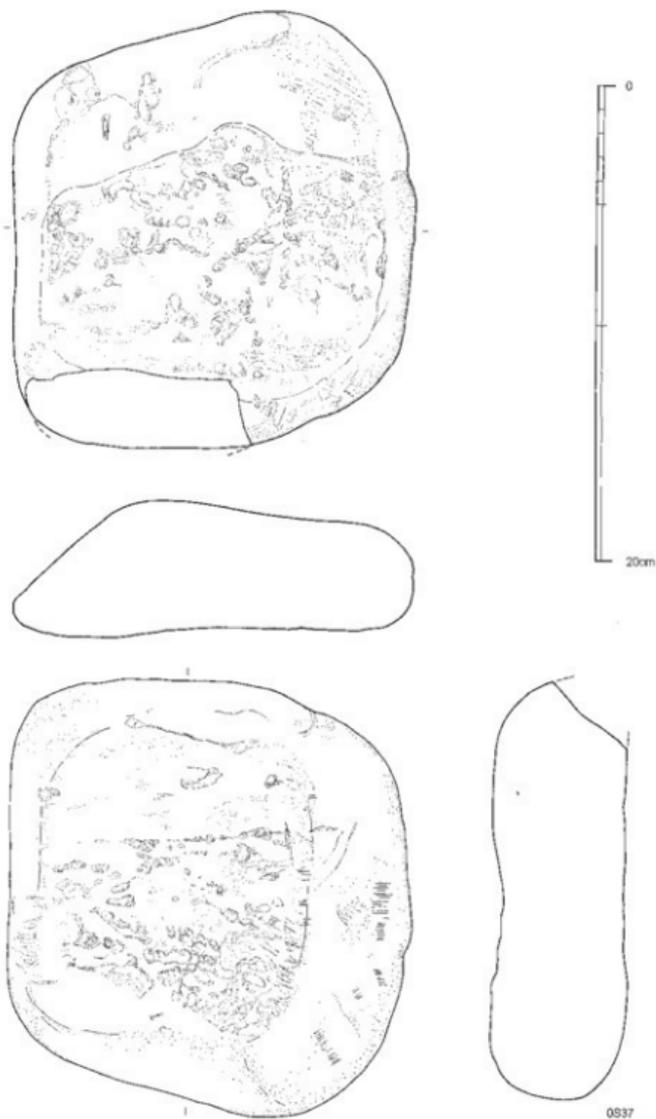
第113図 石器・石製品④



第114図 石器・石製品⑤



第115図 石器・石製品⑥



第116図 石器・石製品⑦

## 第7節 木器・木製品

堂山遺跡の木器・木製品は、南区の採鹹土壌と防瀬堤の粘土下から出土している。

### (1) 採鹹土壌出土の木器・木製品 (第117~120図)

採鹹土壌から出土した木器・木製品は、出土状態や層位により、その機能・用途等は三つに分かれている。その一つは、良質の黒色粘土下に封じ込められた生産に伴う祭祀遺物(W9~W15)である。二つ目は、採鹹土壌が機能していた段階のその必要な構造に使用していたもの(W4~W8)である。三番目は、採鹹土壌の廃絶後の埋土から出土したもの(W1~W3)であり、この層からのみ土器も出土している。

W1は、沼井かきと呼称している木製品であり、採鹹土壌に集めた鹹水を均したり、梳いたりして、鹹水の垂下を促す塩田用具と捉えてこの名称を使用している。廣山堯道先生の命名である。入浜塩田で爬砂作業に使用する万鋸と同じ形態であり、その小形品である。農具では、の代掻と同じ形態である。

沼井かきは、長方形に加工した台木に着柄孔と歯穴を穿った木製品で、長さ36cm、幅4.3cm、厚さ2.8cmである。着柄穴は台木中央に長辺3.7cm、短辺1.6cmの長方形に穿たれ、歯穴とは直交している。歯穴は着柄孔を挟んで両側に2ヶ所づつ計4ヶ所あり、歯穴も長方形に穿たれ、歯穴の大きさにはばらつきがあるが、長辺2cm前後、短辺1.5cm前後であり、その間隔も一定でない。着柄孔は片側からの穿孔であるが、歯穴は両側から穿孔している。歯穴の中に歯の木質が残存していた。樹種はマツである。

W2・W3は、蓆などを編む際に錘として使用された木製品である。塩田用具の民俗資料では木根子と呼称されており、この名称を借用した。これも、廣山堯道先生の提言である。農具としては槌の子と呼ばれ、考古学の用語としては木錘と呼称されているものである。

W2・W3とも樹種はカシである。木取りは、両者とも、丸材の両端を僅かにのこし、中央部に向かって円錐状に削り込んでいる。W2は両端部の径4.4cm、中心部の径2.9cmを測り、全長は11.7cmである。W3は両端部の径4.3cm、中心部の径2.8cmを量り、全長は11.7cmであり、両者はほぼ同形同大である。

W4~W6は、船材の転用材ではないかとみているが、詳しくは検討できていない。

W4は内面を浅く窪ませる加工がみられ、図の下の側線にも一段下がる加工がみられる。長さ87.5cm、最大幅26.3cm、最大幅8.0cmである。

W5の内面は緩やかなカーブをもつように削り込まれており、深さは5cmほどである。最大長118cm、最大幅36cm、厚さ5.8cmを測る。一方に偏って長方形に近い柄穴が穿たれており、柄穴は長辺5.9cm、短辺4.3cmである。

W6は長方形の板材で、長側縁の一方が段状に加工されている。長さ169cm、幅44cm、厚さは厚くのこっているところで6cmである。

W7は丸太材で、両端は加工され、一端は枝をのこし二股状に加工している。長さ1.8m、径11cmほどである。

W8は、カシ材を使用した櫃で、考古資料としては、完形の希少な例である。全長260cmと長大で、ブレードと呼ばれる水をかく部分の長さ139cm、最大幅6.6cmで、片面を緩やかな山形に加工しており、最大厚さは3.2cmである。ハンドルの柄部は面取りされ、長さ1104cm、径6.6cmである。ブレードと柄部の間のルーム部には切り込みを入れている。

W9は、完形の漆器柄である。口径15cm、器高5.6cmで、高台は低く、底径は14.2cmである。底部外面を除いた全面に黒漆を塗り込んでいる。底部外面には記号のようなものが彫刻されている。クリ材を木地としている。

W10は、針葉樹の柾目の板材で、現存長8.2cm、幅2cm、厚み0.3cmを測り、両端が欠損している。

W11は、先端を尖らせた串状の木製品で、上方は欠損しており、現存長13.7cm、幅0.5cmである。

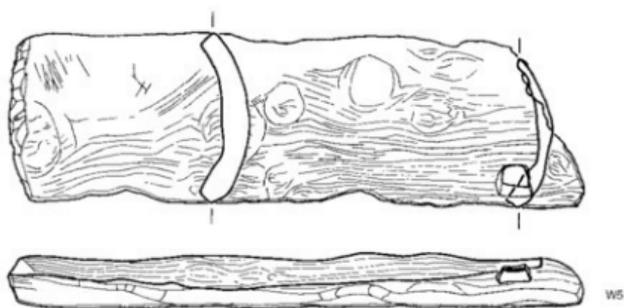
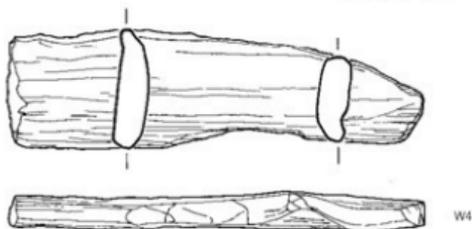
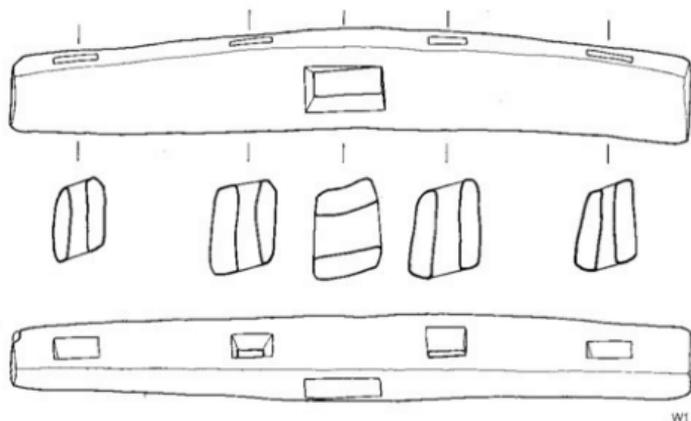
W12は、上方が欠損しており、現存長15.3cm、幅2.8cm、厚さ0.6cmの板状を呈している。短辺下端の中央には切り込みをいれ、長辺中央付近の両側に抉りをいれている。前者を足の表現で、後者を胴部付近の表現とみれば、人形木製品とみれなくもないが、実態は不明である。

W13は、刀子形をした木製品で、刃の部分にV字形の抉りをいれ、また、2ヵ所に穿孔がみられる。長さ16.4cm、幅2.6cmである。

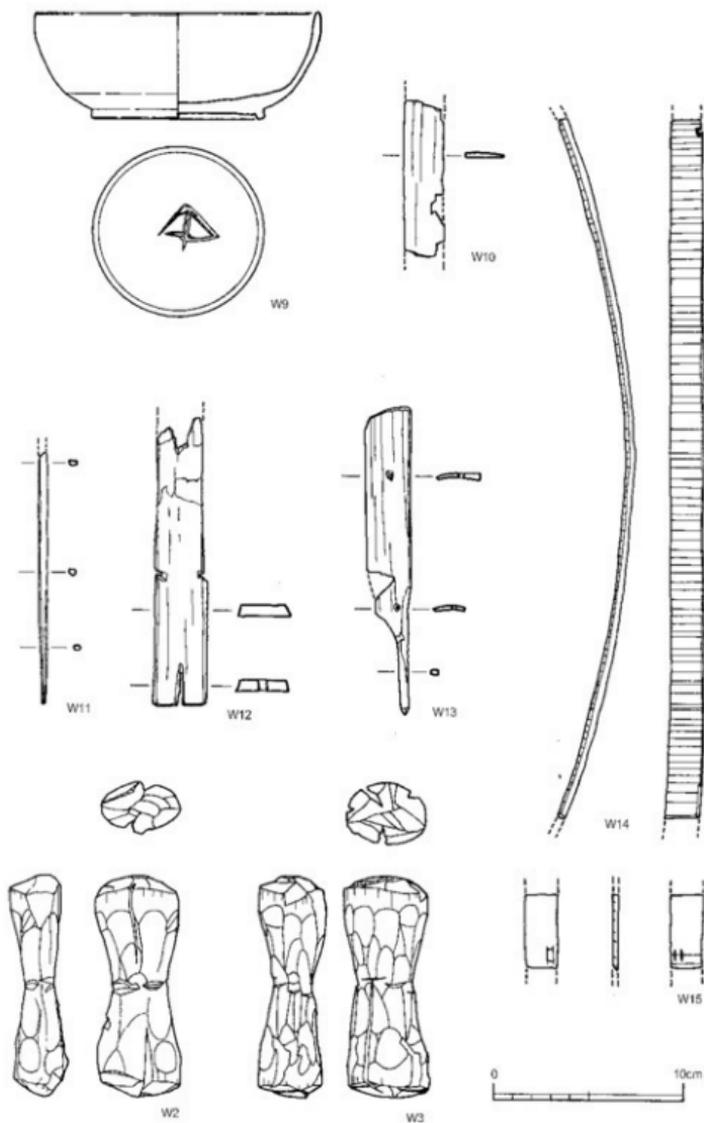
W14・W15は、曲物の椗の破片である。W14は内面には密な状態で切り込みが入られ、一端には結束孔の穿孔が入られている。

## (2) 防潮堤粘土下の杭 (第120図)

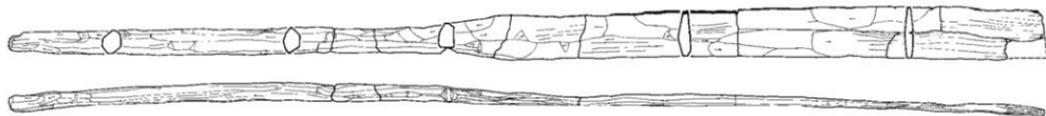
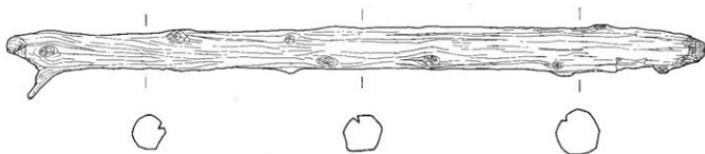
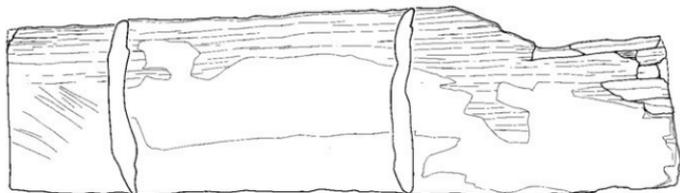
W16～W23は、木杭で割材を使用し、樹皮を削って面取りをしているものが多い。いずれも全形をとどめていない。図示した8本の幅は3.7～5.6cmであり、平均幅4.5cmである。樹種はクリとカヤの両方を使用している。



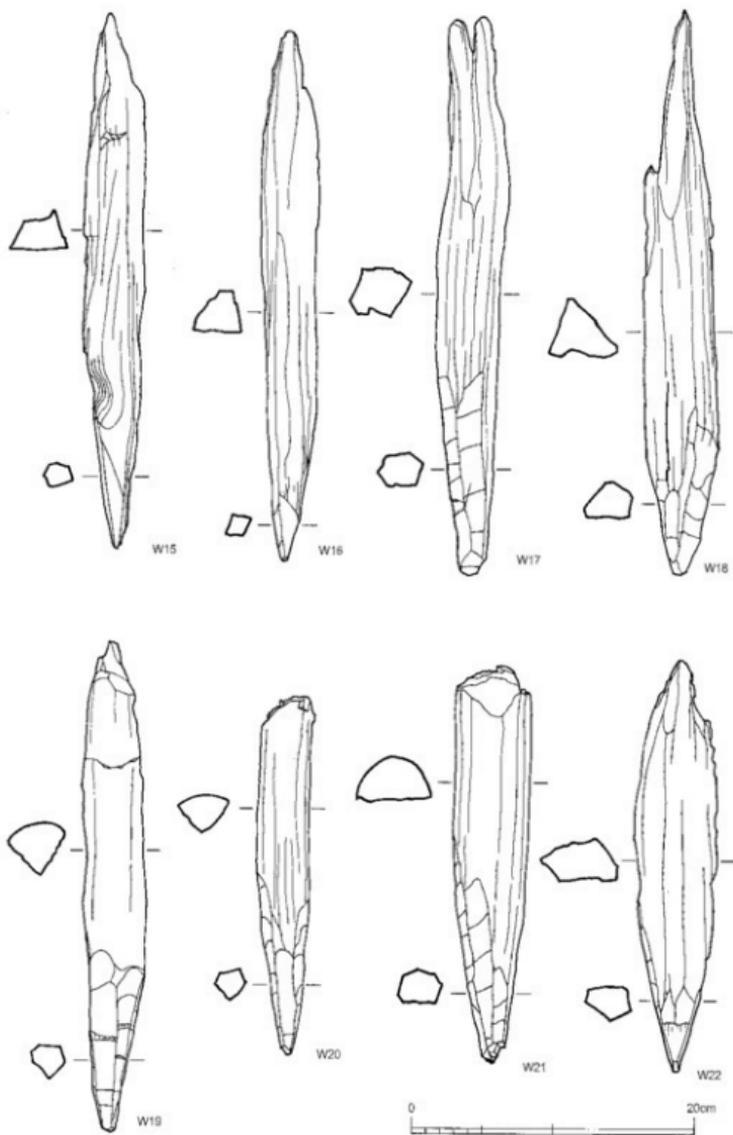
第117圖 木製品①



第118圖 木製品②



第119図 木製品③



第120図 木製品④

## 第8節 鉄器・鉄製品

遺構から出土した鉄器・鉄製品（第121図）は僅か2点で、ほとんどが包含層からの出土である。南区と北区に分けて、その遺構や出土層位を先に述べておきたい。

塩田が検出された南区の状況は以下のとおりである。

X14・X25は採鹹土壌1層から、X12・X15は南区9層埋立層から、X26は集石遺構2の上の南区6層からの出土である。塩田が放棄された後の堆積層のうち、南区5～6層から出土したものはX6・X9・X11・X17・X18・X19であり、南区3～4層出土したものはX22～X24・X27・X28・X31である。

北区からは、X1・X2・X5・X29が北区8層の古墳時代後期の包含層からの出土である。X13は北区6層、X21は北区7層、X13が北区4層からの出土である。他は表採資料である。

南区9層埋立層から出土したものは11世紀後半までの時期に、採鹹土壌のものは14世紀前半代に、塩田が放棄された後の堆積層から出土したものは14世紀前半以降の時期のものと捉えられる。北区は若干の混乱もみられるが、北区6層は11世紀後半から14世紀前半までの堆積層、北区4層は14世紀前半以降の堆積層とみている。

X1は、上半部の鉄板を両側から折り曲げて、中空の袋部をつくった鉄斧であり、長さ11cm、刃部の幅4.9cmである。

X2は、両端が欠損しているが、円錐形を呈した鉦石突とみている。現存長14cm、袋部外径3.6cm、内径1.3cmである。

X3は、逆刺をもつ鉞で、先端が欠損している。現存長10.5cmで、軸部は丸く仕上げ、径1cm前後である。

X4は、刀子である。刃部側と背部側ともに関があり、関の位置はずれている。海の中道遺跡の報告書ではⅡ類と分類されている形態である。茎の先端部分は欠損している。残存長15.5cm、刃部幅1cm前後である。

X5は、棒状の先の尖った鉄器で、若干湾曲している。鉞の軸部にあたるか、ヤスのような刺突具であろう。

X6・X7は、刃部が欠損しており、刀子あるいは小刀の柄部とみている。X6の現存長6.6cm、X7の現存長6.5cmである。X7は表採資料である。

X8・X9は雁又の鉄鎌である。

X10・X11・X12は、用途不明の鉄製品である。X12は刀の柄部かもしれない。

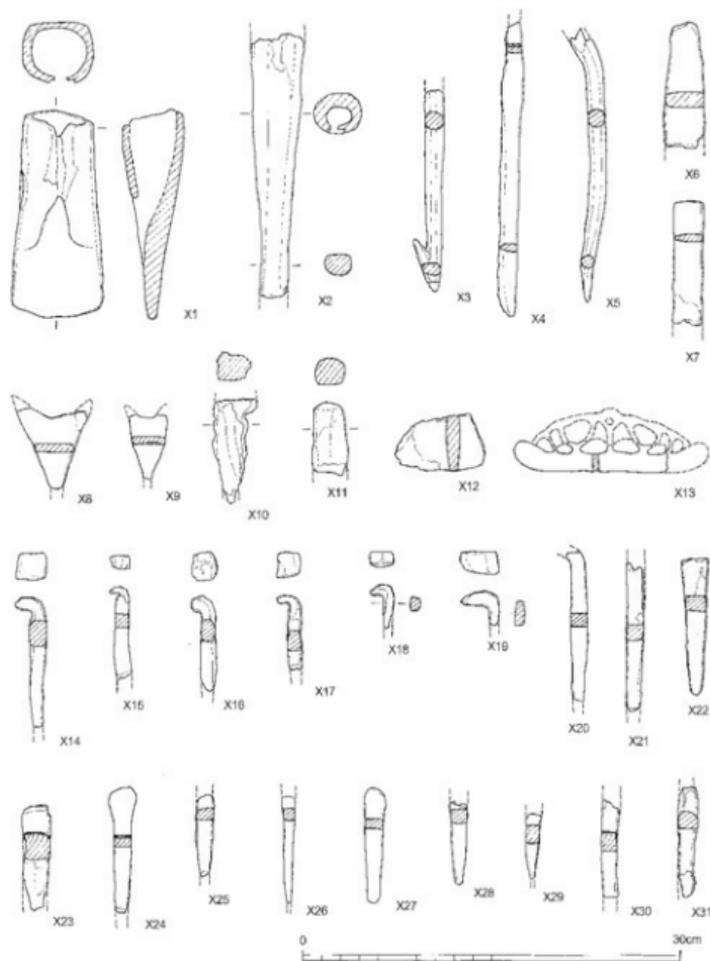
X13は、山形の形態に分類される火打金である。底辺の一部しか残存していないが、全体

にすかしを左右対称に施していると復元できる。復元長10.4cm、復元高3.3cmである。  
山田清朝氏の分類のA-e類に相当し、9世紀には出現しており、18世紀まで続いていることが論述されている。

X14~X31は、角釘と捉えているものであるが、X22・X24・X27の断面が長方形を呈するものは、ヤスのような刺突具になる可能性が高いであろう。全体の形状が遺存しているものはない。頭部が遺存するものは、すべて頭部を折り曲げた折釘である。X24は頭部の折り曲げが1.5cmと最も大きいものである。X15は単純な折釘ではなく、頭巻釘の可能性も否定できない。

(註)

- (1) 横山浩一、山崎純男、村上恭通他『海の中道遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集）1982年  
横山浩一、山崎純男、村上恭通他『海の中道遺跡Ⅱ』（朝日新聞社西部本社、海の中道遺跡発掘調査実行委員会）1993年
- (2) 山田清朝「第7章第2節 火打金について」（『中尾城跡—近畿自動車道舞鶴線関保埋蔵文化財調査報告書X1—』兵庫県文化財調査報告書第67冊）1989年



第121圖 鉄器・鉄製品

## 第9節 その他の遺物

### 1. 韓式系土器 (第122図)

(1)  
堂山遺跡の韓式系土器は、硬質のいわゆる金海式土器ないしは陶質土器と呼ばれるもので、朝鮮半島南岸域からもたらされた舶載品と思われる。BIX区より5点まとまって出土している他は散在しており、合計11点を数える。これらはその特徴よりすべて同一個体の壺と思われる、図上で復原すると、口径15.3cm、体部最大径約22cm、器高約24cmを測るものになる。

胎土は0.5mm大の砂粒をわずかに含むが、極めて精良なものである。焼成は硬質で、非常に堅緻である。色調は内・外面とも暗赤紫色(暗赤褐色・7.5R 3/2.5)<sup>(2)</sup>、断面はセピア色でサンドイッチ状を呈し、外面全体に自然釉をかぶり光沢を有する。

形態について詳しくみると、口頸部は基部よりゆるやかに外反してたちあがり、口縁端部は鋭く斜め外方へつまみ、端部直下にやや細い感じを与える鋭い断面三角形の突帯を有し、端部が凹状を呈するようになる。体部は各破片において焼きひずみが認められるため、復原図示した形態はやや不自然で、細かい形態については言及できないが、全体のプロポーションはやや肩部が張る方形に近いもので、丸みをもつ底部に至るものであろう。

調整についてみると、口頸部～肩部上半の内・外面にヨコナデ・体部外面はやや短い単位で平行叩き(4～5本/cm)を縦方向に施した後、へら描きの沈線(幅0.2～0.3cm、深さ0.05～1.0cm)を1.0～2.1cm間隔に施す。この沈線が連続して体部を巡るものかどうかは不明である。また、底部外面は体部外面と同一原体の平行叩きを部分的に交差するように施している。いずれも叩きはそう深くない。体部内面は斜め上方へのナデで仕上げている。

さて、いわゆる韓式系土器は近畿地方においては約51遺跡での検出例が確認されており、そのうち陶質土器は22例に及ぶ<sup>(3)</sup>。これらは弥生時代中期とされる大阪・日明山遺跡を除いては5世紀後半を中心とした時期に集中することが知られている。当資料については共伴遺物もなく、時期決定をするのは困難である。層位よりみると、どの破片を包含していた層も庄内式併行期以降の遺物を含むもので、弥生時代中期まで遡ることは考えられない状況である。また、体部に沈線が巡る初期須恵器の壺の類例は、愛知・東山111号窯<sup>(4)</sup>、福岡・小隈窯<sup>(5)</sup>の製品中に認められる。しかしながら、当資料は焼成及び色調が著しく相違するようで、口縁部の形態特徴が初期須恵器と共通するものの、舶載品の可能性をここでは消極的に指摘するとどめたい。

また一方で、朝鮮半島における陶質土器の壺の変遷から検討してみよう。陶質土器Ⅰ期とされるものは抹角方形形を基本とし、外面に縄文文叩きないしは格子目叩きを整然と施し、口唇部が断ち切られた扁平なもので、3世紀後半～4世紀後半の時期が与えられている。そして、Ⅱ期に近づくにつれて叩き目も乱れ、口縁端部の中央が溝状を呈するようになるという。縦方

向に平行叩きが施されたり、叩き目の幅が広くなったり、単位が大きいものも形式的には新しい要素として扱えられる。さらに、Ⅱ期の開始とされる4世紀末には、伽耶地方、新羅地方で独自の展開をみせ始めるとされるが、その展開の実態は明示されていない。ただし、それぞれ小地域単位で特色がみられるようになり、伽耶地方ではⅠ期段階の系譜のもとに制作され、新羅地方では製作意識の変革が認められるという。

以上のように、当資料について現段階で管見に触れた陶質土器の資料中から類例を見出すことはできなかった。朝鮮半島南岸域における陶質土器の実態が十分に把握しきれない点、明確な根拠に欠けるが、当資料は5世紀前半代に朝鮮半島の南岸地域から船載されたものと推定しておく。また、当遺跡から約7km北北東の赤穂市有年の蟻無山1号墳<sup>(7)</sup>でTK73型式併行<sup>(8)</sup>の初期須恵器とされる器台片が採集されていることも合わせて、今後類例の増加を待つて検討を加えていきたい。

## 2. 鹿角未製品 (第125図)

刀子の柄部の鹿角未製品と捉えている。刀子の茎を差し込む穴はまだあけられていないが、その部分の加工はすでに施されている。柄部は面取り状に削られているが、まだ自然面ものこしている状態である。長さ1.4cm、径2.4cmである。確認調査の坪AⅡの土層断面再検討中の出土であり、庄内式土器と伴出しており、弥生時代終末期と捉えている。

## 3. 銅鏃・管玉・金環 (第124図)

銅鏃は1点のみ出土である。長さ3.7cm、幅1.35cm、厚さ0.3cmの有茎で、身は柳葉形の銅鏃である。身部の断面は菱形をなし、中央に鏃を形づくる。茎端は裁断されている型のものであろう。北区の下層からの出土であり、弥生時代終末期から古墳時代初頭のものであろう。

管玉も1点出土したのみである。管玉は長さ1.95cm、形0.45cm、孔形0.2cmで両側から穿孔している。AⅡグリット・下層の土壌7近くの出土であり、弥生時代終末期前後のものであろう。

金環も1点出土しているのみである。金環は径2.8cm、厚さ5.5cmである。

## 4. 埴輪 (第126図)

埴輪は10数点出土している。図示にしたのは7点である。R1は北区からの出土であり、

R2～R4・R6は南区9層埋立層から、R7は南区8層から、R5は南区7層からの出土である。

R1は、朝顔形埴輪の口縁部で、外面には1cmあたり約12本の縦刷毛調整を施した後、比較的均整のとれた断面が台形の箍を張りつける。内面は1cmあたり14本の縦刷毛調整を施した後、ヨコナデで擦り消している。胎土には0.5～1mmの砂粒を含み、焼成は硬質の土師質である。

R2は、円筒埴輪の破片で、外面に1cmあたり11本の刷毛調整を縦に施した後、不整形な断面をもつ箍を張りつけ、内面にはナデ痕・指頭圧痕が認められる。胎土には0.5mm大の砂粒を含み、焼成は土師質である。

R3も、円筒埴輪の破片で、外面に1cmあたり10本の縦刷毛調整を施した後、不整形な断面をもつ箍を張りつけている。内面には指頭圧痕が顕著に認められる。復元径で27cm前後を測る。胎土には1mm大の砂粒を含み、焼成は硬質の土師質である。

R4・R7は、円筒埴輪の破片で、R4は均整のとれたしっかりした箍であるが、R7の箍は低く粗雑なつくりである。

R5、R6は、円筒埴輪の底部で、R6は底部外面に指頭圧痕が認められ、その下には面をもち、横刷毛が認められる。

以上の堂山遺跡出土の埴輪は、1次調整の縦刷毛のみで調整しており、箍の突出も低くものが多い。硬質の土師質の埴輪から窯で焼成しているのであろう。6世紀代のものである。

## 5. 緑釉陶器 (第127図)

緑釉陶器は2点出土しているのみである。H1は南区2層の床土からの出土であり、H2は南区3層からの出土である。

いずれも底部の破片である。H1は貼付け高台をもつ椀であり、高台径6.2cmである。見込み部分に棒状工具による擦痕が認められる。色調は淡灰緑色である。

H2は、削出し高台の椀で、底径3.4cmである。色調は淡乳色である。

## 6. 黒色土器・瓦器 (第128図)

I1～I6は南区の出土で、I7は北区の出土である。I1は南区9層埋立層から、I6は南区3層から、I2・I4・I5は南区4層から、I3は南区5層からの出土である。

I1は、黒色土器の椀で、しっかりした貼付け高台をもち、高台径7.4cmである。外面に指頭圧痕が認められ、内面は暗文が微かにみえるが磨滅のため定かでない。外面は乳褐色で、

内面は黒色である。11世紀後半代である。

I 2は、瓦器の破片で、口径13cmに復元でき、外面に指頭圧痕が、内面には荒い暗文が認められる。

I 3も、瓦器の破片で、口縁端部内面に凹部をもつ和泉型の瓦器柄の特徴を示している。内面の暗文は磨滅のため不明だが、外面にはあまり間隔の開かない細かな暗文が認められる。

I 4は、瓦器の底部破片で、退化した高台を張り付け、高台径は4.7cmである。外面には指頭圧痕が、内面には荒い暗文が認められる。I 2～I 4は13世紀後半代である。

I 5・I 6は瓦器の小皿で、I 5は口径8.6cmで、底部外面には指頭圧痕が認められる。

I 6は口径7.8cmで、底部外面には指頭圧痕が認められる。

I 7は、瓦器の皿で、口径10.6cmで、内面に間隔の広い細かい暗文が認められる。

## 7. 輸入磁器 (第129図)

当遺跡の磁器は、すべて龍泉窯系の青磁で、総数20点である。南北両区の包含層から出土した。南区は塩田が放棄された後に堆積した層からの出土で、K 3・K 10が南区3層から、K 2・K 6は4～5層からである。北区の層位は若干混乱しているが、K 4・K 5・K 7～K 9は北区2層から北区6層の出土である。

横田賢次郎・森田勉氏の型式分類に従えば、K 1・K 2の劃花蓮華文碗、K 5の皿はI-2類、K 3・K 4はI類、K 6・K 9はI-5類、K 10はⅢ類に分類される。なお、図示していないが、15世紀代の比較的新しい龍泉窯系の青磁も存在している。<sup>(9)</sup>

I類は、総じてやや青味がかった灰白色の胎土をもち、釉色は透明度が高い。しかし、I類の中でも舖のない蓮弁文を施す碗、K 8・K 9は、やや茶色味がかかる胎土で、釉色は黄色味が強く、透明度が低く、表面に小さな穴が多い。Ⅲ類のK 10は、白味の強い灰白色の胎土で、極めて明るい色調の、厚めの釉を施す。I類とは底部の厚さ、高台の形が全く異なる。

以上のことから、当遺跡は、少数ながらも12世紀から15世紀までの各時代に渡って、龍泉窯系の青磁を出土しているといえよう。

## 8. 龜山焼 (第130図)

岡山県倉敷市玉島八島字龜山を中心に分布する古窯址から発見される、古代須恵器生産の系譜を引く焼物である。当遺跡では、甕の破片19点が出土し、相互の交流を示している。

J 1は、表面黒灰色を呈する瓦質の甕の口縁部である。外反し、外面及び端部は格子タタキ目の後、ヨコナデ、内面はヨコナデ調整で、表面の剥離がはなはだしい。南区3層からの出土

である。

J 2は、須恵質の甕の頸部で、くの字状に折れ曲がる。体部外面は格子タタキ目で、頸部はヨコナデにより、すり消している。口縁部内外面、及び、体部内面は回転ナデである。北区4層からの出土である。

図示していないが、甕の体部の破片で、外面に格子タタキ目、内面は同心円状タタキの後、交錯するハケ目が残る表面黒灰色で、瓦質の亀山焼もある。

須恵質はJ 2のみで、あとはすべて瓦質・土師質である。亀山焼の編年は十分確立してはいないが、J 1・J 2は、12世紀後半から13世紀前半のものであろう。<sup>(11)</sup>

## 9. 備前焼 (第133図)

備前焼は北区・南区の包含層から出土している。南区から出土層位は、いずれも塩田が放棄されてから堆積した層の出土で、L 4は南区1～2層、L 2は南区3層、L 5・L 7は南区4～5層からの出土である。北区からは、L 1が北区2層、L 3が北区3～4層の出土である。

L 1は、摺鉢の口縁部の破片で、備前焼VI期以降のものである。

L 2は、甕の口縁部の破片で、備前焼IV期の15世紀代のものである。

L 3は、摺鉢の破片で、備前焼III期後半の14世紀中頃から後半のものである。

L 4も、摺鉢の破片で、4本単位の摺目が放射状に付されている。備前焼III期前半の13世紀後半から14世紀前半のものである。

L 5も、摺鉢の破片で、6本単位の摺目が放射状に付されている。備前焼III期後半の14世紀中頃から後半のものである。

L 6・L 7は、摺鉢の底部で、備前焼IV期のものであろう。L 7は7本単位の摺目が、L 6は8本以上の摺目が認められる。

## 10. 瓦 (第131図)

総数15点の瓦の破片が、主に南区の包含層・塩田面から出土した。O 1・O 3は南区9層の埋立層から、O 2は南区6層から、O 4は南区4層からの出土である。

O 1は、青灰色を呈する焼成の堅緻な平瓦である。凸面は、板状器具のなでつけによって条痕が残り、凹面は、布目疔痕が残る。図示していないが、同じ胎土・焼成で、凸面調整ナデ、凹面調整布目疔痕、側面取り、側面に接する凹凸面にも面取りを施す丸瓦も出土した。

O 2は、やや紫がかった青灰色を呈する、焼成の堅緻な丸瓦である。凸面はナデ、凹面は布目疔痕が残る。

○3・○4は、灰白色を呈する焼成の軟質な平瓦である。凸面は重複する平行タキ目が残り、黒灰色を呈し、凹面は布目圧痕が残る。薄手である。

いずれの瓦も播磨の瓦陶兼業窯で生産された、中世のものと思われる。

## 11. 銭貨 (第132図)

南地区包含層から2枚、北地区包含層から6枚、AIVグリッドのビットから13枚の古銭が出土した。北宋銭が大部分を占める。ビットは整った長方形を呈し、長さ16cm、幅12cmの極めて

番号	出土地区	出土地点・層位	銭種	初鑄年	書体
1	北	AIV古銭ビット	開元通宝	621 (唐・武徳4年)	楷書
2	"	" "	咸平元宝	998 (北宋・咸平元年)	"
3	"	" "	祥符通宝	1008 ( "・大中祥符元年)	"
4	"	" "	天聖元宝	1023 ( "・天聖元年)	"
5	"	" "	"	" ( "・ " )	"
6	"	" "	皇宋通宝	1039 ( "・宝元2年)	篆書
7	"	" "	"	" ( "・ " )	"
8	"	" "	熙寧元宝	1068 ( "・熙寧元年)	"
9	"	" "	"	" ( "・ " )	楷書
10	"	" "	元祐通宝	1086 ( "・元祐元年)	篆書
11	"	" "	"	" ( "・ " )	行書
12	"	" "	紹聖元宝	1094 ( "・紹聖元年)	"
13	"	" "	□□通宝	不明	—
14	"	AB III第4~6層	至道元宝	995 (北宋・至道元年)	行書
15	南	E II第3層	皇宋通宝	1039 ( "・宝元2年)	篆書
16	"	F IV第4層	"	" ( "・ " )	楷書
17	北	AB IV第7層	"	" ( "・ " )	"
18	"	A II第8層	熙寧元宝	1068 ( "・熙寧元年)	篆書
19	"	B II第3層	"	" ( "・ " )	楷書
20	"	B II第6層	"	" ( "・ " )	"
21	"	X I視乱	永樂通宝	1408 (明・永樂6年)	"

第7表 銭貨一覧表

小規模な遺構である。遺構内には、有機質が腐朽した土質が認められ、木箱のようなものの中に小銭を入れていたと思われる。古銭はすべて表面を上に向けて出土した。

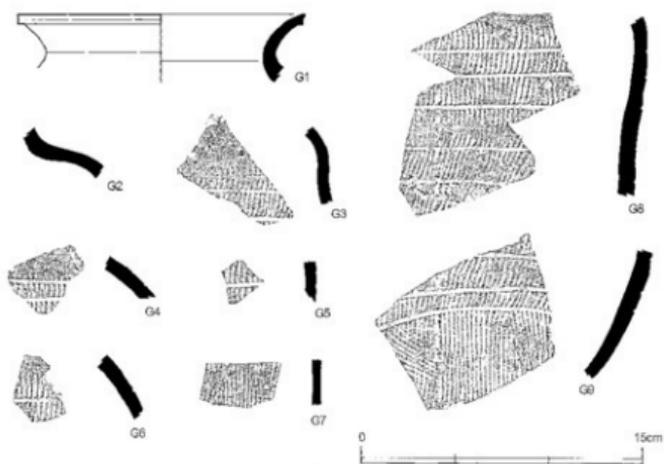
なお、「削銭」は鏤のみで、それ以外は外径2.4～2.5cm、郭孔0.6～0.7cmである。各々の出土地区・銭種・初铸年・書体は第7表に示した。

## 12. 土製円板 (第134図)

備前焼を再利用した土製円板が4点出土している。Q1は摺鉢の再利用で、径4.2cmと最も大きい。他は径2.5～3.0cmの大きさである。

(註)

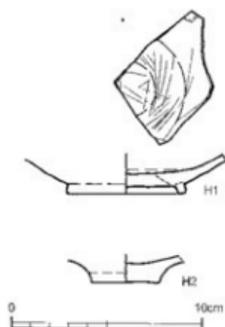
- (1) 韓式系土器の呼称は、ここでは学史を踏まえた上で、朝鮮半島から舶載された可能性が極めて高い土器のことをさすものとする。
- (2) 土器編『新版標準土色編』に拠る。
- (3) 植野浩三「韓式系土器についての予察」『奈良大学紀要』12号 1983
- (4) 斎藤孝正「Ⅱ 須恵器の源流 東海地方」『日本陶磁の源流—須恵器出現の謎を探る』1984
- (5) 平田定幸「朝倉の初期須恵器窯跡」『甘木市史資料 考古編』1984
- (6) ①金元龍「金海式土器」『世界陶磁全集』17 韓国古代 1979  
②壺田直「韓半島伝来の印目文土器(韓式系土器)について」『日・韓古代文化の流れ』1982  
③崔鍾圭「陶質土器の成立前夜とその展開」『韓国考古学報』12 1982 (後藤直訳『古文化談義』第12集 1983 所収)
- (7) 松岡秀夫「蟻無山1号墳」『赤穂市史』第4巻 1984
- (8) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 196
- (9) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978年
- (10) 森田勉氏に御教示いただいた。
- (11) 平井康男「中世の遺構・遺物について」『百間川原尾島遺跡2』1984年



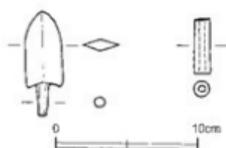
第122圖 韓式土器



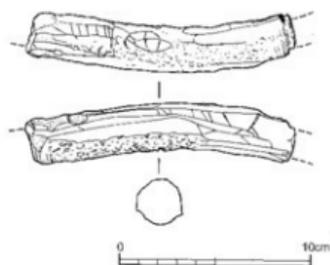
第123圖 韓式土器復原圖



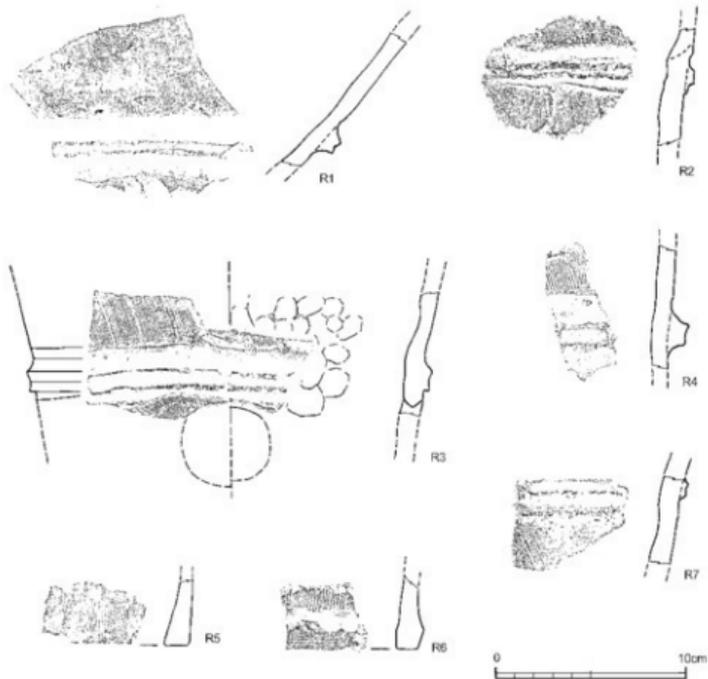
第127圖 綠釉陶器



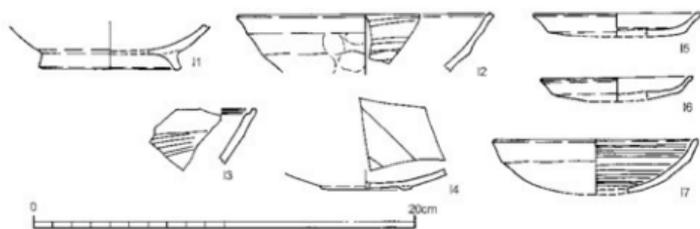
第124圖 銅鉄・管玉



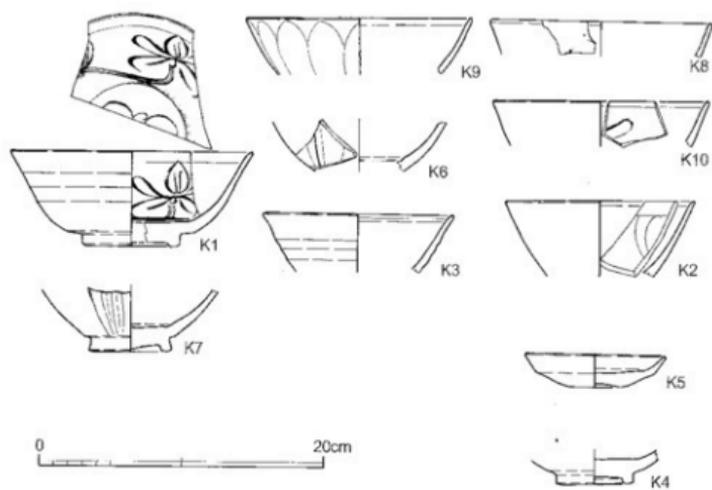
第125圖 鹿角未製品



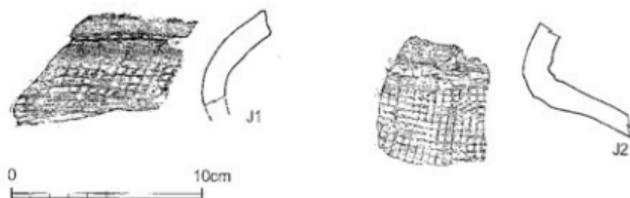
第126圖 円筒車輪



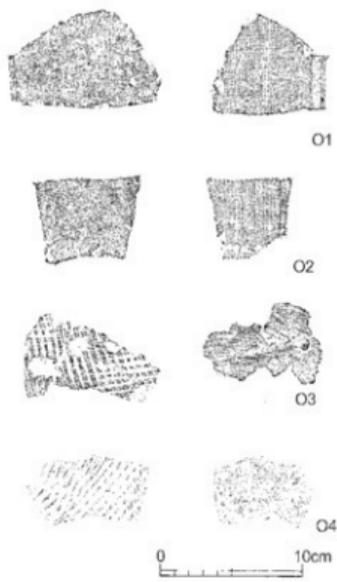
第128圖 黑色土器・瓦器



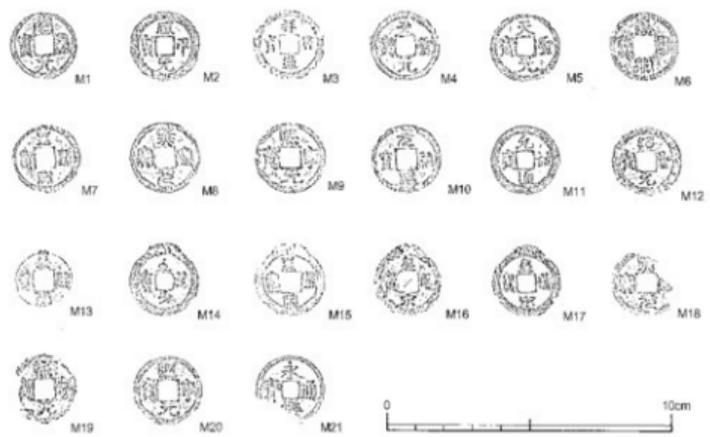
第129圖 輸入磁器



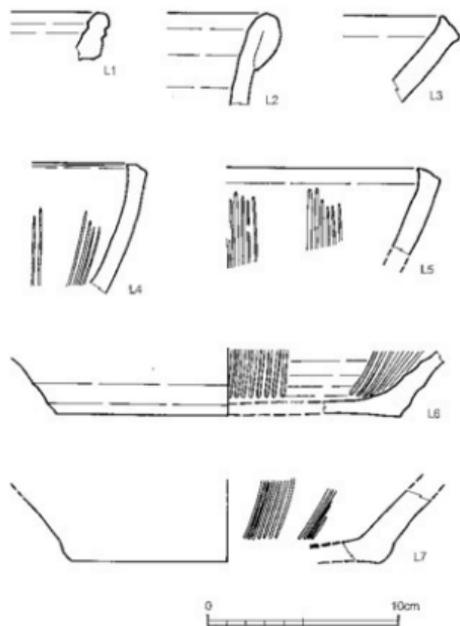
第130圖 亀山焼



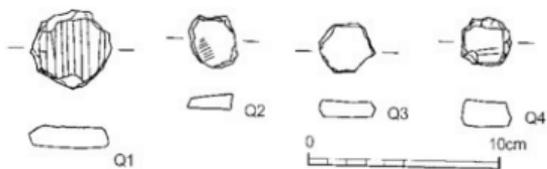
第131圖 瓦



第132圖 古銭



第133図 備前焼



第134図 土製門板

---

赤穂市

兵庫県文化財調査報告 第142冊

## 堂山遺跡

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XVI—  
本文編

平成6年3月31日発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒662 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5  
発 行 兵庫県教育委員会  
〒660 神戸市中央区下山手通5丁目10-1  
印 刷 株式会社 精文舎  
〒662 神戸市兵庫区下沢通6丁目2-18

---

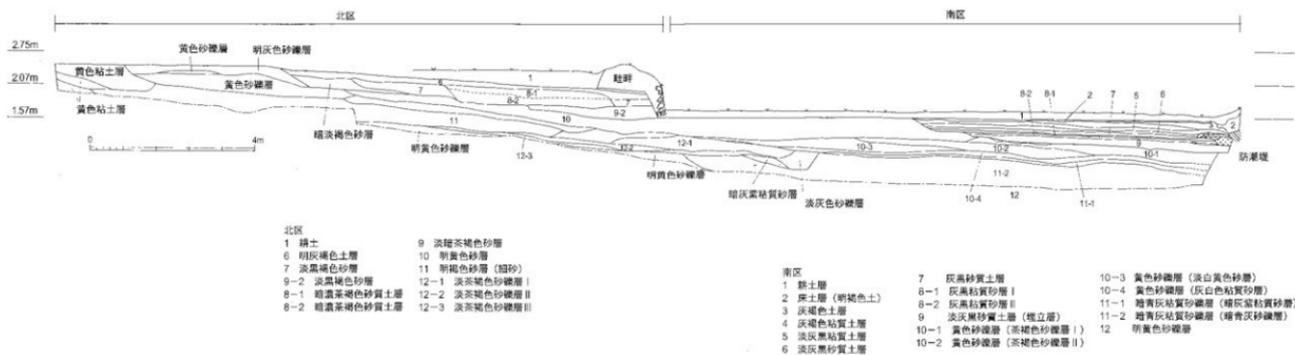
# 堂 山 遺 跡

## 付 図 目 次

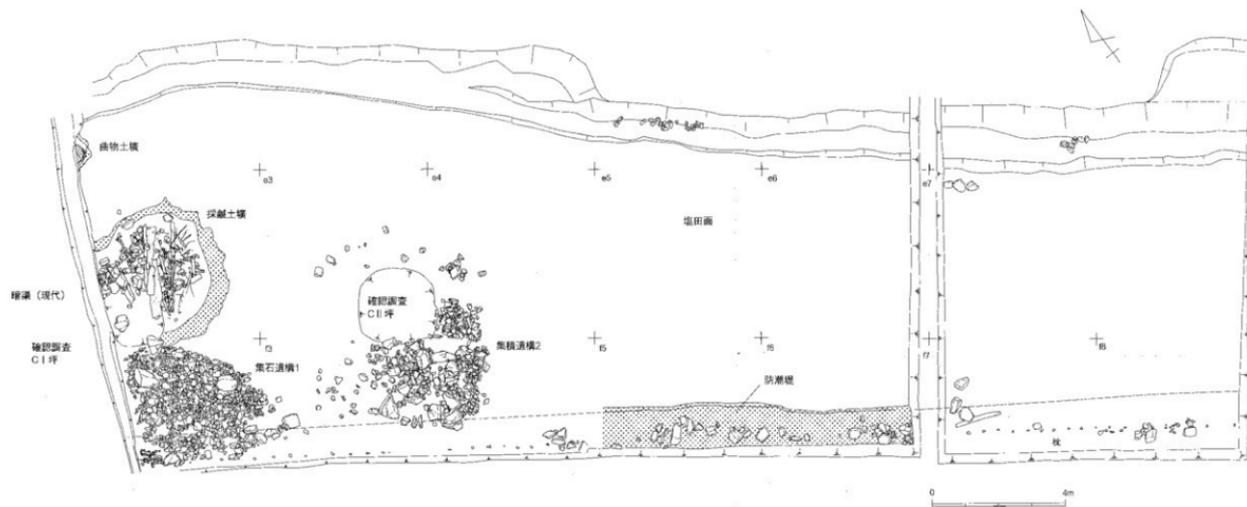
付図1 7ラインの土層断面図

付図2 塩田の遺構配置図

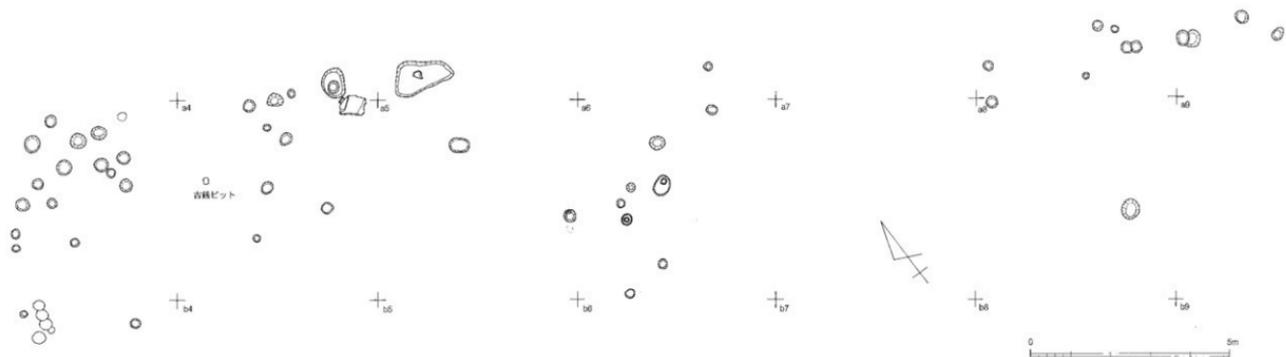
付図3 中世ビット群



付図1 7ライン西壁土層断面図



付図2 塩田の遺構配置図



付図3 中世ピット群